

# 神 樓

研 究 紀 要

日蓮聖人第七百遠忌特輯号

第 5 4 号

昭 和 5 7 年 3 月

身延山短期大学学園



## 「臨滅度時大曼荼羅」について

解説 上 奥 田 本 本 昌  
写 真 野 本 洋

日蓮聖人が池上宗仲の館において、弘安五年十月十三日入滅されるにあたり、その床頭に大曼荼羅を奉懸されたということは、『元祖化導記』や『高祖年譜』『本化別頭仏祖統紀』等その他の諸書に記されているごとくである。即ち、『年譜』によれば、十月十二日の項に、「諸子問訊。大士曰我期在<sup>レ</sup>近<sup>ニ</sup>、慈訓諄諄、床頭掛<sup>ニ</sup>大曼陀羅<sup>ニ</sup>焚香散華、誦經唱題」とあり、『統紀』によれば、この入滅の際に懸けられた曼荼羅が、「蛇形曼荼羅」と称されるもので、ここにその写真を掲載したものである。

この曼荼羅は、『弘安三年<sup>庚辰</sup>三月』に染筆されたものであり、長さは一六一・五センチ、幅は一〇二・七センチで、十枚の紙を貼りたして書かれていることがわかる。弘安年間の特徴である「日蓮」の字が、花押の中へ含まれてしまっており、筆勢も雄大なものであって、百二十余篇にのぼる曼荼羅の中でも、代表的なものの一つに数えられている。

『統紀』の説によると、入滅に臨んで奉懸されたので、古来この曼荼羅を「臨滅度時大曼荼羅」とも称されているとし、また、中尊首題の「蓮」の文字の<sup>レ</sup>が、龍蛇のごとき勢で書かれているため、人々はこれを「蛇形曼荼羅」と言うようになったのであるとしている。

真蹟は、現在鎌倉市大町妙本寺に所蔵されている。尚、富士西山本門寺日代の『宰相阿闍梨御返事』によれば、「池上御入滅時御遺告云<sup>ニ</sup>仏<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>注法華經<sup>ニ</sup>とあり、これは弘安五年十月十六日付で日興が執筆したものを引用したかたちになっているが、その下に、日代は「御円寂之時、件曼荼羅被<sup>ニ</sup>尋出<sup>ニ</sup>、奉<sup>ニ</sup>懸事顯然也。」と記している。

こうした諸文献から、宗祖入滅に際し、曼荼羅本尊の奉懸があったことは、間違いないものといえよう。弟子信徒に数多く授与された曼荼羅を、自身の入滅に当り、床頭に懸けさしめたということも当然といえることができる。





紙本着色日蓮聖人涅槃図 身延山久遠寺身延文庫蔵

解説 熊林 王 秀 是 臣 晋

この日蓮聖人涅槃図は江戸時代に製作された極彩色の超大幅の画である。縦三四〇センチ、横二五〇センチの法量をもち、表装された全体は縦四五〇センチ、横三〇〇センチの大幅である。作者は不明であるが、これだけの肉筆大作の日蓮聖人涅槃図はきわめて珍しく、おそらく二つとないと思われる。

釈尊がクシナガラ（拘尸那揭羅）のシャーラ（沙羅）樹のもとで涅槃に入った光景を図示したものを釈尊涅槃図というが、この日蓮聖人涅槃図がそれにならって作成されたことは確かと思われる。しかし単に模して、というよりはその作成の意図はもう少し深いところに求められよう。

日蓮聖人は、七百年の昔、身延山を出られ、十月十三日の朝、その六十年におよぶ波瀾の生涯を武蔵国池上宗仲の館で静かに閉じられたが、聖人が晩年の九か年間を過ごされて「いづくにて死に候とも、はか（墓）をばみのぶさわ（澤）にせさせ候べく候。」（波木井殿御報）と遺言された霊地身延山を、釈尊説法八か年の聖地靈鷲山に対比し、釈尊の入涅槃されたクシナガラを武蔵国池上郷になぞらえる信仰がある。クシナガラは靈鷲山の東北にあたるとされ、池上は大よそ身延山の良（東北）に位置している。日蓮聖人の御入滅に際しての門下の人々の悲嘆の情は、釈尊の入涅槃のときに勝るとも劣らないものであったろう。日蓮聖人への止みがたい讃仰と哀惜追慕の念こそ、釈尊涅槃図にならって日蓮聖人涅槃図を作成させた要因であろう。

本図は吹抜屋台（天井・屋根を除いて、斜め上方から見おろすように屋内のようすを描く）の技法が用いられ、大幅であるだけに細部まで明瞭に描かれている。人物が多彩であり、その一々に人名があてられている。

臨滅時の御本尊が懸けられ、机上には立像の釈迦仏が安置され、御弟子方は聖人の御枕辺を囲んで一心に御経を誦誦し、在家の信者たちは悲しみに身をよじらせて、七百年の昔の日蓮聖人御入滅の厳肅な有様を今に伝えている。

身延山では毎年十月十一、十二、十三日の御会式に、本図を棲神閣祖師堂に懸け報恩の法要を営むのである。

七百遠忌を記念して、原図の約三分の一に縮小された複製品が作られ、身延山大本堂建立寄附丹誠の寺院方に頒たれている。



如日月光明 能除諸幽冥

不染世間法 如蓮華在水

宗祖日蓮聖人七百遠忌正當會

昭和五十六年十月十三日

身延山久遠寺總務

身延山延興大學監

身延山学園理事長 日泰



日蓮聖人正当第七百遠忌報恩記念

身延山久遠寺總務  
身延山短期大学々監  
明星山妙純寺貫首

竹下日康  
猊下染筆

# 神 樓

研 究 紀 要

日蓮聖人第七百遠忌特輯号

第 5 4 号

昭 和 5 7 年 3 月

身延山短期大学学園

樓 神 第五十四号 目次

卷頭写真

「臨滅度時大曼荼羅」について

紙本着色日蓮聖人涅槃図 身延山久遠寺身延文庫蔵

日蓮聖人正当第七百遠忌報恩記念色紙……………身延山久遠寺法主 竹下日康 猊下

三観・三諦説について(一)……………若杉見龍(1)

身延山晩年における日蓮聖人……………上田本昌(11)

——弘安四年正月から八月まで——

法雲『法華義記』における信……………望月海淑(35)

日蓮聖人の時間論……………町田是正(51)

最蓮房あて御書の問題点……………中條暁秀(77)

——立正観抄と四重興廢・真如随縁論——

〈資料〉身延山歴代略譜(第三回).....	北	沢	光	昭	(93)
言語小論⑤.....	大	森		孝	(1)
身延山史索引.....	林		是	晋	(15)
昭和四十七年以降 日蓮聖人研究文献目録.....	奥	野	本	洋	(77)
妙玄庵歴代帖.....	林		是	幹	(93)
学園彙報・学園だより.....					(132)

後

記

# 三觀・三諦説について(一)

若 杉 見 龍

## 一

天台智顗の三觀・三諦説は天台教学中、觀心部門の最重要な教理であり、すでに諸師によって幾多の解説が施され、亦すぐれた研究も發表されている。<sup>(1)</sup>

智顗には『三觀義(三觀玄義)<sup>(2)</sup>』とよばれる著述がある。これは大本『四教義』と今は欠本になっている『四悉壇義』と共に開皇十五(五九五)年、隋の秦王広 即ち後の煬帝に献上した『淨名玄義』の離出本であり、更に二年後の開皇十七(五九七)年に、『維摩經文疏』と共に献上しようとした『維摩經玄疏』はこれを要約したものである。

智顗の最終的な三觀説は『維摩經文疏』において極まるものと思われるが、同文疏の中で、別相三觀と一心三觀については

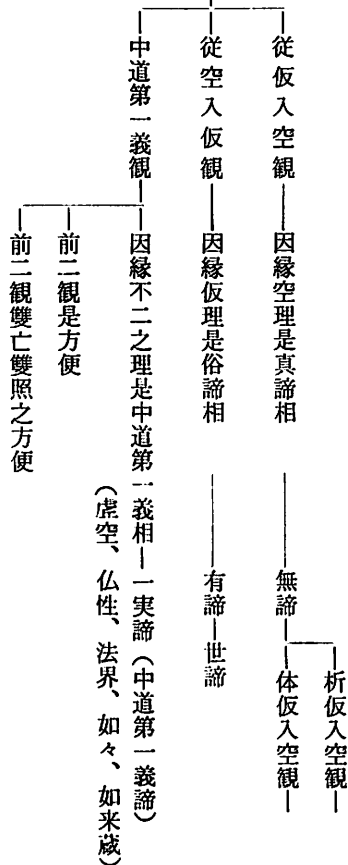
三觀玄義已具分別<sup>(3)</sup>

と述べているので、暫く、主に『三觀義』によって、三觀説を概説したいと思う。

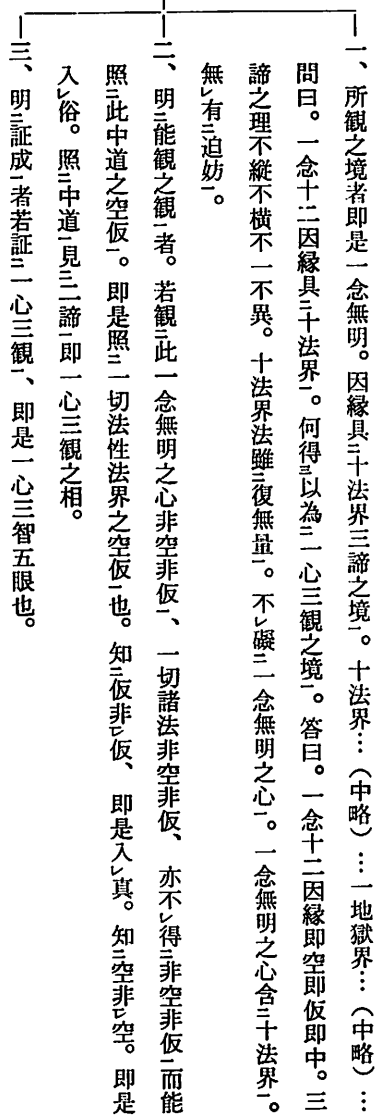
『三觀義』<sup>(4)</sup>上に説いている別相三觀と一心三觀は頗る詳細を極め、且つ複雑しているので、別相三觀については原文を要約して表示し、一心三觀については原文をそのまま掲げてみたいと思う、

三觀・三諦説について(一)(若杉)

○別相三觀



○一心三觀





智顗は別相の三観については之を「次第の三観」<sup>(6)</sup>、或は「別相の三智」<sup>(6)</sup>とも称しているので、別相という語と次第という語、及び三観と三智は外延と内包を同じくする同意語として用いていたようである。更に

明別相三観開三乘<sup>(7)</sup>

とも言っており、『四教義』<sup>(8)</sup>の中では藏・通・別の三教の行位・断証を明している。そして、從仮入空観は因縁空の理に、從空入仮観は因縁仮の理に、中道第一義観は因縁不二の理にそれぞれよるものとし、從仮入空観の從仮は析仮と体仮に分けられ、析仮入空観は藏教の仏位に至り、体仮入空観は通教の三乗の位に至り、又別教の初信から始まり第十住に至るといふ。從空入仮観は別教の菩薩の初行から第九行までの段階の行位に当り、中道第一義観は別教の菩薩の第十行から等覺までの修行の段階に相当し、この中道第一義観によって、菩薩行は完成する。又、中道第一義観の対境は「一実諦」であるが、これは『三観義』<sup>(9)</sup>の中の別の箇所では「中道第一義諦」ともよばれるが、『四教義』では更に

亦名三仏性・法界・如如・如来藏<sup>(10)</sup>。

とも言っている。即ち「一実諦」「中道第一義諦」「仏性」「法界」「如如」「如来藏」は同意語として智顗は考えていたのである。但、ここで注意すべきことは從仮入空観（略して空観）・從空入仮観（略して仮観）中道第一義観（略して中観）の対境はそれぞれ「真諦の相（無諦）」「俗諦の相（有諦・世諦）」「中道第一義の相（一実諦）」であって、空・仮・中の三諦とは言っていないし、中観のなかにはまだ空観・仮観を包容していないので、前二観（空・仮観）は「雙亡雙照の方便」<sup>(11)</sup>といっていることである。

次に一心三観は「一心三観撰」<sup>(12)</sup>内教一切五十二心位<sup>(12)</sup>といわれるように、前述の「別相（次第）の三観」とは異なる

三観・三諦説について」（若杉）

三観・三諦説について(一)(若杉)

つて、円教の観法として明かに区別して説かれる。そして、その所観の境としては「一念の無明」を掲げている。更に、この「一念の無明」は「十法界」と「三諦の境」であり、能観の観は「照中道」、見三諦」ることであると説いていることは重要視さるべきである。

次に『維摩經文疏』巻第二十一では三観として次のように述べている。<sup>(13)</sup> やや、長文に亘るが、智顗の三観説はここに要約してみられるので、繁を厭わず挙げてみたいと思う。

三観義具如三前明。今須更略分三別三観之相。三藏教菩薩既不見真不須論也。若通教菩薩但約三諦作三観。要實只成三観無第三観。亦非淨名今答之正意也。今但約別教円教二種。以簡別三観之相不同則有三種。一者別相三観。二者通相三観。三者一心三観。一別相三観者歷別観三諦。若從仮入空但得観真。尚不得観俗。豈得観中道也。若從空入仮但得観俗。亦未得観中道。若入中道正観。方得雙照三諦。是義如前三観玄義已具分別也。二通相三観者則異於此。從仮入空非但知俗仮是空。真諦中道亦通是空也。若從空入仮非但知俗仮是仮。真空中道亦通是仮。若入中道正観。非但知中道是中。俗真通是中也。是則一空一切空無仮無中而不空。一仮一切仮無空無中而不仮。一中一切中無仮無空而不中。但以二観當名。解心無不流通也。雖然此是信解虛通。就観位除疾不無患。前後之殊別也。三一心三観者。知一念心不可得不可説。而能円観三諦也。即是此經云「一念知一切法。即是坐道場成就一切智」。故此観前於三観玄義已具分別也。此三種三観初別相三観的在別教。歷別観三諦也。若通相三観一心三観的属円教也。

ここで、智顗は三観の相として、一別相の三観、二通相の三観、三一心の三観の三種を挙げ、別相の三観については、初めて「歷別観三諦」といい、三の一心三観については、「一念心不可得不可説而能円観三諦」として、一

念心において、円かに三諦を觀するものと説き、その詳細については前述の『三觀義』にその説明を譲っているのである。二通相の三觀については、俗仮は但だ空のみならず、真諦・中道にも亦通ずるのが空（觀）であり、俗仮は但だ仮のみならず、真空（真諦）・中道にも亦通ずるのが仮（觀）であり、中道も中のみならず、俗（諦）・真（諦）にも通ずるのが中（道）觀である。即ち、空觀・仮觀・中觀のどの觀においても三諦を觀するのであり、空を挙げれば一空一切空で、仮（觀）・中（觀）も空觀ならざるなきが如く、一仮一切仮であり、一中一切中であるというのである。従って、三觀は相通するというのが智顗の主旨のようであって、まだ三諦の各々が相通ずるとは述べていない。そして、この初めの別相三觀は別教の三觀であり、通相の三觀と一心三觀とは的しく円教の三觀であると説き、円教の三觀には二種類あることを記してはいるものの、通相の三觀と一心の三觀との相違については述べていない。よって、『三觀義』上に説く所の「一心三觀は所觀の境として、『三諦之理不縱不横不一不異』と「一念無明之心含三十法界」との二つを挙げているが、維摩經文疏では「一念心（中略）能円觀三諦」と説くのみで、「一念無明心含三十法界」については閑説していいことに注目すべきであろう。

最初述べたように、この維摩經文疏は開皇十六・七年頃の智顗の親撰である。因みに智顗は開皇十七年十一月に寂しており、如上の三觀・三諦説は智顗の最晩年の極説とも言えるものであるに特に留意しておきたい。

## 二

次いで、この智顗の三觀・三諦説を智顗が開皇十三年、荊州で説いたと伝えられている『妙法蓮華經玄義（法華玄義）』の中に窺って見たいと思う。

三觀・三諦説について（若杉）

三觀・三諦説について(若杉)

『法華玄義』の中に説かれる三觀説については既に詳細な研究が発表されているように、三觀についての基本的な論述はなく、達意的に述べられ、それは三軌や二智三智等と併説されているのであり、むしろ特徴的なのは三諦説である。よって『法華玄義』に見られる三諦説の主なもの挙げ、『法華玄義』の三諦説を述べたいと思う。

法華玄義卷第一上

- (1) 若隔歷三諦龜法也。円融三諦妙法也。<sup>(16)</sup>  
(2) 大梵於三三界自在。諸經或於俗諦自在。或於真諦自在。或於中道自在。但是歷別自在非大自在。今經三諦円融最得自在。<sup>(17)</sup>

法華玄義卷第二下

- (3) 五明三諦一者。衆經備有其義而名出纓絡仁王。謂有諦無諦中道第一義諦。今經亦有其義。壽量云。非如非異即中道。如即真異即俗。問若此經無四種因緣等名那用其義。答五住二死名出勝鬘。涅槃不応レ用其義。若不レ用五住一則不レ破無明。若不レ用三死一則非常住。又三仏名出楞伽。余經応レ無三仏義。衆經皆是仏説。名乃不レ同義不レ可レ壅云。今明三諦為レ三。一明三諦。二判三諦。三開三諦。却二前兩種二諦。以レ不レ明中道二故。就五種二諦得レ論中道。即有五種三諦。約別入通二点非有漏非無漏三諦義成。有漏是俗無漏是真。非有漏非無漏是中。常教論中但異空而已。中無三功用不レ備諸法。円入通三諦者。二諦不レ異前。点三非漏非無漏具一切法。与三前中異也。別三諦者。開レ彼俗為二兩諦。對レ真為レ中中理而已云。円入別三諦者。二諦不レ異前。点三真中道具足仏法也。円三諦者。非但中道具足仏法。真俗亦然。三諦円融一三三一。如止観中説云。<sup>(18)</sup>

『玄義』卷一上では(1)において隔歴・円融の三諦は既知のものとして述べられ、(2)においては、俗諦・真諦・中道(第一義諦)の各々が諸經に見られるが、法華經においては三諦円融が説かれていと述べてはいる。しかし、ここでも三諦についての説明はない。『玄義』卷第二下の(3)は境妙を明す段であるが、ここで初めて三諦の由来が説かれ、『法華經』寿量品の文によって、『法華經』にも三諦が説かれていると述べ、次いで中道第一義諦を中心に、別入通・円入通・別・円入別・円の各三諦の同異を説き、円教の三諦のみは中道第一義諦に仏法を具足するのみならず、真諦・俗諦にも仏法を具足するといひ、円教の三諦は円融して、三諦は一にして三、三にして一であると述べ、詳しくは摩訶止観に譲っている。この「一三三」については湛然は「(摩訶止観の)如第三卷頭体中及第七卷破横堅中<sup>(19)</sup>」と言っているが、紙数の関係で、此処ではこれ以上の言及は避けたい。

右の『法華玄義』の説く所を『三観義』『維摩經文疏』の前掲文と比較してみると、『三観義』等での「別相」或は「次第」或は「歴別」という語は「隔歴」という語になり、「通相」の語が「円融」となっていることに先づ気がつくのであるが、更には隔歴の三諦は龜法(別教)円隔の三諦は妙法(円教)であることに力点が置かれているように見受けられる。又、「維摩經文疏」では三観の通(円融)が説かれるに對し、『法華玄義』では三諦の円融にと説相が著しく変化しているのである。『法華玄義』卷第二下に見るように、三諦の円融についての説明は『摩訶止観』に譲っているのであるが、その『摩訶止観』も実は開皇十四(五九四)年に説かれており、『三観義』撰述の一年程前のことになる。又(3)において見られる別入通・円入通・円入別の三被接は既に拙論において論じたように、三大部の筆録者たる章安灌頂の案出創意によるものと思われる。そして、この三被接と共に説かれる三諦の円融は恐らく『法華玄義』卷第一上に記述されている三諦円融と共に、『玄義』の筆録者たる灌頂の付加した部分であろうと推察

三觀・三諦説について(一)(若杉)

されるのである。更に言えば、灌頂は智顗親撰書における観(主観)の別相・通相・の三観を發展させて、用語を改め、境(客観)の隔歴・円融の三諦を説くに至ったのではなからうか。もし『法華玄義』や『摩訶止観』に述べているように隔歴、円融の三諦説を智顗が説いたとすれば、『法華玄義』や『摩訶止観』より後に撰述された『三観義』や『維摩經文疏』等にそれらが何らかの形で触れたことであろうが、それらしき記述は全く見当たらないのである。

『法華玄義』によれば、三諦は『三観義』に説かれるように、真諦(無諦)・俗諦(有諦・世諦)・中道第一義諦(一実諦)であることは前掲の(2)によって知られるが、後になって三諦は空・仮・中の三諦として説かれるようになった事、並びに『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』の三大部中の三観三諦説相互の関係については別稿を期したい。

〔註〕

- (1) 佐藤哲英著『天台大師の研究』(昭和三十六年刊)六八四頁以下  
日比宣正著『唐代天台字研究』(昭和五十年刊)一一三頁以下
- (2) 『三観義』は現行の正統藏經では『維摩詰經三観玄義』と題され、又、智顗自身では『三観玄義』と言っている。(維摩經文疏卷第二十一・台灣版正統藏經二十八冊百十六紙ウ下)
- (3) 台灣版 正統二十八冊、百十六紙ウ下
- (4) 台灣版 正統九十九冊、三十八紙ウ上以下
- (5) 同前 四十八紙ウ下
- (6) 同前 四十四紙オ上
- (7) 同前 四十四紙オ上
- (8) 『三観義』下(同前五十一紙オ下)にも三観それぞれを四教に分けているが、『四教義』の方がより詳細なので、今はこれを付記した。

- (9) 同前 五十紙ウ下
- (10) 正蔵四六・七二七下
- (11) 台湾版正統九十九卷 四十一紙ウ上
- (12) 同前 五十一紙オ下
- (13) 台湾版正統二十八冊百十六紙ウ上——百十七紙オ上
- (14) 『法華玄義』における三観 野本寛成（印度学仏教学研究第二十九卷第二号二三七頁——二三九頁）
- (15) 同前
- (16) 正蔵 三三・六八二上
- (17) 正蔵 三三・六八四下
- (18) 正蔵 三三・七〇四下
- (19) 法華玄義釈義卷第六（正蔵三三・八五九上）
- (20) 楼神第五十号（昭和五十三年三月刊）二十八頁以下「被接」について

# 身延山晩年における日蓮聖人

— 弘安四年正月から八月まで —

上 田 本 昌

## 一、弘安四年正月

元と高麗の兵船が、再び我が国を襲ってくるであろうという情報の渦巻くなかで、弘安四年の正月が明けていった。世情騒然たる中にも、幕府は三月に高野山へ勸学院を創立して、記文を置く<sup>(1)</sup>という余裕をみせていた。しかし、五月廿一日、弘安の役<sup>1</sup>が起り、彦岐・対馬に夥しい兵船が来襲し、侵略の火の手が挙がると、最早やこれを迎え打つことに急であつて、全く他をかえりみる余裕もなくなっていたのである。

身延入山後、七回目の正月を世情とは逆くに、静閑たる環境の中で迎えられた聖人は、身の不調をかこちながらも、新春を迎えた悦びに浸っていたのである。正月五日に駿河国富士郡にある重須殿の女房から、正月用の餅<sup>(2)</sup>（十字）と菓子一籠が届けられた。その『御返事』には、

「正月の一日は日のはじめ、月の始め、としのはじめ、春の始。此をもてなす人は月の西より東をさしてみつがごとく、日の東より西へわたりてあきらかなるがごとく、徳もまさり人にもあいせられ候なり。」<sup>(3)</sup>

と正月一日を祝う心を述べている。新春を賀す気持は聖人も又深いものがあり、新年の贈り物に対しては、必ず

身延山晩年における日蓮聖人（上田）



礼状と共に心の籠った年賀状がしたためられているのが通例であるが、右の一文もそうした年賀状の中では代表的なものの一つに挙げられよう。この文に続いて、次のような地獄と仏についての注目すべき説を示している。

「抑地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば、或は地の下と申経もあり、或は西方等と申経も候。しかれども委細にたづね候へば、我等が五尺の身の内に候とみへて候。さもやをばへ候事は、我等が心の内に父をあなづり、母ををろかにする人は、地獄其人の心の内に候。譬へば蓮のたねの中に花と葉とのみゆるがごとし。仏と申事も我等心の内にをします。」

地獄も仏も共に、我等肉身の内にあることを明らかにし、父母をおろそかにする者の内に地獄があることを示している。社会倫理の上からも両親をあなずることは誠であるが、特に聖人は身延の嶺から、両親のことを懐しく追憶されることが、しばしばであった。また次に「我等は父母の精血変じて人なりて候へば、三毒の根本姪欲の源也。いかでか仏はわたらせ給べきと疑候へども、又うちかへしうちかへし案候へば、其ゆわれもやとをばへ候。蓮はよきもの、泥よりいであり。」とあって、我等凡夫の出生は、三毒の根本・姪欲の源であり、仏とは縁の遠い存在であるかのごとくであるが、よく思案をすれば、あの蓮華が濁った泥沼の中から、清浄な花をつけるように、いわれが悟れるのであるとしている。つまり三毒の身に仏果をうることでできる即身成仏の説を、わかりやすく説いている。

更に、正月の始めに法華経を供養することは、池より蓮の蕾が開くのと同様であるとし、凡身の内に仏果のみあることを明らかにしている。相手が女性であるため、わかりやすい譬を用い、教化の面にも細かな配慮がなされている。また注目すべきことに、「今日本国の法華経をかたきとしてわざわいを千里の外よりまねきよせぬ。」という一文があることである。日本中が正法の仇となつたために、禍を千里の外より招くことになつたのであるが、こ

これは明らかに元（蒙古）の大軍が我國を攻めて来たことを指しているものといえよう。「法華経をかたきとする人の国は、体にかげのそうがごとくわざわい来べし。」ともあり、再び蒙古の軍勢によって、禍を招くであろうことを暗に示しているものとも受けとめられよう。これに対して、「法華経を信人はせんだんに、かをばしさのそなえたるがごとし。」とあって、一文を結んでいる。

真蹟は富士大石寺にあり、重要文化財に指定されている。七紙にわたる筆蹟も雄々としており、代表的な筆勢である。古来、『十字御書』或いは『重須殿女房御返事』と称されている。尚、重須殿については、石川新兵衛入道のことであり、女房は南条時光の姉であるといわれている。

続いて正月十三日には、同じく富士の上野尼御前から、正月用の食糧品が数多く送られて来た。即ち「聖人ひとつ（筒）、ひさげ（提子）十か。十字百。あめひとをけ（一桶）二升か。柑子ひとこ（一籠）、串柿十連。ならびにおくり候了。」とあるので、当時とすれば草庵の食膳を久し振りに賑ぎわすに足るものであったろうと考えられる。聖人は早速に御礼状と、年賀状を兼ねた書信を記されている。「春のはじめの御喜花のごとくひらけ、月のごとくみたせ給べきよし、うけ給了」聖人の年賀状は、初春を喜ぶ言葉で始り、いつも芽出たい祝福の詞で飾られている。

ところでこの書状には、弘安三年九月に死別した尼御前の子である七郎五郎のことを追憶して、慰めの情を寄せている。上野尼御前とは南条時光・七郎五郎の母であり、兵衛七郎の妻に当る人である。富士郡の上野に住し、西谷へはいつも使者をつかわしてご供養につとめた外護檀越の代表的存在であった。この度も上記のような多種の品が届けられている。

書状の内容は、経文の中に「子のかたき」と記されたものがあるとし、実例として衆は母を食ひ、安祿山は子に殺

身延山晩年における日蓮聖人（上田）

され、為義は子の義朝に命を取られたことを挙げ、次に「子は財」という經文ありとして、法華經の妙莊嚴王は子の淨藏によって救われ、生提女は子の目連によって助けられた例を出し、「されば子を財と申經文たがう事なし」と述べ、五郎七郎は「子は財」という經文にあてはまる立派な青年であったことを記している。わずか十六才で他界したこの子は「心ね、みめかたち、人にすぐれて」いただけに、母としてはあきらめのつかない悲嘆であつたらう。聖人はその母の心情を察して、心のこもった慰みの文を綴られているのである。わが子に会いたくば「釈迦仏を御使として、りやうぜん淨土へまいりあわせ給へ。」と説き、「南無妙法蓮華經と申女人の、をもう子にあわずという事はなしととかれて候ぞ。いそぎいそぎつとめさせ給へ<sup>8)</sup>。」と文を結んでいる。「靈山淨土」という言葉が用いられているが、身延の聖人は、此の御書に限らず死後靈山淨土で再会することをしばしば説かれている。従つて法華經行者の死後の淨土は、「靈山淨土」であることは間違いないものといえる。但し、この「靈山淨土」は死後でなくては行くことのできない淨土ではなく、聖人の場合、「我等は穢土に候へども心は靈山に住むべし<sup>9)</sup>」であつて、聖人は心の面で常に靈山淨土へ往詣されていたと考えることができよう。

身延の谷で寒苦缺乏に耐えつつも、尚且つ一方で靈山に往詣される法説にひたつておられた聖人の心境には、こうした「心は靈山に住べし」という純粹に宗教的な意識をもっていたことが肯けるのである。特にこの御書は、前の重須殿女房に与えた御書と同じく、対告衆が女性であり、しかも息子を若くして失った母への手紙であるため、靈山往詣の思想は濃いものとなつて現われているとも云える。真蹟は八紙で富士大石寺に在り、重要文化財に指定されている。

## 二、弘安四年の春

節分も過ぎて春も立った二月十七日に、棧敷女房から「白きかたびら布」が送られて来た。御供養の主である棧敷女房については、今のところつまびらかではない。棧敷というのは地名からきたもので、日昭の母と妙一尼、それに松野氏も、この棧敷に関連していたというが、さだかではない。真蹟には「さじきの女房御返事」<sup>(10)</sup>となっており、さじきの女房が果して誰なのか、更に研究を要するところである。建治元年五月二十五日付の『さじき女房御返事』には「兵衛左衛門殿」<sup>(11)</sup>の名があり、「かたびら」の供養について記されているので、この折りも「かたびら」の御供養を行ったものと考えられる。また文永九年三月二十日付の『佐度御書』には、「此文は富木殿のかた、三郎左衛門殿、大蔵たう（塔）のつじ（辻）十郎入道殿等、さじきの尼御前、一一に見させ給べき人人の御中へ也。京・鎌倉に軍に死る人人を書付てたび候へ。外典鈔・文句、二・玄四、本末・勘文・宣旨等これへの人人もち（持）てわたらせ給へ。」<sup>(12)</sup>とある。ここでは「さじきの尼」となっているが、「さじきの女房」と同一人物か否か、この点も不明であるが、この「さじきの尼」は文面からみて京・鎌倉の情報を或る程度つかむことのできる立場の人で、仏典に関する文書についても入手可能な地位にあった者の一人であることが推察できよう。

また文永十年四月廿六日付の『妙一尼御返事』には、最後の宛名が「さじき妙一尼御前」<sup>(13)</sup>となっている。従って妙一尼も「さじき」の名が冠せられているところから、この人も検討の対象となってくる。ところが妙一尼もまた生没年不明で、日昭の母、或いは姉、更に日妙の子で乙御前のことではないかとの諸説がある。<sup>(14)</sup>古来、二人説・三人説もあって、「さじきの女房」と「妙一尼」「妙一女」については、定った説がないのが実情である。

身延山晩年における日蓮聖人（上田）

しかし、今の「棧敷女房」に与えられた御返事には、「かたびら」の供養に対し、十種供養によせて功德の大きいことを明らかにしている。尚、末文に「あらあら申すべく候へども、身にいたはる事候間、こまかならず候。」と記している。詳しく述べたいところであるが、「身にいたはる事」があるので、詳細については省略したいというのである。この頃の聖人は又健康を害され、養静を要する状況であったことがわかる。本書の真蹟は、和歌山県の了法寺にある。二紙目に「二月十七日」の日付があるが、『縮冊遺文』では、本書を建治四年に配している。しかし、筆蹟から見て晩年の弘安四年をとる『昭和定本遺文』又は弘安五年とする『対照録』の方が妥当だとも考えられる。

二月に入り聖人は久し振りに又曼茶羅の染筆を行っている。即ち二月二日に「優婆塞藤原日生」宛のものと、「俗資光」宛の二幅が伝っている。日生に授与された曼茶羅は、珍らしく「二日」という日付がはっきり読みとることができ、現在池上本門寺に所蔵されている。資光へ授与された曼茶羅には「二月 日」とあって、日数は入っていない。真蹟は熊本の本妙寺に所蔵されている。二幅共に弘安後期の曼茶羅として、中尊首題と四天王及び梵字が大きく太字で書かれ、花押と署名も雄大に記されている。共に三枚継の用紙で、大きさもほぼ同形である。しかし、授与者の日生と資光については詳しいことが伝えられていない。曼茶羅本尊の授与があった点から推して、当時熱心な門下の信徒であったことには間違いないものと考えられうる。

一か月後の三月十八日には、富士の南条家から、<sup>(17)</sup>「鶯」一俵が届けられて来た。その礼状が記されているが、真蹟は伝っていない。日興の写本が現在富士の大石寺に所蔵されている。それによると、「又かうぬし（神主）のもとに候御乳鹽一疋、竝に口付一人候。」とある。問題はこの「乳鹽一疋」であるが、一説には馬のことではないかとしている。<sup>(18)</sup>「乳鹽」という文字が使われているので詳しくは不明であるが、例としては『新勅撰和歌集』の中に、藤原雅経

の歌として、「くれないのち<sup>し</sup>ほもあかず三室山いろにいづべきことのはも哉<sup>19</sup>」とある。この場合は「千入<sup>ちいり</sup>」であつて、幾回も染液にひたして、色を染めることを云うのである。『十六夜日記』の一節には、「時雨けり染る千入のはては又紅葉の錦色かはるまで<sup>20</sup>」とあるのでもわかるごとく、染色に関する語である。従つて、聖人に帰依している富士の熱原在住の神主のもとにある「御乳鹽」という馬と口取の者一人を身延に召したいという意味ではないか、とする説もある<sup>21</sup>。しかし馬だとしたら、西谷の生活で果して馬の必要性がどの程度あつたか尚疑問の余地があるようにも考えられる。又かりに馬であつたとして、一年後に身延を下山する際、波木井家から立派な「くりかげの御馬はあまりをもしろくをばへ候<sup>22</sup>」という名馬の差し廻しがあつた程であるので、難路遠方の南条家に依頼されなくとも、近か間でまに合わすこともできたのではないか、とも考えられよう。或いは「神馬」として飼う予定であつたかもしれないが、この年の秋に草庵の大改修があり、従来の小庵から大坊・小坊・馬舎を備えた建造がなされている。この点については後に又詳しく述べることにするが、「馬舎」を持つということは、当然馬の飼育が当時あつたことを物語っているといえる。

聖人自身が常に馬に乗られていたかどうかは疑問であるが、訪ねて来る弟子・檀越の人々は、馬による交通を行つていたとも考えられるので、馬舎の必要はそうした面からも背けるのである。身延への入山、及び下山の際は、勿論馬を使用されたものと考えられるが、病弱になられていた聖人自身が馬で山内、或いは山外に出られるということは考えられないことのようにも推察できる。ともかく爰では「御乳鹽」が馬であろうとする説は、「口付一人<sup>23</sup>」という語から考えても、一応馬だともいえるが、尚考える必要も残っているといえよう。

この礼状では更に「故五郎殿」のことにもふれつつ、尚今後も法華經をあだむ者が現れて、たえることはないと思

身延山晩年における日蓮聖人（上田）

うが、法華経を「身にて心みさせ給<sup>レ</sup>候ぬらん。たうとしたとし。」と結んでいる。これは法華経を身をもって守り通したことに對する讃詞であつて、恐らくは彼の熱原法難の折りに南条氏が、陰に陽に外護し、そのためその筋や周囲から「あだまれ」たことに對するねぎらいの言葉であつたらうと解することもできよう。

また此の月には、「俗日大」に對し曼荼羅が一幅授与されている。香川県高瀬の法華寺に保存されているが、右下「大広目天王」の脇に小さく「富士上野顯妙新五郎仁日興申与之」と日興の添書がある。直接の授与者たる「俗日大」については、さだかではないが、日興が後に富士の百姓新五郎へ与えた御本尊であることがわかる。この点については日興の『白蓮弟子分与御筆御本尊目錄事』の中に、「富士上野新五郎者日興弟子也、仍申<sup>与</sup>之<sup>二</sup>百姓<sup>一</sup>」と明記されている。更に左下「阿闍世大王」の下には、「懸本門寺、可為末代重宝也」と日興の添書がみえる。従つてこの御本尊は、本門寺に一度奉安されたものであり、永く重宝として尊重すべきであるとの注意書きのついたものである。さすがに堂々たる筆勢で、花押も雄大である。

三、三大秘法稟承事について

四月八日、釈尊降誕会を期して、西谷では『三大秘法稟承事』即ち一般に三大秘法鈔といわれている一書が完成した。この御書は古来とかく論義され、現代でもその真偽について、種々論じられているものである。真蹟は存在せず、写本として日親の筆によるものが京都本法寺にある。本書の宛名は「太田金吾殿御返事」となっている。聖人の檀那の中でも有力とされている下総の太田乗明に与えられたものであることには間違いないであらう。真蹟が伝わっていないため、真偽の両説はそれぞれ盛んであり一様ではない。

今ここでその代表的なものを二・三挙げてみることにすれば、始めに真作であると云う側に立つ人に、三位日順がある。日順は日興の法孫で、富士北山本門寺の大学頭であり、『本因妙口決』の中で、日蓮宗の大事を説きつつ「三秘法抄云、題目有三意云云、能可<sup>レ</sup>習<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>」<sup>(25)</sup>と本書を引用し、更に『摧邪立正抄』の中で、「法華者諸經中第一、富士者諸山中第一也」<sup>(26)</sup>とし、故に富士へ法華本門の戒壇を建立すべき旨を説いて、「是即大聖之本懷御抄分明也」としている。これは日順が本書を所依として立論しているところからみてわかるごとく、真撰として扱っているのである。

次に久遠成院日親は、本書を真撰とみて書写し、現に京都本法寺に保存されている。この外に身延の日朝も書写しており、久遠寺に保存されている。一妙院日導・優陀那日輝等いずれも真撰とみなしているようである。<sup>(27)</sup>下っては山川智応・清水竜山らも共に真撰説を唱えている。<sup>(28)</sup>これに対して本書を偽書であるとする見方もあり、顕本法華宗の学者たる合掌日受・永昌日鑑らは共に偽書説を掲げ、田辺善知・鹽田義遜らも、<sup>(29)</sup>富士派を中心とした偽作であるとみなしている。

このように真蹟が現存しないため、真偽の論もやかましく、真偽未決の御書として永く扱われて来ているが、一方では真蹟が存在していたことを記している文献もあるのである。即ち、寛正二年（一四六一）に中山の学僧である本成房日実の著した『当宗宗旨名目』<sup>(31)</sup>によれば、中山に真蹟が在ることになっており、享保二十年（一七三五）刊の玉沢日好による『録外徴考』には、「正本富士重須本門寺有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>」<sup>(32)</sup>となっている。ところが中山にも富士にも現在のところ真蹟は存在していない。中山や富士に若し最初から保存されていたとしたら、当然『常修院本尊聖教録』及び『富士一跡門徒存知事』の中に、その名が見えていなくてはならないはずであるが、これらにも見えないのであり、

身延山晩年における日蓮聖人（上田）



不明の点も又多いのである。

鈴木一成教授は、こうした諸説をふまえた上で、「臆説」であることわりつつ、「本鈔の法門は聖人が六老僧や富木・大田等の教団の重立に、深秘の法門として口決相承されたもの<sup>(33)</sup>」という見方をしている。こういうことであれば現在真蹟が存在しなくとも、又途中から真蹟が存在したと云う記録が出て来ても、無理からぬことであるとしている。しかし、仮りにそうであつたにしても、文献的に証明されているわけではないので、やはり結論的には、真偽未決の域を出るわけにはいかないと云えよう。尚、本書については、最近に至り、コンピューターを用いて、統計的な手法により、真偽の判別解折研究がおこなわれた。その中間成果が五十五年六月に「朝日新聞」から報道され、俄かに又真偽判別についての論が、「日蓮宗新聞」<sup>(34)</sup>等で見られるようになった。真偽についての論は、まだ今後も続くことであろうが、結論的にはやはり真偽未決となるであろう。しかし、山川智応、鈴木一成両氏の説くところから推して、その距離は偽よりも、むしろ真に近いと見ることができるようになるのである。

本書の本文では、先ず神力品の結要四句を引用し、本化上行に付属した要法たることを論じている。また本法には「但專限<sup>(35)</sup>本門<sup>(36)</sup>寿量<sup>(37)</sup>一品<sup>(38)</sup>出離生死の要法也」と論じ、寿量品を要法と定め、此の「寿量品所<sup>(39)</sup>建立<sup>(40)</sup>本尊者五百塵点当初以来此土有縁深厚本有無作三身教主釈尊是也」と「本門<sup>(41)</sup>本尊」を明示している。次に「本門題目」については、正・像と末法との二意があるとし、今末法の題目は「異<sup>(42)</sup>前代<sup>(43)</sup>互<sup>(44)</sup>自行化他<sup>(45)</sup>南無妙法蓮華經也。名体宗用教五重玄五字也。」と述べ、更に「本門<sup>(46)</sup>戒壇」については「王法<sup>(47)</sup>冥<sup>(48)</sup>弘法<sup>(49)</sup>弘法合<sup>(50)</sup>王法<sup>(51)</sup>王臣一同に本門<sup>(52)</sup>三大秘密の法を持て（乃至）尋<sup>(53)</sup>似<sup>(54)</sup>三靈山淨土<sup>(55)</sup>最勝地<sup>(56)</sup>可<sup>(57)</sup>建立<sup>(58)</sup>立<sup>(59)</sup>戒壇<sup>(60)</sup>者歟。可<sup>(61)</sup>待<sup>(62)</sup>時耳。事の戒法と申は是也。」と説いている。

しかも此の三秘については、本化として仏から直接に付属を受けたものであることを、次の通り明らかにしている

のである。「此三大秘法は二千余年の当初、地涌千界の上首として、日蓮に自<sup>三</sup>教主大覚世尊「口決相承せし也。今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に芥爾計りの相違なき色も替らぬ寿量品の事の三大事なり。」とあるごとく、「口決相承」したものとして受けとめられている。これは純粹に宗教的境地における相承であり、まさに神力別付の付屬を受けたとする自覚から発したものとえよう。「本化仏使」としての立場でなくては表現できない言葉ではないかと考えられる。三大秘法について、明確に解説をされ、末法の「教」を説明すると共に、末法における「師」についても同時に明解な答を与えられた御書として、注目すべき一書であるといえる。先述のごとく真偽の論も残っている点から考えると、そうした点も含めて、所説の教義上からも問題の書であるということもできよう。

#### 四、弘安四年の夏

四月に入って間もない五日に聖人は、「僧日春」宛の曼荼羅をしたためられた。九二・一廻に及ぶ丈のほとんど全紙にわたって、大きく首題が書かれているのが特色である。僧日春が如何なる人物か、詳しいことは伝っていないが、恐らく病弱の聖人を訪ねて、西谷へ来た人々の中の一人であつたろう。真蹟は沼津岡宮の光長寺に所蔵されている。又十七日には「俗真広」宛の曼荼羅が書写されている。これは五四・二廻の丈で、前の御本尊に比較すると小型であり、筆の跡も細目になっている。又四天王がなく梵字が左右に大書され、ほぼ丈の長さ一杯に及んでいるのが特徴である。通称を「若宮御本尊」と呼び、京都の本圀寺に所蔵されている。「若宮御本尊」と称する由来については、弘安元年七月五日に沙門日門に授与された御本尊についても、同様の通称がつけられている。<sup>(88)</sup>

また下旬に入つて廿五日には、「比丘尼持円」に与えられた曼荼羅が一幅書写されている。これは中尊首題の「經」

身延山晩年における日蓮聖人（上田）

の文字が、特に一段と大きいところに特徴がある。京都の本満寺に所蔵されているが、右下「大広目天王」の脇に、「甲斐国大井庄々司入道女子同国曾弥小五郎後家尼者日興弟子也仍申与之」とあり、また、「可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>本門寺重宝也<sub>一</sub>」ともある。更に、左下花押の近くには「孫大貳公日正相伝之」と日興の添書が付されている。これも又日興の関係者の一人であつたことがわかるが、日興は「甲斐国曾根五郎後家尼者寂日房弟子也、仍日興申<sub>レ</sub>与之<sub>二</sub>、但<sub>レ</sub>聖人御滅後背<sub>一</sub>了」<sup>(40)</sup>とも記しているので、先きの御本尊の添書との間に相異するところもあり、断定するわけにはいかないが、恐らく「背了<sub>一</sub>」といった理由から、孫の大貳公日正が、これを相伝する結果となつたものとも推察できよう。ところでこの大貳公であるが、日郷の『日興上人御遷化次第』によると、御葬送に當つての行列次第の中に、二人の大貳公がいたことがわかるのである。即ち、「御興」の前陳右に三位阿闍梨ら六名の門弟が名をつらねてゐる中に、大貳公が記されている。もう一人は同じく「御興」の後陳右に、伊予阿闍梨ら六名の門弟がつらなつてゐる中の一人に、大貳公の名が出てゐるのである。<sup>(41)</sup>又「御遺物配分事」を記録した中にも、二名の大貳公がいたことを伝えているので、この御本尊に記された人物は、二名存在した大貳公の何れに當るか、更に研究を要するものといえよう。

さて、その翌廿六日には「比丘尼持淳」へ授与された曼茶羅の染筆をさせてゐる。この頃は陽氣もよく西谷を訪ねて来る僧俗も多くなり、聖人の病状もかすかながら少康をえた感もあつて依頼に應じ、筆を執られる機会も多くなつていったものと考えられる。それにしても連日筆を執られ曼茶羅・消息文等を書き遣された西谷での生活は、病状次第に進み衰弱を重ねた身にとって、相当な負担となつてゐたものと考えられるのである。入滅一年前の聖人はすでにその時の近きを悟り、できる限りの力をふりしぼつて弟子・檀越の請いに應じ、御本尊の授与も、次第に数をましめていかれたとみることができよう。入滅までの約一年間に現存十五幅に及ぶ曼茶羅の染筆があり、この間の事情を物

語っているといえよう。この持淳尼あての御本尊は、鎌倉妙本寺に保存されている。

二日後の二十八日の夜、突然に大風が吹き荒れた模様である。「御そらう（所勞）いかん。又去文永十一年四月十二日の大風と、此四月二十八日のよの大風と勝負いかん。いかんが聞候といそぎ申せ給候へ。」という真蹟一紙が京都本願寺にある。大風のあった門下の一人に御見舞いを兼ね、詳しい情報をえようとされ、この一文を送られたものと考えられる。世はまさに蒙古の大軍が再度日本総攻撃を開始しようとしているという情報が入り乱れて、世上の不安はつのる一方の時だけに、この大風も我が国の前途を暗示するかのごとく受けとめられた向きもあったことであろう。聖人は『立正安国論』でも明らかにしているように、亡国の前兆として天変地天をとらえられている面もあり、他国侵逼の難の前兆の一つとみなされたものともいえよう。

五月に入り聖人の健康状態は、一向に回復を迎えず、衰えをつのらせていった。そんな頃、池上宗仲・宗長の兄弟から、鎌倉八幡宮造営について、工事にはずれた旨の知らせが届いた。そこで池上兄弟を慰め励ます意味から一書が記されていた。『八幡宮造営事』がそれであり、廿六日付で発送されている。真蹟は現存していないが、『延山録外』本の写本が伝えられている。それによると、「此七八年が間、年々に衰病をこり候つれども、なのめに候つるが、今年は正月より其気分出来して、既一期をわりになりぬべし。其上、齡既六十みちぬ。たとひ十一今年すぎ候とも、一二をばいかでかすぎ候べき。」と語っている。身延へ入山して間もなく、頑強の身にも病の生ずるところとなり、一年毎に衰退していった聖人は、此の書にもある通り、正月より更にその度を加え、一期の終りに近ずいたことを悟られている。聖者は自身の臨終近きを悟るといわれているが、聖人も本書において、たとえ十のうち一つ今年を過ぐすことができたとしても、一年二年と生き延びることは不可能であろうと云われた通り、自身の余命を自覚され

ていたのであった。

すでに二月十七日の棧敷女房宛の書信にも先述のごとく、「あらあら申すべく候へども、身にいたはる事候間、こまかならず候」とことわっている通りであるが、この頃になると「此程上下人人御返事申事なし。心もものうく、手もたゆき故也」という状態にまで衰弱が進んで来ており、筆を執ること自体、容易でなかったことがわかる。よく物事を見通す眼力と卓越した思考力を持ち、如何なる困難をも乗りこえて来た不屈の気概を身につけた聖人ではあったが、「老・病」の二つの波が寄せては返す中で、次第に頑健な身体は、衰えを深めていったのである。この間には山間僻地での不自由な衣・食・住から来る影響や、西谷の生活環境から来る陰湿な土地や不健康な条件等も加わり、門下檀信徒からの御供養があったとはいえ、晩年の聖人を支えるには、不備が多く思うにまかせぬ点多々あったことは云う迄もなからう。入山以来、毎年のことながら、春から秋へかけてのシーズンは、遠国からはるばる入山の師を慕って、門弟や檀越が来訪し、教えを乞う数は次第に増えていったのである。しかし、この頃はそうした人々との対話も、直接聖人の被勞に響いて行つた。「手もたゆき故」さすがに返事も書けない状態ながら、池上兄弟へ敢て「大事なれば苦を忍で」しるされるに至つたのである。

内容は八幡宮の造営については、番匠であつた兄弟が、担当をはずされたことは、讒奏した者がいた為であろうとし、「一往はなに事つけても辞退すべき事ぞかし。幸讒臣等がことを左右よせば、悦でこそあるべきに、望るゝ事一失也。」とさとしてゐる。また日本国の一切衆生が謗法の罪によつて、釈迦・多宝・十方分身の諸仏等に捨てられた時、八幡宮のみを造営してみても「力及給べしや」と述べ、かえつて造営の大番匠をはずされたことは「天の御計歟」としてゐる。その理由は、かつて文永の役の時、大風が吹いたが、又今年も四月廿八日に大風があつた。しかるに四

月廿六日は八幡宮の上棟式であつたと云うから、三日の内に大風ありと云うことは疑いないものとなつた。と述べているのである。<sup>(47)</sup>やがて此の文に見える「大風」は、本書には記されていないが、「弘安の役」によつて、「文永の役」の時と全く同じ状態を呈していたことが知られるに至るのである。最後に「返返穩便にして、あだみうらむる気色なくて、身をやつし、下人をもぐせず、よき馬にもならず、鋸・鎚手にもち、腰につけて、つねにえめるすがたにておわすべし。」と、番匠としての日常生活における在り方に至るまで、細まやかな注意を与えているのである。ここにも聖人の豊かな人間性が窺えるが、又一面、法華経の菩薩行を詩にたくして表したという宮沢賢治の詩の一節<sup>(48)</sup>を彷彿とさせるものがあるように考えられる。恐らく賢治もこうした聖人の御書を一見し、影響を蒙つたものではないかと考えられる。単に宗教上の問題だけではなく、人間対人間として、世に処する上での教示を与えられるということは、門下檀越にとつては、宗教上の「師」であると同時に、人生におけるリーダーとして、此の上もなく心強く、「生きる」上での活力となつていったであらうことは、推察にかたくないところである。

「此事一事もたがへさせ給ならば、今生には身をほろぼし、後世には悪道に墮給べし。返返法華経うらみさせ給事なかれ。」と結んでいる。如何なることがあつても法華経をうらんではいけないとする訓誡は、「善に付け悪につけ法華経をすつる、地獄の業なるべし」という『開目抄』の文と、同意のものといえよう。宛名は大夫志と兵衛志の兩名宛になつており、この兄弟から来た手紙の御返事である。病身で「上下人人」にすべて出すべき消息文を、一切断つてゐるなかで、敢て筆を執られた聖人の心中は、この池上兄弟のことを如何に深く考えておられたか、察するに余りあるものがある。

次に、此の年の春から夏へかけての書簡と見られている『上野殿御書』（一紙断簡）がある。「故五郎殿の十六年

が間の罪は江河の一てい（滯）、須臾の間の南無妙法蓮華經は大海の一てい等云云<sup>(50)</sup>とあるので、南条氏宛の断簡であることは間違いないものと考えられるが、前後の真蹟が欠けているので、御書全体の文意を知ることができない。恐らくは真蹟一紙の第一行目最初に「あぢわい、大海の一滯は五味のあぢわい」とあるので、南条家からなんらかの御供養があり、その礼状として記されたものとも考えられよう。京都妙伝寺に真蹟は所蔵されている。

六月に入り、ついに二度目の国難がやって来た。元の將軍范文虎は高麗軍と共に、大船団をもって博多に総攻撃を仕掛けて来たのである。<sup>(51)</sup>此の重大ニュースは鎌倉在住の人々から、直に西谷の聖人へ急報されるに至った。そこで聖人は六月十六日付で、次のような書状を発し、門下の人々に対し厳しい訓示を与えている。「小蒙古人寄<sup>ニ</sup>来<sup>ル</sup>大日本<sup>ノ</sup>国<sup>ノ</sup>之事、我門弟<sup>ハ</sup>竝<sup>ニ</sup>檀<sup>ニ</sup>那<sup>ニ</sup>等<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>若<sup>シ</sup>向<sup>フ</sup>他人<sup>ニ</sup>將<sup>シ</sup>又<sup>シ</sup>自<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>及<sup>フ</sup>言語<sup>ヲ</sup>。若<sup>シ</sup>違<sup>フ</sup>背<sup>キ</sup>此<sup>ノ</sup>旨<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>離<sup>ス</sup>門<sup>ノ</sup>弟<sup>ノ</sup>等<sup>ノ</sup>由<sup>リ</sup>所<sup>ニ</sup>存<sup>ス</sup>知<sup>ス</sup>也<sup>ヲ</sup>。以<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>旨<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>示<sup>ス</sup>人<sup>々</sup>候<sup>也</sup>。」とある。門下にとって再度の蒙古来襲は、まさに聖人が予言した他国侵逼の難の適中を現し、二度にわたって予言が現実のものとなったことに対する驚きであると同時に、大いに自慢すべきことでもあったのである。門下の人々が他に向って予言適中に対し誇らしげな言動をとったことも無理からぬことであつたらう。

しかし、聖人はこうした門下の態度を厳しく誠しめているのである。確かに予言が適中したことは、嬉ばしいことであるが、これは他国によって我が国が攻められるという悲しむべき予言の適中であつて、決して嬉ぶべきことではない。如何に予言の適中とはいえ、自国が攻められ大難に値つて数多くの戦死者や負傷者を出している事実からみたととき、単に予言の適中という事だけをとらえ、他の悲しみや不安をよそに、自慢げな言動をとるようならば、「日蓮の門下」としてふさわしくない者であるとしている。聖人の「国恩を報ぜんがため」という国を思う気持が如実に現れた一文とすることができよう。国が亡びることが最大の難であると考えていた聖人にしてみれば、当然の言葉で

あったものともいえよう。尚、本文に「小蒙古」「大日本国」とある点について、諸説があるが、この場合は国勢・面積の大小を云うのではなく、正法流布を行っている本化仏使の住所であって、「日蓮は日本国の棟梁也。」との自覚を持ち、「日蓮日本第一法華經行者為蒙古退治大將」と云う自負をもたれていた点から推して、正法・正師の国を「大」とし、これを攻める国を「小」とされたものと推察することができるであろう。本書の写本は本満寺本が伝っている。それによると、「日真（私部）私曰、日蓮大菩薩御真筆直奉（58）拜享（59）之者也。但御筆草也。所持人者桜井弥次郎也、但御袖判也。無御名乗見事御筆也」とあるので、日真は真蹟を直接拝写したことになるので、真蹟が当時は現存していたと考えることもできる。

さて、次に月が替り、七月に入って最初の日、聖人は曾谷二郎から来た書状を見て、その返信を記されている。此の御書は日興の写本が、富士重須本門寺に所蔵されている。日付は「弘安四年閏七月一日」となっており、宛名は「曾谷二郎入道殿御返事」となっている。世上は蒙古の来襲によって、緊張と不安の渦巻く中にあり、国難のまっただ中であつた。「世間事且置（60）之、專逆（61）三佛法（62）法華經第二云其人命終入阿鼻獄（63）等云云」とあつて、經文の解説を以下行っている。即ち正法たる法華經を信じない人々は入阿鼻獄であるとし、弘法・慈覺・智証の三大師をあげて、謗法の邪義であることを明らかにしている。「今三大師以三未顯真実經（64）非破（65）三世仏陀本懷之說、剩失一切衆生成仏之道、深重罪過現未來諸仏爭可窮（66）之乎。爭可救（67）之乎。」と厳しく批判を下している。この邪義を破する為に折伏逆化の化導を進めて来たが、流罪死罪の大難に値う結果となったことを述べ、終りに「蒙古牒狀已前依去正嘉・文永等大地震・大彗星之告再三雖奏（68）之國主敢無信用、然而日蓮勘文粗叶三仏意故此合戰既興盛也。」と国難に先きがけて瑞相のあられた時、再三に諫曉を行ったが、ついに聞き入れず、他国侵逼の難が現実のものとなつて



身延山晩年における日蓮聖人（上田）

二度まで起ったことをあげ、今日の日本が蒙古に攻られて苦難に値うのはいたしかたのないことであるとしている。「爰<sup>（一）</sup>貴<sup>（二）</sup>辺<sup>（三）</sup>与<sup>（四）</sup>日蓮<sup>（五）</sup>師<sup>（六）</sup>檀<sup>（七）</sup>一分也。雖<sup>（八）</sup>然<sup>（九）</sup>有<sup>（一〇）</sup>漏<sup>（一一）</sup>依<sup>（一二）</sup>身<sup>（一三）</sup>隨<sup>（一四）</sup>國<sup>（一五）</sup>主<sup>（一六）</sup>故<sup>（一七）</sup>欲<sup>（一八）</sup>值<sup>（一九）</sup>此<sup>（二〇）</sup>難<sup>（二一）</sup>歟。」と謗法者と共に難に値うことを説き、「唯一心可<sup>（二二）</sup>被<sup>（二三）</sup>期<sup>（二四）</sup>靈<sup>（二五）</sup>山<sup>（二六）</sup>淨<sup>（二七）</sup>土<sup>（二八）</sup>歟。設<sup>（二九）</sup>身<sup>（三〇）</sup>值<sup>（三一）</sup>此<sup>（三二）</sup>難<sup>（三三）</sup>心<sup>（三四）</sup>同<sup>（三五）</sup>弘<sup>（三六）</sup>心<sup>（三七）</sup>今<sup>（三八）</sup>生<sup>（三九）</sup>交<sup>（四〇）</sup>修<sup>（四一）</sup>羅<sup>（四二）</sup>道<sup>（四三）</sup>後<sup>（四四）</sup>生<sup>（四五）</sup>必<sup>（四六）</sup>居<sup>（四七）</sup>弘<sup>（四八）</sup>國<sup>（四九）</sup>」と説いて結んでいる。今生には身を兵難修羅道に置いて、心は弘國靈山淨土に居することを得るものであるとしている点に注目すべきであろう。爰では一応、身と心とを区別し今生に難に値うことと、後生に靈山淨土を期することとを、一人の人生の現実とその延長線上で認められているのである。ここで云う「後生は必ず弘國に居せん」というのは、「靈山淨土」を指しているものであることには疑いないものがある。要するに蒙古來襲について、聖人自身はこの現実の國難を、どのように受けとめられていたかを知る上で、極めて重要な一書であるということができよう。真蹟は現存しないが、日興の写本が富士重須の本門寺にある。

次ぎに八月八日、光日上人宛の『御返事』の中にも、同様に「其人命終入阿鼻獄」の經文を引いて、此の經文の解説を進めている。真蹟十一紙は曾て身延に保存されていた。光日上人とは光日尼ことであり、安房國天津の人で、聖人とは旧知の間柄であった。子の弥四郎の手引きで入信したといわれているが、<sup>(60)</sup>光日尼の詳しい生没年は伝っていない。本文はほぼ前書である曾谷二郎入道に宛た文面と前半は共通している。後半は「光日尼御前はいかなる宿習にて法華經をば御信用ありけるぞ、又故弥四郎殿が信じて候しかば子、勧めか。此功德空しからざれば、子と共に靈山淨土へ参り合せ給ん事、疑なかるべし。」と述べているので光日尼の人物についても手がかりがえられる。子の弥四郎はすでに文永十二年（一二七五）年若くして亡くなり、聖人は書を送って慰められている。<sup>(62)</sup>

「今の光日上人は子を思ふあまりに、法華經の行者と成給ふ。母と子と共に靈山淨土へ参り給べし。其時御対面いか

にうれしかるべき」と結んでいる。ここでも「靈山浄土」が示され「其時御対面」という言葉からみてもわかるように、「後生」を指していると考えられる。先きに逝った弥四郎と靈山浄土で対面することができるといのであるから、靈山浄土のありかたが示されているものと考えられうる。

閏七月、大風雨にあつて蒙古の軍船は、再度の打撃を受け、漂没して、我が国の難は、かろうじて脱れることができた。七月から八月へかけて、聖人の健康状態は陽気も定まった為かいく分持ちなおして来たようである。書簡もこのため発信されているが、一つには先きにふれた蒙古来襲が、聖人をして更に筆を執らずにはおかぬ事態となつて現れた為ともいえよう。いずれにしても聖人の病状は、すでに衰弱の度を深くして、平常のごとくにはいかないものであったことは事実であつたといえる。食欲も常のようにはなく不快の日々であつたようである。

二十二日にはそうした聖人のもとへ、治部房日位から、白米一斗・蕤荷の子・はじかみ一苞が送られて来た。日位は後に中老僧の一人に数えられる程で、数多い門人の中でも代表的な弟子の一人であつた。『統紀』によれば、幼にして聖人の門下となり、「晩築<sup>ニ</sup>隠<sup>ニ</sup>駿州有度郡池田之郷<sup>ニ</sup>」とあるごとくで、池田本覚寺の開山として知られている。真蹟はないが本満寺本の写本が伝っている。本文では法華經を供養する者は必ず仏になることを説き、法華經の為に勸持品の難をも覚悟すべきことを説いて、更に經文が「当時の世間に少しもたがひ候はぬ上、駿河国賀島莊は、殊に目前に身にあたらせ給て覚へさせ給候らん。」と現実になつて生起したことを示している。これは弘安二年に起つた熱原法難<sup>(66)</sup>のことを指しているものと考えられる。日位は此の法難の時、日興らと共に事に當つて活躍したことがわかる。又、法華經の行者たる聖人に対し上下こぞつて迫害を加えるため、一切の仏神に祈念を捧げても還つて科<sup>か</sup>となり、他国に攻められ、歎き悲しむことになる、兼ねて人々に申し聞かせきて来たことを述べている。最後に「御使いそ

身延山晩年における日蓮聖人（上田）

ぎ候へば委くは申さず候。又々申べく候」とあるので、御供養の品々を届けに来た使者に、その手で持たせて帰したことがわかる。

翌二十三日は、摩尼女に対して一幅の曼荼羅が図顕されている。鎌倉の妙本寺に所蔵されているが丈五〇糎・幅三一糎ながら、筆勢にはいささかの衰えもなく、首題・梵字・花押共に他の御本尊と同様、力量感を持っている。授与者の摩尼女が如何なる人物かは不明であるが、摩尼とは宝珠の意味もあり、仏弟子の中にも、摩尼跋陀(67)という人もいたことから考えて、たんなる俗ではなかったろうと推察できよう。聖人ご在世の当時は、こうした出家でも俗でもないといった、謂わば中間層の人々で、篤信の徒が、意外に多くいたようにも考えられる。

かくして聖人は、弘安四年という国難の嵐吹きすさぶ中で、内には慢性化しつつ次第に悪化していった消化器病（下痢）に耐えながら、国難に対処すべき道、正法によって国土を守るべきことを説き続け、弟子や信徒を励まし、教化を続けられたのであった。

〔註〕

- (1) 『日本宗教史年表』（笠原一男編）一〇七頁
- (2) 八幡宮造営事によれば、此の年正月より気分がすぐれず、「既一期をわりになりぬべし」（一八六七頁）と述べている。
- (3) 重須殿女房御返事 定遺一八五五頁
- (4) 同 一八五六頁
- (5) 『日蓮聖人真蹟集成』 九卷・二七五頁
- (6) 上野尼御前御返事 定遺一八五七頁  
聖人とは清酒せいしゆのことを指す。

(7) 同

同 一八五八頁

- (8) 同 一八五九頁
- (9) 千日尼御前御返事 同 一五九九頁
- (10) 棧敷女房御返事 同 一八六〇頁
- (11) さじき女房御返事 同 九九七頁
- (12) 佐渡御書 同 六一〇頁
- (13) 妙一尼御返事 同 七二二頁
- (14) 『本化別頭仏祖統紀』二五卷一、及び『本化聖典大辭林』三〇二九頁、更に『棲神』五二号三三頁〔註〕四四の拙論等を参照されたい。
- (15) 『日蓮大聖人御真蹟対照録』（立正安国会編）を参照。
- (16) 『日蓮聖人真蹟集成』一〇巻参照
- (17) 上野殿御返事 定遺一八六一頁
- (18) 『本化聖典大辭林』には、「馬の毛色の千入染めたる紅葉の如く深紅なるにや」（二四〇六頁）と述べている。
- (19) 『新勅撰和歌集』（恋一・六八三）
- (20) 『十六日記』は阿仏尼の作、『新校群書類従』第一五卷七一頁
- (21) 日蓮聖人遺文全集講義』二六卷一一頁
- (22) 波木井殿御報 定遺一九二四頁
- (23) 参考として、聖人の誕生した年は、承久四年壬午である。つまり干支は「午」であるため、特に馬を愛しておられたとする考え方もできよう。例えば「夫と馬となくばいかでか日蓮が命はたすかり候べき」（兵衛志殿御返事一五〇五頁）とあり、又諫曉八幡抄（一八三二頁）には冒頭より馬についての詳しい記述が見られ、馬について相当に知識も豊富であったことがわかる。
- (24) 『日蓮宗宗学全書』第二卷（興尊全集）一一七頁
- (25) 同 第二卷（興門集）二九八頁
- (26) 同 同 三五五頁
- (27) 『日蓮聖人御遺文講義』第七卷 三四八―三五二頁
- 身延山晩年における日蓮聖人（上田）

身延山晩年における日蓮聖人（上田）

- (28) 『日蓮聖人遺文全集講義』第二六卷六七—八頁
- (29) 『日蓮宗宗学全書』顯本法華宗部一五頁・三八二頁
- (30) 『日蓮聖人の本尊論』（田辺善知著）二七六頁。並に塩田義通博士は「三大秘法鈔の研究」（『大崎学報』七九号）の中で、偽作説をとっている。
- (31) 『当宗宗旨名目』上巻参照。
- (32) 『録外微考』下巻 九
- (33) 『日蓮聖人御遺文講義』七巻 三五六頁
- (34) 「日蓮宗新聞」昭和五六年九月一日号で、「三大秘法鈔の真偽判別研究」と題して、立正大学伊藤端敬助教授は、同新聞の第一〇〇一号に冠賢一教授が「真偽説の根本的誤りを問う」という一文に答えている。
- (35) 三大秘法鈔 定遺一八六三頁
- (36) 同 同 一八六四頁
- (37) 同 同 一八六五頁
- (38) 『御本尊集目録』（立正安国会）一五〇頁参照。
- (39) 『日蓮聖人真蹟集成』第十巻参照
- (40) 『日蓮宗宗学全書』第二巻（興尊全集）一一六頁
- (41) 同 同 二七三頁
- (42) 同 同 二七六頁
- (43) 大風御書 定遺 一八六六頁
- (44) 八幡宮造営事 同 一八六七頁
- (45) 「日蓮聖人晩年の健康をめぐって」（『大崎学報』一〇三号）で宮崎英修博士は、聖人の病氣、療養、発病の時期等について詳説している。
- (46) 八幡宮造営事 定遺 一八六八頁
- (47) 同 同 一八六九頁
- (48) 宮沢賢治の代表作たる「雨ニモマケズ」の詩には、菩薩としての生き方が示されていると思われる面もあるが、御書と相い

通ずるところがあるといえよう。『近代日本の法華仏教』四四八頁以下の拙論を参照。

- (49) 開目抄 定遺 六〇一頁
- (50) 上野殿御書 同 一八七〇頁
- (51) 『日本宗教史年表』(笠原一男編) 一〇七頁
- (52) 小蒙古御書 定遺 一八七一頁
- (53) 『本化聖典大辞林』二一〇三頁、及び『日蓮聖人遺文全集講義』二六卷七八頁等に詳しい説がある。参照。
- (54) 撰時抄 定遺 一〇五三頁
- (55) 与極楽寺良観書 同 四三二頁
- (56) 『録外考文』卷三十一
- (57) 曾谷二郎入道殿御報 定遺 一八七一頁
- (58) 同 同 一八七四頁
- (59) 同 同 一八七六頁
- (60) 『本化聖典大辞林』 一四五七頁
- (61) 光日上人御返事 定遺 一八七九頁
- (62) 光日房御書 同 一二六一頁
- (63) 光日上人御返事 同 一八八〇頁
- (64) 『本化別頭仏祖統紀』 十一一二〇
- (65) 治部房御返事 定遺 一八八二頁
- (66) 熱原法難については、『棲神』五一号四九頁の拙論を参照されたい。
- (67) 顯謗法鈔 定遺 二六二頁

# 法雲『法華義記』における信

望 月 海 淑

## 1

法雲は『法華義記』の冒頭において、序・正宗・流通の三段に法華をわかつて、法華經の主旨を説明しているが、その序分には通序と別序の二つがあることを説いている。それによると、法華經の序品の如是我聞から退座一面までが通序であり、爾時世尊四衆圍繞から序品末までが別序であることになるが、その中で衆經はそれぞれ不同であると、

如下欲レ説<sub>レ</sub>涅槃二大音宣告放<sub>レ</sub>光動<sub>レ</sub>地以<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>別序<sub>一</sub>。欲<sub>レ</sub>説<sub>二</sub>勝鬘<sub>一</sub>父母送<sub>レ</sub>書以<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>別序<sub>一</sub>。欲<sub>レ</sub>説<sub>二</sub>維摩長者<sub>一</sub>獻蓋<sub>為<sub>二</sub>別序<sub>一</sub></sub>。此經天雨<sub>二</sub>四華<sub>一</sub>地六種動<sub>為<sub>二</sub>別序<sub>一</sub></sub>也。然通序亦名<sub>二</sub>証信序<sub>一</sub>。明<sub>二</sub>弘法理同<sub>一</sub>。

と、涅槃・勝鬘・維摩・法華の各經典が説示を展開するに至る過程を示し、別序を示しているが、ここでは、通序が何故に証信序であるかの説明を加えてはいない。

しかし、『妙法華經』の「如是我聞」の句を注釈するにあたり『義記』は、

我聞者此是通序中第二。表明<sub>二</sub>阿難述而不作<sub>一</sub>。正言如是一部法華經我從<sub>二</sub>弘迦<sub>一</sub>聞。非<sub>二</sub>我自造<sub>一</sub>。所以爾者。但弘在世時開<sub>レ</sub>教度<sub>レ</sub>人明<sub>レ</sub>理化<sub>レ</sub>物。尚有<sub>二</sub>性執取<sub>一</sub>斜見<sub>二</sub>不信受<sub>一</sub>者<sub>上</sub>。

とし、小乗の人等は未<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>信だから、「如是」といい「我聞」といったのだとなし、今は、

法雲『法華義記』における信（望月）

法雲『法華義記』における信（望月）

于時四衆既意重如來心尊至極。聞<sub>レ</sub>伝<sub>二</sub>仏語<sub>一</sub>信受無<sub>レ</sub>疑<sup>(3)</sup>となしてゐる。そして、仏が王舎城に住していたことを示すのは、「証成我聞」であり、聞經の処を明白にさせるためであるから、

我聞之言可<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>信受<sub>一</sub>。若不<sub>レ</sub>憶<sub>二</sub>聞經之處<sub>一</sub>我聞之言云何可<sub>レ</sub>信。是故出<sub>二</sub>聞經之處<sub>一</sub>我聞不<sub>レ</sub>謬也。<sup>(4)</sup>

として、我聞（法華經の説示）に対して信受する方法しかないことを示している。すなわち、法華經は釈尊によって語られたそのままの經典であり、阿難によってそのままに聴聞されたもので、何等、阿難の手が加えられたものではないのであるから、信受することが唯一最高の道であることを示している。そこで、ここで示されている信受の語は、絶対なるものに対する信であることは明白であり、通序が証信序といわれた理由も、そこにあるものと思われる。

## 2

方便品第二を注釈した『法華義記』は『妙法華經』の「是法不可言辭相寂滅」に始まる十一行に言及しているが、その中で「除諸菩薩衆信力堅固者」にふれて、この半行は有知の人を除くことを示したものだとして、

除<sub>二</sub>有知人者<sub>一</sub>正言<sub>レ</sub>除<sub>二</sub>諸菩薩衆中有信力堅固者<sub>一</sub>。自能得<sub>レ</sub>知。然非<sub>二</sub>見知<sub>一</sub>猶是信知。此則引<sub>二</sub>声聞等<sub>一</sub>作<sub>二</sub>大乘<sub>一</sub>。令<sub>下</sub>改<sub>二</sub>狭劣心<sub>一</sub>立<sub>中</sub>菩薩大志<sub>上</sub>也。<sup>(5)</sup>

となしている。すなわち、菩薩の信力堅固なる者というのは、信知によるもので、大乘菩薩の大志を発すものだ、ということになるであろう。しかして、信知というのは見知に対するものであるから、単に知覚によって知ることではない。梵文法華經はこの信力堅固者を、



yasya tam deśayed dharmam deśitam cāpi jāniyāt | anyatra bodhisattvebhyo adhimukṭiya ye sthitāḥ ||

(その法を説き、説かれた法を理解する人は、信解に住している菩薩たち以外にはない)

としているから、信知は信解 *adhimukṭi* にかかわるあり方と理解してよからうと思われる。それは、一般の人間の思慮分別による理解ではなくて、経験したこともない正法、体得したことのない永遠不死の境涯を、仏たちの教化によつて先ず信じ、信じて行く中でだんだんと真実なることを味わい領得して行くことを意味している。<sup>(7)</sup>したがって、『妙法華經』によつて信力と訳されたものは、神通力 *ṛddhi* にかかわるようなパワーではなくて、仏の力によつて証得される境地と、それを信ずることによつて生まれ出て来る心の状態を意味するから、『義記』によつて「信知」となされたものと考えることが出来る。

しかし、『義記』が必ずしも *adhimukṭi* 信解について、正確にとらえていたかどうかは疑問といわなければならぬ。何故なら、方便品の「於<sub>三</sub>仏所<sub>三</sub>說法」当<sub>レ</sub>生<sub>三</sub>大信力<sub>二</sub>にあたるところを注釈して、

此半行是第二勸奨誠勅令<sub>レ</sub>信也<sup>(8)</sup>

としているからである。ここでの梵文は、*yam Śāriputro sugataḥ prabhāṣate adhimukṭi-saṃpanna bhavāṇi* <sup>(9)</sup>*patra* (舍利弗よ、善逝が語ったものに信解をなせ)であり、信力にあたるものは *adhimukṭi* であり、ひたすらに信ずるということではないからである。それ故に、『正法華經』にはここを、唯仏具足 解達知<sub>レ</sub>彼最勝導利 悉暢<sub>三</sub>了<sub>二</sub>誠<sub>一</sub><sup>(10)</sup>とし *adhimukṭi* としてのとらえ方がなされている。

又、『義記』は釈尊と舍利弗の三止三請に言及し、

舍利弗三請者第一舉<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>疑請。第二有<sub>三</sub>利根<sub>二</sub>必信故請。第三有<sub>レ</sub>解故請也。<sup>(11)</sup>

法雲『法華義記』における信(望月)

法雲『法華義記』における信（望月）

とのべ、更にこれを注釈して、この会の人は皆利根にして仏説を聞くに堪えうるからだ、としている。すなわち、三止三請にかかわるところであるから、ここでの信は、『妙法華経』が、舍利弗の言葉として、「敬信」の語を使って説示を願ったことを示したところであり、梵文法華経は、この敬信を *abhisraddha* を使って説示しているから、梵文の *sradha* によって示される信であることは明白であらう。<sup>(12)</sup>

この *sradha* の信に関して『義記』が利根あれば必ず信ずとしていることは興味深い。舍利弗が重ねて唯願説之唯願説之とのべるところでも、利根あれば必ず信ずるが故に請うものだとしているが、<sup>(13)</sup> ここでの信は利根ある上に於てなされるということになる。恐らく、舍利弗が利根あるものであったという、上中下の三種の利根の上に立ったから、かくなしたものと思われる。

しかし、『義記』はこれ以降、授学無学人記品が終るまでは、広開三顯一斷疑生信を明すものだとし、そこには上中下の三根があるとし、三種の信解があるとしている。そして、三種の信解について、

初始<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>三法説<sup>二</sup>竟外凡夫中有<sup>三</sup>利根<sup>一</sup>得<sup>レ</sup>解。舍利弗示<sup>二</sup>同領解<sup>一</sup>。譬説既竟外凡夫中有<sup>三</sup>中根者<sup>一</sup>得<sup>レ</sup>解須菩提等仍示<sup>二</sup>同領解<sup>一</sup>。宿世因縁竟外凡夫中有<sup>三</sup>下根者<sup>一</sup>得<sup>レ</sup>悟富樓那等示<sup>二</sup>同領解<sup>一</sup>。<sup>(14)</sup>

としているから、ここでの信解は領解のことを示している。このような理解は信解 *adhimukti* の性格上、当然なことと思われる。

これに対して、三止三請の後、釈尊が一仏乗を語ろうとして舍利弗に語る「仏告舍利弗。如是妙法」からはじまる言葉を注釈した『義記』は、これからはじまる長行には六義ありとし、一は歎法希有、二は不虛妄、三は開三、四は顯一、五は五濁、六は簡真偽敦信だとしている。<sup>(15)</sup>

この簡真偽敦信というのは、簡真偽敦物信心のことで、『妙法華經』の我弟子のうち自ら阿羅漢、辟支仏なりと謂い、諸仏如来は但、菩薩のみを教化す、これを聞かず知らずんば、これ仏弟子に非ず云云以下についてのべたものが簡真偽で、仏滅度の後にこの經を受持説誦し云云にはじまるところが敦物信心であるとしている。そしてこの敦物信心には三重ありとし、

第一正敦<sub>三</sub>物生<sub>レ</sub>信第二釈<sub>レ</sub>敦<sub>三</sub>信之意第三釈<sub>レ</sub>物疑心<sub>一</sub>也<sup>(16)</sup>

であるという。第一の正敦物生信について、「除仏滅度後」の語に關して、無仏の時代であるから信する人なきも、仏在世に思ひをいたし信樂の心を生じ法華万善同歸の法を受持しなければならぬとし、理に就て談ずれば有仏無仏を問はず皆自然に解すとしながらも仏を背信せずとしている。そして第二の敦信之意については右の意をうけ、「所以者何」以下に關して、所以は汝及び仏在世の信受を勧め、者何は仏滅後は法華經を受持する者が得がたいので、汝は今日信受しなければならぬとしながらも、しかし未だ仏を背信しまいとし、第三の釈物疑心については、「若遇余仏」以下の語に關して、もし阿羅漢で今日仏に会わなくても未來世において必ず仏に会い法華經の説示を聞けるのだから、只仏の此の語を聞いて信受しなければならない、と信を勧めていることを示している。

このように、この箇所において信、信樂、信受の語が示されているが、『妙法華經』は「除仏滅度後」と語り出して、

汝等當<sub>レ</sub>一心信<sub>二</sub>解受<sub>三</sub>持<sub>レ</sub>仏語<sub>一</sub><sup>(17)</sup>

の一語をもつて結んでゐる。すなわち、釈尊がこの箇所で示さんとしたものはこの一語にあり、それは唯一仏乘なることを示すことであつた。そしてこの箇所の梵文法華經は、

imesu buddha-dharmesu śraddhadvam me Śāriputra pattiyaṭṭavakalpayata (81)

（この仏陀の法を信ぜよ、舍利弗よ 私を信ぜよ、信頼せよ）

となして、信ずるということを強調している。そして、その信の基調となるものは 'śaddha' であるから、法華経がここで目指しているのは、仏の教え、仏そのものに対する信の強調であった。『義記』が前述のごとく、信、信衆、信受を説いたとなしているのも、ここに依ったものと思われる。されば『義記』は、

舍利弗汝等当『一心信』解受『持仏語』。此下是等五明『不』虚妄『止』物誹謗之心也。就中有『三』。第一明『勸信』。第二諸仏如来下正明『不』虚。第三無『有』余乘『以下』举『所』信之法『結勸也』。(82)

となっている。それ故にこそ、この一連のところで使用された信は、'śaddha' をうけたものであることを確認でき、それは正法・仏に対する信であるから、不虛妄であり誹謗すべきものではないことになるであらう。

更に、方便品偈を注釈して『義記』は、「説仏智慧故」以下の八行半は果一を頌したものだとし、そこには三段あるとしているが、その第二段は「如其所得法」から「為説実相印」までとし、仏は出世以来大乘の果を与えんと欲しているとし、四重ありとして説明している。第一は大果を衆生に与えんとしたもので、第二は仏の出世の本意は大果を与えん欲するものだから、大果を惜しむ者は慳貪の人となる、しかし、大果を求める機なきため三を説き、疑を生ずる衆のために、自ら仏は衆生に大果を与えんと欲すると言ひ仏語を信ずべしと言ひ、それ故にこそ、

故第三從『若人信』歸仏『下有』一行一偈『引』勝人証。汝言『無有』信者自有『人信』三『宝』者言『仏不』欺誑者。此等人信『仏恒欲』与『衆生大果』。時衆有生『疑言』。若使『都無』有『信』三『宝』者。誰当『復信』仏耶。(83)

と、説き、第四では仏と大果とが虚しからざることを示したのだ、としている。すなわち信は、仏を信じ三寶を信じ

仏の大果を信ずるという形で表現されている。この「若人信婦仏」の語に対する梵文では、信に関して言及されてはいないのであるが、『妙法華経』の訳文は信を語っているために、その信をうけて『義記』はこのような信のあり方を展開したものであろう。

この後の『義記』は『妙法華経』の「我有方便力 開示三乘法」以下をうけて、先の一行は釈迦も諸仏と同じく先に三乗を説き後から一乗を説いたもので不虛妄だとし、次の一行「今此諸大衆 皆除疑惑 諸仏語無異 唯一無二乗」は勧信したものであるから不虛妄だとしている。<sup>(22)</sup>一仏乗だということは、唯一しかないのでそれを信ずる道しかないとする立場からであらう。

そして品末近くの「鈍根小智人 著相憍慢者 不能信是法」を注釈して『義記』は、

明「惡事除故喜」。何以知<sub>レ</sub>之。此人本事是鈍根今者利根。何以知<sub>レ</sub>然。昔日縱便利根廢已作<sub>二</sub>鈍根<sub>一</sub>。今発<sub>二</sub>広大心<sub>一</sub>故称<sub>レ</sub>之為<sub>二</sub>利根人<sub>一</sub>也。此人本時は小乗小智今者成<sub>二</sub>大乘大智<sub>一</sub>。此人本時は著相憍慢者今日非<sub>二</sub>著相憍慢<sub>一</sub>。本時不能<sub>レ</sub>信<sub>二</sub>大乘法<sub>一</sub>今日能信<sub>二</sub>大乘法<sub>一</sub>。是故喜也。<sup>(23)</sup>

となしているが、正しく正法への信は利根であることを用するが、その利根は、広大な心、大乘大智によるものであり、それ故にこそ偏見、うぬぼれを離れ、信が生ずるものであることを示している。信はこのような心の上に立ち、素直な広い心（憍慢の心を離れるから）から生ずるものであろう。ここでの『妙法華経』の文に相当する梵文は、

duḥśradadhāṇ etu bhaviṣyate 'dya nimitta saṃjñinīha bāla-buddhinām | abhimāna-prāptāna avidya-sūnām ime tu śroṣyanti hi bodhisattvāḥ<sup>(24)</sup>

（今、表相の觀念だけで、愚かで、無知で、増上慢となったものは信じ難いであらう。しかし実に、菩薩たちは聞  
法雲『法華義記』における信（望月）

法雲『法華義記』における信（望月）

くであろう。）

となされているから、ここでの信は *śraddhā* であるといえる。すなわち信は慢心を離れた上になり立つものである。

3

譬喻品の注釈の冒頭で『義記』は舍利弗の悔過にふれている。その中で『妙法華経』の「然我等不<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>方便<sub>一</sub>」以下をとりあげ、

是第二悔<sub>二</sub>昔日取<sub>レ</sub>小也。我若解<sub>二</sub>如来昔日教是方便<sub>一</sub>者豈復取<sub>レ</sub>小。祇由<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>如来昔日方便權教<sub>一</sub>故仍於<sub>レ</sub>中信受。

此則悔<sub>二</sub>昔日取<sub>レ</sub>小也<sub>(25)</sub>

としている。これは『妙法華経』が先の句に続いて「初聞<sub>二</sub>仏法<sub>一</sub>」遇便信受思惟取<sub>レ</sub>証」としているから信受とせられたものであろう。この箇所該当する梵文法華経は信に関する記述をしてはおらない。

しかし、三車火宅の喩を語った後、『妙法華経』は「從<sub>二</sub>仏世尊<sub>一</sub>聞<sub>レ</sub>法信受」とし、これを梵文法華経は、

te tathāgatasya lokapitṛ abhīśradaddadhanti | abhīśradaddadhivā ca tathāgata-śāsane "bhīyiyanta udyo-  
gam āpadyante<sub>(26)</sub>

（彼等は世間の父である如来を信する。信じて如来の教誡に専心し努力する）としているから、信受は *śraddhā* の訳語であり、先の信受とせられている場合も *śraddhā* の訳語としての信受とうけとめられていたかと思われる。ただ、前者の場合、梵文法華経において信に関する記述がないのは、舍利弗が小法に対してあやまった行いであった

ことを悔いるところであるからで、後者の場合は正法に対するものであるから *saddhā* が語られたと思われる。このように *saddhā* は仏・法・僧三宝に対しての心のあり方として使われるのが一般である。

将来、華光如来となるであろうとの授記を得た舍利弗は、世尊に「我今無復疑悔……」と語るが、これについて『義記』は、これよりは中根人のための譬説開三顯一で疑を断じ信を生ぜしめるものだとしている。<sup>(27)</sup>そして、信を生ぜしめんとしたなされたものが火宅の喩であるが、時の長者（世尊）の心を『妙法華経』の「恋著戲処」以下の文をうけた『義記』は、

我即自思惟若但證<sub>二</sub>仏乘<sub>一</sub>衆生没<sub>二</sub>在苦<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>信<sub>二</sub>是法<sub>一</sub>破<sub>レ</sub>法不<sub>レ</sub>信故墜<sub>二</sub>於三惡道<sub>一</sub>我寧不<sub>レ</sub>説<sub>二</sub>法疾入<sub>二</sub>於涅槃<sub>一</sub>。<sup>(28)</sup>

として、衆生は苦界にあるために、いきなり仏乗を説いても信ぜず、むしろ法を破り三惡道におちてしまうのではないかと、と仏の悩みについてのべている。この箇所において『妙法華経』は、「衆著嬉戲不<sub>レ</sub>肯<sub>二</sub>信受<sub>一</sub>」と語っているが、梵文法華経は信に関して語ってはいない。しかし、『義記』によって示された信はまさに *saddhā* によって示される仏・法に対する信で、それを信じないとする時、それは信の反対 *a-saddhā* であらう。されば、仏が等一の大事を与えたことについて『義記』は、

然仏是至人誠言無<sub>二</sub>一<sub>レ</sub>。既説<sub>二</sub>断正結尽<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>。仏語不<sub>レ</sub>虚云何不<sub>レ</sub>信。如<sub>二</sub>今所見<sub>一</sub>生死何必是生死耶。<sup>(29)</sup>

として、仏語に対するひたすらな信を求めており、三車火宅の喩によって衆が得心いったがために、

時衆既得<sub>二</sub>信心不<sub>レ</sub>虚<sub>一</sub>妄義其意自顯。

として、信によって理の正邪を見極めうるようになることを示している。

かくの如く信 *saddhā* は仏・法にかかわるものであるから『義記』は、譬喩品偈の「雖<sub>二</sub>復教詔<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>信<sub>二</sub>受於諸

法雲『法華義記』における信（望月）

欲染貪著深二故」に關して、これは、

顯レ無レ機。若以三神力二通レ之無レ有ニ信受一。

とのべたもののだとして、信受が神力などによっておこされるべきものでないことを示している。すなわち機が熟する時が肝要ではあるが、信が何物でも、どのようなことであっても、信ずればよいというものではないことを示していると思われる。それは正しいもの秀れたものに對するあり方であるからであらう。

そこで、仏は眞實を語り、不虛なるものを説かないから、如來の教えへの信が勧められることになる。<sup>(90)</sup>

それ故、法華經の「若有聞レ者隨喜頂受」以下の文をうけた『義記』は、弘經を勧めたものだとしながら、更に注釈を加えて、「若有信受」以下は過去に久しく善根をうえた人のことを明し、「以信得入」の意は、有信の人を挙げたものであることを示している。ここで示される信受・信は梵文法華經によると、saddhāをもって語られるところであるから、有信の人は sradhā を持つ人のことであらう。

〔註〕

- (1) 大正三三・五七五上
- (2) 同     ・五七六下・五七七上
- (3) 同     ・五七七上
- (4) 同     ・五七七上・中
- (5) 同     ・五九九上
- (6) saddh. p. 31
- (7) 校部建『仏教語の研究』三七～三八参照
- (8) 大正三三・五九九中



- (9) sadh. p. 32
- (10) 大正九・六八中下
- (11) 同 三三・六〇〇中
- (12) 拙著『法華経における信の研究序説』一九五〇一九七、三一七〇三一八参照
- (13) 大正三三・六〇〇下
- (14) 同 六〇二下
- (15) 同 六〇二下
- (16) 同 六〇五中
- (17) 同 九・七下
- (18) sadh. p. 44
- (19) 拙著『法華経における信の研究序説』二〇〇参照
- (20) 大正三三・六〇五下
- (21) 同 六〇七上
- (22) 同 六〇七下、ただし『義記』は「示以三乗教」としている。
- (23) 大正三三・六一〇上
- (24) sadh. p. 57
- (25) 大正三三・六一一下
- (26) sadh. p. 80
- (27) 大正三三・六一三中
- (28) 同 六一六下
- (29) 同 六二〇中
- (30) 同 六三〇上には「若有菩薩此下兩行是第二引勝人。証如来不虛勸信」とある。

『義記』は信解品注釈の冒頭において、解に兩種ありとし、

一者自以<sup>二</sup>智<sup>一</sup>慧明<sup>二</sup>見<sup>一</sup>法相<sup>二</sup>此則法行人呼為<sup>二</sup>見解<sup>一</sup>。二者不<sup>二</sup>自見<sup>一</sup>理憑<sup>レ</sup>師謂<sup>レ</sup>爾此則是信行人名為<sup>二</sup>信解<sup>一</sup>也。今此品中明<sup>二</sup>四大声聞領<sup>一</sup>開三顯一之義<sup>二</sup>信<sup>一</sup>同歸莫<sup>レ</sup>二之理<sup>一</sup>。從<sup>レ</sup>信得<sup>レ</sup>解仍詔為<sup>二</sup>信解品<sup>一</sup>。<sup>(1)</sup>

としている。これによると、解には法行の人と信行の人とのあり方があるとし、師によって爾いうのが信行の人だとするから、師の言葉（教え）をそのままにうけとめそのままにしたがうのが信行であり信解であるということになる。しかし更に、自の智慧明によって法相を見るのが見解で、自らは理を見ずとも師の説によっていくのが信解だということから、ここでの信解は師の説を信じ、信に従って解をうることを意味しているから、それは信じ、そのように確とうけとめ、捉らえることであると思われる。一方、信解品は梵文法華經によると *adhimukhī-parivartah* のことであるから、法華經が示す信解は *adhimukhī* であり、それは信解（勝解）と一語で示されるものであるから、『義記』のこの理解は、仏宝僧三宝に対する信 *śraddhā* に対し、対象をしっかりと捉えてそれを理解し確認する心のはたらしを意味<sup>(2)</sup>している、と理解することが出来るであらう。

このような理解を示した上で『義記』は、信解品は中根の人の領解を明かしたもので、中根の人の得解の相をのべたものと、中根の人の領解の辞をのべたものとなつてゐるという<sup>(3)</sup>から、その意味ではこの信解は仏の教えを信じ領解するという具合に理解したものと思われる。更に、慧命須菩提の慧命の語について、昔日は開三顯一同歸の理を解しなかつたので愚癡の人の心を相統していたが、今は権実の宗を解し慧心相統したから慧命と名付けるのだ、<sup>(4)</sup>とし

ている。この慧命は梵文法華経では *ayusmat* と表現され、それは長老を意味するのであるが、それをもって慧命となしたのは、『義記』がこの領解を仏知を覚る慧にいたるものと理解したからであろう。

法華経には信解品において *hinādhimukti* (劣った信解) としての使用例が多いが、『妙法華経』はこれを楽しむ意にとらえ志意下劣の意に訳しているが、『義記』は「解(5)は小是幼稚」「便応(6)是解大」等々の表現をしているから、あるいは領解の意が強いかもしれない。しかし、この解に關して先解は永く善根を断じ一聞提を成ずるものではなく、煩惱五濁のためであるから、とて『義記』は、

夫善生必以信心(7)為本。于時雖失大解(7)由有信心。於五戒十善教中修行能令大乘智願善根不断

とし、譬喩品の舍利弗に対し仏が本願所行の道を憶念せしめんがために法華経を説いた語を引用しているから、信(8)*śraddhā* をもって入り、その上において領解(信解) *adhimukti* が確立することを示そうとしたのではなからうか。それ故、『義記』は、信心があるならば失解はなからうとの間に対して、大乘の解なくとも何で小乗の信を妨げようかと逆説している。ここで失解、大乘の解というのは梵文法華経が示す *hinādhimukti*, *adhimukti* のことと思われる。

このような信解のとらえ方に対して『義記』は、窮子が長者の家に住むようになり、自ら客作賤人として務めたことについて、法華経が窮子を客作賤人としたのは外面上のことで、内面的には修行をし信首に登っているのだとし、二十年過ぎて「心相對信」し、入出自在なことについて、

心相体信者是无異之言。若約教為論羅漢無為与仏無為(9)無異也

としているから、喜び一筋の道を歩むのは信のはじめで、互に信じ合うことは仏も何もすべて同様のあり方であることを示している。ここで示される信は *śraddhā* の示す信がふさわしいと思われるが、この心相對信にあたる梵文法

法雲『法華義記』における信（望月）

華経は、

sa daridra-purusas tasya griha-pater niveśane viśrabdho bhaven niṣkramaṇa-praveśe (かの貧しい男はその長者の家に安心して出入りするようになる)<sup>(10)</sup>と、あつて信 śraddha の語は使われていない。『妙法華経』の意識の信をうけて、『義記』はかく理解したものではなからうか。

〔註〕

- (1) 大正三三・六三二下～六三二上
- (2) 桜部建『仏教語の研究』三七
- (3) 大正三三・六三二上「今此領解中有二者。第一是經家序中根人得解之相。第二從二白仏言以下竟品正是中根人領解之辭」
- (4) 右同「慧命須菩提者凡有三種解。一者言昔日未解開三顯一同歸之理。愚癡之人心相統為レ命。今日既得レ解權實之定。慧心相統為レ命」
- (5) 拙著『法華経における信の研究序説』二二三～二三一参照
- (6) 大正三三・六三四上
- (7) 同 同・六三四中
- (8) 同 同・六三九中「外譬明長者忽爾転客作之人名之為レ兒。内合此人既修行出彼外凡二登此信首」
- (9) 同 同・同
- (10) saḥ. 107

『義記』は如来寿量品について、如来の寿命を明かすに塵沙を以て量となすから寿量品というのだとして、この品

から分別功德品の半品までは「広説壽命長遠斷疑生信<sup>(1)</sup>」の説であるとし、この從地涌出品の弥勒の質問は勸信を説いたものだとして<sup>(2)</sup>いる。それは壽命長遠を説いた寿量品、衆に授記した分別功德品の最初の長行、領解を示した弥勒の偈頌と仏の長行の部分だとする。そしてその中、寿量品に關して縁起を明かしたものと正広説したものがあるとし、汝等当如来誠諦之語から神通之力までが明縁起で、以下品末までが正広説だとしている。

この汝等当信如来云の語句は梵文法華經によると、*avakalpayadhvam me kula-putrā abhisraddadhvam tathāgatasya bhūtām vācam vyāharataḥ* <sup>(3)</sup>（善男子よ、如来の真實の言葉を用ひ、信じ、頼るべし）と示されているから、ここでの信は *śraddhā* の示す信であることは明白である。しかしてこの語は三度くり返され強調されているのであるから、『義記』がこれをもって明縁起とした意図は、如来寿量を知るためにはまず信がなければならぬことの上に立つことを示していることが出来る。されば、法華經の「我以三仏眼<sup>(4)</sup>。觀其信等諸根利鈍<sup>(5)</sup>」をとりあげて、これは照機の智を明かしたものだとしている。「衆生既信伏<sup>(6)</sup>」以下の十四行半は「義頌未來二也<sup>(7)</sup>」としているのも、信を以て入り、その後には於て仏慧に到達するとのあり方をとらえているからであらう。

そして、分別功德品に入つて、先述した弥勒が偈を説く以下は領解を示したものだといふにふれて、この領解について四段ありとし、第一は衆が得解寿量の故に歡喜したことを称讃し、第二は「或住不退地」以下で領解の義を説いたもので、第三は「雨天曼陀羅」以下で弥勒が自ら時事を述べたもので、第四は「仏名聞十方」以下で仏が領解を結したことを歎じたものだとしている。<sup>(8)</sup>そしてこれらは、如来寿量の説示を聞いてと続けられるものであるから、この領解は如来寿量の説示を領解することを意味している。しかし、ここでは領解がどのようなことか示してはいないが、如来寿量の説を信じ、そこから領解（信解）が生じ、確立すると捉らえたものと思われ、これは『妙法華經』の

法雲『法華義記』における信（望月）

一念信解を、信と信解ととらえずに、信解と捉らえたものと思われる。<sup>(9)</sup>

『義記』は信解品の注釈において、解に兩種ありとし、信行人を信解となすとし、四大声聞の理解について領解とよび、信より解をうるから信解品というのだ、<sup>(10)</sup>としているから、ここでのいう領解もこのような意味あいをもっているかと思われる。

〔註〕

- (1) 大正三三・六六六中、六六七下、六七二上
- (2) 同 同・六六七上
- (3) *sadh.* 315
- (4) 大正九・四二下
- (5) 同 三三・六六八中「此明是照機之智也」
- (6) 同 九・四三中
- (7) 同 三三・六七二下
- (8) 同 同・六七二下～六七三上
- (9) 同 同・五七四下には「第三流通者。分別功德品中從弥勒說偈後長行初。言仏告弥勒菩薩其有三衆生聞仏壽長遠如是乃至能生一念信解當知以爲深信解相……」とある。
- (10) 同 同・六三二下～六三二上  
尚、法華経は方便・譬喩・信解・涌出・寿量・分別功德の各品において、信 *saddhā* 信解 *adhimukti* に多く言及しているので、この論を書くにあたり、『義記』の中のそれらの各品の註釈に重点をおいた。

# 日蓮聖人の時間論

町田 是正

## 目次

- 一 まえがき―問題の所在―
- 三 「時」の認識―時と人―
- 五 「今本時」の意味―永遠の今―
- 二 「救え」に生きる―殉教の如來使―
- 四 「時」を超える―末法の超克―
- 六 むすび―「時」を生きる―

## 一、まえがき―問題の所在―

日蓮聖人の「時」の意識は、法華經の色説・弘教という実践との関わりのなかで受容されている。この事は、たとえば

天台云適時而已等云云・仏法は時によるべし（「開目鈔」定遺六〇九）

夫仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし（「撰時抄」定遺一〇〇三）

正法を修して仏になる行は時によるべし（「日妙聖人御書」定遺六四五）

等々の御文書の文意に徴しても明瞭である。<sup>(1)</sup>法華經の行者・日蓮聖人にとって、「時」とは法華正法の流布の成否と関わる重要な事として意識されていたのである。

このように、聖人は時と教法の流布とに対して深い省察をされたのであるが、しかし、「時」に関する体系的な思<sup>(組織的)</sup>（時

日蓮聖人の時間論（町田）

日蓮聖人の時間論（町田）

問論）  
索書は遺されてはいない。遺文全篇を涉獵しても時間論の書を見出すことは困難である。

こうした「時」に関する表現の方法に於て、日蓮聖人と略々時代を同じくして活動された道元禪師と比較した場合、きわめて対照的である。禪師は只管打坐・修証一如・弘法救済の実践に生涯を貫かれたが、又沈潜思索の生涯でもあり、主著『正法眼蔵』は独特の語法と独創的思想の展開に於て日本思想史上の白眉であり、その「有時の巻」に示される時間論は、ハイデガーの『存在と時間』を想起させられるものがある。

このように、道元禪師の生涯は普勸坐禪と沈潜思索であったが、日蓮聖人の生涯は「法華經の行者」とか「殉教の如來使」であつたと表現されるように、法華正法の色説の信行論に特色がみられるのである。即ち聖人に於ける「時」とは、自らの法華經の忍難色説と流布の成否に関わるものとして意識され、受容されたものである。

文永八年十月の『寺泊御書』の中で

勸持品云有諸無智人惡口罵詈等云云日蓮當此經文汝等何不入此經文及加刀杖者等云云日蓮説此經文  
：數數見擯出數々者度々也日蓮擯出衆度流罪二度也。

と追懷され、末法惡世の三類の強敵から迫害を受けることが法華經行者の資格とされ、その文証として法華經を用し、惡世末法に弘經を誓つた菩薩衆の代理として此事を宣明すると云っている。

日蓮聖人のこの忍難弘經の軌跡が、そのまま「時」を生き抜かれた証であつたのである。色説の軌跡は生きた時の持續であり、主體的に意識された時の連続であつた。聖人の「時」とは、生きた時・息吹する時・生命の連環した「時」であつたのである。それは思索のための時・沈潜する為の時ではなかつた。



- (1) 聖人の遺文中、弘教と時に係わる文書は多い。幾つかを摘出しておこう。「末法の今の時は一向本門の弘<sup>ら</sup>せ給<sup>べき</sup>時也」(妙一女御返事・定遺一七九八)。「所詮一<sup>ニ</sup>弘<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>授<sup>レ</sup>命<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>二時機未熟<sup>ハ</sup>故也。今既<sup>ニ</sup>時来<sup>ニ</sup>」(法華行者値難事・定遺七九九)。「一切の事は時による事に候か」(上野殿御返事・定遺一七二二)。「法華経は一法なれども機にしたがい時によりて其行萬差なるべし」(種種御振舞御書・定遺九六一)。
- (2) 懷契編『正法眼蔵隨聞記』(和辻哲郎校訂・岩波文庫)。河村孝道編著『諸本対校永平開山道元禪師行狀建斷記』(大修館・昭和五〇年)。禪師の伝記研究の必読文献である。
- (3) 衛藤即応校註『正法眼蔵』三卷(岩波文庫・昭和一四年)。寺田透・水野弥穂子註『道元』上下(日本思想大系12・13岩波書店)。
- (4) 前掲寺田・水野註『道元』上巻・正法眼蔵第二十有<sup>リ</sup>時(二五六～二六三)。拙著『道元の「時」の觀念』(楳神51号所収)。
- (5) Sein und Zeit von Martin Heidegger・桑本務訳「存在と時間」三卷(岩波文庫所収)。
- (6) 日蓮聖人は自ら「日蓮は法華経行者也」(聖人知三世事・定遺八四三)。「日蓮は日本第一の法華経行者也」(南条兵衛七郎殿御書・定遺三三七)。「日蓮は日本第一の法華経の行者なる事あえて疑ひなし」(撰時抄・定遺一〇四八)などと宣明されているが、曾て姉崎正治博士『法華経の行者日蓮』(博文館・大正五年)が公刊され、日蓮聖人を法華思想史上に位置意義づけ、遺文中心に生涯を描写されて以来、博士の名声ともあずかり「法華経の行者」の呼称が定着した。
- (7) 「殉教の如来使」(仏使上行の自覚)は、開目鈔で一大開顯されたところであるが、その自覚は從地涌出品「是四菩薩・於其衆中・最為上首・唱導之師」の四菩薩上首の涌現と、如来神力品「爾時仏告・上行等菩薩大衆・…」の妙法結要付嘱の勸奨などの教示を文証とされているが、殉教如来使の意識は、開目抄の他にも「法華取要抄」(定遺八二一～八一五)。「曾谷入道殿許御書」(定遺九〇〇)。「顯仏未來記」(定遺七三九)。「法華行者値難事」(定遺七九八)。等その他に於てその内証が示される。
- (8) 立正大学教授渡辺宝陽氏は、日蓮聖人の宗教は「五字七字の題目の受持と立正安國の願行に「信」と「行」とを集約した：その願行が中核をなす」(「日蓮宗信行論の研究」・平泉寺書店・五頁)とする。筆者は同書から裨益される所が大きかった。尚駄足ながら、日蓮聖人は「観心本尊抄」三十三字段で「自然ニ彼ノ因果ノ功德ヲ譲リ与ヘタマウ」(自然譲与)と云いながら、何故に信行を勧奨されるのかという、問に対しては、その自然譲与の冠頭に「我等此ノ五字ヲ受持スレバ」とあり日蓮聖人の時間論(町田)

日蓮聖人の時間論（町田）

って、受持信行が強く要請されていること、及び寿量品の「我本行菩薩道・所成壽命」との要文に徴しても菩薩道こそ法華經行者の在るべき姿の説示であつたこと。この信行によつて修証現成することを学び得たいものである。

（9） 定退五一四

（10） 寺泊御書・定退五一五

二、「教え」に生きる―殉教の如来使―

「教え」に生きるとは、法師品の中に「藥王今告汝、我所説諸經、而於此經中、法華最第一<sup>(11)</sup>」とある、その『法華經』を如説修行することである。日蓮聖人は「教え」に生きる証<sup>あかし</sup>として、日輪と蓮華とに象徴される「日蓮」の名のなかに、法華經行者の理想と、人間として生きる理想とを祈りこめたのである<sup>(12)</sup>。然し、その『法華經』を色読することは難事のなかの難事である。

日蓮聖人はいかなる発心をもつて、「今度強盛の菩提心ををこして退転せじと願しぬ<sup>(13)</sup>」と、「教え」に生きる誓願を立てられたのであろうか。聖人は立教の誓願を立てる時の心境を次のように追懐している。

「日蓮は流罪死罪となるべしとしりて候しかども、仏いましめて云、此事を知らずながら身命ををしみて一切衆生にかたらずば、我が敵たるのみならず、一切衆生の怨敵なり、必阿鼻大城に墮<sup>お</sup>べしと記<sup>し</sup>給へり。此に日蓮進退わずらいて、此事を申ならば我身いかになるべし。我身はさておきぬ<sup>(14)</sup>」。

また『清澄寺大衆中』に於て

此を申さば必日蓮が命となるべしと存知せしかども、虚空藏菩薩の御恩をほうぜんがために、建長五年四月二十八日、安房、国東条清澄寺道善之房持仏堂の南面にして……少々大衆にこれを申しはじめて其後二十余年が間退転

なく申。(15)

と申し送っているが、先の『高橋入道殿御返事』の文意と同様に、聖人の発心が文脈からあふれ出ている。誓願することで生命に及ぶ迫害を覚悟された心境が述べられている。

日蓮聖人は「日蓮進退わずらいて、此事を申ならば我身いかにもなるべし。我身はさておきぬ」と、追懷されているが、この感慨は立教誓願の生々しい心境の吐露であろう。即ち「進退わずらいて」とは、この法華正法を<sup>(願うか)</sup>発言すべきか否、<sup>(願うまいか)</sup>黙すべきか、という二者択一の岐路に立つ思いである。立正安国を誓願することで旧師道善房と袂を分ち、両親とは今生の別れを告げ故郷を追放される身であれば、惜別断腸の切々たる思いであったであろう。「進退わずらい」で思い惑うのが当然であったろう。二者択一の厳しい思いは『開目鈔』(五五六～五五七)にも開陳されている。

しかし「教え」に生きることが、棄恩入無為・真実報恩の道であるならば、「我が身はさておき」、「日蓮が命と成るべしと存知せしかども」、御恩を報ぜんがために我不受身命の忍難の道を選びとり、但惜無上道の如来使の道程<sup>(決意)</sup>を誓願したのである。

日蓮聖人の「教え」に生きる誓願、それは法華経見宝塔品中の「三箇の鳳詔」によって勧奨された事は周知の所である。即ち『開目鈔』に於て

法華経の第四宝塔品云……誰能於此娑婆国土二広説三妙法華経一今正是時如来不レ久当レ入三涅槃一。仏欲<sup>ス</sup>以<sup>テ</sup>此妙法華経付<sup>ク</sup>属<sup>ス</sup>有<sup>リ</sup>在<sup>ニ</sup>等云云。第一の教宣なり。……以<sup>テ</sup>是<sup>ノ</sup>方便<sup>ヲ</sup>令<sup>ニ</sup>法久住<sup>ス</sup>。告<sup>グ</sup>諸大衆<sup>ヲ</sup>我滅度後誰能護持<sup>ス</sup>讀<sup>ミ</sup>誦<sup>ス</sup>此経<sup>ヲ</sup>。今於<sup>ニ</sup>仏前<sup>ニ</sup>自説<sup>ス</sup>誓言<sup>ヲ</sup>。第二の鳳詔也。……若<sup>シ</sup>仏滅後於<sup>ニ</sup>惡世<sup>ニ</sup>中能説<sup>ス</sup>此経<sup>ヲ</sup>。是則<sup>ハ</sup>為<sup>レ</sup>難<sup>シ</sup>……我滅度後若<sup>シ</sup>持<sup>テ</sup>此経<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>二一人<sup>ノ</sup>説<sup>ス</sup>。是則<sup>ハ</sup>為<sup>レ</sup>難<sup>シ</sup>。諸善男子於<sup>ニ</sup>我滅後<sup>ニ</sup>誰能護持<sup>ス</sup>讀<sup>ミ</sup>誦<sup>ス</sup>此経<sup>ヲ</sup>。今於<sup>ニ</sup>仏前<sup>ニ</sup>自説<sup>ス</sup>誓言<sup>ヲ</sup>等云云。

日蓮聖人の時間論(町田)

日蓮聖人の時間論（町田）

第三、諫勅也。第四第五の二箇の諫曉、提婆品にあり<sup>(16)</sup>

と述べられている。三箇の鳳詔とは「付嘱有在」<sup>(17)</sup>・「令法久住」<sup>(18)</sup>・「六難九易」<sup>(19)</sup>の三つの諫勅である。この三箇の告勅の受持信行は難事の中の難事である。本仏は地涌の菩薩を召喚して滅後の弘法を付嘱することに本意があった。いかに難事であろうとも、滅後に正法を「令法久住」せしめんとされたのは、本仏の大慈悲の発露であったのである。だからこそ「六難九易」を克服して、滅後末法に於ける弘法の使命を果させようと勸奨したのである。日蓮聖人は当に「三箇の鳳詔」を読みとり、読み続けることを不退転の決意をもって誓願したのである。

弘長二年、伊豆謫居中に執筆された『四恩鈔』に於て

法華經云如來現在猶多<sup>ス</sup>怨嫉<sup>ス</sup>況滅度後云云。始に此文を見候し時はさしもやと思候しに、今こそ仏の御言は違はざりけるものかなと殊に身に當て思ひ知れて候へ……法華經の故にかかる身となりて候えば、行住坐臥に法華經を読み行ずるにてこそ候へ<sup>(20)</sup>

と述べられ、迫害忍受の苦難の道程に踏み出した心境、滅後末法の多怨難信の只中に身を投ずる使命感、迫りくる法難を身に當て読む行者の意識があふれている。

小松原法難の直後に南条兵衛七郎に宛てた消息の中で

されば日本国の持経者はいまだ此經文にはあわせ給はず。唯日蓮一人こそよみはべれ。我不愛身命・但惜無上道是也。されば日蓮は日本第一の法華經行者也<sup>(21)</sup>

と云っている。滅後末法世の中で唯一人、法華經を色読した行者の自覚が宣明されている。勸持品の「有諸無智人・惡口罵詈等、及加刀杖者」の未來記が、小松原に於て「頭にきずをかほり左の手を打ちをらる<sup>(22)</sup>」と、直接に身に當

て読んだとき、法華經行者の意識と弘法の使命感はより一層に昂揚されたのである。

文永八年九月、竜ノ口法難の前夜、埋不尽にも捕縛されたとき、曾ての弟子少輔房によって法華經第五ノ巻をもつて打擲された事について、

うつ杖も第五卷うたるべしと云、經文も五卷、不思議なる未來記の經文也……かくの如く思ひつづけ候へば感涙をさへがたし。<sup>(23)</sup>

法華經の第五卷をもて、日蓮が面を教箇度打たりしは、日蓮は何とも思はず、うれしくぞ待りし。不輕品の如く身を責め、勸持品の如く身に當て貴し貴し。<sup>(24)</sup>

と追懷して法悦の涙をながされている。松葉谷焼打・伊豆配流・小松原刀杖難・そして竜口断頭の坐に赴むとき、迫害忍受の未來記たる勸持品によって打擲された事は、當に色心二法に體現したのであり、法華經行者の自覚は確固となった。

聖人は『寺泊御書』に於て

勸持品云、有<sup>レ</sup>諸無智人、惡口罵詈<sup>ス</sup>等云云。日蓮當<sup>レ</sup>此經文。汝等何<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>此經文。及加刀杖者等云云。日蓮讀<sup>レ</sup>此經文。汝等何<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>讀<sup>レ</sup>此經文。常在大衆中欲毀我等過等云云。向國王大臣婆羅門居士等云云。惡口而盟誓數見擯出。數々者度々也。日蓮擯出衆度。流罪二度也。法華經三世說法儀式也。過去不輕品今勸持品。今勸持品過去不輕品也。今勸持品未來可<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>不輕品。其時日蓮即可<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>不輕菩薩。<sup>(25)</sup>

と述べているが、この迫真狂溢の消息は越後寺泊より富木氏に宛てられたものである。勸持品二十行偈の「皆當忍受之」「當著忍辱鎧」の迫害忍受の未來記と、不輕菩薩の忍難の礼拝行の二つの説示が、いまや聖人の色説と一体と

なったのである。勸持品二十行偈を「日蓮当<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>經文<sup>ニ</sup>」<sup>(26)</sup>「日蓮説<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>經文<sup>ニ</sup>」<sup>(26)</sup>となし、常不輕菩薩の我深敬汝等の二十四文字の忍難の行軌を「身ニ当<sup>テ</sup>」<sup>(27)</sup>「身ニ説<sup>メ</sup>リ」<sup>(27)</sup>とされ、此処に殉教の法華經行者の自覚が鮮烈に表現されるにいたる。

日蓮聖人は佐渡一谷に流罪謫居の身となる。「北国の習なれば冬は殊に風はげしく、雪ふかし。衣薄く食ともし。野中の御三昧ばらにおちやぶれたる草堂の上は雨もり壁は風もたまらぬ<sup>たふ</sup>傍に：現身に餓鬼道を経、寒地獄墮<sup>お</sup>ぬ<sup>(27)</sup>」<sup>(28)</sup>という、寂寞荒寂たる有様であった。と同時に暫時の内省の機会ともなった。聖人みずから「此事日蓮当身大事也<sup>(28)</sup>」とされた『観心本尊抄』<sup>文永一〇・四・二五</sup>また『顯仏未来記』<sup>文永一〇・五・一一</sup>・「法華行者値難事<sup>文永二・正・四</sup>」等の重要文書が撰述され、法華經行者の色読内証が宣明されるが、とくに『開目抄』<sup>文永九・二</sup>に於て仏使上行の自覚殉教如来使の自覚が開顯される。

聖人にとって『開目抄』の撰述は、

我身法華經の行者にあらざるか。此の疑は此書<sup>(29)</sup>肝心一期の大事<sup>(29)</sup>」

とある如く、色読内証の成否に関わる重要事であった。内外・大小・権実・本迹・教觀の五重相對判の独自の教判の展開はもとより、「法華經の行者」の呼称を二十六回も使用して殉教の如来使の内証を開顯される<sup>(30)</sup>。そして忍辱の鎧を身にまとい、呻吟して悲涙をあふれさせた忍難慈勝の色読は、三大誓願となつて開花し<sup>(31)</sup>、「当世日本国に第一に富者日蓮なるべし<sup>(32)</sup>」と、法悦の境地に身を置くのである。古来、開目鈔は人開顯の書とされるが、此処で改めて「今度強盛の菩提心ををこして退転せじと願しぬ<sup>(34)</sup>」の誓願をかみしめ、「教え」に生きられた軌跡を鑽仰しなければならぬであらう。本仏と地涌菩薩等の代表となつて、泥まみれ、血まみれ、汗にまみれて、菩薩道を只ひたすらに生きられ英姿であつたのである。

- (11) 坂本・岩本訳注「法華經」中・岩波文庫一五二ページ。
- (12) 四条金吾女房御書「明かなる事日月にすぎんや。淨き事蓮華にまざるべきや。法華經は日月と蓮華となり。故に妙法蓮華經と名く。日蓮又日月と蓮華との如くなり」(定遺四八四)。
- (13) 開目鈔・定遺五五七。
- (14) 高橋入道殿御返事・定遺一〇八六一一〇八七。
- (15) 定遺一三三四。
- (16) 定遺五八二一五八三。
- (17) 注(11)「法華經」中・一九〇。
- (18) 前同法華經。一九二。
- (19) 前同法華經・一九六以下。
- (20) 定遺二三五一二三六。
- (21) 南条兵衛七郎殿御書・定遺三二七。
- (22) 聖人御難事・定遺一六七三。
- (23) 上野殿御返事・定遺一六三五一一六三六。
- (24) 妙密上人御消息・定遺一一六七一一一六八。
- (25) 定遺五一四一一一五。
- (26) 注(25)。また開目鈔「日蓮法華のゆえに度々ながされずば教々の二字いかんがせん。此の二字は天台傳教いまだよみ給はず。況余人をや。末法の始のしるし、恐怖惡世中の金言のあふゆえに、但日蓮一人これをよめり」(定遺五六〇)とある。
- (27) 法蓮鈔・定遺九五三。
- (28) 観心本尊鈔副狀・定遺七二一。
- (29) 開目鈔・定遺五六一。
- (30) 法華經行者の内証とは、法華經を「身ニ当テ・身ニ説ンダ」事を意味する。即ち、①法師品の「而此經者、如来現在、猶多怨嫉、況滅度後」と、安樂行品の「一切世間、多怨難信」と説示される末法多怨難信の渦中に身を投じて、文証から現証へ

日蓮聖人の時間論(町田)

## 日蓮聖人の時間論（町田）

と体现したことである。②勸拝品二十行偈の迫害忍受の未来記を体现したという事である。③常不輕菩薩品の「我深敬汝等」等々二十四文字が示す忍難の但行礼拝行を末法弘教者の行軌なりと受けとめる事が出来たか否かと云うことである。④薬王菩薩本事品の「我滅度後、後五百歳中、広宣流布、於閻浮提」の教示を、末法弘教者に対する勸奨として受けとめることが出来たか否かという事である。⑤從地涌出品の「是菩薩衆中、有四導師」とある本化の菩薩の涌現と、如来神力品の「爾時仏告、上行等菩薩大衆」と以下の妙法結要別付囑の説示を、末法の行者として体现できたか否かという事である。⑥見宝睹品の「三箇の鳳詔」の勸奨を末法行者の行軌と受けとめ、「立正安國」を誓願した信行の内省である。―そして開目抄の処々に於て「恐怖惡世中の金言のあふゆへに但日蓮一人これをよめり」（定五六〇）、「日蓮なくば此一偈の未来記妄語となりぬ」（定五五九）「經文に我が身普合せり」（定五六〇）と、色説の内証を宜明される。色説と内証とを経文と照合して述べられたものに『顯仏未来記』（定七三八・七四〇・七四二）がある。併せ参照されたい。

(31) 開目鈔に「されば日蓮が法華經の智解は天台伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲すぐれたる事をそれをもいだきぬべし」（定五五九）とある。

(32) 開目鈔中、あまりにも有名な条であるので引文は略す。定遺六〇一参照。

(33) 開目鈔・定遺五八九

(34) 註(13)参。

## 二、「時」の認識―時と人―

「教え」に生きると云うことは、法華經を身「ニ当テ」「身ニ読ム」ことである。それは生と死の限界状況の間を生き抜くことであった。日蓮聖人は『日妙聖人御書』等に於て

正法を修して仏になる行は時によるべし。夫仏を学せん法は必ず先づ時をならうべし。<sup>(35)</sup>

と述べて、菩提の覚智を求めて「修する行者」（人）と、その歴劫修行の菩薩道は「時による」「時を習うべし」



となし、時と人との深い相関について興味ある示唆をされている。

日蓮聖人の「時」の認識とは、理性とか悟性という知性の対象としての「時」ではなかった。法華經の行者にとって「時」の認識とは、智の領域を超えた信の世界に関わる問題であった。

『報恩抄』の中に

日蓮が慈悲廣大ならば、南無妙法蓮華經は万年の外未來までもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり。無間地獄の道をふさぎぬ。此功德は伝教天台にも超え、龍樹・迦葉にもすぐれたり。極樂百年の修行は穢土よどの一日の功に及ばず。正像二千年の弘通は末法一時ひとときに劣るか。是はひとへに日蓮が智のかしこきにはあらず。時のしからしむる耳(36)。

とあり、また『四条金吾殿御返事中』に於ても

身の智分をば且かつく置おぬ。法華經の方人として難を忍び庇を蒙る事は漢土の天台大師にも越こ、日域の伝教大師にも勝かたり。是は時の然らしむる故なり(37)。

と述べている。「日蓮が智の賢きには非ず」と云い、「智分をば且く置きぬ」として、末法の法華經の行者の資格は智慧（機根）にあるのではなく、「時の然らしむる故なり」とされる。「然らしむる」とは、国語的解釈からしても「そのような結果に至らせる。そうさせる」ことであるから、法華經行者の資格は「時」と深く関わっているのである。「智分は且く置く」と申されているが、法華經行者にとって「時の然らしむ」事を知ることが真の智解である事は云うまでもない。「日本第一の智者となし給え(38)」との祈願は此の事であらう。

日蓮聖人が正法弘通との関わりに於て「時」について強い関心を寄せ、深い洞察を加えられたことは云うまでもな

い。

『教機時国鈔』に於て

時者、弘<sup>ニ</sup>仏教<sup>ニ</sup>人必可<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>時……不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>時弘<sup>ニ</sup>法無<sup>レ</sup>益上還<sup>ル</sup>惡道<sup>ニ</sup>也……当世入<sup>ニ</sup>末法<sup>ニ</sup>二百一十余年也。權經念  
仏等時歟。法華經時歟。能<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>勘<sup>ス</sup>時刻<sup>ニ</sup>也。<sup>(39)</sup>

と述べ、『撰時抄』の一文にも

何に況や、仏法を修行せんに時を糾ざるべしや……機の熟不熟はさておきぬ。時の至れるゆえなり。經云今正是  
其時決定、説<sup>ニ</sup>大乘<sup>ニ</sup>等云云……問云、いかなる時にか小乗權經をとき、いかなる時にか法華經を説くべきや。……

答云、仏眼をかつて時機をかんがへよ。<sup>(40)</sup>

とある。先の『教機時国鈔』の中の「能<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>勘<sup>ス</sup>時刻<sup>ニ</sup>也」とか、『撰時抄』の「仏眼をかつて時機をかんがえよ」  
との教示は、法華經の弘通に於ける「時」の見究め、「時」の選択について仏眼（智慧）を開かねばならぬことの教  
示である。こうした「時」の選択について、『妙一女御返事』には

法華經の弘まらせ給べき時有三<sup>ニ</sup>度<sup>ニ</sup>。所謂在世與<sup>ニ</sup>末法<sup>ニ</sup>也。修行又有<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>意<sup>ニ</sup>。仏世は純円一実、滅後末法の今の  
時は一向本門の弘らせ給べき時也。迹門の弘らせ給べき時は已に過て二百余年になり、天台伝教こそ其能弘の人  
にてましまし候しかども、それもはや入滅し給ぬ。日蓮は今、時を得たり。豈此所囑の本門を弘めざらんや。<sup>(41)</sup>

とあって、「日蓮は今、時を得たり」と述べているが、その「時を得たり」とは、方便品・譬喻品・宝塔品等に  
「今正是其時」又は「今正是時」と教示される勸授そのものを容け入れ、忍難色説による如来使の自覚が、末法の  
「今の時」を選び択らせたものである。こうした「時機」に対する認識に関して、

たとえば『富木入道殿御返事』には

詮ずる処は天台と伝教とは内には躰給<sup>（42）</sup>といへども、一には時来らず、二機なし、三譲られ結はざる故也。今末法に入ぬ。地涌出現して弘通有べき事なり。

と見え、また『四菩薩造立鈔』に

今末法に入れば尤<sup>（43）</sup>仏金言の如きんば、造るべき時なれば本仏本脇士造り奉るべき時也。当時は其時に相当れば、地涌の菩薩やがて出させ給はんずらん。先其程四菩薩を建立し奉るべし。尤も今は然るべき時也。

と述べられ、法華經行者の資格と法華經流布の有無は、仏使上行等の涌現の付嘱にあるとされ、今が正に「然るべき時」であり、「妙法蓮華經広宣流布之時刻也。是知<sup>（44）</sup>時也」とされている。聖人の「時」の認識は、法華經の忍難色説との関わりのなかで、正法流布の「時」を選択する仏眼をもつことであつた。

我々が時を認識するという事は、主体的に生きたと云う自覚の構造として把握されることである。本来、人間は生

*die Furcht von der Zeit* sagt

老病死の時間衝撃からの逃避を願っている。老の衰えを苦惱し、死の恐怖に懊悩する衆苦充滿の時間衝撃からの離脱（超克）を志向している。時に対する認識が深まれば深まる程に、時の衝撃からの逃避・超克を強く志向するであろう。この超克の理念を樹立する所に宗教の存在する意味がある。

鎌倉新仏教の興起と展開は、有為転変・末法当初を意識するなかでなされたのである。法然・栄西・親鸞・道元等の開祖、そして日蓮聖人は末法を克服することを共通の課題として抱き、死身弘法の活動であつた。<sup>（45）</sup>鎌倉新仏教は時に対する深い洞察と認識のなから新生した事は確しかな事である。

日蓮聖人の時間論（町田）

- (35) 日妙聖人御書・定遺六四五。撰時抄・定遺一〇〇三。
- (36) 定遺一二四九。
- (37) 定遺一八〇〇。
- (38) 善無畏三藏鈔・定遺四七三。清澄寺大衆中・定遺一一三三。破良觀等御書・定遺一二八三。
- (39) 定遺二四二。
- (40) 撰時抄・定遺一〇〇三・一〇〇五。
- (41) 定遺一七九八。
- (42) 定遺一五一九。注(41) 妙一女御返事の「答云、天親龍樹内鑑冷然等云云。天台大師云、後五百歲遠沾妙道」。伝教大師云、正像稍過已、末法太有、近法華一乘機、今正是其時。何以得、知、安樂行品云、末世法滅時云云」。も併せ参照。
- (43) 定遺一六四八。
- (44) 定遺二四四。
- (45) 辻善之助「日本仏教史」中世篇之一・岩波書店刊一〇六。日本仏教学会年報34号―鎌倉仏教形成の問題―昭和四四年刊。

三、「時」を超える―末法の超克―

日蓮聖人は末法当初の時にこそ正法の流布される「今正是其時」と受けとめた。云うまでもなく、その受容意識は法華經の忍難色説による自覚でもある。

さて、日蓮聖人が「時」を受容された意識は、単に国語的解釈による「受け入れる」と云う意味だけではなく、かえって其を克服へと止揚する理念をとりこんだ意味を含んでいるのではないか。それどころか、法華經の行者日蓮聖人にとって、穢土を改めて浄土を実現することは絶対の使命と受けとめていたのである。即ち娑婆即寂光の具現は絶対の使命であったのである。

「時」を超える——末法の超克——と云う理念が樹立されることは容易な事ではない。「超える」と云う事は限界を越えることであるから、その越える為のエネルギーが必要である。我々の日常的な時空の次元を超えて、永遠の世界を想定するためには、そこに思考の変革、倒錯の論理とも云うべき思惟がなければならぬ。

聖人は『種種御振舞御書』のなかで

仏滅度後二千二百余年が間、恐は天台智者大師も一切世間多怨難信の經文をば行じ給はず。数数見撰出の明文は但日蓮一人也。一同一偈我与授記は我也。阿耨多羅三藐三菩提は疑なし。相模、守殿こそ善知識よ。平、左衛門こそ提婆達多よ。念仏者は瞿伽利尊者、持斉等は善星比丘。在世は今にあり、今は在世なり。<sup>(46)</sup>

と述べて、仏在世と滅度後を対照されている。そして機根(能力)の熟・不熟、信の篤い薄い、と云う事は時とは関係がない。仏の在世でも悪提婆の如き謗法者も居れば、滅後末法であっても相模守(八代執權・時守)の如き有徳者も居るのである。即ち正法を受持する機根は、正像末の三時の流れとは関わりがないとするのである。

聖人は此処で語調を整えて、「在世は今にあり、今は在世なり」とされる。若し文字通り素直に訳読すれば、「仏の在世は末法当初となり、末法はそのまま仏在世となる」となる。この教示によれば、「仏在世」と「末法当初」という、時間も空間も全く異なる次元の世界を、同時に同質のものとして容認しようとする論理思考である。然し、次元の異なる世界を同じ時点で認めようとする思惟は、明らかに二律背反の論理であり、矛盾した論理だと指摘をせざるをえない。

日蓮聖人はそれでも「在世は今なり。今は在世なり」とされるのである。聖人の教示が成り立つ為には、時間倒錯の論理思考が導き入れられねばならない。即ち、宗教的に昇華された純粹時間と、思索の領域を超えた空間とが想定

日蓮聖人の時間論（町田）

されなければならない。聖人が「在世」を「末法の今」に比定されるのは、末法衆生の救済を本願とする大慈悲の現われである。

日蓮聖人は在世正法の時よりも、むしろ末法の時に宗教的意義を見い出そうとされている。此処で「日蓮当身ノ大事」とされた『観心本尊抄』の教示を鑽仰してみよう。

迹門十四品、正宗八品、一往見レ之以三乗、為レ正、以三菩薩凡夫、為レ傍。再往勸レ之以三凡夫正像末、為レ正。正像末、三時之中、以三末法始、為レ正中正。問曰、其証如何。答曰、法師品云、而此經者、如來現在猶多怨嫉、況滅度後。宝塔品云、令三法久住、乃至所來化仏當レ知此意等。勸持安樂等可レ見レ之。迹門如是。以三本門論レ之一向、以三末法之初、為三正機。所謂一往見レ之時、以三久種、為三下種、大通前四味迹門、為レ熟至本門、令レ登三等妙。再往見レ之不似三迹門。

本門序正流通俱、以三末法之始、為レ詮。在世、本門末法之初、一同純円也。

答曰、進退惟谷。試粗說レ之。法師品云、況滅度後。壽量品云、今留在レ此。分別功德品云、惡世末法時。藥王品云、後五百歲於三閻浮提、広宣流布。涅槃經云、譬如七子。父母非レ不三平等、然於三病者、心則偏重上等云云。以三己前明鏡、推三知。仏意、仏出世非レ為三靈山八年諸人、為三正像末人、也。又非レ為三正像二千年人、末法始、為三如レ予者。

また『法華取要抄』に於て、

問曰、法華經、為誰人、説レ之手。答曰、自三方便品、至三于人記品、八品有三意。自レ上向、下次第説、之第一菩薩第二三乘第三凡夫也。自三安樂行、勸持提婆宝塔法師、逆次説、之、以三滅後衆生、為レ本。在世衆生傍也。以三滅後、論、之、正法一千年像法一千年傍也。以三末法、為レ正。末法中、以三日蓮、為レ正也。問曰、其証拠如何。答曰、況滅度後文是也。疑云、日蓮、為レ正、正文如何。答云、有諸無智人、惡口罵詈等、及加刀杖者等云云。問云、自讃如何。答曰、喜余レ身故難、堪自讃。

右に引用參借した御文書は、聖人の宗教理念とされる「末法為正」を示唆したものとして知られている。即ち「凡夫正像末ヲ以テ正ト為ス」。「正像末ノ三時ノ中ニモ末法ノ始ヲ以テ正ガ中ノ正ト為ス」。「末法ノ初ヲ以テ正機ト為ス」。「在世ノ本門ト末法ノ初ハ一同ニ純円ナリ」。「逆次ニコレヲ読メバ滅後ノ衆生ヲ以テ本ト為ス」。「滅後ヲ以テコレヲ論ズレバ正法一千年、像法一千年ハ傍ナリ。末法ヲ以テ正ト為ス」等々と、表現されるのは、先の『種種御振舞御書』の「在世は今にあり、今は在世なり」との意を更に積極的に表現されたものである。種種御振舞御書の表現は、拝読する者に柔軟な感を与え、観心・取要両抄の表現は直截的な感を抱かしめる。ともかくも、「末法為正」と主張されるのは、法華経は滅後末法の救済を目的としている、否それどころか末法に強い意義を求められた日蓮聖人の独自の法華経観である。

ところで「末法為正」の「正」は、「証」（証悟・証道・証智）と同義に解する事も可能である。在世の「証」はそのまま末法の「証」と云う事になる。末法を超えて在世の本門と同調する思惟である。本尊抄の「在世ノ本門ト末法ノ初ハ一同ニ純円ナリ」との教示は、久遠本時と末法当今は共に同調していると把握され、法華一仏乗は悉く末法の時・末法の機のためのものと主張されたのである。

謂うまでもなく、「末法為正」の宗教理念が主張される為には、法華経の忍難色読によって裏打されていると云う事である。『法華取要抄』の中で所謂、順読法華・逆読法華の二つの法華経観が示されるが、「末法為正」の精神を自己の胸奥に抱きしめる為には、「安楽行ヨリ勸持・提婆・宝塔・法師ト逆次ニコレヲ読メバ滅後ノ衆生ヲ本ト為ス」という逆次に色読することで、法華経の末法流通の心を把握しなければならない。法華経は独り日蓮聖人の為の

日蓮聖人の時間論（町田）

未来記ではなかった。滅後の衆生すべての為に「是好良業・今留在此」され、「遣使還告」された未来記である。この尊い未来記を日蓮聖人が代表となられて、逆次に忍難色説されて、在世の「今」を末法の「今」へとたぐり寄せられたのである。

〔註〕

(46) 種種御振舞御書・定遺九七一。

(47) 観心本尊抄・定遺七一四・七一五。

(48) 前同・七一八・七一九。

(49) 法華取要抄・定遺八一三。

(50) 前同・八一三。

(51) 「法華経を代表となつて色説した」との表現は、「法華経の殉教の如来使」と云うことである。偶々、筆者は一九七九年西ドイツの「聖オットー・エレン大修道院」に日蓮宗徒でありながら唯一人滞在を許されたが、厳しい修道生活の間、十数回に亘り修道院長ノトケル・ボルフ師（神学・哲学博士）と研究討議の機会を得たが、院長は「イエズスの十字架上の犠牲」と題する講義の中で、「Jesus Christusは人類の代表となつてカルヴァリオ丘の十字架上の犠牲 das Opfer となつたが、その犠牲により神と人類との間の厚い壁をとり除いた。Jesusは殉教・犠牲によつて深い愛を示された」（こうした神秘的事柄は思索によつては理解できない）と。筆者はその講義を聴きながら、日蓮聖人の忍難慈勝（日蓮は泣かぬども涙ひまなし。五字ノ内ニ此珠ヲツツミ末代幼稚ノ頭ニ懸サシメタマウ）の悲涙の生涯に想いを馳せ、また三大誓願を背に負うた殉教の如来使（一切衆生の代表となつて法華経を色説）の英姿を想起し、ヨーロッパの空の下で改めて立正安国の誓願の意味を考ふる縁となつた。



#### 四、「今本時」の意味―永遠の今―

「今本時」とは、『観心本尊抄』の所謂、「四十五字法体」の冒頭にみえる語句である。その「四十五字法体」は、仏陀釈尊の久遠成道（本地）の時を説き明したものとされてきている。

今本時、娑婆世界離三災、出三四劫、常住淨土。仏既過去不滅未來不<sub>レ</sub>生。所化以同体。此即己心、三千具足三種世間也。<sup>(52)</sup>

この「今本時」の語句は日蓮聖人の遺文中、唯一度の出自であり、幾種類かの仏教学並に日蓮宗学関係の辞典を披見しても、「今本時」の項目を見ることは無い。<sup>(53)</sup>がしかし、「本時」の項目は全辞典類に収録されている。ちなみに辞典類の解説を要約してみると、一本時とは、法華經寿量品に於ける開近顯遠・開迹顯本によって寿量文底の久遠本仏が開顯され、その久遠本仏の時空を超えた宗教的絶対世界―また―法華經寿量品に開顯された本源的な時、即ち我此土安穩天人常住満と語られる次元を指すとみられる―とされている。

このように「本時」について解説をされてみて、寿量本仏の無始無終の絶対世界であるとするならば、「本時」の頭に冠せられている「今」とは、一体何であろうか。単に「本時」の意味を強めるために冠せられた接頭語でない事は確しかである。宗教的な意味がこめられた「今」であることは云うまでもなからう。「今」を、素直に国語的に解釈して、現在・過去と未来の境としての瞬間・自己が立っている時点・末法の現在などに解すべきであろうが、「本時」に冠せられている事と併せ考えれば、その「今」は何か概念化されたり、抽象化された思弁の産物であると受けとめてはならない。明らかに宗教的悟道の表現、つまり寿量久遠本仏の時と深く関わる「今」であることが理解され

よう。

さて、日蓮聖人の「今本時」の意味を思索するとき、それに触発されて一恣意的ではあるが―想起させられる語句に、道元禪師が『正法眼蔵』（「有時の巻」）で特徴的に使われる「有時の而今」がある。<sup>(64)</sup>

道元禪師が特徴的に用いる「有時の而今」・「有時」・「而今」等の語句は、『正法眼蔵』の全巻の中でも殊に難解且つ深い思索の意味をもつとされている。「而今」とは「即今」<sup>ジャ・ニ・コン</sup>とも云い、現在の事・いまの事であるが、禪師はこれに宗教的意味を持たせて、過去を担い未来を孕む時である今、又は仏道の行持を現成する今、真理そのものの実現する今であると、表現されているのである。

此処で禪師が示した「有時而今」を手掛りとして、日蓮聖人の「今本時」の意味について考えてみたい。まず「今本時」の読み方であるが、「今が本時となる」と読むのか、「今がそのまま本時である」と読むのか。先の道元禪師の「有時而今」に徴するとき、明らかに「今即本時」・「本時即今」と読むべきであろう。端的に云えば、我々の立っている時点がそのまま本時なのである。この事について、道元禪師は次のように見事に示される。

われに時あるべし。われすでにあり。時さるべからず。彼方にあるにたれども而今なり。<sup>(65)</sup>

即ち、有時している而今を思念することが重要だと云う。その「有時」とは、時間がそのまま存在、存在がみな時間である事を示している。一切の世界はすべて時であり、それらは自己の内にあるのであるから、自己が発心、修行、現成すれば、一切の世界と同時に発心、修行、成道することであり、自己と同心一体の「時」がはじまるとするのである。

さて、日蓮聖人が逆説法華の帰結として、「末法為正」と主張してやまないのは、法華經の色説を媒体として、本

仏の世界と感応道交して「(永遠の世界)本時」の中に生きられたからである。随つて「今本時」と云うは、時間の長短・空間の広狭を超えた世界の中に生かされている事である。

日蓮聖人は次のように示される。

法華經を一字一点も信じ行ぜば本時同居の安樂世界に往生すべし。(56)

とあり、また『御義口伝』には釈して次のように見える。

時者感応末法時也。…時者本時娑婆世界時也。…時者末法第五時也。今日蓮等之類奉レ唱ニ南無妙法蓮華經ニ者住所説也。(57)

即ち衆苦充滿の娑婆世界であらうとも、法華經色説者の住する処はそのまま「三災ヲ離レ四劫ヲ出タル常住」の本時なり、「(永遠の過去)仏既ニ過去滅セズ未來ニモ生ゼザル」本時となるのである。「過去ニモ滅セズ」「未來ニモ生ゼズ」とは、無始の昔から無終の未來にいたる無量無辺の本仏の世界の事である。日蓮聖人が志向された本仏の永遠の世界とは、(永遠トハ)「久遠者ハタラカサヅクロハズモトノ儘云義」とあるように、無作・無縁であり、時空を超越した本有の世界であったのである。

此処で「久遠本仏」とか「寿量本仏」と呼称される性格について整理し理解しておく必要がある。即ち、日蓮聖人の御書中に表現される仏身観には、「無始古仏」と、「無始無作三身」(無始本覺三身)と云う二種が観られるのである。

法華經を所依の經典とされた日蓮聖人は、法華以前の諸大乘經典にみられる仏身と、法華經の就中、本門寿量品で開顯された仏身との相異を明確に示し、そこに法華經の特異性を認められている。

日蓮聖人の時間論(町田)

『開目鈔』に於て

爾前のみならず迹門十四品一同に爾前に同ず。本門十四品も涌出・寿量の二品を除ては皆始成を存せり。双林最後、大涅槃經四十卷・其外の法華前後の諸大經に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども応身報身の願本はとかれず。<sup>(59)</sup>

と述べて法華經爾前の諸大乘經は法身仏を本地としたが、法華經に至って応身と報身の願本が説示されたとなしてゐる。そして寿量品に於て顯現された本地は無始の古仏であるとする。即ち『觀心本尊尊抄』に於て、

我等已心カ・積尊ハ五百塵点乃至所顯ニ三身ニ無始古仏也。<sup>(60)</sup>

と明快に示されている。ちなみに寿量品には次のように説示される。

如是我成仏已来、甚大久遠、寿命無量、阿僧祇劫、常住不滅、諸善男子、我本行菩薩道、所成壽命、今猶未盡、復倍上數、然今非実滅度、而便唱言、当取滅度。<sup>(61)</sup>

即ち、本仏の壽命とは、伽耶始成の釈迦（応身）の壽命が久遠であると言うのではない。仏陀となったその世界（報身）が久遠だと云うのである。寿量品で説示される本仏の「無量無辺」とは、「五百千万億那由佉劫」という、<sup>(計算することの不可能)</sup>  
「非算數所知」であり、<sup>(思考する領域も超越している)</sup>  
「亦非心力所及」なのであり、無始の古仏の性格を平易に且つ見事に語っている。

然しながら、「五百塵点」とか「百千万億劫」と天文学的數量をもつて示されても、それが有限の數値であり、「復倍上數」と積み重ねても結局は有限であることには変りはない。日蓮聖人も「五百塵点乃至所顯三身」とか「五百塵点劫成仏」、また「五百塵点三身相即無始の古仏」のように、寿量品の數値をもつて無始古仏の悠遠性を示そうとしている。法華經にみられるドラマチックな表現また御文書にも見られる「五百塵点劫」という表現は、天文学的

數値を藉りて有限の世界から無限の世界を誘う為のものである。五百塵点劫の有限の數値をもつて、無始無終の久遠（「常住不滅」）の生命を顯現しようとしたのである。

壽量品に「諸所言說、皆實不虛」と前置きして、

所以者何、如來如實知見、三界之相、無有生、死、若退若出、亦無在世、及滅度者、非實非虛、非如非異、不如三界、見於三界、如斯之事、如來明見、無有錯謬。（65）

とある。この説示は久遠の古仏の本性を見事に説き明したものである。本仏の常住（無假性）と不滅（永遠性）についての美事な表現である。天文学的數値を以つて本仏の壽命を説示したドラマチックの表現が敷衍されて、常住不滅の無始古仏（「法身仏」）の仏身觀が明らかにされている。

次に、日蓮聖人の御遺文中には「無作三身」とか「本覺無作」と表現される仏身觀がみられる。たとえば『授職灌頂抄』には、

明三釈尊、無作三身、欲令増進弟子三身……此三身者雖無始本覺三身、且立五百塵点劫成仏、三身即三世常住（66）

とあり、壽量文底の本仏は五百塵点劫本覺無作の三身であるとされる。また『今此三界合文』には、

釈伽如來是三千年總體從無始一來本來自証無作三身法法皆具足無有闕減（67）

とあり、「本來自証」の三身と見え、本覺無作の性格が示されている。そして『御義口伝』によれば

無死退滅、無作報身也。有生出在、応身也。如來如實無作法身也。（68）

と示され、無作の法身仏を明らかにしている。

さて、日蓮聖人の仏身觀は本論論、成仏論、己心論とも深く関わる宗学上の重要問題であるから、本拙論で疎略に

日蓮聖人の時間論（町田）

## 日蓮聖人の時間論（町田）

扱うことは許されないであろうが、しかし聖人が自ら「日蓮当身ノ大事」とされた『観心本尊抄』に於て、

我等己心、釈尊五百塵点乃至所願三身、無始古仏也。

と、明らかにされる限り、寿量文底の本仏は「無始の古仏」とせねばならないであろう。従前、この「無始の古仏」と「本覚無作」とを混同してきた為に日蓮聖人の仏身觀に錯綜が生じたのではないか。無始無終の実成的性格と、本

有無作という本覚的性格を一緒にして、久遠実成本覚無作三身と称しても、本仏の性格が渾然融和された事にはなら

ない。寿量品所願の本仏とは、久遠実成の無始古仏とすべきである。久遠の昔から永遠の未来に生きつづける本因本

果を具足した本仏であると領解すべきである。

寿量品開頭の本仏は最初から時間を超えている。随つて「無量無辺」という性格は、單に無限の時限の経過を指す

のではなく、「永遠の今」を志向している存在である。久遠本仏は「今、此処に」・「何処に」でも存在するのであ

る。「本時」とは無始古仏、久遠本仏の世界のことである。

「今本時」とは、「永遠の今」という事になる。久遠本仏の生命の中に包みこまれた「今」ということである。「今

本時」の「今」は永遠の相下に觀られた「今」であり、仏既ニ過去ニモ滅セス未来ニモ生ゼザル「今」である。この

「今」が本時と云われるのは「今」の永遠の相を示されたものである。

日蓮聖人にとって、久遠というのは時間の無限の流れとか、時間の限らない持続という所謂「永久」の事ではな

い。それは過去を担った今であり、（永遠の無終）未来を孕んだ今であり、現在のな今であったのである。「本時」がそのまま「無

始の今」であり、「無終の今」であったのである。

〔註〕

- (52) 観心本尊抄・定遺七一二。尚『法華宗内証弘法血脈』のなかに「末法今時、法華經所坐之處、行者所住之處、道俗男女貴賤上下所住之所、併皆是寂光也。所居既淨土也」との文も見える。
- (53) 「今本時」を項目として扱い、それを論じたものに、望月飲厚『日蓮教學の研究』（平樂寺書店・一二三）。茂田井教亨『日蓮教學の根本問題』（平樂寺書店・一六四）などがあり、また、『日蓮宗事典』（二四頁）に「今本時」の項が設けられている。
- (54) 『正法眼藏』（有時の巻）に於て「われに時あるべし。われすでにあり。時さるべからず。時もし去來の相にあらざるは、上山の時は有時の而今なり。時もし去來の相を保任せば、われに有時の而今ある。これ有時なり。」また「大悟の巻」でも「令我念過去未來現在いく千万なりとも、今時なり而今なり、人々の分上はかならず今時也」。（寺田透・水野弥穂子校注「道元」上・日本思想大系12・岩波書店・二五七・一二二）。
- (55) 注(54) 同書二五八參。
- (56) 女人往生鈔・定遺三四七。
- (57) 御義口伝・定遺二六八。
- (58) 前同二六七。
- (59) 開目鈔・定遺五五三。
- (60) 観心本尊鈔・定遺七一二。
- (61) 坂本・岩本訳注『法華經』下巻・岩波文庫二〇。
- (62) 注(60)
- (63) 授職灌頂口伝・定遺八〇一
- (64) 真言宗私見聞・定遺二〇七五。
- (65) 注(16) 一八。
- (66) 注(63) 八〇一。
- (67) 今此三界合文・定遺二二九二。
- (68) 御義口伝・定遺二六六四。
- (69) 注(60) 七二。

日蓮聖人の時間論（町田）

六、むすび―「時」を生きる―

我々が生きている現在<sup>いま</sup>は、いつ反省しても、いつ考えても、いつ確めても、常に「今」である。「過ぎた」と思われるものも、我々の記憶の中には「この今」が残像として残っている。「時」は経過<sup>ながれ</sup>とか無常<sup>むじやう</sup>と云われるが、然し「この今」は常に我々の内に在って流れないのである。これを「永遠の今」と表現してもよいのではないか。「久遠」とは流れない現在、永遠の今の事ではなからうか。「久遠本仏」とは、永遠の昔から無限の未来に生き続ける生命<sup>いのち</sup>の事であらう。だとすれば、永遠の生命は常に我々の「今」と同時同居しているのである。

日蓮聖人は「今本時」の中に、久遠<sup>（永遠の今）</sup>の今を思念した。「末法為正」の中に時を超える理念を樹立された。そして大事なことは、「今本時」も「末法為正」も、すべて忍難慈勝、逆説法華の殉教如来使の誓願が祈りこめられていることである。本年、昭和五十六年は日蓮聖人七百遠忌正当である。末法の時を生き抜かれた日蓮聖人の生命<sup>いのち</sup>は、七百年の時間を超えて、今ここに生きている。これは確しかな「今本時」なのである。

日蓮聖人七百遠忌正当会ニ此ノ一篇ヲ草シ以テ報恩ニ擬シ奉ル（昭和56・10・13）



# 最蓮房あて御書の問題点

—立正観抄と四重興廃・真如随縁論—

中 條 暁 秀

## (一) はじめに

故立正大学教授浅井要麟先生の祖書学の特色は遺文の真偽論にあるが、その一つに「祖書の思想的研究」(『日蓮聖人教学の研究』<sup>①</sup>所収)がある。それは、中古天台は円密禪合談の雜亂教学で、台密教義を権實雜亂として極力付けられた宗祖が、このような思想を取り入れられるはずはなく、宗祖の思想の本質は、中古天台の思想と異質でなければならぬという前提にたつて、中古天台教学に与同的な遺文は凡て偽撰として排除しようとする試みである。この試論は、夾雜物を除去して純粹日蓮義を樹立しようとする貴い作業であつたと思うが、思想内容に検討を加えることによって、真偽を判定しようとする方法は、余りにも冒險すぎるのではないかと案じられる。<sup>②</sup>『立正観抄』を一つの例としていえば、浅井要麟先生は、止観勝法華の説は、宗祖より三十一才後輩の仙波の尊海がたてたものであるから、宗祖の時代にはなかつた思想であるとして、これを以て『立正観抄』偽書説の有力な根拠とされている。これらの点を踏まえつつ拙稿は、最蓮房あての御書十二篇中、身延山久遠寺に蔵され、身延三世日進の写本が現存する『立正観抄』について、殊にその中に説示される四重興廃(止観勝法華劣)と真如随縁論とに焦点を絞つて、吟味しようとするのである。

最蓮房あて御書の問題点(中條)

最蓮房あて御書の問題点（中條）

なお既に、

(a) 最蓮房の伝について。

(b) 最蓮房あて御書十二篇の選定について。

(c) 身延日進と中山日祐との極めて親密な関係を考える時、日祐の目録・記録・著述類中に『立正観抄』のことが片鱗だにないということは理解に苦しむということについて。

(d) 宗祖の教学の一つの特色に、充分に吟味された文献を利用して、自説の援証とする文証主義があるとの点から、『立正観抄』の引用経論釈の出典等について検討を加えると、曖昧さの残る六・七箇所が指摘されるなどの点について。

の考察を本誌五三号<sup>(3)</sup>において試みてあるので参照されたい。

(二) 最蓮房あて御書と中古天台文献

——中古天台文献について——

現存する中古天台文献の相当数は、最澄・源信撰とされ、その他の場合においてもほとんどが、過去の優れた学匠の名に仮託されている。したがって、その文献の成立年代考証は、至難の業である。いうまでもなくこれら中古天台文献は、平安末までは口伝乃至切紙を以て伝承されていたが、徐徐に成文化が平安末から鎌倉にかけて試みられ、文献の大部分は鎌倉中期以後の成立と見られる。<sup>(4)</sup>そして、確実に宗祖以前に成立していたものは、『顕密一如本仏義』・『本理大綱集』・『授決円多羅義集唐決』程度にすぎないと、浅井円道先生は指摘されている。<sup>(5)</sup>しかし、成文化に

至るまでは、かなりの時間を要したものであろうから、成文化以前の思想内容としては、日蓮以前に存在していたものが、相当数あったと見て差し支えなからう。

——最蓮房あて御書と中古天台文献——

最蓮房あて御書と中古天台文献との係わりについて、その幾つかを見てみると、

(1) 最蓮房が宗祖から賜わった遺文には、例えば『生死一大事血脈抄』の血脈、『草木成仏口決』の口決、『当体蓮華抄』の当体蓮華、『十八円満抄』の十八円満など、その題名を見ただけでも中古天台色が濃厚であることを知るのである。そして、自説の援証として引用される文献を見ても、『立正観抄』についていえば、『慈覚大師釈』・『灌頂玄旨血脈』・『天台大師自筆血脈』・『伝教大師血脈』など切紙相承的な口伝法門が、引用されていることを知るのである。

(2) 最蓮房が入信後最初に賜わった遺文が、文永九年二月十一日付の『生死一大事血脈抄』である。その冒頭近くに、  
伝教大師云、生死二法一心妙用 有無二道本覚真徳文<sup>(10)</sup>

という中古天台文献からの引用がある。これは伝最澄の『天台法華宗牛頭法門要纂』の第五の「三惑頓断」の冒頭の一節、同じく伝最澄の『五部血脈』の「生死覚用鈔」(「本無生死論」)の長行に相当する<sup>(12)</sup>。

なお田村芳朗先生の「天台本覚思想の文献と特色」(『天台本覚論』所収)中の文献成立年代区分によると、『牛頭決』及び『五部血脈』は「第二次形態(平安末期・一一五〇〜鎌倉初期・一二〇〇)」で、宗祖以前の成立におかれているのである<sup>(14)</sup>。

因に、『生死一大事血脈抄』は録外御書巻十三に収録され、真蹟はない。また、真偽を疑う人もあるから、これを

最蓮房あて御書の問題点（中條）

以て『牛頭決』・『五部血脈』の成立が、宗祖以前のものである証拠とする訳にはいかない。

(3) 日蓮教学では総じて『修禪寺決』からの引用は、日蓮遺文にはないと踏んでいる。<sup>(15)</sup>つまり『修禪寺決』は宗祖以降の成立との理解である。前掲の田村先生の成立年代区分が、本書を「第四次形態（鎌倉中期・一二五〇～鎌倉末期・一三〇〇）」とされているのも首肯できる。そして、最蓮房あて御書十二篇中、『修禪寺決』と係わりのあるものは、『当体蓮華抄』と『十八円満抄』の二書である。すなわち、『当体蓮華抄』は、

伝教大師修禪寺相伝、日記とて四帖あるなり。<sup>(17)</sup>

と記し、『十八円満抄』となると、『修禪寺決』の「蓮の五重玄」の釈名のところで述べられる十八円満の法門が、そっくりそのまま引き写されている。<sup>(18)</sup>したがって、定遺がこの二書を偽書扱いされているのも納得できる。

などが大雑把にいつて挙げられよう。

(三) 立正観抄の問題点

——四重興廃——

△四重興廃について▽

四重興廃とは、釈尊の一代の教えを爾前・迹門・本門・観心の四つに分けて、その勝劣興廃を論じ、教相から離脱した観心（止観）の超勝を説く点にあり、その原型は天台智顗の『法華玄義』<sup>(19)</sup>（卷二上）に見られる。但し、『玄義』にいうものは四重を包含する興廃であって、天台本覚思想という観心勝を究極とする段階的な四重興廃とは違うものである。以下問題とするのは、観心（止観）の超勝を落着とする段階的な四重興廃、そして、これをより進展させた

止観勝法華及び禪勝止観である。

四重興廃の成立期についての従前の研究は、例えば石田瑞磨先生は「口伝法門における四重興廃の成立」（『印度学仏教学研究』十五—二所収）中に、四重興廃は少なくとも鎌倉初期、十二世紀の終わりに成立していた公算が大である、との見解を示されている。その一方、田村先生は「天台本覚思想の文献」（『鎌倉新仏教思想の研究』所収）中に、四重興廃乃至止観勝法華の成立は、鎌倉中期・一二五〇年以降の静明あたりにもってくるのが妥当ではないかと力説されている。

#### △日蓮遺文と四重興廃▽

日蓮遺文中に四重興廃が見られるのは、真偽未決の論のある『十法界事』<sup>(24)</sup>と『立正観抄』のみで、真蹟の現存・曾存のものにはない。すなわち、『十法界事』には、

迹門、大教起爾前、大教亡。本門、大教起迹門爾前亡。観心、大教起本迹爾前共亡。<sup>(25)</sup>

と、典型的な四重興廃が示され、『立正観抄』（定遺八四六）にもほぼ同様の記述がある。しかし、『立正観抄』は四重興廃にふれつつ、

当世天台宗、学者念仏・真言・禅宗等同意故。天台教、教習失。背三法華經、得三大謗法罪也。若止観、勝三法華經、云々、過有之。<sup>(26)</sup>

と、

天台至極、法門法華本迹未分、処無念、止観立最秘の大法とすと云邪義。大僻見也云事。……（中略）……  
・若止観不レ、依三法華經、者天台止観同、教外別伝、達磨、天魔邪法。<sup>(27)</sup>

最蓮房あて御書の問題点（中條）

最蓮房あて御書の問題点（中條）

と、止観勝法華劣の評破に力が注がれているのである。これに対し『十法界事』は、

此是如来所説聖教 從淺至深次第轉迷也<sup>(28)</sup>

と、肯定の姿である。そして、立正観抄』では、当時の叡山が祖師達磨禪の影響を受け、四重興廃から止観勝法華・禪勝止観にまで進展した旨を、

当世学者不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>此意<sup>30</sup>、故<sup>31</sup> 天台已証妙法習失止観勝<sup>32</sup>法華經<sup>33</sup>・禪宗勝<sup>34</sup>止観<sup>35</sup>・思捨<sup>36</sup>法華經<sup>37</sup>・付<sup>38</sup>止観<sup>39</sup>・捨<sup>40</sup>止観<sup>41</sup>・付<sup>42</sup>禪宗<sup>43</sup>也。

と、論難されていることを知るのである。

△日進と四重興廃

祖師日蓮の三十三回忌には既に身延の貫首たる地位にあり、出来るだけ祖師に忠実でありたいと心掛けて、日蓮門下の指導的立場にあったであろう日進は、『立正観抄』を二度に亘って書写した<sup>(34)</sup>。かかる事実から推し量ると、日進は四重興廃・禪勝止観などという天台・伝教の意に反する無教偏観主義についての知識は、かなり豊富ではなかったかと察せられるのである。

日進は貞和二年（一三四六）十二月、七十六才で寂したが、その著に『玄義見聞集』<sup>(35)</sup>・『三国仏法弘通次第』<sup>(36)</sup>・『日蓮聖人御弘通次第』<sup>(37)</sup>・『本迹事』<sup>(38)</sup>・『破浄土義論法華正義』<sup>(39)</sup>等がある。その教学はこれらの著の外、日進の門に学んだ日全の『法華問答正義抄』<sup>(40)</sup>によって窺うことができる。今、ここでは四重興廃・止観勝法華についての記述のある『本迹事』及び日全の『正義抄』について考察する。

(1) 慶長十九年（一六一四）極月八日、身延十一世寂照日乾が身延西谷善学院において筆写され、「進師之御記歟」

との奥書を残す『本迹事』を見ると、その末尾近くに、

問云、観心本尊抄云、南岳天台等出現、以三迹門、為レ面、以三本門、為レ裏、百界千如一念三千盡其義、云云。付レ之南岳天台、行既以三本門、為レ面、可レ云也。四重興廃時本迹、上立三観心、可レ云也。是則大師実義也。以三本迹、為レ裏、以三観心、為レ面、可レ云也云何。<sup>(42)</sup>

と、四重興廃を以て南岳・天台の所立となして、本迹の教相以上に観心をたつのが大師の実義であると、四重興廃に与同的な立場に立つ旨の記述がある。<sup>(43)</sup>

(2) 武州一の江妙覚寺の祖日全<sup>(44)</sup>（一二九四～一三四四）は、日進について宗学を学び、台学を叡山・仙波に学んだ。

その著に『法華問答正義抄』（全二十二卷）がある。かの日向の『金網集』が諸宗の見聞を雜記するのに対し、本書は一卷から十二卷までは、法華經の要文を釈して法華正義の顯揚を目的とし、十三卷から二十一卷までは法華教学の立場から諸宗の見聞について記し、最後の二十二卷は法華天台止観勝劣及び当家の観心の行相を論じたもので、いわば今日という宗学概説の書に相当する。ここでは第二十二卷中の「法華与天台止観勝劣事」を問題とする。<sup>(46)</sup>

『正義抄』によると、止観勝劣法華の説は、政海・一海及び尊海一門の唱導になるものであったらしい。その辺の経緯を日全は次のごとく記している。

然予住山之時、对三西谷禅笑、委細尋此事、禅笑委細示云、此事古千手堂、堅義時無助寺、政海精之。止観大師己心中所行、法門者、故不依三經論一覺タリ。<sup>(46)</sup>

と、止観勝劣法華の説は、政海によって唱え出された。しかし、扶全なるものによって、

不審也。抑止観法華勝タリト被レ精之条、天台及山家大師等、釈義未レ見、随漢土天台門流中更無此義。況本朝、先

最蓮房あて御書の問題点（中條）

最蓮房あて御書の問題点（中條）

徳等代々相伝無<sup>ニ</sup>此義<sup>（47）</sup>。誰人<sup>（47）</sup>相伝乎。

と、詰問されている。これに対し政海は、

千手堂法談事取<sup>ニ</sup>時所<sup>ニ</sup>浮精義也。非<sup>ニ</sup>師資相承<sup>（48）</sup>。

と、釈明したが、扶全によって再び、

自<sup>レ</sup>今已後、如<sup>レ</sup>此謗法邪義於<sup>ニ</sup>山上学侶<sup>（49）</sup>者、努々不<sup>レ</sup>可有<sup>レ</sup>之云云。

と、封じ込められ、政海もこれに合点の旨の返状を寄せたという。その後、

東国尊海、随分泌法師資相承云事近來少。其聞有<sup>（50）</sup>、此条一海為知<sup>（50）</sup>ラン。仍尋<sup>（50）</sup>ニ一海<sup>（50）</sup>時。

と、仙波の尊海が止観勝法華の説を名目としたので、或人がこのことを政海の一門の一海に尋ねたところ、一海は、

先師政海抄粗見<sup>ニ</sup>子細有<sup>（51）</sup>ニ云へ共、治定不<sup>レ</sup>見。故無<sup>（51）</sup>示<sup>（51）</sup>他云云。

と、答えたという。

この経緯を見ても日全の当時、比叡山上でも止観勝法華の説が指弾されていた事実を知るとともに、日全はかかる説を「私曲浮言也」<sup>（52）</sup>「天魔説也」<sup>（53）</sup>と斥けていることを知るのである。そして、『立正観抄』は、最蓮房が止観勝法華という義について、これを報じ、批判を請うたのに対する返書である。とすると、最蓮房は政海から聞いたものであろうか。この政海という人物、恐らく土御門門跡流の政海<sup>（54）</sup>と思われるのであるが、残念ながらその伝は詳らかではない。もし政海の伝が明らかになれば、おのずから止観勝法華の説の成立時期も浮き彫りされようというものである。

なお両書とも、日進が知悉していたであろう禪勝止観についての記述はない。



△日蓮遺文と真如隨緣論▽

『立正觀抄』には、

伝教大師、血脈云、夫一言妙法者、閉二兩眼、見三五塵、境二時者、應三隨緣真如。閉二兩眼、住三無念、時者、當三不變真如。故聞三此一言、二万法、效達。一代、修多羅含三一言一文。<sup>(65)</sup>

と、さらに、

夫尋三天台觀法、者於三三昧開發、已來開三目、思三妙法、隨緣真如也。閉三目、思三妙法、不變真如也。此兩種、真如、如一言妙法有。我唱三妙法、時万法效達。一代、修多羅含三一言。<sup>(56)</sup>

と、真如隨緣論が述べられている。<sup>(57)</sup> 遺文を通していえることであるが、遺文中より真如乃至真如隨緣論に言及されたものを拾うと、今いう『立正觀抄』・『守護國家論』<sup>(58)</sup>・『當體義抄』<sup>(59)</sup>・『日女御前御返事』<sup>(60)</sup>、及び偽撰書（『成仏法華肝心口伝身造抄』<sup>(61)</sup>・『誦誦法華用心抄』<sup>(62)</sup>・『万法一如抄』<sup>(63)</sup>）等である。『守護國家論』の場合は、妙案の『弘決』<sup>(64)</sup>の第四の三の言を引いたものであるから、宗祖の言葉ではない。『當體義抄』・『立正觀抄』・『日女御前御返事』については、古来から真偽未決との論もあるから、したがって、確実な遺文には、真如に関する論は存在しないことになる。宗祖は最澄を根本大師と仰ぎ多大の法門を吸収されたことは、今更いうまでもない。その宗祖に最澄が尊重活用した真如隨緣論が見られぬということは、真に不思議であるといわざるを得ない。<sup>(65)</sup> 思うに、宗祖にとって、法華經の根本真理は一念三千であったから、かかる論は所詮別教に属する教理であって、天台法華宗の元來からの教学ではないと判断された結果、発表を差し控えられたものであろうか。<sup>(66)</sup>

最蓮房あて御書の問題点（中條）

△金綱集と真如隨緣論▽

古来から身延門流の秘書として重要視された『金綱集』に、真如隨緣論を見ることができる。周知のように、『金綱集』は日向が宗祖の講義を聴講し、また、自ら見聞するところにしたがって、諸宗破立の大綱を記し、広く經・論・釈・疏の金言を援引して、華嚴見聞・真言見聞等と名づけ、総括して『金綱集』と題されたものである。<sup>(67)</sup>この『金綱集』十四卷ある中、身延山に蔵され、四世日善の筆になる「理具之事」の中に△隨緣真如不變真如事▽<sup>(68)</sup>という一項がたてられている。紙巾が許されないの引文は掲げぬが、かなりの紙面を割いて、真如隨緣・不變についての問答往復がなされていることを知るのである。となると、『金綱集』には存、遺文には不存の真如隨緣論のあり方が問題となろうが、所詮は「理具之事」中の論であって、日蓮教学の正系のものではなく、傍系に位置するものであろう。しかし、『金綱集』にかかる論が存在することによって、当然のことながら宗祖は、真如隨緣論を知悉していたことは間違いない。

△日朝と真如隨緣論▽

身延山中興と仰がれる十一世行学日朝の臨終の法談に、真如隨緣論がフルに活用されていることを知るのである。すなわち、日朝の弟子の日記が、

此等法門予命今日ニヤ限ラン最後ノ觀法也トテ被仰訖云云。<sup>(70)</sup>

と、注記する『日朝上人御辭世之句』中に、法談の全文が掲げられている。その法談中に、例えば、

「玄旨血脈」云開二兩眼一見三五塵境時者心三隨緣真如一閉三三根二住三無念ニ時者当三不變真如云云。<sup>(71)</sup>（以下略）

と、記されてある。これは『立正觀抄』と同一の引文である。かかる事実から察するに、日朝は宗祖が意識的に用い

ることを避け、言明する時は細心の注意を払ったであろう真如随縁論を、公然と使用していたことを知るのである。

#### (四) むすび

以上極めて荒い論となつてしまつたが、ぐくくりとして拙論の要点を述べるならば、

(a) 確実な遺文には、四重興廃・止観勝法華の説は見られない。

(b) 日進の門下生であつた日全の『正義抄』によると、止観勝法華の説は、政海がはじめて唱えだしたという。これにしたがうと、宗祖及び静明と尊海との間に恐らく位置するであろう政海という人物が、『立正観抄』を云々する時、大きな係わりをもつてくるようである。

(c) 『金綱集』は存、遺文は不存の真如随縁論であるが、所詮は「理具之事」中のものであつて正系の教学ではなく、傍系に位置するものであらう。

(d) 日朝の頃になると、傍系に属する真如随縁論が公然と活用されていることが確認されるのである。の四点を挙げることができよう。

(1) 一八二～三三五

(2) 浅井円道氏「宗祖と慈覚・智証——要麟先生への疑義」(一九二『大崎学報』一二二)を参照されたい。

(3) 九一～一〇七、及び拙稿(二二～二二五『印度学仏教学研究』二九一)参照

(4) 田村芳朗氏『鎌倉新仏教思想の研究』(四〇三～四七四)、日本思想大系九『天台本覚論』(五二一～五四二)を参照されたい。

最蓮房あて御書の問題点(中條)

最遊房あて御書の問題点（中條）

- (5) 浅井円道氏「宗祖における観念論打破の思想」（一四四『日蓮教学の諸問題』）参照
- (6) 定遺八四七
- (7) 〳八四九
- (8) 〳八四九、但し『灌頂玄旨血脉』と同じものである。
- (9) 〳八四九
- (10) 〳五二二
- (11) 伝全五一五九
- (12) 〳五一三六〇。「生死覚用鈔」は円仁の作と伝える独立した一本もあるという。なおかかる件については、田村芳朗氏「鎌倉新仏教と日蓮思想」（二六六の注（14）『日蓮聖人研究』）を参照されたい。また、『大白牛車書』（定遺一四一二）中においても同一の引文が見られる。
- (13) 五四〇～五四一を参照されたい。
- (14) 浅井円道氏「日蓮聖人の日本天台史観について」（二五九『日蓮聖人研究』）によると、宗祖はこれらの書を読了されていない。
- (15) 前掲『天台本覚論』（五六二）参照
- (16) 注（13）参照
- (17) 定遺二二三七
- (18) 定遺二二三八～二二四〇までのところが、伝全五一三〇～一三四の部分と全同である。なお『臨終一心三観』（定遺二二〇五～二二〇六）には、『修禪寺決』の一心三観の行門の口伝のところで述べられる臨終の一心三観が、そっくりそのまま引用されている。
- (19) 大正藏經三三・六九七（中）
- (20) 前掲『天台本覚論』（五三六）は「四重相互興廢」と形容されている。
- (21) 三〇一
- (22) 四二八
- (23) 俊範の弟子の静明である。叡山で宗祖と同学の士といわれている。

(24) 浅井要麟氏前掲著（二五五～二五七）を参照されたい。

(25) 定遺一四〇

(26) 〃 八四六

(27) 〃 八四九

(28) 『立正観抄送状』には「止観勝法華申邪義」（定遺八七一～八七二）とある。

(29) 定遺一四〇

(30) 〃 八五一

(31) 宗祖が折伏を加えたのは祖師禪である。日本思想大系九『日蓮』（五三七～五四四）を参照されたい。なお『立正観抄』には「天魔之語」（定遺八五一）とか「天魔所為」（定遺八五一）とある。

(32) 定遺は『立正観抄』を日蓮赦免の文永十一年に係け、身延の筆であるという。最蓮房あて御書全般についていえることであるが、最蓮房は比叡山の学僧であつたため、当時の天台教学について様々な質問を発し、それに対して宗祖は相手の理解を得やすい様な文辭を以て回答を与えたため、最蓮房あての御書はそのタイトルを見ただけでも中古天台色が濃いことは周知の通りである。宗祖より先に何らかの原因で佐渡配流となつていた最蓮房の赦免は、『日蓮宗年表』（一四）によると、宗祖赦免の翌文永十二年（四月改元・建治）である。『立正観抄』は止観勝法華劣という義について、これを報じ、批判を請うたのに対する返書である。とすると、その教示を仰いだ書簡の作成の地は佐渡ということになる。果して一介の流僧の最蓮房が、当時の叡山教学に持て囃されたという四重興廃乃至止観勝法華・禪勝止観という義について、知悉していたものであろうか。四重興廃はともかくとして、止観勝法華・禪勝止観までは如何であらうか。それとも、既に教界にはかかる思想が風靡していたものであろうか。加えて、宗祖と同学の静明は、既に四重興廃を唱えていたという説もある。もし宗祖がそれを学んだとすれば、『十法界事』に四重興廃があつても可笑しくはない。中には『祖書綱要刪略』（一九三『日蓮宗全書』）のように、系年を佐後に係けるべきとの説もあるが、『十法界事』は四重興廃を破しておらず、仮にこれを真撰とするならば、宗祖初期の天台と同時代のものであると見ることもできる。しかし、四重興廃を最蓮房經由の知識であるとする、『十法界事』は如何様に扱われるべきであらうか。

(33) 日進は正和二年（一一三三）に身延入山（『日蓮宗年表』二七）、そして、翌三年は祖師日蓮の三十三回忌に相当する。な

お中山三世日祐は、宗祖三十三回忌を期して、身延参詣を志している。

最蓮房あて御書の問題点（中條）

最遊房あて御書の問題点（中條）

(34) 定遺八五一の脚注参照

(35) 『日蓮宗事典』（一二一五）

(36) 身延山久遠寺藏

(37) 『三國仏法盛衰事』（宗全一一三二三～三三三〇）・『支那仏法弘通次第之事』（宗全一一三三〇～三三五）・『日本仏法弘通次第之事』（宗全一一三三五～三三九）の三篇を合せていう。

(38) 宗全一一三三九～三四〇

(39) 立正大学図書館蔵

(40) 宗全一一三四一～三三三

(41) 立正大学図書館蔵（写本）。なお宮崎英修氏『不受不施派の源流と展開』（八一）の注（29）を参照されたい。

(42) 一三紙左

(43) 浅井要麟氏前掲著（二四一～二六七）を参照されたい。

(44) 宮崎英修氏前掲著（四一～四二）中に日全の略歴が述べられている。

(45) 林宣正氏「止観勝法華思想と仙波教学」（二四二～二四四『清水竜山先生古稀記念論文集』）と、注（43）を参照されたい。

(46) 一紙左

(47) 二紙右

(48) 〃

(49) 二紙左

(50) 〃

(51) 〃

(52) 七紙左

(53) 八紙右

(54) 前掲『天台本覚論』（五九四）の「相承略系譜」参照

(55) 定遺八四九

(56) 〃 八五〇～八五一

(57) 定遺八四九にいう真如隨緣論は、いわば最澄の口を借りての真如隨緣論であるが、定遺八五〇～八五一にいうものは、明らかに宗祖の考への表明である。

(58) 定遺一二四

(59) 七五七。なお拙稿「最蓮房あての御書の検討―当体義抄について―」（『布教資料十一集』五四～五九・静岡県連合布教師会編）を参照されたい。

(60) 一三七六

(61) 二一〇六

(62) 二二七九

(63) 二一八七・二一八八・二一九〇

(64) 大正藏經四六―二六八（上）

(65) 最澄は真如隨緣論を駆使して法相教学に対抗し、天台教学の正当性を論証した。なお真如観尊重の気風は、論争書ばかりではなく、例えば『註無量義經』などの論争書外のものにも認められる。

(66) 浅井円道氏『上古日本天台本門思想史』（一七二～一七九）を参照されたい。

(67) 宗全二三―例言（一）参照

(68) 一四―五九四

(69) 日朝はこの年（明応二年四月二十八日）から七年延命している。

(70) 本尊論資料（二三九）

(71) 一三八

なお『昭和定本日蓮聖人遺文』は定遺、『日蓮宗々学全書』は宗全、『大正新脩大藏經』は大正藏經、『伝教大師全集』は伝全、とそれぞれ略称した。

【資料】

身延山歴代略譜（第三回）

北 沢 光 昭

三十二世智寂院日省上人 字老辨」

師範八十如院日行字心蓮下谷善立寺二世ト」

飯高入学十三才 玄講廿一世ナリ山科水戸両文講飯

高廿世ノ化主 京妙」傳寺廿世水戸無二亦寺開基

身延東谷智寂坊造立シテ閑居  
宝永元年申年退院ノ上十八年ニノ入寂ト」

元禄十一 戊寅年十一月請待十二月十三日 水戸ヨリ直ニ七  
ケ年」 入山 在位

ケ年」

稚童寛九 了親院日解法師 元禄十三庚辰九月十三日千頭和六左衛門ノ  
受教院日行法師 元禄十四辛巳五月三日十二才」

子息ナリ十二才」

全 清九 教其院日受法師 宝永元年申十月二日十二才」  
門達院日受法師 宝永元年申六月廿七日十七才」

石門稻荷社并拜殿建立 元禄十三庚辰十二月朔日

日省判形」

真符堂前 銅水鉢角 阿伽器造之 元禄年中 日省代」

石門稻荷并別當所六間 再建翁願主寺神院日述 日省判形」  
元禄十四辛巳年

身延山歴代略譜（北沢）

（28才）

高座石発願ス 日省師代便ニ諸人協依揚仰ノ開基ハ」  
学神院日述 妙石庵ヲ造立ス」

影現七面天社三間 四方幣殿外一間半二間半三間半  
外棟三尺五寸 外棟三尺五寸 外棟三尺五寸 外棟三尺五寸  
元禄十四辛巳十一月廿九日吉辰」

発起主 學神院日達 本國院日義 元禄十四辛巳十一月廿九日吉辰」  
玄理院日儀 三十二世 日省判形

奥ノ院別當再建立 元禄十六癸未年ナリ 日省代」

全籠リ屋 本ト別當寮ナリ 元禄十六癸未引之修復ス」

元禄十四 辛巳 五月十九日紫衣参内賜ニ綸旨」

燈主堂三間半 新建立 棟札日省判形」

宝永元年十一月廿五日玄理院日儀ト」

燈主堂并萬燈室ノ兩額ハ 寛永房十七世玄理院日儀ノ筆ナリ」  
省師御代

宝永元年 甲申年退院智寂坊ヲ造立ノ閑居十八ケ年」

石門稻荷之宮殿再興 正徳元年辛卯五月成就 全三壬辰年又再興ス」  
其年八月大風ニ皆破損

実退房日修 日省判形」

享保六 辛丑年正月十三日未明八十五才入寂」

省公辞世 カリニキテ今立婦ル本覚ノ

モトノスミカハ真如ナリケリ」

〔註〕

（1） 後ニ（身延入山後に開基となる意、私云）

（2） 明治八年焼失 像ハ智寂房ニアリ〔頭註〕

（3） 別當「寮」か。（私云）



身延山歷代略譜(北沢)

(4) 文政七年焼失

三十三世遠沾院日亨上人

通師ノ弟子  
初遊理院ト云フ  
字領海

越中富山ノ座ト

母 清運院神慶日喜 慶安三庚寅年六月廿九日  
父 顯珠院慶門日理 元禄八乙亥年八月七日

山科 飯高廿五兩檀文講 京妙傳寺 立本寺廿五

京満願寺開山 周防國岩國法要寺開基云云(清泰院ト)

後ニ江戸谷中領玄寺へ隠居ノ化(尤モ)

宝永元年 申 九月請待十一月九日京岡崎ヨリ入山在位

十年

兒童 榮好丸 源天院日覺字士 正徳二壬辰二月十一日飯高所化廿三才死

七面別当

正徳三癸巳九月廿一日五十五才  
卒師ノ門人 西之房七世

修善院日得

奥ノ院別当 宝永四丁亥年正月 日化 理運院日忍

唐本一切経藏本藏二百一十函又タ統藏三十八函目錄合ノ三百四

十函

日辛代新ニ奉ニ請之寶永元申十一月九日入院ノ時免願スラク当山ニ雖  
有ト「藏經ニ在ノ山ニ故ニ不便ニ急用ニ又倭藏ニシテ有ニ欠本欲ニ求ニ店  
本安置セント」本院 宝永三丙戌五月当山本堂衣ノ許合 御礼ノ上京参内  
之御礼ニ於テ神テノ小路唐本書林有ニ新藏好本 欲願之也ト○此藏經  
ハ三(文政十二)己丑九月六日戌ノ刻火災ノ節灰燼タル日環上人ノ代ナ  
リ○依之江戸谷中領玄寺ニ有ニ字師 御所持ノ藏經三百四十九函所  
之当山(安置ス彼ノ住職良雅日感代ナリ)当山旧本ヨリ又統藏ノ分九函多  
之(4)

(29オ)

宝永三 丙戌 年四月五日久遠寺永紫衣賜繪旨参内

堂ノ前蓮葉金ノ水鉢

宝永三丙戌八月 卒師ノ銘  
施主 院部坊ノ二代寶樹院日亨ト

供厨二間半建立

往古ハ二天門ノ脇ニ有之中古ハ西谷道ノ辺リニ引移シ  
俗ニ云ニ御供所 從古ニ有之ニ遠隔又損ス故ニ 卒  
師代堂前ニ移シ之改ニ造之ニ師ノ御供料ニシテ寄附田地ニ又新ニ建立 供  
厨一 施主ハ和泉村大木四良兵衛同佐太夫也宝永三丙戌十月十三日 三十  
三世日亨判形

高座石ノ祖師堂三間半庵三間半

号ニ妙石庵ト

宝永三 丙戌 年十月十三日江戸新建立 日亨判形

羅刹堂檜皮葺更

宝永二乙酉年正月廿二日 日亨判形  
施主 浅原村五味半弥

大地震

宝永四丁亥年十月四日未ノ刻全五日辰ノ刻諸國大地震ナリ 高  
浪樹死等數多当山内諸堂大破損死セ十八人ナリ 依テ普請始ル

藏經堂四間四方

新建立ハ 宝永四丁亥ノ冬東ノ岸ニ建立ス  
ト十月四日未ノ刻全五日辰ノ刻諸國大地震ナリ 高  
浪樹死等數多当山内諸堂大破損死セ十八人ナリ 依テ普請始ル

御靈骨ノ宝藏

右十月四日未ノ刻全五日辰ノ刻諸國大地震ナリ 高  
浪樹死等數多当山内諸堂大破損死セ十八人ナリ 依テ普請始ル

右芳心院者養珠院ノ孫女也

元ト宝藏ハ養珠院ノ建  
立故ニ亭師述ニ其ノ由緒ノ勸レト云フ

靈寶藏

宝永四年震災ニ又損スル故南ノ方(ハ少引山シテ宝藏形)居損ニ  
又々普ノ引ニ應テ下ヲ撤散ト宝永七庚寅年十月十二日上機ノ機  
有ニ宝藏ノ額ハ亭師ノ筆ナリ

東ノ土蔵 右震災故損ス南ノ方へ引徙之再興ス

古仏堂 右震災ニ付損スル故ニ修三間之  
施主ハ江戸神田山田吉平山田太良兵衛

石壇 延師通前代ニ造之石十月四日ノ震災ニ大破損スル故ニ  
辛師悉ク補復之

奥位牌堂 三間新建立 宝永五戊子年

祖師宮殿新造立 宝永五戊子年於ニ京都作レ之金子五百兩 余ニテ成  
就之

施主願分ハ宮殿ノ内ニ立三其ノ牌 作者大仏師山田式部ナリ 檀度鉢ハ  
有土蔵三十三世日字判形

松ノ木ノ祖師堂 二間 正徳二壬辰年 全所息寮 宝永五戊子建立  
四月建立之

十萬部ノ祖師堂 宝永六己丑年 陽山建之 棟札日亭判形

七面山ノ本宮 日字代別當修善院日得道俗ヲ勸化シテ 金柱惣檼漆色  
金製附檢天井金物雨覆雨戸玉垣池之廻門木部之天井惣  
門等成ハ建立成ハ修飾之為防ニ雨湿ニ悉ク以油丹ニ塗之

本地塔 四方外棟付 新ニ建立之 寶永七庚寅年 為レ令ニ諸人ニ蓮祖ノ本地  
ナルコトヲ

ハ上行「ササ」 建立之 他家ニモ 塔ハ武江ノ住人植  
有此例

木助三郎喜捨金三百兩 一 没後ニ立之銅瓦ハ助三  
郎ノ養子助五郎

上行菩薩ノ像 本阿弥空中弁光前法眼存日ニ奉造立之  
没後ニ飯沢閑居日現納ニ当山

開關會ノ始メ 祖師堂ハ廊下 寶永七庚寅年六月十六日ナリ  
出仕ノ 報恩金ノ時作レ之常ニハタムミツク

文永十一年 甲戌 六月十七日當山建立ノ日ナル故ニ  
興起ノ御書當山ニ有之最モ可レ當報恩ノ日也又

身延山歴代略譜 (北沢)

タ諸國及國中參詣容易之時節ナル故ニ亭師」暨  
之 法事ノ僧法衣五十通り同年ニ様ニ裁シテ施入ノ諸人別記ニ 有  
之 當前起立ノ際三十流并ニ體頭等舞ハ并踊下ノ 櫻井水引ナリ於ニ京  
都新ニ織ル之ヲ十種供養之具并ニ新供之具 及香爐造花兒童ノ天冠寶主  
ノ天蓋等悉ク於ニ洛陽ニ新ニ造ル

報恩修造攝大法會本願并惣施主大帳ニ 別ニ日亭判形  
有之

宝永七 庚寅歲 七願寺宣下

翌八正徳 辛卯 五月七日勅願賜三綸旨參内ス

御廟ノ番僧寮 妙福庵亭師自ラ志シ宝永八辛卯春開地ヲ  
為ニ鑿川水以石築之ニ一式新ニ建立ス

兒舞臺三間四方 往古舞臺歷ニ年朽損シ見分不立 六本ノ柱ヲ  
四本トス 辛師代

正徳二 壬辰 年再建立 施主武江深川 冬木ヤ 田中源  
四郎

同樂屋并廊下 宝永四年ノ震災ニ類スル故ニ辛師代改造ス

大門二間半 往古ハ車馬ノ下ニ雖有損壞シ狹少ナル故ニ濱ノ之武井坊西  
東ノ谷ノ辺ニ開地ヲ新起ス正徳二壬辰六月 日亭判形 往古ハ在  
車馬ノ前ニ日食師代ニ今ノ坂口へ引レ之尚又今般下ケテ建ル歟 施主ハ武江  
住人近江ヤ妙雲長サキヤ八右衛門岡平四郎 伊勢ヤ治兵衛衛門掛中同女  
掛中

書院并學問所休息所 七間半 辛師代合三ヶ所ニ様ニ建立ス  
宝永七戊子年也 西ハ狩野春笑ノ筆  
三ヶ所不残同筆ナリ

小方丈 勝手不立故ニ辛師代開北方又々北方ノ床ヲ縮ム  
西ノ方へ移シ又地形ヲ整ルコト 尺余ニ悉ク改造之 日亭師代

料理所湯浴所金支配部屋廊下七ヶ所 悉ク再建之

身延山歴代略譜（北沢）

兒文殊ノ宮三尺六寸  
四尺六寸 正徳二壬辰年 亨師再建之

妙見大士ノ堂三間半  
三間半 日亨代改テ妙見宮トノ改造之上ノ山  
ニウツス

発軫額ノ三大字 水戸中納言綱條卿ノ筆 日亨代(17)

三門前常唱堂并頭寮香殿 結衆寮新建立」施主本願武

州住人三河屋吉左衛門 日亨判形」

宝永五戊子年夏也 本院經藏前ノ庭泉水等 堂前ノ橋」石灯籠并上

位牌堂前ノ花壇 書院東ノ方ノ小庭 寶永藏前ノ一藤棚 古仏堂辺ノ井并

ニ遷ノ盆池 日亨代作之作り松從ニ歸州ニ寄進諸木ハ從ニ地中多ク來ル

池ノ西ノ大石ハ上ノ山利堂ノ辺ヨリ引之 西ノ方ノ中門新造 花壇ノ門

藏ノ門等亦新ニ造之

庭ノ作者ハ京妙顯寺住僧本妙院 閑居ス甲州」

妙玄庵(18) 西谷藤林玄顯寮也 日亨判形」

寶永四亥年 甲府城主松平中堅守殿ニ身延山由緒」書上ノ中ニ云京都山科

鷹峯岡櫻林下鐵飯高櫻林ニ而字問其」ノ後山科護國寺飯高法輪寺ニケ所ノ

文能ヲ勸ノ又々京寺町妙伝」寺立本寺ニケ寺住職其後一切経持見其ノ後沿

東岡崎ニ渡願」寺ト申ス寺再興其寺ヨリ宝永元年申十一月九日ニ身延久

遠寺」ハ入山儀」 宝永中將軍洞吉公歸于殿中」普門品ノ御講聽聞有之

正徳三癸巳年五月退院江戸谷中領玄寺」九ヶ年閑居

享保六辛丑年十二月廿六日七十六才 領玄寺ニテ入寂火葬

〔註〕

(1) (この一行誤りとして消し、次の文を入れる。) 京

都市上京区笹屋町太田氏ノ産ト、西陣織工業ニ

当主ハ太田喜三郎ト云フト

(2) (日付を欠く、私云。)

「文政十二……日環上人ノ代ナリ」ハ朱字書き入

(3) 幸ニ明治八乙亥年一月十日ノ火災ニハ此ノ藏經ハ

残ル也

(4) 「日実」を「日宝」と訂正。

(5) 明治八年火災焼失

(6) 富士山ヤケ宝永山現レ近国へ砂ルハ此時敷

(7) 返り点「一」を欠く。

(8) 「險」ハ「險」の音亨。

(9) 「居」ハ「屋」の写し違い。

(10) 返り点「一」を欠く。

(11) 文政十二年火災焼失ス

(12) 文政七年火災焼失

(13) 「救」ハ「勅」の音亨。

(14) 文政十二年ノ火災ニ焼失ス

(15) 是モ震災故カ

(16) 「旦」ハ「檀」の音亨。

(17) 明治八年ノ火災ニ付引テ本院ノ仮客殿トス又々全

十五年十一月廿四日ノ出火ニ灰燼ス  
〔保〕 宝永二(年、私云)ナルベシ

三十四世見龍院日裕上人 亨師ノ弟子字龍海」

山科文講十九 京満願寺二祖 水戸玄講 飯高

文四十四 兩講」但シ正徳二壬辰年十一席 小湊山廿七世」

正徳三癸巳年六月五日小湊ヨリ直ニ入山在位二十

年」入山後出府建目御礼登城動シ之」

兒童 慶幸九 元始院日慈法師 享保五壬子十二月廿五日

慈徳院日盛聖人 安永五丙申四月十二日当山一老清木坊

院 勤幹徳律師 格致院日慎聖人

飯高村ノ産高登坊開再々シテ閑居ス 寛師代一老被申付寛保三癸亥閏四月十九日六十五才

奥ノ院別當 妙経院日誠」

八幡宮宝殿檜皮葺替 享保四己亥三月廿八日 日裕判形」

享保三戊戌年四月廿三日賜ニ綸旨一参内賜紫敕許親宣

上人ト云フ」

享保五庚子年五月廿一日人皇百十三代御真輪」

日蓮大菩薩号頂戴 坊城大納言殿添状有之」

〔朱字〕 堀川一進院日法上人ノ取次也」

〔堀川一進院日法へ大驗者也青柳昌福寺一十二州歴一脱師弟子

河内領根村正行等十五世中興該寺記ニアリ〔享保四己亥二月十三日六十六

一才化スト遺骨ノ納ル出〕 〔朱字〕 追分祖師堂再建 享保七壬寅年 施主江戶淺草六人 日裕判形」

身延山歴代略譜(北沢)

奥ノ院諸堂修營 裕師代」

祖師并御兩親六老僧之像衣更 裕師代 退座ノ法則有之」

高祖四百五十遠忌 享保十六辛亥十月一七ケ日間大法会 修行動之 裕師代」

享保十七壬子年五月一円庵へ退居六ヶ年」

元文二丁巳年正月八日七十五才一円庵ニテ入寂」

〔註〕

〔一〕 「五」を「三」と訂正。

〔二〕 「元禄六癸酉年五月六日脱師初テ参内之綸旨右中

辨トアリ」

爰ニ廿八年ノ後チ

〔學字〕

「享保五庚子年五月廿一附ケ裕師代ササ号之副翰

ニ都護前亞相藤花押トアリ」 別頭統紀ニ小川坊

城前亞相藤俊清卿トアリ 此兩書ハ坊城家全人ト

考フ(貼附)

〔三〕 イ(七十)七

三十五世誠峯院日竟上人 字實等」

父 顯性院宗哲日體 享保七壬寅二月十一日」

誂師ハ威音院日量聖人 享保五庚子二月廿一日」

山科文講 甲府信立寺廿世 京妙傳寺 飯高文六十八

身延山歷代略譜（北沢）

滝谷妙成寺」

享保十七壬子年八月二日能州滝谷山立江戶縣目録城濟十月八日入山在

位三ヶ年」

兒童 以一丸 順了院日眞法師 享保十九甲寅三月八日」

院代 千如院日近聖人

字山智 甲府遠光寺廿八 越后村田三十二 飯高八十七 文庫室五之亥十一月十八日

奥ノ院別当 長壽院日影」

永代六月不易千部發起 享保十八癸丑年二月」本願人并助

願之姓名大曼荼羅日竟判形但シ日竟日潮両代ニ」

成就潮師ノ大曼荼羅モ有之」

享保十九甲寅年正月廿一日五十八才入寂」

三十六世<sup>(1)</sup>六牙院日潮上人 字海音又ハ潮音元教上人ニハ日潮師ハ孫弟ニナリ

師範ハ草山恵明院日燈律師

元教上人ニハ日潮師ハ孫弟ニナリ 享保二丁酉九月十二日化

松ヶ崎文講 仙台孝勝寺 飯高文講五十二世」

元文元 丙辰 年 山台ヨリ 江戶登城濟九月廿五日六十三才ニテ入山

在位九年」

院代初ハ誠諦院日審聖人

元文五庚申十月十八日化

同 次ハ一中院日如聖人

字正門 西谷化五十世 端和妙恩寺歴代

奥ノ院別当 清閑坊」

密門ノ額開會関 潮師ノ筆元文三戊午四月廿八日 額裏ニ施主名列記ス

(32ウ)

(33ウ)

三門閣上身延山ノ三大字同筆」

七面山摩尼珠嶺 全筆現今ノ額ハ粉子吼筆ト有リ

上ノ山八幡宮ノ額 全筆」

西谷惣門二間尺同通路 寛保元辛酉年 潮師代」

全旃檀林ノ三大字右ハ日遠上人百回忌爲供養開之建ルト

兎軫堂再建立 潮師代文文四己未三月廿八日 檀札ハ寺文院日盛筆判形

宗祖御廟一式再建立 延享元甲子年正月」

寛保三癸亥年四月廿二日賜三綸旨「参内」

祖師堂ノ菊天井 延享元甲子年正月始レ之九月造畢」

施主ハ江戶京橋大津新兵衛 爲是資財賜額号ト 成正院日潮筆ト

延享元甲子年十一月廿四日一円庵へ閑居ス五ヶ年」

寛延元戊辰年九月廿日七十五才入寂」

<sup>(3)</sup> 延享元甲子年十一月廿四日一円庵へ閑居ス五ヶ年」

〔註〕

(1) 其先出レ自「百濟國」聖明王ノ玄孫琳聖太子ト云

京師ノ人青木氏父ノ名元澄ト云

(2) 元文四己未ハ元文四己未と思われる。(私云)

(3) 「享保」を「延享」と訂正。

(4) イ(異説の意、私云)ニ十二月六日退

(34才)

三十七世薩心院日寛上人 潮師ノ弟子字宣妙」

鎌倉本覺寺 池田本覺寺 小湊三十二 飯高七十五世」

延享元 甲子 年十二月同二 乙丑 年正月廿二日小森ヨリ入山在位六年」

院代 本義院日地聖人三十四才ノ時院代勤 当山四十九世ノ山主ナリ九十才ニテ化ス

奥ノ院別当 円仁房日言」

寛延三 庚午 年正月廿一日六十七才入寂」

三十八世廣演院日答上人 脱師ノ弟子字高通」

甲州休息山廿一世飯高文七十九世 文六十一世

寛延三 庚午 年六月休息ヨリ入山 在位六十日」

同年八月十五日七十三才入寂」

〔註〕

(1) イニ八十五化ト

三十九世貞明院日總上人 字三益ト改三貞明」

奥州白川開會山妙閑寺ヲ開基ス 京妙傳寺三十六

世」飯高文七十世 文五十四世 上州前橋永什寺」

寛延三 庚午 年請待全四 辛未 年四月廿九日前橋ヨリ」

身延山歴代略譜(北沢)

(35才)

入山 在位八十日」

奥ノ院別当 慧秀院」

寛延四 辛未 年閏六月廿九日八十三才入寂」

〔註〕

(1) 或ハ(八十)四(日)

四十世圓通院日輪上人 字泰学」

上總奥津妙覺寺三十七世 京東山文講 飯高八十

一世」

寛延四 辛未 年十一月十九日奥津ヨリ入山 在位四ケ

年」

院代 智照院」

奥ノ院別当 誠明院日宣聖人宝曆十二壬午二月十五日 崇之坊廿三世七十五才化

古仏堂ノ祖師江戸浄心寺ニ 於テ開帳宝曆二癸酉四月朔日ヨリ 六十日ノ間

御真骨宝藏并中央廊下拜殿共以三銅板一葺更之」

宝曆三癸酉年九月十七日成就 日輪形」

三門家根銅瓦ニ葺替宝曆三癸酉九月十九日始之間 四甲戌二月成就 日輪代

天神宮三尺八寸同雨覆二間半新建立ス宝曆四甲戌年 二月廿五日 重榮

梅天神ト云フ家根銅板ニテ葺之上サ奥津妙覺寺ヨ

身延山歴代略譜（北沢）

リウツス」

祖師堂檜皮葺更三十七世寛師御代企之  
四十世輪師御代成就

奥院孝老院座式新建立 輪師代」

② 圓師堂三間新建立宝曆四甲戌年輪師登座ニ成就ニテ  
遷化 施主ト茲聯合成就ス

施主ヘ金百兩江戸 坂倉附兵衛 外ニ輪師ヨリ金三十五兩寄附ス  
松屋四良兵衛（3）

宝曆四申戌年四月廿日六十四才入寂」

（35ウ）

〔註〕

（1） 慶応元年十二月十四日焼へ頭註

（2） 文政七年火災焼失へ頭註

（3） 山谷正法寺ノ且中花川戸松本四良兵衛ナルヘシ

四十一世能治院日妙上人 字寄雅」

野呂妙光寺卅四世 飯高玄八十七世  
文六十六世 江戸四ツ谷戒行

寺」

宝曆四甲戌年七月八日戒行寺ヨリ入山 在位四年」

院代 即成院日迅聖人」

同 日融聖人休息立正寺住職」

奥院別当 莖真院日葉」

靈寶藏ノ内陳檜皮葺更」

丈六堂檜皮葺替」

（36オ）

大黒堂全断」

位牌堂前通り全断」

① 圓師堂（輪師）（2）代企之今般成就新建立也（3）」

宝曆七丁丑年八月三日七十七才入寂」

〔註〕

（1） 明治八年ノ火災焼失ト 是ナルベシ

（2） 「論師」は「輪師」の誤り。（私云）

（3） 輪師ノ下ニ有之

四十二世耐慈院日辰上人 字修海」

上サ四國奥郡内野郷若山村ノ産十一才出家門海日辰ト改メ小西岸玄義  
ニテ飯高ヘ入習修海ト改メ成功ス

辰師坂頭ノ時（1）元文二巳年ノ大地震ニ付諸堂」大破以ニ夫諸所修營  
ヲ成弁スト又勸學已來常ニ口ノ痛ミ諸経演」説導不任心我レ常ニ念願

スラク命終ノ後テ口中ニ病有ル者ヲ救護ノ令ニ」平愈誓願ス依テ朝夕仏神  
ヘ念願スト云々又々而願ニ有レ感応諸人」祈誓ス利益日ニ新也」

② 上総国府基宝墓山本泉寺中興 比企谷妙本寺三十

五世ト」飯高玄百二世  
文七十七世 上サ大野栄久山光福寺五十

五世 後ニ身延」樹下庵ヲ開基ス」

東谷」

宝曆八戌年 上サ大野ヨリ入山 在位五ケ年」

児童 千代九宣宗院日顯仏  
寶曆九巳卯五月廿九日十一才没ス  
千代九寶利院日詮  
寶曆十二巳巳（3）六月十七日

院代 妙雄院日遷聖人明和三年九月  
十一月廿九日

（36ウ）

同 瑞妙院日輝聖人 明和六己丑 六月八日樹下庵ニ化

奥院別当四人 慈船院日蓮 門勇院 勝智院 不樂院

七面山ノ別当 遠壽院日長聖人 安永九庚子十一月廿五日

但シ五十五代ノ別当ナリ七面山水證跡ノ祖也樹下庵ニ代同庵ニテ死ス

六月説誦十方部供養 宝曆十庚辰六月辰師勅之 大覺寺藏有之文一返首略結縁者へ出之

西谷岸推鐘之銘 辰師ノ作

追分祖師堂再建立 宝曆十一辛巳九月廿日 辰師勅之 祖師堂前舞台舞臺ノ由来及ヒ勸誠 宝曆十二壬午年秋

日辰判形

三光天之宮殿 宝曆十二年壬午五月十五日 日辰判形

宝曆十二壬午年七月廿一日一円庵へ御退休ノ四ケ

明和二乙酉年十月十八日八十歳入寂

〔註〕

(1) 元文三(年、私云)八月ノ文譚ナレハ主ノ時ナルベシ

(2) 「府基」を「国府台」と訂正。

(3) 「己巳」を「辛巳」と訂正。

(4) 私ニ祖山相繼ノ儀飯高檀林能化職ニテ進山ノ

身延山歴代略譜(北沢)

知口当辰師ニテ城下谷ハ池上へ進住シ身延ハ松谷

中谷ニテ隔代ニ晋山スルヌニ寺社奉行所ニ於テ被

申渡依テ辰師ハ御退蔵スルト見ヘタリ此儀ハ飯高

ノ首中函内ニ委細有之先年拝見ス從是松中両谷隔代ニ進山ス先ツ日見師松谷ヨリ入山也見合ベシ

四十三世理天院日見上人 字理天

越後国鉢崎有馬氏ノ産

谷中正運寺十 飯高文九十八世 江戸駒込大乘寺十二

世ニテ「佐野妙頭寺廿四世ヲ兼任職」

宝曆十三癸未四月五月廿九日 江戸出立 入山 在位五ケ

年

兒童 三親九 多聞院日悟法師 江戸産 明和元年申九月五日

院代 成遠院

同 智見院日住聖人 字頭禮西谷玄嶽四十六世

奥院別当 顓誠

三光堂三文字 見師ノ筆 明和二乙酉七月吉日

明和三丙戌年五月十五日賜ニ綸旨ニ参内

全 四丁亥年退院一円庵へ閑居三ケ年

明和五戊子四月為ニ養生ニ御出府全六年己丑二月五

日江戸表ニ於テ遷化二月廿七日御遺骨一円庵へ



身延山歷代略譜（北沢）

御着満山大衆加用人迄「惣門へ出迎結衆中三門へ  
旦林満山惣門へ町役人舟原迄」出迎等勤之三月二  
日御本葬也」

明和六己丑年二月五日亥ノ中刻七十七才入寂」

〔註〕

（1） 勤役ノ後寺沢村へ隠居スト

（2） 百（四十六世）カ

四十四世潮音院日寶上人 潮師ノ弟子字海輪」

武州江戸新橋ノ産」

父 智光院宗普日妙 享保五戊子七月廿一日  
母 尊嚴院妙光日宗 享保九年辰四月十四日

飯高 文百六十五 芝一乗寺歴」

明和五戊子年 芝ヨリ入山 在位ニケ年」

明和六己丑年八月六日五十九才入寂」

四十五世寂隆院日應上人 字智恩」

下總飯高村莖ノ田小兵衛宅ヨリ出家ス」

江戸谷中本壽寺 上依智妙傳寺 野呂妙興寺」

飯高 文百八十三

明和六己丑年十二月二日野呂ヨリ入山 在位五ケ  
年」

（39オ）

兒童ノ弟子 大隆院日勇聖人

字孝忠 三田樂王寺歴  
治師ノ院代 寛政十二庚申

三月廿九日」

全 弟子 序應院日慶法師 安永六丁酉六月廿五日」

院代 一相院日坎聖人 敬許權律師 下谷宗延寺  
字朝貞 寛七乙卯年二月十八日」

上ノ山七面大明神 寧形靈舟歴 應師代」  
影現社 明和七庚寅八月廿辰

大平橋市二間 明和七庚寅十二月成就渡リ初メ九十

三才ノ翁」当上新町住人小倉縫左衛門法号橋初渡

翁信士 本尊應師ヨリ」

安永二癸巳年五月廿八日賜三綸旨參内」

当山開闢五百遠忌ノ嘉会 安永二癸巳年六月十七日迄ハ例之通  
十八十九日法用別ニ勤之

諸堂并向拝惣修復彩色塗り地 紀州御殿信敬院殿」

小石川御殿賢姫 蕉姫君 洪谷御殿善修院殿女中各

々『安永二癸巳九月 板札日應判形」

久成殿 本堂ノ額 應師ノ筆 安永二己九月 板札日應判形」  
鬼子母神 横 額 全」

經 藏 上ノ山 全」

獨 尊 丈六堂 全」

大黒天 上ノ山 全」

常唱堂 上ノ山 全」

思親閣 奥ノ院 全」

真如閣 東谷 全」

安永二<sup>巳</sup>年十二月十九日七十九才入寂』

除歴日唱<sup>(1)(2)</sup>

字守慎

(3) 江戸下谷中善性寺ヨリ晋山

安永三<sup>甲</sup>午年五月十二日入山 在住四ヶ年

院代 弟子壽光院日理 奥院別当初ハ輪行院

隨身役 弟子遠光院日壽 同 次ハ智仙院

弟子惣代 本光院日晴

惣門外境之事

小田船原村ト久遠寺ノ境ト松園面ニ致シ中井清太夫殿役所ヘ申立テ御料ノ地面久遠寺ニテ三拾九間二尺五寸借用致シ制札ヲ建候趣久遠寺一役僧并小田船原村名主長百姓代連書差上永借地ト定リ候

安永四<sup>乙</sup>未年八月三日唱師代役僧円如院<sup>(戒善坊)</sup>

七面山焼失之件

安永五<sup>丙</sup>申年十月十一日ノ夜出火焼失翌十二日西谷能化日連<sup>(4)</sup>ニ向テ眞主ノ曰ク七面山ノ焼失ハ元トマコ邪神ノ故ト申ス依之及ニ騒動故ニト説言ワモ不レ用候故ニ翌六丁酉年三月新公処ニ四月廿七日寺社奉行ヨリ御召状ニ付五月朔日当山出立間五日ノ公処ヘ若屈六日法論不受忍田ノ異流ニ落居ス脱衣ノ上直ニ掲リ屋入被申付右アカリヤニテ死去無帰山罪ノケ余ニ依テ一当山除歴ス最モ飯高并教藏院モ除歴也善性寺モ同断ナルベシ

安永七<sup>戊</sup>戌年正月廿七日御裁許済ミ委クハ公訴書録ニ有之<sup>(5)</sup>

日唱認ノ本尊授与之分麓坊ニテ不殘取上ケ火失致ス也一日遊日豊岡尊師ヨリ書改メ夫々ヘ遺ニ本尊一

但シ本尊ヲ認方ニ御列ノ異流ト申ス更 一老円解院日聖御代々ノ御名前モ

身延山歴代略譜(北沢)

盛一

[註]

(1) 四十六世

(2) 妙乘院

(3) 飯高文百七十九世

(4) 山高実相寺ヨリ巡番ノ化主ナリ

(5) 初度 安國坊日興聖人 京妙覺寺十九世ト

慶長 對馬ヘ配流十三ヶ年ニシテ船ルト

寛永七<sup>庚</sup>年三月十日七十一才化

二度 長遠院日樹上人 芝朗樹寺ヨリ入山カ

寛永七<sup>壬</sup>年二月廿一日酒并雅樂頭宅ニテ問答対決也己ノ刻日

自ハ 身延日乾日遊日遊原日東玉沢日連屬越井心了院 六人

他ハ 池上日樹中山日賢平賀日弘小西日領碑文谷日連中村日光 六人

決着 日樹ハ信州伊奈郡飯田ヘ御領ケ翌寛永八<sup>未</sup>五月十九日

遷化 寂勝院日賢中山九世除歴但シ日樹ノ弟子三河日賢ト云

除歴配流 小西日領守玄院ト云フ相馬配流

寛永三ノ生レカ 三度安國院日講聖人 字惠雄 野呂妙興寺廿世ト

寛文六<sup>丙</sup>四年春破戒配流上二巻作

全年四月十七日附ケ守正殿(國)欠落心章ヲ作テ寺社

奉行ヘ獻ス四代家鶴公ノ時ナリ依テ日向ヘ配流在島二十三

ヶ年ニシテ元禄十一<sup>戊</sup>寅三月十七日七十三才遷化スト

自ハ 身延廿八代日賢

他ハ 日講平賀日述小浜日連碑文谷日略與津日連谷中日談 六人

延山院師ハ翌寛文七<sup>未</sup>十月廿三日六十七才遷化

身延山歷代略譜（北沢）

元禄四辛未年四月廿八日悲田供養之新義企三停止被仰事

自ハ 身延三十一世日親池上ハ日現前代 玄節ナルベシ

他ハ 小湊日映碑文各日附谷中日還唱ノ異流 脫節札之公認

元禄十一年谷中陣（一）欠落也 谷中 天台宗

△安永五年頃身延日唱不受悲田唱フ企（一）企ならん 七年正

月廿七日御籤許也

（貼付）

四十六世領峰院日邊上人 初ハ 日宜ト云フ 字湛如

甲州巨摩郡両畑村字久田子ノ産也身延西谷ノ棚澤

勇」成坊ニテ剃髮スト

飯高高百五十人 奥津妙覺寺 小田原玉傳寺

安永七戊戌 年小田原ヨリ入山 在位一年

同年十二月十八日七十四才入寂（二）

〔註〕

（一）シト（読む）

（二）小田原邊師ト云フ

四十七世亮心院日邊上人 字玄妙

駿州小鹿村ノ産

川越休墓寺 下依智妙純寺 京聖 飯高百廿六

安永八己亥 年六月八日下依智ヨリ入山 在位七年

兒童 德壽丸 宗祖五百遠忌ノ児也

（41才）

同 寛心院日冲聖人 字玄鶴 大林房二十五世

院代 智照院日如聖人 字泰信

同 慈舟院日安聖人 天福七丁未五月廿五日

影 現 拜殿葺替 安永八己亥八月廿八日始之 豐師代

裏門修復 榑ノ根ツヤ家根更 日豊判形

三光堂 三間半再建立 安永九庚子 日豊判形

七面山ノ本宮 四間 安永九庚子八月十九日 日豊判形

妙石庵再建立 天明元丑閏五月十九日了有日妙 日豊判形

高祖五百遠忌 天明元辛丑年從九月廿七日至十月

相輪塔 天明元辛丑年十月十三日豐師代新ニ建立シ相

七面山ノ幣殿 三間再建成就 天明四 甲辰 六

月ヨリ同五乙巳六月廿五日迄ニ 日豊判形

天明五乙巳年十月廿三日退藏一円庵へ閑居

天明六丙午九月三日七十四才入寂

〔註〕

（一）「上依智」を「下依智」と訂正。

（二）万部之導師ト

四十八世光漸院日源上人 亨師孫弟子ナリ字會傳

上サ国壇谷郷寺家墓村海宝氏ノ産也」

父 門尊院法安日興 宝曆四甲戌七月六日  
母 通尊院妙安日中 宝曆八戊寅五月廿八日

師範ハ漸學院日教聖人 宝曆六丙子九月十二日七十三

下サ内山妙傳寺 江戸二本榎円真寺 房州小松原

鏡忍寺 飯高 文百七十七世

天明五 乙巳 十一月八日 同六 丙午 三月廿日小松原ヨリ入

山在位八年」

兒童 亀若丸 快勇院日延法師 源政四毛子十一月五日

院代 本光院日相聖人 寺 字 支瑠 飯高兩隣主授意通光

隨身役 不輕院日禮聖人 字 礼教 下谷宗延寺 文化六己巳十二月十五日

全 甘露院日泉聖人 字 前旭 山谷正法寺 寛政三辛亥八月五日

(42オ) 夏鐘堂檜皮葺更 天明六 丙午 四月日棟札日源判形

寛政五 癸丑 年正月廿一日一円庵へ退藏閑居二年」

全 六 甲寅 年三月十七日八十六才入寂」

〔註〕

(1) イ二十月

四十九世本義院日地上人 字 観十」

駿州小鹿村ノ産」

身延山歴代略譜(北沢)

江戸一本松大法寺 寛政ノ院代 当山三十七世 勤ル三十四才ノ時ナリ 飯

高 文百八十九世

寛政五 癸丑 二月 一本松 弘リニテ 入山在位五年」

兒童 德壽丸 弟子 本具院日專聖人 清水院門底附ノ歴代 天保十一庚子九月六

日」

院代 潮文院日暹聖人 当山五十五代へ還山 村田妙法等

隨身役 本勝院日運聖人 初ハ明行院ト云フ松玄坊ニ閑居而化 天保八丁酉正月十八日

院代 本理院日慶聖人 一ノ願妙了寺廿八世 寛政九丁巳八月廿二日八十二才化

三門檜皮葺替成就 本ト鏡見寺也有故檜皮トスル」

古仏堂檜皮葺更成就」

寛政九 丁巳 年 八十七才ニテ 一円庵へ退藏閑居四

年」

八十八歳ノ祝寛政十年 戊午 一円庵ニテ三ツ切本尊

ヲ出ス」

寛政十二 庚申 年八月六日九十才入寂」

〔註〕

(1) 十月

五十世教山院日沾上人 字 教俊」

身延山歷代略譜（北沢）

(43オ)

下サ方田村法光寺 获久保中道寺 上依知妙傳寺

小湊山四十二世 飯高文二百三十三

寛政十戊午年三月廿九日小湊ヨリ入山在位一年

院代 大隆院日勇聖人字字亮 当山院御ノ兒童ナリ 三田ノ藥王寺歴 寛政十二庚申三月廿九日

隨身 重厚院日實聖人字煩誠 症ノ坊廿八 下谷宗延寺 文政十二己丑正月六日当山ニテ化

奥院別当 教住院日慶大徳隔之師廿七世 文政五壬午年四月十二日

寛政十年三月入山 七ヶ月ニテ十月十九日八十一才入寂

五十一世明静院日全上人 字完妙

佐渡國ノ産

江戸二本榎円心寺三十世閑居 飯高文二百四十 文百六十六世

寛政十戊午年十二月五日同十一己未年二月三十日入山在位五年

兒童 智禪院日定大徳字嘉志 智教坊十一日遊ナリ 享和三癸亥七月五日

院代 智勝院日産聖人字完輪 通光寺三十三世 天保七丙申十月十八日化

同 智雄院日観聖人字秀榮 寛政十二庚申十一月十三日

同 大翁院日現聖人山本府廿四世 当山一老隠居ナリ 文化六己巳九月十八日

隨身 了牙院

同 智優院日領聖人字弁教 大坂雲雷寺

七面山別当 淨妙院

(44オ)

奥院別当 教円院

靈宝藏ノ家根ハ本ト雖シニ、楡皮、有合ノ綱瓦ヲ以テ葺シ之 享和三年癸亥ノ夏棟札日全判形

享和三癸亥年十一月二日 一円庵へ退蔵閑居六年

文化五戊辰年四月六日八十三才入寂

五十二世堅樹院日盛上人 字本考

北総飯塚村ノ産也

下サ箇木村妙経寺 本所本仏寺十三世 飯高文二百 文百九

七十四

父 體如院是相日性 明和四丁亥三月三日 母 用莊院妙齡日身 寛政元己酉六月廿八日

師範ハ常壽院日詮聖人宝曆十二壬午九月三十日 大行院十四世

文化元甲子年三月朔日本所ヨリ入山 在位三年

兒童 榮樹丸 榮樹院日鳳聖人字本考 甲府ノ産 初ハ本 佐州塚原山ノ歴

型 安政五戊午六月十八日化

院代 玄壽院日健聖人字教督 堀之内十九世 文政七甲申二月廿九日

同 勇進院日猛聖人字蘭魯 奥津妙覚寺 文政十三己丑九月十六日

隨身 至真院

同 教樹院日遊聖人字滋教 法寶曆廿二世 小笠原久成寺 小室十郎院へ 天保六

乙未正月二十日化六十七才

(44ウ)

文化三丙寅年二月十九日七十五才入寂」

五十三世上妙院日奏上人 字海雄」

川越本能寺 小湊山四十四世 飯高玄二百六十六  
文百八十七世

飯高ノ上妙坊」建立主」

文化三丙寅年五月廿六日小湊ヨリ入山 在位九年」

初ノ院代 潮恩院」

次ノ院代 孝超院日登聖人字孝格  
大連坊再建立主 参内ノ院代カ  
勲許権律師

〔イ〕文化十一甲戌正月十三日化」

七面山別当 潮岸院日序聖人山之明廿一世  
本字坊 文政十三庚寅十一月三十日」

奥院別当 了牙院」

太平橋市二間再建ス 文化三丙寅年十月吉日」

退分祖師堂再建立 文化四年丁卯正月日奏判形」

文化八辛未年閏八月十九日賜繪旨参内」

同十一甲戌年十月廿五日一円庵へ退藏閑居二年」

同十二乙亥年九月廿九日八十四才入寂」

〔註〕

(1) 院代緋紋ノ初ナリ

五十四世智透院日審上人 字顯厚」

院師ハ智真院領厚日純聖人 三田聚王寺  
隨從ハ前明院會道日遠聖人 小湊三十九世 聚王寺歴」

身延山歴代略譜 (北沢)

(45ウ)

京松ヶ崎文譜 下サ岩部村大乘寺廿二世 飯高二  
百三世」

文化十二乙亥年二月廿六日岩部ヨリ入山在位三年」

兒童 顯完院日甚法師 文政三己卯七月七日」

隨身役 智本院」

同 智善院日誦聖人 字忠盛 本所本仏寺」 奥津妙覺寺後

ニ相真院日倫ト改ム嘉永二己酉十月十五日化」

奥院別当 了樹院日正大徳 秀悦房十六世」  
天保四癸巳六月十九日」

奥院題目千部執行永代」文化十一甲戌六月奏師企之同十二乙亥三  
月審師代成就ス」

太平橋再掛更市二間  
長十二間 文化十三丙子年八月大風雨水ニテ 損スル故  
ニ再興同年冬成就」

文化十四丁丑年七月二日八十一才入寂」

五十五世潮文院日還上人 字海郁」

甲州一ノ瀬妙了寺三十世〔イ〕越後村田妙法寺」飯

高二百廿二世 京聖也〔2〕」

文化十四丁丑年九月十四日大木川支  
十六日入山在位九年」

兒童 万壽丸 潮雛院日容法師 文政四辛巳年十一月十二日」

院代 智伸院日遠聖人 字省己過師ノ弟子ナリ谷山端輪寺歴」  
天保五甲午二月十三日

同 養心院日遊聖人 字宜徳三田良聖寺 鎌倉本覺寺」  
文政十三庚寅七月十八日

身延山歷代略譜（北沢）

（46ウ）

- 七面山ハ蓮成院日行聖人 天保九戊戌十月十八日（寂靜坊二十三世）  
 奥院ハ潮明院日住聖人 天保六乙未十二月十六日（南尚坊二十世）  
 同 大玄院日孝聖人 天保元庚寅十二月廿日六十九才（円光庵十一世）  
 古仏堂ノ祖師開帳 文政三庚寅年三月十一日ヨリ六十日間深川淨心寺ニテ（寺ニテ）  
 御廟八角堂本殿拝殿共回祿 文政四辛巳八月九日ノ夜九ツ時  
 永代不易（從前日）千部経 文政五壬午年四月ヨリ始ル 龜頭主通師（至十日）  
 供厨（四間半）再建立 文政五壬午九月吉成 施主江戸相繼助兵衛 日逞判形  
 八角堂（三間一尺）再建立 文政五壬午十月十三日成就 日逞判形  
 御供所ノ額ハ本妙律師ノ筆 文政五壬午九月日  
 實主代々中谷ヘ松壽庵新建立 文政四辛巳ノ年始メ同六年癸未年十二月成就 施主ハ江戸御本九ノ大奥八十女（藏尼女屋獨女ニテ金百五十兩納之通師ノ出金三百兩ナリ入費）東テ四百五十兩余也通師建立ノ開基閑居ス（6）  
 三大堂并諸堂回祿 文政七甲申年八月廿七日申ノ下刻 本堂 祖師堂天井ノ上ヨリ出火大雨中焼失  
 祖師堂位牌堂二天門円師堂鐘樓鼓樓二重塔燈主堂萬燈室上行堂舞台并樂屋番所撰持所作事小屋廊下五ヶ所一時ニ焼亡ス  
 仮祖師堂（十三間） 文政七甲申年九月吉日 棟札日逞判形  
 此堂ハ後ニ仮本堂トス又タ後ニ外位牌堂トス  
 堂過去帳拾五冊 各二日宛 文政七甲申十月日 日逞判形  
 施主江戸相繼助兵衛

（47ウ）

- 假鐘堂太鼓堂假舞台假廊下等造之  
 文政七甲申十月祖師堂同時会式前ナリ  
 祖師堂再建立企之 文政八乙酉年正月十三日新初メ  
 壽量院文殊之社（三間）再建 文政八乙酉六月如常珠日逞宮  
 文政八乙酉年八月廿二日退藏中松壽庵ヘ閑居六年間  
 同 十三（天保元ナリ）庚寅年九月廿二日九十一才入寂  
 〔註〕  
 〔1〕 東京板橋本壽院ニモ住居ス  
 〔2〕 越後糸魚川經王寺十六世ト  
 〔3〕 村田ヨリ歟  
 〔4〕 文政四（年）焼失（頭註）  
 〔5〕 是迄ノ一円庵ハ如何ン  
 〔6〕 文政七年火災（頭註）  
 五十六世太裕院日晴上人 字天中 初ハ日精ナリ再假ノ時略ト改ム  
 師範 太玄院日沼聖人 字裕恩 堀之内妙法等  
 荻久保中道寺 山科文講 飯高二百三十四世甲  
 州河内領成富矢崎教信庵ニ閑住ス  
 文政八乙酉年十月十日矢寄ヨリ入山 在位ニケ年  
 院代 太蓮院日養聖人 天保八丁酉五月二日 江戸高田亮朝院十四世

隨身役 太量院日考聖人字煩略 寛永廿九年九月二十九日

同 太禪院日永聖人字春雲 文政十三庚寅九月八日

奥院ハ太潮院日命山ノ房十八世 天保十四癸卯三月廿日

七面山ハ蓮成院日行聖人(一)

祖師堂専ラ普請中也」

文政九丙戌年九月八日七十二才入寂」

〔註〕

〔註〕

(1) 遅師代ヨリ勲統敷

(2) 因ニ記ス一ノ瀬妙了寺ハ代々中葉谷ニテ住職ノ処

文政八酉年卅五代豊心院日俊聖人谷中瑞輪寺へ移  
転ス依テ晴尊前御代松和田谷ヨリ三十六代へ孝叔  
日梵聖人上サヨリ尊命ヲ以テ入山スト太研院ト云  
院号考フベシ

五十七世究竟院日舜上人 字義端」

江戸麻布妙祝寺 京聖 飯高二百三十二世」

文政十丁亥年二月廿六日妙祝寺ヨリ入山 在位一年」

院代 真如院日湊聖人字通海 久ヶ原安祥寺

隨身 一真院日治聖人字巨舜 駿府盛広寺

七面山ハ蓮成院日行聖人 敬勝」

身延山歴代略譜 (北沢)

奥院ハ竟秀院 日舜上人直弟」

祖師堂専ラ普請中也」

文政十年七ヶ月八月二十日七十四才入寂」

五十八世是運院日環上人 字是運」

母父 宝蓮院成等日見 廿七日」  
蓮成院妙等日相 八日」

師範ハ是應院日堅聖人金津妙樂寺并村田ノ歴是光院日  
寺狭久保中道寺奥津妙覺寺等ノ歴飯高玄文兩隣主ナリ」天明五乙巳十一月  
三日化ス」

松崎村下サ也顯實寺 京鷹峰文講 谷中妙揚寺」飯

高二百三十八世」

文政十丁亥年冬請待同十一戊子二月廿八日谷中ヨリ入山 在位五ヶ年

兒童 千代禪丸 是詮院日常聖人字是詮 江戸下谷山田氏ノ産

慶応二丙寅九月廿八日化 西郡落合村法尊寺住ニテ化ス芝田日啓并ニ」  
川上法教寺望月是性ノ師匠ナリ

同 松禪丸 靈玄院日恵法師文政十三己丑五月十九日

院代 是経院日琳聖人字弁字 野呂 村田

同 是中院日考聖人字是海 関口長光寺

同 是幹院日登聖人字龍文 目黒正寛寺 下谷奈延寺

同 雙樹院日扇聖人字智応 後ニ当山六十二代ノ山主

隨身 是山院日領聖人字忍梵 天保三卯二月十八日三十一才



身延山歴代略譜（北沢）

同 是明院日清聖人 天保九戊戌八月六日

七面山ハ蓮成院日行聖人 天保九戊戌四月十八日 積善坊廿三

世」

奥院ハ了樹院日正大徳 天保四癸巳六月十九日化

太平橋中二間 文政十一戊子六月三十日大水流失 環師代」

此ノ文政十一子年六月三十日ノ大風雨大水ニテ山内橋々不レ残落ル所々大破」損三門常唱堂ノ庫裡妙福坊談談合場ニ字一門庭上新町下新町」狐町人家數軒流失常唱堂ノ扣納人小屋并ニ納人皆ナ流失上新町ニテ」女老入流死山内諸所川除普請等致ス」

東照宮ノ社 四尺六寸 同雨覆 三間 再建立 文政十一戊子十一月成 就」

方丈向不殘焼失 文政十二己丑九月六日戌ノ中刻」

五重塔飛火ニテ類焼ス」

會舍所大方丈小方丈經堂御真骨ノ宝藏中央拜殿」

古仏堂奥位牌堂奥書院學問所休息所寄附ケ茶之

間」大庫裏新土藏御靈屋永守社靈宝藏ノ拜殿表

門」長部屋通本橋廊下數ケ所浴室不淨場數ケ所」

計二拾八棟ト云フ」

仮厨司再建立 十六間 文政十三己丑十二月吉辰成就棟札日環判形」

仮對面所 四間 居間 三間 二尺茶之間 六間 二尺寄リ附 五間半 玄

關式臺 三間半 飯莖場 四間 番部屋 二間半 會舍所 六十二 之

(50オ)

二タ間ナリ仮作事造立 文政十二己丑九月ヨリ天保二辛卯年秋迄ニ追次造建 五百五十遺是勤之日

現代」

奥ノ院祖師 影南石ノ七面宮 開帳 文政十三庚寅七月十九日ヨリ六十日間 於深川淨心寺

同祖師ノ宮殿再建 文政十三庚寅年 施主江戶芝中村ヤ平兵衛ノ母

祖師堂 本再建落成ス 逞師ノ企テ晴舞環ノ四代ヲ經テ全ク成

就」 文政十三也 庚寅十一月十日上棟日環判形但シ二拾

間四面也」

同祖師ノ宮殿再建 天保二辛卯四月成就四月二日御題座」同三日ヨリ十二日マテ祖堂開帳千餘供養」三十四日宮殿開帳法興勤之宮殿ノ施主大坂身延縣年參攝中」大仏師ハ法橋林如水作之

千金ニ及フ也 日環判形(4)」

舞台 三間四方 同樂屋 三間 判形 施主本石町八日環(マ)中」

通本橋 二十一間 再建立 天保二辛卯年掛之施主ハ棟札 日環判形」

栖神法窟ノ 四大字ノ額掛ル 天保二卯九月上ルヲ御紋付キ」

大方丈 十五間 再建立 施主松和田一谷法類中 日環判形」

御真骨ノ宝藏 三間半 施主本所龜盛万兵衛 日環判形」

古仏堂 三間半 再建 天保二卯五月四日并初同十月十三日上棟札 日環判形」

燈主堂 三間半 萬燈室 文政十二年ノ企テ天保二辛卯年十月十三日ノ 日環判形」

奥ノ院御供所 二間半 新建立 天保二辛卯年 施主下山村中」

常在殿常唱堂 三間 妙法堂四條殿ノ各額 環師ノ筆」

本堂ハ宝塔兩尊并無辺行安立行ノ二菩薩ニ」四大天王

安置」

ノ像 天保二<sup>辛卯</sup>年十月 日環開光ス<sup>一</sup> 当国青柳  
村中<sup>宝塔岡尊金五百兩  
外六鉢ニテ金三百兩</sup>合テ八百兩也<sup>一</sup>

宗祖五百五十遠忌 天保二<sup>辛卯</sup>年十月十三日<sup>從九月廿七日  
至十月十三日</sup>

迄<sup>一</sup>万部經供養勤之 五十八世日環師代<sup>一</sup>

天保二<sup>辛卯</sup>年十一月廿五日 松壽庵へ退藏閑居十一  
年<sup>一</sup>

同十二<sup>辛丑</sup>年八月廿八日八十三才入寂<sup>一</sup>

〔註〕

(1) 文政十一年風水荒レ<sup>一</sup>頭註<sup>一</sup>

(2) 文政十二年大火災<sup>一</sup>頭註<sup>一</sup>

(3) 本年九月廿二日五十五代日環上人松壽庵ニテ九十  
一才遷化 又タ因ニ記ス妙了寺卅六世太研院日梵  
ハ焼失後ヨリ登山普請方作事奉行在勤ト

(4) 普請方妙了寺太研院日梵本年五月十二日遷化ニ付  
真應院日源上サ福益村本念寺ヨリ三十七世へ入寺  
ス依テ是真院日感ト改名ス貫主ノ門弟トナル故也  
本年九月住職入寺十月五百五十遠忌初登山大會動  
<sup>1</sup>

五十九世圖中院日詔上人 字海鍊<sup>一</sup>

佐野妙頭寺 飯高<sup>玄三百六十八  
文三百四十世</sup> 小湊山四十八世<sup>一</sup>

身延山歴代略譜 (北沢)

(51オ)

天保三<sup>壬辰</sup>年二月廿八日小湊ヨリ入山 在位三年<sup>一</sup>

兒童 梅壽丸 字海等<sup>一</sup>

同 福壽丸 英中院日孔聖人<sup>字海住甲府近藤氏ノ座  
三十一才化大蓮坊十三世嘉</sup>

永四<sup>辛亥</sup>四月卅日<sup>一</sup>

院代 遠壽院日受聖人<sup>字存立谷中延壽寺 長坂大長寺  
白銀寛林寺</sup>

同 頭中院日方聖人<sup>嘉永二酉年二月廿三日  
本所妙源寺佐野妙頭寺</sup>

隨身 司中院日瞻聖人<sup>字鍊孝橋場長昌寺串橋妙像寺  
妙院日衆ト改ム</sup>

七面山ハ蓮成院日行聖人<sup>遠崎縣麻諾ノ五代勤之  
天保九戊戌十月十八日</sup>

同 智登院<sup>兩畑村正徳寺</sup>

奥位牌堂<sup>三間再建 天保三壬辰十月棟札  
施主 教来石宿河西六郎平</sup> 日詔判形<sup>一</sup>

通本ノ廊下<sup>二間再建 天保三壬辰十月棟札  
施主 當徳町中</sup> 日詔判形<sup>一</sup>

天保四巳年日詔師御代三ヶ寺<sup>天保四巳年日詔師御代三ヶ寺  
遠光寺ハ日詔師ナリ<sup>(1)</sup></sup> 日詔判形<sup>一</sup>

舞台ハ環師御代再建立也<sup>天保五甲午年四月吉辰 本石町八日殿中  
山上棟ス 棟札日詔判形</sup>

天保五<sup>甲午</sup>年六月廿六日七十一才入寂<sup>一</sup>

〔註〕

(1) 「天保四巳年」より「日満師ナリ」は朱字書入れ  
である。

六十世一雨院日潤上人 字雪川<sup>一</sup>

京満願寺 御庵 飯高<sup>玄三百九十七  
文三百五十五</sup> 尾州日比津定徳

身延山歴代略譜（北沢）

寺ヨリ」

天保五<sup>甲午</sup>年 請待同六<sup>乙未</sup>入<sup>二月廿六日</sup> 山 在位四年」

児童 <sup>榮壽九<sup>松壽九</sup>詔潤心ノ三代勳ル</sup>（一）」

院代 相壽院日誠聖人<sup>字智漢 教許權律師 下谷宗延寺 嘉永五壬子七月十一日</sup>

隨身 真讓院日融聖人<sup>教許權律師 日比津常徳寺 萬延元庚申三月十二日</sup>

七面山ハ智性院日過聖人<sup>天保十二辛丑正月朔日 門柳坊二十世</sup>

奥院ハ 恵快院日了大徳<sup>天保八丁酉十一月廿七日 東之坊二十一世</sup>

同 是泰院日琳贈聖<sup>天保十二辛丑九月十七日 本行房三十四世 五十才</sup>

小方丈<sup>九<sup>間</sup>再建立</sup>天保六乙未年冬企之同七丙申年二月成就<sup>施主ハ春米村小林ハ太郎 櫻礼日潤判形</sup>

大方丈ハ再建 今般造作并唐門玄関再建立令成就之<sup>大<sup>方丈</sup>ハ再建 今般造作并唐門玄関再建立令成就之</sup>

松平左京大夫頼學殿御參詣<sup>天保七丙申二月 松平左京大夫頼學殿御參詣</sup>

天拜ノ祖師本社七面宮靈仏靈宝等開帳」天保八丁酉

年七月十九日ヨリ日延共七十日間於深川浄心寺」

大坂巡説<sup>三十六年日ノ番 天保九戊戌年廿五ヶ寺并ニ 新寺迄御名代京妙伝寺日補師勳ル</sup>

中國西国四国九州巡説<sup>天保九十一ノ三ヶ年間 名代日幸勳之</sup>

宝珠殿<sup>七面山</sup>之額 萬燈額 長明室額 潤師ノ筆」

天保九<sup>戊戌</sup>年閏四月七日八十才入寂」

夢中の歌 月影にのはれるわしのたかねまてしろひきたまへ見る遊那ほと

(52オ)

(52ウ)

ヶ」

（註）

（一） 心師ノ下へ出ス

（二） 水鳴樓ト云フ歟

六十一世智了院日心上人 字泰忍」

一ノ瀬妙了寺三十三世 飯高二百五十六世」

京聖也 武州川越本應寺ヨリ（二）」

天保九<sup>戊戌</sup>年十月九日入山 在位五年」

児童 榮壽丸 泰榮院日了學士<sup>天師弟子ナル 下今井村ノ 天保十一庚子四月十五日十</sup>

全<sup>三</sup> 松壽丸 泰常院日雄大徳<sup>心師ノ弟子ナル 下今井村ノ 己酉八月十二日</sup>

（四） 竹壽丸」

（五） 千壽丸

同 本立院日哀聖人<sup>字海慈 江戸原町幸國寺</sup>

同 慈謙院日義聖人<sup>字 武州星川法性寺 天保十二辛丑九月廿四日</sup>

同 文義院日登聖人<sup>字 谷中盛王寺</sup>

隨身 智円院日登聖人<sup>字 麻布法雲寺 淺草妙福寺 長坂大長寺 嘉永五壬子十月十九日</sup>

七面山ハ智等院日壽聖人 笹走本妙寺」

(53オ)

奥院ハ本持院日定贈聖文殊房十七世安政六己未九月二日

二天門持国毘沙門二大像天保十己亥六月日心師開光芝中村ヤ  
成田東運之作

平兵衛母イヲ女納ル但シ文政十三寅年ニハ儒師代奥院ノ祖師宮  
殿ヲ納ル殿見合ヘシニ天門建立マテ祖師ニ安置ス

本堂再建之企テ天保十庚子正月十三日日心判形

祖師石ノ大水鉢并兩屋天保十己亥十月一式心師代  
施主有野村矢崎又右衛門

御真骨惣金柱金極彩色金張付花天井須弥壇金白檀

板ノ間ハ樞ノトキ出シ塗表式施主池田本覺寺歷

本壽院日行聖人古金小判三百兩納ル天保十一庚子  
年

二重寶塔三間一尺再建ノ企テ天保十二辛丑年三月

円師堂三間半再建天保十二辛丑年九月  
施主江戸酒井清兵衛日心判形

天保十三壬寅年三月九日七十五才入寂

## 〔註〕

(1) 秀岸院日心有之故ニ該山住職中ハ真ト云フ

(2) 天保九年 妙了寺ニテ請待式

(3) 詔潤心ノ三代動ル

(4) 心扇閣ノ三代動ル

(5) 後チ闍師ノ下ヘ出ス

六十二世雙樹院日扇上人 字智應

身延山歴代略譜(北沢)

越後國ノ產

師範ハ智應院日慶聖人字智應 飯高文庫  
修可ヶ谷本淨寺

越後柏崎福泉寺歴 飯高二百七十八世

講一三州岡崎九山長徳寺隱地之寺ヲ再興ノ開基ス同寺ヨリ香山ス

天保十三壬寅年(一)五月廿七日入山 在位三年

院代 妙信院日法聖人字要中 三田藥王寺

隨身 太彦院日等聖人日勝上人ノ弟子 北之御世 当山四老  
安政三丙辰五月廿一日五十二才

七面山ハ妙應院日真聖人字顯山 藤田村妙行寺(4) (6) 後チ  
東郷小石和村蓮長寺へ住職(6二)

奥院ハ是諦院日研聖人字是諦 善行院ト改谷中妙行寺  
慶応元乙丑九月十日五十六才

闍師ノ弟子ニ是諦等ノ兩人氏隨身ニ來ル是諦ハ後ニ谷中妙行寺ニ  
テ化智等ハ後チ(一)越後柏崎福泉寺へ住職ニテ化ス  
天保十三寅十二月企之同十四癸卯ノ  
九月落助ス

外ノ位牌堂家根替板板拜 成就

## 〔註〕

二重ノ塔地形柱立ノ事 天保十四癸卯年十月  
但シ心師ノ企初ノ塔也 素立迄

祖師堂惣朱塗リ金具成就 天保十五甲辰春

利女堂檜皮葺更此時御擇所柱二本入新造  
別當 法達日久 扇師代

天保十五甲辰正月四日七十二才入寂

## 〔註〕

(1) 一ノ瀬妙了寺ニテ請待式

(2) 「妙心院」を「妙信院」と訂正

(3) 後チ薪師ノ御代院代再動ス

身延山歴代略譜（北沢）

- (4) トアリ仙應寺ナルベシ
- (5) 妙了寺日感聖人ノ門弟ニノ願山院ト云フ浅原村柴田覚平ノ師匠ナリ
- (6) 隠居シテ上方筋ヘ行キ住化
- (7) 一ノ瀬妙了寺永代松和田谷ニテ法類相統許可免狀大本尊御授与之事日願（上）人代天保十三寅年也該寺ハ三十七世日感代ナリ
- (8) 「十」を「十五」と訂正

(54ウ)

六十三世一乘院日闍上人 字観具

房州加茂日運寺 大坂雲雷寺 池田本覚寺 小湊

飯高文四百六十二世

弘化元甲辰四月小湊ヨリ入山 在位二年

児童 竹壽九字観正（一）

全 千壽九字観正（一）（三）下谷ノミ宗林寺大師了泉寺

後チ真恭院日利上人本増ト改ム 明治五年申三月十二日化

院代 本敬院日楨聖人字貞静 下谷中尊性寺 小湊ヘ入山

隨身 大千院日観聖人字観玄 小湊ノ妙蓮寺

七面山ハ中應院日運聖人 嘉永五壬子七月廿日敬善坊廿四世

二重塔屋根并造作 弘化元甲辰ヨリ同二乙巳年

弘化二乙巳年二月十五日七十七才入寂

〔註〕

- (1) 心扇闍ノ三代勤
- (2) 改テ頭感ト云
- (3) 児ニ登山ノ砌リ妙了寺日感ノ弟子分トナリ法名願哲ト授リ其後山本坊ノ弟子ナル由ジ日勸師代取戻シ頭感ト云フ
- (4) 櫻田願本 音羽真勇院ノ師匠ナリ

六十四世不老院日仲上人日中ト云フ字要順

下サ国安久山村木下氏ノ産

父 願壽院良遠日願 文政四年己七月廿七日

母 追壽院妙長日願 文化十三年七月十八日

師範ヘ専心院日恪聖人字願要 坂方妙雲寺 小湊ノ妙蓮寺 文政八丁酉正月十一日八十二才

飯高文四百六十二世

弘化二乙巳年七月五日村田ヨリ入山在位二年

院代 妙守院日護聖人字要順 高田亮朝院ノ十六世 明治五年申九月廿三日 竹鼻ニテ化ス

隨身 妙智院日惠聖人字要教 没草妙福寺 文久二壬戌八月九日

同 妙衣院日忍聖人字月松 越后辺渡邊金寺 祥師ノ院代

七面山ハ是諦院日研聖人（二）谷中妙行寺 慶応元乙丑九月十日五十六才

奥院ハ妙禪院日輝聖人 慶応元乙丑九月十日五十六才

児童 松壽九各江戸ノ産 仲桂薪ノ三代勤ル

(56オ)

波木井円師五百五十遠忌

弘化三丙午年九月廿五日正」当ノ旭二月廿四五法用勤之」弘化三年丙午二月

七面山開闢五百五十年ノ嘉会

弘化三丙午年九月」神事修行

七面山永代不易千部経読誦始之

毎年九月從十日至十九日マテ」弘化三丙午年ヨリ

二重塔九輪成就

弘化三丙午年十月吉祥日」棟札日仲判形」心願園仲ノ四代ニテ成就

妙法大善神堂

三間半 田代ノ社也 弘化三丙午年十月上棟札日仲判形」別当ハ願徳日光

弘化三丙午年十二月廿三日七十三才入寂」

〔註〕

(1) 西郡有野村矢崎丈右衛門ヨリ出家ス

(2) 扇師代奥院ニ

六十五世普恬院日桂上人 字通寛」

師範 可円院日理聖人字通寛」

信州飯田長源寺 京東山文講 飯高二百七十七世」

弘化四丁未年四月飯田ヨリ入山 在位七ヶ月」

児童 松壽丸各江戸産」

院代 一真院日治聖人字巨舜 静岡遠志寺 明治十三辰辰八月三十日八十四才」

隨身 恬中院日懿聖人字通寛 甲府清蓮寺 安政五戊午九月二日」

七面山ハ海運院日瑞聖人南之房三十一世 妙徳房ハ閑居 安政三丙辰十一月十五日」

身延山歴代略譜(北沢)

(56ウ)

奥院ハ以順院日信聖人 本妙坊六世 遷泉坊五世 嘉永六癸丑正月二十二日」

御即位御祈禱御撫物御降 弘化四丁未 八月十七日」

ヨリ廿三日迄一七日間祈禱堂ハ出仕勤之」

弘化四年十月三日七十七才入寂」

六十六世示宣院日薪上人 初ハ日持ト云フ 字顯説」

当国大柵村ノ産 今ハ深沢友左衛門ト云フ」

父 能性院成信日顯 文化二乙丑三月廿八日 七十四才」

母 能成院妙信日説 寛政四壬子六月四日 五十一才」

師範ハ顯持院日俊聖人 西谷庫 落居村本願寺 文化二乙丑閏八月十六日」

甲州今願助村久本寺 上八田妙長寺歴 京山科文講 飯高二百八十九世」

弘化四丁未年十二月四日上八田妙長寺ヨリ入山在位八年」

児童 松壽丸 御弟子 甲州中ノ常仙寺昌屋永立寺駒場湯沢 字顯又光ハ要松氏

等」

同 鶴壽丸 全 妙要院日勤法師 明治十六癸未五月三十一日」

院代 機扣院日宜聖人 字教忠 西条妙源寺 黒沢妙覺寺十七世 飯高文講 明治元戊辰九月十四日八十二世

文化」

全 妙信院日彰聖人 字衷中 三田聚王寺 越后村田」下谷宗 延寺飯高同講主」(2) 歿許權權節村鎮 衆表ナリ」

隨身 顯光院日灌聖人 字泰忠 岡崎門領寺」

身延山歷代略譜（北沢）

全 顯正院日光聖人字顯修 甲州高砂村門寺  
明治四辛未七月十七日

七面山ハ嶺内院日報聖人一老隱居大林房廿八世  
 安政三丙辰四月十五日ハ六十才

奥院ハ初ハ太教院日清ニハ智玄院日は三ハ寛妙院

日述

外位牌堂之釈迦尊像再興 弘化五戊申四月九日ヨリ開眼為供養  
 并ニ大六堂之釈迦尊像再興 千部羅執行 日新開光

小方丈柿板葺替 弘化五 戊申年十月吉日

通本橋回廊柿板葺替 全 十二月吉日

夏鐘堂柿板葺替 新師ノ嘉永改元申年十二月吉日  
 自普請ノ嘉永改元申年十二月吉日

朝師堂檜皮葺 嘉永二酉年六月成就  
 行学院日弘代 日新判形

日朝上人三百五拾遠忌 嘉永三己酉年六月  
 一七日ノ間千部羅勤之 法会執行

奥ノ院祖師 并ニ 影現七面天女靈仏靈宝等開帳

嘉永二己酉 七月十九日ヨリ六十日間於深川浄心寺

薪師代

鼓樓三間半  
 四方(3) 嘉永二酉九月薪師代企之 本所深川惣

講中

千體仏像再興 嘉永二酉年八月於深川開帳中一體ツノ施主  
 額ミ迄之 日新開光

大方丈土瓦葺更 嘉永三庚戌八月成就  
 金三百兩薪師自普請也 日新判形

釈尊二千八百遠忌 嘉永四辛亥二月十五日  
 大報恩会供養勤之

一切経并経藏三間四間再建立  
 嘉永四辛亥十月十三日模札 傳

大土普成普建唐金宝塔

(58才)

丈六釈尊像衣更蓮華座  
 石座新キ 嘉永四辛亥二月十五日  
 二千八百遠忌供養

本地塔二二間四方再建立  
 上棟同日開堂供養 日新判形

本化上行之像再興 嘉永五壬子三月廿八日薪師開光  
 施主大僧都日作聖人

古仏堂替地下ノ段ヨリ引移ス 嘉永五壬子年四月  
 施主神奈川中山又之助

釋量院ノ社土瓦葺替 嘉永五壬子年九月日  
 巴鈴坊日爲代 日新判形

本堂十三間四方  
 外像一丈ツ 也 嘉永三庚戌十月十一日柱立 同四辛亥年十一月十  
 日上棟同五壬子七月七日入仏供養 模札日新判形

二天門八間再建立  
 四間半再建立 (5) 同六癸丑年三月十六日  
 柱立同年十二月成就 日新判形

御真骨ノ宝藏銅瓦并壁上塗り成就 (6) 嘉永六癸丑年  
 成就

同中央三間半廊下二間半  
 再建立 施主尾州  
 惣持中

五重塔三間四方再建立企之  
 十二丈三尺 嘉永六癸丑四月八日打初メ  
 同六月廿六日地形初メ 日新判形

奥院祖堂土瓦葺替 嘉永六丑九月成就日新判形

興師堂二間半再建立  
 三間再建立 嘉永六丑年九月七日成就 日新判形  
 林達坊日爲代

上ノ山大黒堂檜皮葺替 嘉永六丑年九月廿六日 日新判形  
 大光庵日照代

八幡宮拜殿五間ニ三間再建立  
 外エニ三間再建立 嘉永六癸丑二月上棟 日新判形  
 施主山内道徳中

奥位牌堂土瓦葺替 嘉永七寅年二月成就

本堂之上行浄行両菩薩ノ像 嘉永七寅年春得與(7) 薪師開  
 安座 施主大坂年參放生同辨

光

嘉永七<sup>甲</sup>寅年二月十一日七十七才入寂

〔註〕

(1) 仲桂新ノ三代勤ル

(2) 但シ<sup>ノ</sup>期師ノ御代ヘ日法ト云フ  
薪師ノ御代ヘ日法ナリ

(3) 「四間」を「四方」と訂正。

(4) 嘉永二<sup>己酉</sup>正月企之

(5) 嘉永二<sup>己酉</sup>九月企之

(6) 弘化三<sup>丙午</sup>仲師代企之

(7) 古仏堂引地シ其跡ヘ此位牌堂ヲ引山シ<sup>ノ</sup>頭註

(8) 去ル天保二年十月環師御代青柳村諸尊彫刻納ルニ  
ササ不足故ニ今回納ルト見ヘタリ

六十七世智鏡院日楹上人 字旭芳

越後國之産鉢崎ナリ上輪村妙果寺ノ檀中ナリ

師範ハ遠来院日衷聖人<sup>飯高岡壽主 村田妙法寺</sup>  
文化六<sup>己巳</sup>五月廿五日

江戸原町幸国寺 (1) 小湊山 京聖 飯高二百九

十八世

嘉永七<sup>甲寅</sup>年六月六日小湊ヨリ入山 在位五年

児童 龜壽丸 頭壽院日長法師<sup>江戸ノ産 薪師ノ弟子分</sup>  
嘉永七<sup>寅</sup>九月廿九日

幸壽丸<sup>江戸産 檀師ノ弟子</sup> 乙壽丸<sup>甲府ノ産 檀</sup>  
字一審 字旭運

身延山歴代略譜 (北沢)

師ノ弟子

院代 智禪院日顯聖人<sup>宇旭遠 足尾本妙寺</sup>  
安政三<sup>丙辰</sup>十二月廿五日

同 妙音院日聲聖人<sup>宇高忍 天津日蓮寺 谷中端輪寺</sup>  
慶応四<sup>戊辰</sup>五月十二日

隨身 體妙院<sup>3</sup>日信聖人<sup>宇旭芳 飯高山</sup>  
明治四<sup>辛未</sup>十二月朔日

七面山ハ静養院日勝聖人<sup>宇一遠 天津日蓮寺 村田妙法寺</sup>

奥院ハ智静院日如聖人<sup>慶応四<sup>戊辰</sup>六月廿一日</sup>  
定林坊廿六世

同 潮旭院日登聖人<sup>明治八<sup>乙亥</sup>十一月三日</sup>  
鹽井坊十五世

嘉永七<sup>寅</sup>年八月廿五日賜綸旨同廿九日参内

御<sup>兵衛</sup>古作之持国毘沙門天王ノ一像 天長年中定

朝作 嘉永七<sup>甲寅</sup>九月 楳師代

本堂金燈籠一對<sup>嘉永七<sup>甲寅</sup>十月 泉州郡中村富十郎納之油料金三十兩</sup>

舞台土瓦葺更 嘉永七<sup>甲寅</sup>十月吉辰日楳形判

大地震<sup>嘉永七<sup>甲寅</sup>年十一月四日辰ノ下刻諸國機死多ク山内モ 七人アリ  
リ諸所大破損過本ヨリ東谷ヘ大破西谷小破損ス</sup> 日楹上人参内

御<sup>船</sup>路國中諸所御巡教中ノ一ノ願抄了寺ニテ布教一之御<sup>船</sup>路 付直ニ御船山

奥ノ院之庫裏再建<sup>右 災 嘉永七<sup>寅</sup>年企之  
ニ付資銀 同安政二<sup>卯</sup>年三月成就</sup> 日楳半形

新土蔵<sup>三間半</sup>造立 安政二年乙卯十月日日楳形判

永守社一<sup>尺五寸</sup>雨覆九<sup>尺</sup>再建立 安政三<sup>丙辰</sup>二月初午日

裏門檜皮葺更 安政三<sup>丙辰</sup>年二月廿八日日楳形判

祖師堂ノ人天蓋<sup>三間四方</sup>再興<sup>板木塙中ヘ依頼ス</sup> 安政三

(59オ)

(59ウ)



身延山歴代略譜（北沢）

辰年三月廿八日 棟札日楹判形」

御資料而實不減度ノ額 村雲昭正 文院日尊尼宮ノ筆  
拜殿 安政三丙辰六月彫刻

相輪塔 去ル寅年災災ス依之下ノ古地ヨリ三光堂前へ引移シ再  
建施主ハ堀之内日淵日趣金五十兩納 安政三辰年

金仏ノ釈尊 右側災罹ル 御院代日願師自志ニテ修復ス  
安政三丙辰年

法久庵上ノ山ナリ之額 楹師ノ筆」

本盤文殊普賢ノ二像 安政四丁巳正月 楹師開光判形  
大坂年參放生ノ阿彌主ナリ

古仏堂ノ祖師 天祥七面天 開帳 安政四丁巳七月十九日ヨリ」六十日  
間於深川淨心寺」

唐本一切経 傳大土像共 安政四丁未八月良辰谷中領玄寺ヨリ納之」

三天金ノ大水鉢 一對 安政四丁巳年九月 楹師代」  
門前 釘銅鉄間屋中納之

一切経藏 (6) 大地震破損ス依之遷移更四方ノ底行道」  
佛閣下新造安政五戊午九月 日楹判形

二重塔 御瓦家根ニ改葺之并惣造作令周備也 日楹判形」  
安政五戊午十月十三日

惣門檜皮葺更 安政五戊午十一月吉辰 日楹判形」  
施主小林小太郎金五十兩納

五重塔 (6) 安政三丙辰四月八日柱立 日楹判形」  
同五戊午年十二月三重マテ組建之納納之

奥書院學問所休息所三ヶ所合ニ二棟ト再建立」安政三丙  
辰年秋企之同年十二月吉辰上棟日楹判形 同六年」

已未年三月全成就」

安政五戊午年十二月廿九日七十九才入寂」

(60ウ)

〔註〕

(1) 川越本應寺

(2) 新楹ニ代動ル

(3) (日) 遊ト

(4) 去ル嘉永二己酉春日新上人御代

(5) 薪師代建立

(6) 薪師代新始メ地形取り賦

六十八世慈祥院日實上人 字友貞」

泉州堺ノ産」

師範ハ妙境院日研聖人 堀之内妙法寺 奥律妙覺寺」  
文化四丁卯十一月十五日

上總木戸妙久寺 京岡崎満願寺 飯高玄二百五十三世」  
安政六己未年京岡崎ヨリ 四月廿六日入山在位二年」

兒童 誠壽丸 甲府ノ産子 教俊日貞 (3)」

同 秀壽丸 甲府ノ産子 權実強三師ニ勲  
孫師ノ弟子 宣秀日榮 文久二壬戌九月六日」

院代 永壽院日等聖人 字教雨 尾州國照寺 シナ常光寺」  
明治九丙子五月十二日

同 戒修院日確聖人 字教印 淺野玉泉寺  
慶応四戊辰四月十五日」

隨身 厚湖院日曼聖人 字教応 土州要法寺」

七面山ハ寛厚院日容聖人 字教順 上サ奥律ノ正福寺住ヨリ勲  
後ニ京大黒町延慶寺 長崎本應寺」

(6)」

(61オ)

奥院ハ是教院日良聖人 明治十四年八月十八日六十二才  
二重塔ノ諸尊入仏供養 安政六年己未 日実判形

影現本社幣殿拜殿檜皮葺替并惣修復成就  
安政六己未年八月十九日 日実判形

通本橋震災大損惣修復 右同断 日実判形

一切経蔵ハ 新徳同代ニ成就 目録金千五百七十五兩也 安政七庚申年  
酒屋中奉納今般上様

四月二日吉辰 日実判形

太鼓堂ハ 薪節代金之租物彫形刻面海上廻シ山岩へ 安政七改万延元  
入堂へ同年十二月五日甲子 柱立同六月上并成就ス太鼓  
喜辰ニ付九ツ時ヨリ打初也 棟札ハ万延元年 庚申 六月吉辰

日実判形

帝釈堂ニ間半再建立 万延元庚申九月庚申日 日実判形  
本行坊日行建立之

円師堂震災ニ付惣修復 万延元庚申年 日実判形  
十月

宝剣之雨家根土瓦 柿坂耳ナリ改テ為土瓦ニ 日実判形  
万延元庚申十月

五重塔再建成就之棟札 万延元庚申年九月奉納 同年十一月十一  
日上棟遷一座之初り納之恒シ五重塔ハ薪

師代金之板師実師ノ三ニ代ニテ  
全成就ス 日実判形

万延元 庚申 年十一月四日八十三才入寂

〔註〕

- (1) 一ノ瀬妙了寺ニテ請待式  
(2) 「三」を「二」と訂正。

身延山歴代略譜 (北沢)

(61ウ)

(3) 「上条法光寺」歴。

(4) 「親」を「寛」と訂正。

(5) 此時キノ随從ニ鶴川日行 後ニ浅草玉泉寺内房本  
成寺 友 後ニ切石正傳寺へ住死

六十九世事感院日琢上人 字宜慶

甲州東南胡村之産也

師範ハ事玄院日祥聖人 字宜慶 同東南胡村ノ産 長久寺歴  
一ノ瀬妙了寺三十二世 四十八才化

東南胡長久寺歴 京山科文講 飯高三百二世 佐

野妙顯寺ノ一準歴 小湊山ヨリ

萬延元 庚申 年十二月八日 同十二日入山在位五年

兒童 政禱丸弟子宣會日顯

同 龜壽丸弟子宣楨甲府ノ産琢祥兩代動ル

院代 智心院日定聖人 字大忍 觀者ナリ 牛込幸四寺 文久二  
壬戌七月七日化 元ハ青柳昌福寺ノ弟子ニテ遠隔ト云フ院  
代中病死ニ付昌福寺へ葬ル 歟

同 智進院日慈聖人 字泰忍 歟許權律師 高田  
感通寺

同 潮松院日愈聖人 字海郁 元ト感通坊住 河西村法界  
寺住ニテ 明治十六年癸未八月廿七日化

隨身 事妙院日珖聖人 字立 四ツ谷妙行寺  
八十四才

七面山ハ見如院日輝聖人 文久四甲子三月十九日  
遠州北原村住持行寺

身延山歴代略譜（北沢）

奥院ハ智啓院日明聖人 文久三癸亥三月廿一日 清木房 大蓮房 五十五才

同 顯隆院日勢聖人 南坊 志摩坊 横根村 正行寺ニテ化 明治十五年四月廿一日

五十八才

古仏堂柿板葺替成就 文久二壬戌三月下旬 日琢判形

奥ノ院祖師 天拜七面宮開帳 文久三癸亥七月十九日ヨリ六十 日間 於深川淨心寺

久遠寺ノ額 文久三癸亥八月開帳中施主日本橋十三日橋中 孫師代

清正堂再建 三間半 文久四甲子正月吉辰成就棟札 日琢判形 四間半 同年二月廿日山火事ニテ焼失又再建企之

二天門成就 元治元甲子年六月十七日上棟 棟札日琢判形 同十八日三天尊聖座心師ノ開光ナリ

五百大阿羅漢之像 聖座同十八日ナリ 日琢師ノ開光判形 施主江戸太田嘉右衛門

奥二王門 敬修復柿板葺替孫師代企之 孫師代成就 慶応二丙寅三月廿七日 棟札日祥判形

元治元 甲子 年七月三日八十才入寂

〔註〕

（一）字の記載が不完全である。

七十世止明院日祥上人 初八日 祥 字顯鶴

越後国田家村ノ産

父 登山院宗盛日良 寛政四壬子十月二日 母 國法院妙本日喜 文化七庚午四月廿七日

読師ハ妙靜院日觀聖人 天保四癸巳八月十七日化 越後国新保在田家村妙本寺座

次ノ師ハ智明院日了聖人 字顯鶴 維司ケ谷法明寺三十五世 文政八乙酉十二月廿八日

（63才）

京山科文講 京妙傳寺 日開上人御代天保九戌年大坂巡説「御 關居ス」夫 飯高三百四世

元治元 甲子 年 布施村妙泉寺 十月二日入山 在位七年

児童 万壽丸 江戸ノ産 顯觀日明

同 菊壽丸 江戸ノ産 内藤氏 本祥日觀

同 鶴壽丸 江戸ノ産 鮮明院日昇法師 慶元乙丑六月 妙衣院日忍聖人 字月松 越后辺發達寺 甲州「布施妙

院代 順妙院日惠聖人 字泰庵 下小松崎村顯実寺 辺見日野春 僧都 明治八乙亥七月十七日七十四才ニテ化ス

同 順妙院日惠聖人 村見法寺座 飯高文壽三百卅五世 任大 鬼船妙現寺（葬ル）妙了寺四十三世日如向ス

隨身 觀樹院日明聖人 字本考 布施妙泉寺廿五世

同 七面山ハ是諦院日研聖人 慶元乙丑九月十日 五十才

同 太善院日大聖人 一老 應 居 光子沢光光庵（隔 居シテ化ス 廿六日 八十一才）

奥院ハ誠壽院日順聖人 端場坊四十一世 明治十丁丑八月九日 四十七才

七面山ノ拜殿向拜檜皮葺更 慶元乙丑九月十九日成就 日祥判形

三門類焼ス 慶應元乙丑十二月十四日昼四時半時ヨ

リ中谷仙莖坊ヨリ出火 円莖坊 山本坊 松井 坊 惠善坊 竹之房 定林房 樋沢坊 了源坊

四 七面山ノ拜殿向拜檜皮葺更 慶元乙丑九月十九日成就 日祥判形

三門類焼ス 慶應元乙丑十二月十四日昼四時半時ヨ

リ中谷仙莖坊ヨリ出火 円莖坊 山本坊 松井 坊 惠善坊 竹之房 定林房 樋沢坊 了源坊

至言坊 南之坊 法雲坊」正運坊 本学坊 凉池  
坊 常経坊 常唱堂 同别当寮」天神社 太子堂  
三夜堂 妙翁社 妙見堂 松尾社」二王尊ノ供所  
束テ小堂八ヶ所 支院十七ヶ所 拟テ」上町中町  
上新町横町片隈町下町 塩谷村屋ニテ火止マル」

仮リ二王門建立

慶応二丙寅年八月七日 日祥判形」  
成説 上様遷座

舞臺

地震災地形固ノ修補又々四本柱ニテ土瓦故重ク桁垂ルム」(6)  
故ニ棟板ヲ以テ掛替成説ス

明治 元 戊辰 十月吉辰日祥判形」

明治三 庚午 年七月八日 久遠寺住持職 賜ニ宣言」全十一日  
并上人号

東京御所参内」

奥ノ院鐘堂<sup>ニ付</sup>再建立 元治三乙丑五月九日新初ノ日祥判形」  
明治三庚午年十月十三日成説

燈主堂柿板葺替成就 明治三 庚午 年十月十三日日祥  
判形」

同 三年十一月七日退蔵ス 西谷本領坊(四居三年ト」

明治四未年春為ニ御療養ニ東京雜司ヶ谷法明寺へ御

越シ夫ヨリ生国」越後へ師親ノ廟参ニ御越シ御滯

在同五 壬申 六月九日金津妙蓮」寺ニテ御遷化奉ニ

火葬ニ七月九日法明」寺へ着同八月十九日全ク当

山へ御着九月二日全骨拝礼同日」御本葬也」

明治五 壬申 年六月九日八十六才入寂」

身延山歴代略譜(北沢)

〔註〕

(1) 琢祥兩代勤ル

(2) 祥師(「代勤ル」の意ならん。)

(3) 扇師代ハ奥ノ院ヲ勤ル尤モ御弟子ニテ随従来ル仲  
祥兩代ハ七面山別当也

(4) 慶應之火災ヘ頭註

(5) 戊辰ノ乱年上野戦争年ナリ維新ノ改革革命ナリ

(6) 実ハ翌年春御出京ナリ

(7) 実ハ田家村妙本寺ニテ示寂ノ由シ

七十一世智現院日禪上人 初ハト 字壽忍」

当国西郡戸田村ノ産」

片瀬休莖寺 白銀妙円寺 長坂大長寺 小湊山」

京東山文講 飯高三百廿七世」

明治三 庚午 十一月十五日請待十二月三日 小湊ヨリ 在位  
二ヶ年」

院代 智嚴院日理上人 字寿忍 四ツ谷門通寺 長坂大長寺」  
教許德律師

同 智順院日逗聖人 字泰忍 南ノ房卅三 竹之坊三十二世」

隨身 智定院日逗聖人 字忍忍 甲州於曾村妙壽寺」  
孫麟二師ノ隨身

七面山ハ智逗院日照聖人 字覺存 西谷先哲 大乗坊三十三世」

奥院ハ円明院日感聖人 字是忍 常樂坊 本行四十四世」

小庫裏ヲ作り 大庫裏ハ修復ノ会式等ニ用之」  
平常ハ用小庫裏ニ飲食味噌倉等所ニ造之

身延山歴代略譜（北沢）

奥書院柿板葺替之 明治四 辛未 歳日禱判形」

明治四 辛未 年三月七日 久遠寺住持殿 賜三宣旨 同十四日参

内」也御出京御参内相所ニ帰路ニテ御是化ノ由也」

厨司惣修復 明治四 辛未 年五月成就日禱師代」

外位牌堂柿板葺替 明治四辛未年春禱師代企之」

明治四 辛未 四月十八日八十一歳入寂 災ハ在位五ヶ月歟」

(65才)

七十二世郷音院日健上人

教部名設置  
ニ付在大教正

字光運」

丹波国福知山ノ産北風氏」

師範ハ重厚院日實聖人 字順誠 籍之坊廿八世 下谷宗延寺歴」

谷中信行寺 丹波福知山常昌寺 洗足御松庵ニ閑

住 奥津」妙覺寺歴 飯高 文三 百二十世」

明治四 辛未 九月十六日 得十月朔日 上ノ奥津 在位四年」

院代 體遵院日珠聖人 字陰玉 晋山千駄ヶ谷仙壽院住

隨身 醇厚院日康聖人 字教順 弦巻常任寺 依知妙純寺歴」

與ハ当山七十四世吉川日隆上人ノ内弟ナリ 姓ハ福重明治廿一年

二月十三日化」

七面山 八十六世 再 勤 太善院日大聖人 岸之房三十七世 一老隠居ナ

リ 十才」

奥院 円明院日感聖人 本行房四十世 明治廿六(6)」

(65ウ)

(66才)

明治五 壬申 三月五日 久遠寺住持殿 於三甲府城ニ賜宣旨」

全年教部省被設諸宗大山 東京ニ呼出ニ付 健師出京」

全 四月廿八日 權少教正賜宣旨同日参内」

全 六月十三日 大教正賜宣旨同日参内」

奥ノ院祖師 影現七面天 開帳 明治五 壬申 五月十五日ヨ

リ」三十日之間五日ノ日延アリ於深川浄心寺修行

其主在京ナリ院代」

燈主堂土瓦ニ改メ葺更 繼師代和合ノ古瓦ヲ以テ葺之不足ハ

明治五年二月三日即 大陽曆ト改ル也 未曾有之大改

正也」

大坂巡説 三十六年 日 駿遠三尾邊勢京御巡説教

宗祖神庵 釈迦堂修復柿板葺更 明治六 癸酉 日健判形」

清正堂 四間再建立 元治元年子年二月廿日山火事ニテ新堂焼失

同二月廿三日新初メ今明治六 癸酉 二月廿日成就上

棟日健判形」

発軫祖師堂修復 家根茅葺成就日健判形」開關六百

年ニ相当ル明治六年 癸酉 三月十七日」

当山開關六百年之嘉会 明治六 癸酉 六月十日至十九日」十ヶ日

上田本錫寺 祐師一勢之」

鼓樓屋根更 明治六 癸酉 六月十六日棟札日健判形」

外位牌堂柿板葺替成就（8） 醫師代金之 健師代成就

井内外壁塗り替（9） 行道様ノ下 成就 日健代（8） 明治七（9） 甲戌

年二月吉辰（10）」

小方丈本電候也土瓦新規葺替明治七年戊辰四月八日日健判形」

奥院ノ祖師堂并廊下拜殿共修復并家根更等」

明治六年（11） 癸酉十一月八日上棟昨申ノ歳東京開帳ノ

有志ヲ」以テ修造之 大教正日健判形」

支院拾三ヶ坊県庁ヨリ廢寺被申付（12） 明治七年戊辰一月ノ下 旬右ハ寺跡舊上ノ際 無遺ニシテ無住ト 書上候故也（13）」

明治七（14） 甲戌四月廿四日退藏西谷本種坊へ閑居廿九ヶ

日ト」

全 五月廿二日八十四才入寂」

〔註〕

（1） 五十三世ト

（2） 里見（氏）

（3） 福重（氏）

（4） 祥健兩代動ル

（5） 禪健兩代動ル

（6） 遷化年号か。

（7） 上東御名代一真院日治聖人駿府盛応寺歴

學頭トシテ出京 文嘉 誠研 泰山

身延山歴代略譜（北沢）

侍従トシテ 吉田日昇 伊奈日要

各上京御名代ナリ後チ御自身モ出京ス 〈頭註〉

（8） 明治七年二月迄カ

（9） 記載順の違ひ旨記してある。本来66丁裏にあり。

註（10） 往見。指定順に随い本文に記入した（前

後四項目）。

（10） 是レハ外位牌堂ノ夏

（11） 県下自他宗トモ一般也

（12） 但シ妙了寺ノ子院モ廢寺モ書上同様被廢候事

（13） 実ハ猪根村頂法寺へ御隠住カ

準歴潮生院日祐上人 字義裏

明治二（15） 巳年二月初分飯高再檀三百三十六世信州

上田本陽」寺十五世 京東山文講」

明治六（16） 癸酉六月八日日本陽寺ヨリ入山（17） 御師大坂御巡説

当山開闢六百年之嘉会法要勤之同月廿四日ニ信

州へ御歸寺 明治六年（18） 癸酉八月十五日七十二才ニ

テ」御遷化 本陽寺へ葬ル

七十三世文明院日薩上人 大僧正 字文嘉」

上州桐生ノ産 新居氏（19）」

師範ハ大車院日運聖人（20） 字文貞 大同原春庭寺 神楽坂」曾國寺

池上草歴六十二世（21） 越後柏崎妙行

寺京 東山文講」

身延山歴代略譜（北沢）

(67ウ)

東京駒込蓮久寺 飯高玄峯ニシテ  
東山作文譜 南谷談林ニテ日講ス  
抑モ師ハ「壯年ヨリ加州竜像寺優陀那日輝和尚  
ニ随学シ充治園ノ耆人ナリ」依テ蓮久寺住中モ私  
塾ヲ設ケ生徒ヲ教育ス遇々明治維新ノ革命「際シ  
朝廷教部省ヲ創立シ諸宗ノ学侶ヲ芝増上寺大教院  
ヘ徵集ス」師ハ初メヨリ出勤ノ宗内百般ノ事務ヲ  
主ル実ニ維新ノ元勳也」

明治七戌ノ春七宗取締トノ甲信等巡回派出勤ル全  
年依ニ本省命「当山七十三世ニ住職晋山シテ内外  
之流弊ヲ釐正一新ス初メ訓導」ヨリ大教正ニ昇級  
シ後ニ任大僧正管長勤務 越後松崎妙行「寺  
住名ヲ帯フ」

因ニ記ス加州充治園ノ学生方ニハ」

新居文嘉日薩

吉川誠研日鑑」

吉田堯存日昇 甲フ位立寺住化  
池上住ス新蜀本

三村宴政日修」

小林泰山日昇 池上住ス新蜀本

中田 日阜」

存朗」

以上」

明治七 甲戌 三月三日久遠寺住職賜ニ指令「教部省ヨ

リ」

全 五月十九日四十六才ニテ入山 在位三年」

管長奈職中殊ニ宗内百般ノ事務多忙ニ付出京」

(68ウ)

代理 晴心院日陳聖人 字玄妙 飯高玄五百四十五  
姓實 明治七甲戌五月七日登山  
遠光寺 三十六世 閏 全年十一月十九日退院半ケ年也 明治十四辛

己三月十日化」

代理 自厚院日鑑聖人 字頌隆 飯高玄講六百三十  
姓吉川 明治七年十一月ヨリ全九丙  
世」下総内山村妙光寺 代理勤兼願頭役統テ当山七

子十一月迄九二ヶ年」  
十四世ヘ晋住ス

七面山ハ要中院日顯聖人 山本坊三十二世 薩摩ノ兩代勤  
一老隨居 明治十丁丑二月廿三日七

才」

奥院ハ本鏡院日行聖人 定林房廿八世 相支村正慶寺  
明治十八乙酉五月三十一日 五十一才」

明治七 甲戌 年十一月月中旬 代理吉川日鑑師 御入山也」  
實主新居日薩師

山内旧規改正十六ヶ条 其余漸次ニ釐正之事」

明治七年十一月廿二日甲駿ノ三ヶ寺支院中會議」

支院四十七ヶ坊合併 明治七甲戌十一月二十六日會議  
全年十二月十五日集庁指令」

建置寺 三十五ヶ坊」

改正条件」

皇政維新ノ御趣意ニ相基キ百般ノ事務旧弊ヲ洗除ス  
ヘキハ勿論」勉テ無益ノ冗務ヲ相省キ教義研究ヲ專  
務ト相心掛報國護「法ノ本意ヲ以テ僧儀ヲ相乱サス  
文明ノ氣運ニ進歩シ治化翼」賛ノ功相立候様注意有  
之度今般山内改正左之通相定」候」

(68オ)

(69オ)

一山主百日祖堂朝勤ノ定限廃止セシメ在山中毎朝參堂之事」

一塔中一般祖堂朝勤毎月割合定日出席必不可欠如之事」但シ不參ノ者ハ代勤相定且其旨具狀ヲ以テ可届出事」

一定日講席塔中一同聴聞不可不參ノ事」但シ不參ノ者ハ具狀ヲ以テ可届出事」

一毎日ノ講釈会説等塔中一同可成丈精々注意出席可致事」

一老僧当番役等ノ課名廃止之事 但シ末派触頭并ニ諸獻納請書等」自今当番印不相用山主并代理ノ印ヲ相用候事」

一年令法聽ニ不抱專ラ人材ヲ登庸シ役課可申付事」

一教導職ノ等級ヲ以テ席次相定候事」

一当分ノ内諸振舞時斉等一切廃止之事」

一西谷檀林ノ旧号ヲ廃シ自今身延檀林ト相唱ヘ候事」但シ当分ノ内善学院ヘ留守居一名相定置講席ハ本院ニ於相勤候事」

一当分之内能化職相廃シ山主直講ノ事 但シ山主不在山之日ハ代理ヲ以可相勤事」

一教導職試補ヲ以テ新談義可相換之事」

身延山歴代略譜(北沢)

(69ウ)

一本職拝命ヲ以テ上座成功ニ可相換事」  
一檀林生徒ヲ本院ヘ相移シ令勤學候事」

一諸末寺交代ノ節ハ年令法聽ニ不抱公平ニ人撰シ本院ニ於テ篤<sup>リ</sup>」檢査ヲ遂ケ住職当器ノ者ニ候ハム添翰可差出之事」

一諸末寺繼目納金之儀ハ本院始塔中配賦等一切廃止シ右納金」積立諸堂向營繕ノ資本ニ可相備之事」  
但年末会算シ一年ノ金納ヲ諸末ニ違<sup>テ</sup>ヲ以可披露事」

一諸国參詣有志獻納ノ儀ハ多少ニ不抱納主ヨリ本院ヘ直納」可致事」但シ諸書ハ山主実印ヲ以テ可差出若シ不在山之時ハ代理ニテ諸書」可相渡之事」  
右之条件末頭塔中会議ノ上確定条条各寺塔中篤<sup>リ</sup>」  
得其意堅可遵守者也」

(70オ)

諸堂方丈向類焼悉皆<sup>明治八年乙亥一月十日午後六時</sup>  
<sup>西谷本檀坊ヨリ出火</sup>

本堂 祖師堂 位牌堂 二天門 円師堂 鼓樓」  
鐘樓 同番所 二重塔 万燈 舞臺 同樂屋」水鉢兩屋 御供所 會所 作事小ヤ 通本橋 同回廊」 祈禱堂 脱影堂 夏鐘堂 影現七面社并幣殿 拜殿」<sup>(8)</sup>五重塔<sup>(9)</sup> 蓮師廟堂 大方丈 水鳴樓 經藏」真骨宝藏并中央 廊下 拜殿 古佛堂 永



身延山歷代略譜（北沢）

守ノ社」奥書院并膳所 大庫裏 寄附茶之間 玄  
関式墓」對面所 院代部屋 穀倉 味噌倉 小  
庫裏 拾軒部屋」時之鐘堂 廊下十三ヶ所 不淨  
場十ヶ所 湯殿五ヶ所」鐘番小屋 東テ計七拾五  
棟」

寺中十二ヶ坊五十八棟 町家三軒拾棟 若者舞臺  
棟」本種坊 常住坊 尊賀堂 琥珀稻荷社 本妙  
坊 杉ノ坊」妙仙坊辰師堂 知恩坊 窪之坊本堂  
宝藏 秀悅坊」下之坊 岸之坊 林藏坊本堂 興  
師堂土藏 花之坊」

惣計百四拾四棟一時ニ類焼ス」

本地堂 西寶藏 東寶藏 新寶藏 表門」  
同番所 裏門」

右七ヶ所ハ全ク残ル」

祖師堂仮殿七間半

寛文九年己酉安藤形庵守造立之 西谷藤林ノ鎌堂ヲ  
元トノ大方丈ノ地ヘ引移」立之 明治八乙亥年三月

廿一日柱立五月十日祖師御遷座二十三十四日 開堂供養」

真骨堂仮殿六間二尺 嘉永七年庚申十月是感院日行造立之 本行坊ノ客殿  
ヲ引移シ造立之 明治八乙亥年四月七日柱立同五

月十日遷座」

講究所十一間

玄関式墓一丈 宝永年中造立之西谷妙玄庵」ヲ引移ノ  
建立之 明治八乙亥年六月十六日柱立

九月上葬成就同十二月八日移徙也」

庫裏仮厨司八間 底九尺 新造受附二間半 内玄関式墓」二間

（71ウ）

新造添 <sup>(11)</sup> 宝曆年間造立ノ西谷能化寮」書院ヲ引移シ明治八  
乙亥年十月廿二日柱立同十二月八日成就移徙之  
生徒寮并廊下三間半 水盥雨屋七尺廊下二ヶ所」  
惣置二間八間 <sup>(12)</sup> 長屋

普請會所六間 庇九尺 法寶坊ヲ 人足休息所妙尊坊ヲ」人足  
休息

尾州世話人會所」光緒坊ヲ引建之移徙 明治八年乙亥十二月八日成就」

奥書院十一間 文政七年申年啓運院日修造立ノ清水房ノ 書院ヲ元トノ真  
骨ノ宝藏ノ地ヘ建之 明治九丙子三月一日柱立四月廿五日  
移徙」

大書院七間 左右傍側 新造立 明治八丙子四月十四日柱立」  
全八年九月十五成就

御真骨ノ八角寶藏五間ノ八角造り 明治八乙亥十一月九日 新初全  
ノ折藏堂ノ旧地ナリ」元ト 九丙子年三月十一日地形取始

仮普請成就ニ付上棟法會修行 明治九 丙子 四月廿九  
日」三十日五月一二三日ノ五日間法用勤ル薩師帰

登山勤之」

棟札ハ 仮祖師堂 真骨堂 講究所 庭裏 小僧院」  
生徒寮 右六枚代理日臨師ノ筆判形

外ニ 通本橋ノ廊下柿板葺更 明治七甲戌十月金之末瀧ニテ同「八年  
乙亥一月十日焼失ス」施主ハ西京石田  
音吉」

御住位大野本遠寺兼住職 廿」

明治九 丙子 八月御退名 東京ニテ管長勤務」池上ヘ  
<sup>(18)</sup>

御住山」

明治廿一戊子年八月廿九日於池上五十九才入寂』

〔註〕

- (1) 父 是法院能義日其母 法性院妙真日養
- (2) 1 (日) 軌
- (3) (六十二世) ト
- (4) 全九年八月退任職
- (5) 柏崎妙行寺ヨリト
- (6) (會議) 決定
- (7) 明治八年大火災(頭註)
- (8) 上ノ山
- (9) 同
- (10) 火元
- (11) 妙了寺十八世日秀(造立)
- (12) (善学院) 庫裡ヲ(引移シ)
- (13) 物置か。
- (14) 西ノ方水鳴樓トシ東ノ方建増シ御居間トナスカ
- (15) 是ハ對面所也
- (16) 全十四年三月廿一日鑑師代ニ至リ成就上棟惣供養
- (17) 施主尾州一國一円信徒丹精
- (18) 函館常住寺開山ト六十五世ト

身延山歴代略譜(北沢)

(72オ)

七十四世自厚院日鑑上人 字誠研 改順誠

土州之産 吉川氏(稱清号)

父 證悟法如居士 母 淨智妙得信女 事同妻直女事 茶山ニ葬ル

師範ハ體蓮院日擬聖人

字嚴敏 土州要法寺三十二世

堀之内妙法寺宿坊ニノ加州充治園日輝和尚ノ門人也 飯高」玄講六百三十世 内山妙光寺住シ私塾ヲ設学徒ヲ教育ス」飯高廃学ニ及ヒ時勢不容易ニ付日々通勤ノ於ニ心性莽」二三ノ現座ヘ日講ス維新革命ニ際シ訓導ヨリ大僧正迄昇級ス管長ヲ奉職ス」

明治九丙子年十二月二日住職辞令同月六日代理』

二ヶ年勤務ニテ直ニ入山 在位十一ヶ年」

昔諸體遊院日珠聖人 字隆玉 千駄ヶ谷仙寿院住ナリ」飯高檀林幹事體遊院日珠聖人 旧法輪寺歴 当山」七十二世日鑑上人ノ院

代勤メ明治七年戊申五月上旬引取リ同八乙亥火災ニ付」登山西谷飯住居ヨリ引統キ常訓会所在居ニテ諸向内外普請」幹事ヲ勤ル」

七面山ハ妙賢院日禎聖人 本行房三十九世」

奥院ハ本鏡院日行聖人 鑑師代ヨリ勤続

釋量院社 地再建 明治九丙子十二月七日遷宮禮日鑑判形」

時之鐘堂 四方再建 明治九丙子十一月石敬初同十年丁丑一月八日」柱立四月成就 施主南条謙中

身延山歴代略譜（北沢）

支院四ヶ坊合併

西之坊 國沢坊 門敷坊 東之坊 明治十一年戊寅二月十三日指令

祖師堂十二間再建立

明治十一年戊寅二月十三日指令 同日十二間已卯同廿九日宗祖大士遷座供養同四月三十日ヨリ五月十三日マテ六百遠忌万部修行

祖師宮殿四方再建立

明治十三年庚申九月成就 宛起主玉泉寺住持松川日行

御眞骨ノ寶藏

五間 鑲師代明治九年九月十日柱立 鑲師代同十四年辛巳三月廿一日上棟

全拜殿五間半

明治十一年戊寅八月廿六日柱立同十四年辛巳三月廿一日上棟開

同時新造

本地堂柿板葺更 明治十二年己卯十月成就 日鑑代

小書院四間

天保年中新造ノ西谷談林本是院各頭發引之 明治十四年六百遠忌手挟ニ付講究所ノ裏ニ建ル

宗祖六百遠忌

明治十四年辛巳歲正當

四月廿九日ヨリ五月十三日迄 七月七日ヨリ十三日迄 十一月十五日ヨリ十二月五日迄 三大會共諸末

寺末頭登山勳(8)

本堂十四間再建之企

明治十五年壬午三月二日新立鑑師代

布教

陛下布教ハ勿論 諸寺ニテ遠忌ノ請待 尚大災後ノ事故

大鐘堂四方再建立

明治十三年庚辰三月廿六日新初メ 同十四年辛巳十二月三日柱立初メ 同十五年壬午五月廿四日上棟ナ

燒失 本院厨子ウヘホリ出火ス

講究所六間 玄関附

小書院建立ナリ 年 生徒寮三間半也 明治十五年壬午十一月

(74オ)

廿四日午前十二時出火 巡教中故ニ日薩上人一登山會式御勳

也重立寺院ト布教結社設立等ノ説論中ナリ市川依田孝モ在山ナリ風靜ナル故ニ四棟ニテ鎮火ニ原因ハ會式中大火ヲ焚キ天上ウヘ燄火氣龍散ト云フ

祖堂前ノ金ノ香炉并雨屋

新厨司十二間半再建立 明治十六癸未正月十三日新初 同六月柱立同十一月十日落成 移徒シ

但シ甲駿兩國末寺及有志中施主也

祖師堂銅瓦ニ葺初メ 明治十八乙酉年九月

七面山本殿幣殿銅瓦葺 明治十四年企之 明治十八年旧九月十八日成就上棟

大客殿再建 明治十八乙酉年八月四日新初 同代素建ス

自厚山清分寺建立 明治十八年旧八月十四日新初

額之分鑑師揮毫

祖堂 栖神閣 厨司 法喜堂 覺林房 鶴林精舎 大乗坊 表門

本行坊琥珀殿邊盛坊摩利支殿 松井房開運殿

御眞骨分骨 十月八日分骨 九州遠後久留米妙壽寺日願上人之徒弟ニテ 流川村一本仏寺創立主中洲隱妙ノ要請ニテ旧例ニ依リ三ヶ

分骨シ証書一通ヲ授ケ 鑲師モ御加判アリ右鎮西身延本仏寺ハ日薩上人ヲ開祖シ隱妙日振ヲ第二世トス 唱遊院ト号シテ日薩上人ノ門人也

明治十九丙戌年一月十三日六十六才入寂 東テ十三年

(註) 大僧正

(74ウ)

- (2) 明治五 壬申 四月久遠寺字頭トナリ教部省へ出仕ス  
全七年十一月ヨリ九年十一月マテ御在山薩師ノ御  
代理在勤ス
- (3) 里見(氏)
- (4) 祖師宮殿の規模不分明。
- (5) 尾州惣講中施主
- (6) 「(廿三)日」を朱字加筆。
- (7) 「中央廊下」の規模不分明。
- (8) 法華經一万部誦誦薩師モ御出勤也
- (9) 未成功ナリ
- (10) 法喜堂ナリ
- (11) 十九年七月建前
- (12) 日向上人ノ古跡樋沢坊地所へ建立ス隠栖所ナリ不  
移遷化ス
- (13) 鎮西身延別院安置
- (14) 明治十四五年カ
- (15) 中洲耀妙師ハ池上へ晋山日振是也リ化ス
- 七十五世心妙院日修上人 大僧正 字宴政<sup>(1)</sup>  
備後国深津郡川口村中村源助四男<sup>(2)</sup> 幼名 本家同村  
三村政右衛門  
籍」
- 母父 東是院行忠日謝 天保三壬辰五月十二日  
惠性院妙貞日儀 天保十己亥十二月廿八日
- 身延山歴代略譜(北沢)

(75オ)

- 師範ハ普門院日現聖人<sup>(1)</sup> 御中加越郡東整原村妙傳寺十八世  
安政六己未年十月廿一日 七十三才  
後ノ師ハ<sup>(3)</sup> 院日合聖人<sup>(4)</sup> 御後沼隈郡水呑村妙頭寺
- 文政六 癸未 年三月四日生レ九才出家天保十年鶏冠  
井檀林ニテ新設<sup>(5)</sup> 山嶺郡上久我村本清寺住<sup>(6)</sup> 山戸郡和尙  
室<sup>(7)</sup> 随逐加州充治園ノ学生ナリ 中村庠成功水呑村  
妙頭寺ヨリ京本国寺<sup>(8)</sup> 四十六世 明治十八年十一月任  
管長
- 明治十九 丙戌 七月十三日六十四才ニテ入山 在位六  
年<sup>(6)</sup>
- 時々<sup>(6)</sup> 代理妙俊院日壽聖人<sup>(7)</sup> 字要俊 志摩坊 寛林房  
「老職也 大諱義」
- 監督 顯壽院日遙聖人<sup>(7)</sup> 字顯好 西谷先哲 薩師ノ学人 奥津檀海  
寺 中条良遠寺 池田本寛寺 玉沢
- 七面山ハ妙賢院日積<sup>(8)</sup> 明治廿三年庚寅十月廿日 七十一才  
本行坊三十九世
- 同 智逗院日照 大衆坊 竹之坊三十四世 七面山嶺場ヨリ
- 奥院ハ妙行院日慈林藏坊三十三世
- 同 要雄院日現竹之坊三十五世<sup>(9)</sup>
- 大客殿ノ造作<sup>(10)</sup> 薩師代造立土居其落成 修師入山明治十九年  
コリ同廿四年五月迄追々造作ス
- 身延保存會組織設立<sup>(11)</sup> 祖山永統維持元資金五十万円募集ノ目的  
ヲ以テス 明治十九丙戌年十一月発会ス  
七面山ノ本殿再建立 明治二十年丁亥旧四月十日上履<sup>(12)</sup>

身延山歴代略譜 (北沢)

大鐘堂 監師代建立 今回土瓦葺成ス  
明治二十年丁亥四月

惣門内太平橋掛替 從來ノ規模ヲ改メ新築壯觀ヲ増ス  
明治廿丁亥四月十一日 最初ノ上模式

祖師堂 土瓦葺落成 監師代銅板ヲ以テ所々葺始ト 雖容易ノ事ニアラ  
ス依テ暫ク土瓦ヲ以テ葺置ク 明治二十丁亥十二月成就

米蔵穀入土蔵 西谷智喜院ノ旧土蔵ヲ移転改築ス  
明治廿一年五月落成

奥ノ院二王門土瓦葺成就 明治廿二年六月

前檐当加藤要明 後檐当田中日現 普請幹事ハ

永田裕爾後ニ山高実相寺住

旧上地御料林委託許可 明治廿三年三月廿一日

遠州金原明尊氏 東京伊藤茂右衛門氏 寧先尽カス  
栽培主在 山高実相寺前住岩瀬日照

大堂祖像居開帳 明治廿三年五月六日ヨリ廿六日迄 三周間開原併  
テ大客殿ニ於テ付室 古書圖ヲ展覧セシム但シ居  
開帳ノ例古來当山ニ付テ是  
レナシ 今回ヲ嚆矢トス

飯二王門ヲ再ヒ建立 明治廿三年五月廿五日落成  
普請担当 惠善坊高明院日永

宗祖御草庵ノ旧跡地方拾間四方御影石玉垣新築  
明治廿三年七月落成 駿州内房本成寺住持鶴川日行ノ願成ナリ  
寄附主 旧播磨姫路侯ノ御後室伯耆守井頭府院殿文字ノ御方ナリ

納骨堂再建立 明治廿三年新始 廿四年十月上ノ重綱  
明治廿三年七月落成

厨司ノ土瓦家根成就 明治廿三年 庚寅 旧ノ十月  
法喜堂ノ土瓦家根成就

明治二十四年 辛卯 年五月十七日 谷中端輪寺廢棄中  
六十九歳入寂

(註)

(1) 三村(氏)

(2) 「幼」名「なるべし」  
(3) 院号を欠く。  
(4) 「七才」を「九才」と訂正。  
(5) 六十五世 晋山ナリ  
(6) 鈴木(氏)  
(7) 久保田(氏)  
(8) 岩瀬(氏)  
(9) 田中(氏)

(10) 本三門ハ慶應元十二月十四日焼失ニ付全二寅八月  
飯二王門ヲ立ル然ル(ニ)又焼失ニ付飯二再立  
ス

(1) 七十六世春應院日阜上人 字

(註)

(1) 何故か歴世数・院日号のみの記載となっている。  
76丁裏の全てを記載予定(白紙)としている。

七十七世境行院日殿上人 字一行

師範ハ静養院日勝聖人 字一遠 飯高玄講五百八十九世一房州  
天津日蓮寺ヨリ總持村田 当山六十七

代日殿上人御代七  
面山ノ別当勤ル

法師倉村宗延寺静養 七面山ニテ得度 谷中端輪寺ニ圓身中飯高玄  
院住職中ヨリ圓身スト 後チ玉沢江門

聖人ノ門 受讓玉沢江住ス 明治廿一年ノ頃宗務院管  
人トナル

長日修上人ノ「監督ヲ勤ル會議後為宗会  
同盟覺ト相分紛松  
有之」

明治廿六年十月 <sup>(2)</sup> 日請待」

明治廿七年三月十日玉沢ヨリ入山式』

監督 智明院日布聖人 姓相田  
字誠誓 智御呂福寺  
明治廿七年秋池田本覺寺へ入山  
ス」

執事 特命 兄嶋宜晃  
推選 和田龜龍 神取充門寺 山高実相寺 小河原淨蓮寺」

隨身長 落合舜良  
小林泰秀」

<sup>(3)</sup> 七面山ハ 元ト大林坊  
堀場ノ坊 赤沢妙福寺 篠原本妙寺 又」

奥院ハ要雄院日現 姓田中 竹之坊三十五世」

監督 真昇院日竜聖人 姓山崎  
字願僊 妙了寺四十四世  
明治廿八年十一月冬ヨリ」

〔註〕

(1) 西谷ニテ新説ス

(2) 日付を欠く。

(3) 別当の院日号を欠く。

(4) 「廿九年」を「廿八年十一月」と訂正。

妙玄庵歴代帖（林）

	670	瑞祥院	春旭	日恕	富士郡橋場	本立寺
	671	智俊院	了遠	日遣	駿・楠金	長遠寺
	672	本光院	唯誠	日達	甲府	信立寺塔中 顯誠坊
	673	本立院	本英	日達	同	本覚坊
	674	中央承院	純澄	日温	遠州中村	満勝寺 弟子
	675	本中院	堯光	日慈	伝法村	本蔵寺
三老ニテ前同代助講	676	春春智院	春海	日讓	西南湖	本成寺 弟子
	677	本治院	貞玄	日龜	篠原	法久寺
中頭ニテ助講	678	瑞光院	春啓	日啓		
	679	飲静院	飲順	日德	北田村	妙栄寺
	680	善応院	義応	日行	落居	妙蓮寺
中座ニテ助講	681	長真院	通真	日清	梅ヶ島	蓮久寺
中座助講	682	俊明院	義存	日穩	中里	本光寺 弟子
	683	宏心院	是頂	日尹	大宮	常泉寺
中座ニテ助講	684	諦明院	玄善	日觀	掛川	正願寺 弟子

妙玄庵歴代帖（林）

639	歛	秀	院	宣	朗	日	光	八木門村	法泉寺
640	真	妙	院	義	勤	日	過	信州松本	妙光寺
641	明	慈	院	泰	忠	日	顯	塩之上村	塩上寺
642	勇	智	院	圓	勇	日	義	薬袋	円立寺
643	一	柳	院	啓	叔	日	泉	万沢	
644	助	智瑞	院	慶	恩	日	誠	小繩	妙浄寺
			院	春	学	日	貞	川崎	法光寺
645	顯	雄	院	見	孝	日	明	板山村	正法寺
646	潮	寿	院	泰	遠	日	峰		
647	妙	顯	院	泰	応	日	喜	鬼嶋村	妙現寺
648	温	祥	院	海	実	日	相	飯野村	福王寺
649	祥	教	院	義	教	日	迅	米倉	本光寺
650	乘	雄	院	湛	応	日	登		
651	勇	賢	院	勇	本	日	照	八日市場	長源寺
6	智	妙	院	瑞	亮	日	勤	早川入	上橋寺
(欠)	顯	祥	院	義	定	日	穩		
	是	運	院	持	徳	日	学		
	誠	照	院	圓	鏡	日	鄰		
	圓	事	院	受	明	日	養	伝法村	
655	是	昌	院	義	聞	日	順	大城瀉平村	本成寺
656	要	雄	院	玄	鑠	日	等		
657	智	全	院	圓	潮	日	詠	早川入	常蔵寺
658	妙	運	院	義	伯	日	有	中条	行善寺
659	泰	祥	院	泰	玄	日	量	下山	上沢寺
660	顯	隆	院	敬	達	日	宣	雨畑	
661	祥	温	院	海	稟	日	隆	田島	妙太寺
662	痴	雲	院	見	寿	日	遙	江尻	妙泉寺
663	明	顯	院	顯	習	日	快	長沢新町	上行寺
664	一	祥	院	玄	妙	日	瑄	哥田	寿量寺
665	智	省	院	義	徳	日	延	矢細二	妙泉寺
666	開	敷	院	顯	瑞	日	窓	市川	円立寺
								弟子	
667	智	遊	院	玄	瞳	日	曦	大塩	薬王寺
668	祥	妙	院	玄	礼	日	遙		
669	栄	妙	院	海	順	日	徳	大塩	仙応寺



妙玄庵歴代帖（林）

助606	通	明	院	遂	周	日	專	長岡	宗徳寺
607	祥	光	院	泰	具	日	遼	成島	妙高寺
608	潮	昌	院	詠	旭	日	勢	鰐沢	感応寺
609	祥	俊	院	純	式	日	猷		
助610	善	寿	院	貞	意	日	篤	岩間	定林寺
上611	明	中	院	東	現	日	慎	落居	本照寺
下助612	明	中	院	性	啓	日	純	信州松代	蓮乗寺
613	祥	心	院	義	讃	日	喜	大鳥井	妙浄寺
614	体	寿	院	玄	正	日	蓬		
615	瑞	祐	院	春	意	日	恭		
				教	電				
616	存	琇	院	存	道	日	浄	鰐沢	蓮久寺
617	静	遠	院	本	了	日	達	当口清子	雲沢寺住
618	妙	光	院	教	龍	日	普		
619	遼	明	院	遵	性	日	鑑	豆州北条	上行寺住
620	静	明	院	寛	是	日	顕		
助621	見	静	院	宣	恕	日	慶		
622	瑞	中	院	春	琢	日	鶴	遠州馬郡村	東本徳寺
623	瑞	喜	院	海	具	日	慈	常国玉川	蓮生寺住
624	圓	妙	院	義	格	日	要	当口天神中条	性蓮寺
625	祥	運	院	実	洞	日	竜	当口本河内岩欠	常法寺住
626	英	真	院	英	嶺	日	習	当口有野村	長福寺
627	玄	明	院	貞	雅	日	瑞	富士郡下稲子	真光寺
628	本	誠	院	沼	全	日	慈	小倉村	見本寺
助629	一	花	院	慈	順	日	頂	八代・上向山村	常光寺
630	是	秀	院	慶	誠	日	晃	柿嶋	法真寺
631	事	成	院	英	誠	日	貞	若神子	妙円寺
632	善	明	院	貞	旭	日	運	下大鳥居	妙増寺
633	秀	明	院	義	春	日	静	鏡中条	妙蓮寺
634	太	実	院	海	閑	日	寛	飯野	妙善寺
635	恵	運	院	即	応	日	等	大嶋	妙法寺
636	智	明	院	義	随	日	辨	岩間	定林寺
637	智	堯	院	英	潮	日	廣	逸見上神取	妙覚寺
638	瑞	中	院	貞	栄	日	礼	駿富士郡沼久保	本妙寺

妙玄庵歷代帖（林）

575	了	応	院	春	達	日	住	伊沼	慈照寺
576	龜太	鏡	院	宜	壽	日	研	大嵐	蓮花寺
577	事	妙	院	義	直	日	感	寺部	妙遠寺
578	遊	要	院	遊	良	日	存	大麻	妙道寺
579	智	逗	院	堯	存	日	照	鰍沢	三光庵
助580	是	心	院	義	淨	日	令	松本	妙光寺
581	事	性	院	敬	誠	日	耐	成島 小島	仏乗寺 善立寺
582	本	事	院	湛	道	日	幸	羽根	教林寺
583	一	乘	院	泰	誠	日	貞	平沼	法花寺
584	順	心	院	貞	秀	日	迅	上条	法向寺
加歴 585	頭	敞	院	玄	順	日	竜	上諏訪	高国寺
586	妙	事	院	義	因	日	達	15所 塩沢 成島	法源寺 蓮照寺 仏乗寺
587	誠	中	院	音	開	日	超	和泉	妙善寺
588	妙	光	院	泰	信	日	禎	成島	仏乗寺
589	見	寿	院	太	元	日	慶	矢野	妙泉寺
590	頭	理	院	海	存	日	定		妙久寺
591	過	妙	院	義	宅	日	同	青柳	法長寺
592	妙	順	院	泰	教	日	扣	平沼	法花寺
593	善	明	院	俊	雅	日	慈		
594	妙	智	院	飲	貞	日	官	中土狩	円久寺
595	泰	行	院	光	勝	日	龜	雨畑	正徳寺
596	泰	明	院	泰	隨	日	運	車田	法円寺
597	養	中	院	海	現	日	光	和泉	妙円寺
598	示	見	院	蓮	海	日	遲		
助599	音	妙	院	遊	貞	日	窓	網代	長延寺
600	敬	感	院	寛	静	日	隨	中沢	一乗寺
助601	明	寿	院	宜	静	日	到	猪頭	遠照寺
602	本	智	院	誓	瑞	日	忱	稲子	真光寺
603	太	智	院	貞	道	日	融		
604	明	温	院	東	隣	日	漸	稲子	浄泉寺
助605	鏡	妙	院	義	觀	日	敞	黒田	本光寺
	瑞	延	院	春	鳳	日	壽	柚野	光徳寺

妙玄庵歴代帖（林）

544	海蓮院	了式	日	鑒		
545	憲悟院	性遠	日	心	河東	大円寺
546	是透院	持紋	日	光		
547	白牙院	智洞	日	遷	早川	真妙寺
助548	宣翁院	学誠	日	養	馬門	妙諸寺
549	一良院	玄式	日	祥	掛川	正願寺
		恵		旭ト改		
550	妙俊院	貞本	日	慧	鰺沢	蓮花寺
助551	事誠院	圓如	日	憲	中村	満勝寺
552	本性院	頭薩	日	遣	市川	法伝寺
553	瑞静院	飲祐	日	過	谷津	蓮性寺
554	明信院	遊東	日	満	三島	本覚寺
555	要寿院	持要	日	持	小林	法寿寺
556	理教院	義通	日	居	今泉	妙延寺
557	唯淳院	春鏡	日	厚	大島	感応寺
558	智暹院	堯遠	日	祥	門野	本妙寺
助559	正遊院	素遊	日	誠	三島	本覚寺
560	本具院	温瑞	日	周	小繩	本泉寺
561	事善院	良道	日	孝	川久保	本照寺
562	理行院	義南	日	宣	三ツ倉	法蔵寺
563	飲良院	良啓	日	原	佐野	法源寺
564	智祥院	玄雅	日	解	門野	本妙寺
					平須	妙光寺
565	事正院	堯応	日	校	天神中条	性蓮寺
566	本敬院	遠長	日	忠	青柳	善応寺
					下山	常福寺
助567	玄寿院	貞性	日	徳	穴平	遠照寺
568	栄運院	海伯	日	旭	切石	善妙寺
569	潮妙院	海周	日	瑞	松本	本立寺
助570	圓義院	堯辨	日	顯	元市場	常諦寺
571	海伯院	良順	日	栄	天神中条	幸栖寺
助572	瑞養院	春養	日	然	川崎	法光寺
					端和	妙恩寺
助573	唯圓院	春義	日	静	上小河原	浄蓮寺
	唯妙院	能那	日	遊	鍛治新居	恩妙寺
574	貞松院	飲学	日	案	東浦多加	富西寺

妙玄庵歴代帖（林）

516	一	和	院	智	圓	日	東	相又 法恩寺 伊佐布 安穩寺 藤枝 大慶寺
517	見	応	院	見	誠	日	遊	大鳥井 妙像寺 久沢 一乗寺
518	理	明	院	義	達	日	運	大塩 仙王寺
519	観	道	院	見	忠	日	典	
520	泰	顕	院	海	察	日	静	
521	遠	中	院	堯	昇	日	明	落居 浄善寺
522	善	哉	院	順	甫	日	応	小田 善行寺 伊佐布 安穩寺
523	耐	遊	院	善	朗	日	門	羽鮒 吉祥寺
524	善	性	院	貞	順	日	過	岩間 定林寺 高田 長生寺
525	宣	中	院	友	寛	日	示	下曾根 円妙寺
526	受	教	院	受	教	日	浄	羽鹿島 円応寺
527	澄	妙	院	義	海	日	遼	丸滝 妙法寺
528	本	光	院	遠	明	日	暉	長沢 善国寺
529	是	妙	院	智	順	日	満	米倉 妙昌寺 大宮 大泉寺
530	慈	眼	院	慈	存	日	視	松本 本立寺 横須賀 本源寺
531	智	進	院	玄	澄	日	誠 <small>閣下改ム</small>	藤枝 大慶寺
532	通	音	院	察	善	日	中	
533	寿	豊	院	東	過	日	逮	落合 成妙寺
534	智	龍	院	遊	応	日	堅	赤沢 妙福寺
535	理	圓	院	義	遍	日	迅	江原 報恩寺 米倉 妙昌寺
536	是	性	院	慈	穩	日	相	松本 妙福寺
537	是	薪	院	義	忍	日	述	大鳥井 妙浄寺
538	中	正	院	素	教	日	順	伊東 聴光寺
539	本	奏	院	宣	量	日	從	精進川 常境寺
540	智	顕	院	本	寿	日	妙	相又 正慶寺
541	泰	勇	院	瑞	光	日	現	
542	是	俊	院	快	遠	日	城	山室 遠照寺
543	泰	運	院	泰	仁	日	達	車田 法円寺 一ノ七 妙円寺

妙玄庵歴代帖（林）

494	溪	雲	院	溪	雲	日	乘	竹ノ内	淨蓮寺
495	本	秀	院	宜	要	日	利	竹居 石和	教善寺 遠妙寺
496	唯	運	院	春	淨	日	行	高田	流通寺
497	智	諦	院	貞	都	日	英	法師倉 穴平	相延寺 遠照寺
498	智	良	院	良	雅	日	艸	法師倉 川久保	相延寺 本照寺
499	守	妙	院	義	伯	日	普	丸滝 玉川	妙法寺 蓮照寺
500	本	行	院	本	嶺	日	達	乙黒 大崩	蓮花寺 金福寺
501	全	雄	院	見	政	日	鳳	荊口	弘妙寺
502	瑞	善	院	春	瑞	日	猛	洞 馬郡東 端和	瑞泉寺 本徳寺 妙恩寺
503	太	讓	院	海	聞	日	衛	田島	報恩寺
504	智	見	院	素	通	日	明	上河東 篠原 甲府	妙福寺 法久寺 信立寺
505	是	宜	院	快	選	日	寿	非持山 相良	源立寺 淨心寺
506	潮	旭	院	玄	祥	日	登	大崩 寺沢	金福寺 法月庵
507	顯	妙	院	泰	顔	日	順	大和 下山	万福寺 本国寺
508	智	承	院	純	澄	日	念	波木井 中村	円夷寺 満勝寺
509	示	性	院	貞	潮	日	相	伊佐布	安穩寺
510	英	影	院	顯	応	日	禎	江尻	妙蓮寺
助講 511	本	寿	院	湛	道	日	感	新倉	法善寺
512	仁	静	院	敬	善	日	顯	小嶋	善立寺
513	穩	妙	院	智	住	日	選	三ツ倉 大宮松 浜松	法蔵寺 常泉寺 法雲寺
514	智	詔	院	存	雅	日	逗	長沢 春米	法界寺 法林寺
515	長	遠	院	湛	如	日	寿	大久保	常泉寺

妙玄庵歴代帖（林）

化主 213	469	良 応 院 英 受 日 悟	岩間 大乘寺
	470	本 融 院 貞 玄 日 承 <small>豆州御首通久寺 篠原法久寺</small>	下曾根 円妙寺
化主 214	471	瑞 豊 院 春 旭 日 充	島田 正覚寺 端和 妙恩寺
	472	智 要 院 義 啓 日 造	落居 妙蓮寺 平須 長遠寺
	473	妙 雄 院 玄 説 日 禪	門野 本妙寺 猪根 正行寺
	474	住 忠 院 通 康 日 護	福士 弘円寺 内房 本成寺
	475	潮 寿 院 海 具 日 善	玉川 迦照寺
	476	温 承 院 純 英 日 恕	中村 満勝寺
	477	敬 翁 院 了 海 日 賀	塩沢 迦照寺
	478		
	479	誠 心 院 純 式 日 養	西井出 上行寺 中村 満勝寺
	480	顕 寿 院 太 蓮 日 啓	柏原 立円寺
	481	顕 秀 院 義 底 日 瑞	関原 円光寺 高田 長生寺
	助482	存 孝 院 啓 山 日 慶	谷村 東漸寺
	483	顕 良 院 政 雲 日 善	横根 実教寺 布施 妙泉寺
	484	顕 性 院 良 存 日 厚	大田和 蓮重寺 八木沢 源立寺
	485	英 如 院 運 省 日 運	若神子 妙円寺 甲府 信立寺
	486	智 海 院 智 海 日 譲	三ツ倉 法蔵寺 夜子沢 法向寺
	487	理 完 院 義 運 日 瑞	田富町 蓮性寺
	488	是 教 院 泰 圓 日 性	北川 正福寺 佐別
	489	温 理 院 義 学 日 誠	飯野 福王寺 長貫 長見寺
	490	遠 誠 院 本 瑞 日 諦	湯島 法雲寺
	491	本 純 院 唯 識 日 耀	上河東 妙福寺 柚野 正法寺
	492	誠 道 院 圓 識 日 具	五丁田 円受院
	493	顕 迎 院 義 穩 日 源	藤田 仙能寺

妙玄庵歴代帖（林）

当 209	445	瑞	遠	院	遠	承	日	静	
	446	本	妙	院	光	圓	日	瑞	猪根 聰法寺 甲府 信立寺
	447	英	遠	院	良	運	日	誠	石和 遠妙寺
	448	顯	詔	院	敬	順	日	恵	羽鮒 吉祥寺 松野 永精寺
	449	智	性	院	恵	性	日	現	松代 蓮乘寺
	450	智	妙	院	義	伯	日	遊	成嶋 仏乘寺
	451	観	解	院	音	開	日	聲	西南湖 本乗寺
	452	本	好	院	海	本	日	運	早川入 聴徳寺 十谷 妙長寺 夜子沢 法向寺
	453	観	向	院	良	達	日	遊	馬門 妙性寺 八幡 忠安寺
	454	遼	応	院	遵	性	日	遂	三島 本覚寺
化 210代	455	妙	演	院	義	遍	日	禎	高田 流通寺
	助455	真	如	院	真	善	日	浄	下田 了仙寺
	456	大	乗	院	辨	義	日	典	今福 妙法寺 天神中 真浄寺
	457	温	良	院	海	聞	日	恭	松野 永精寺
	458	智	快	院	快	寿	日	宝	十島 浄仙寺
	459	智	妙	院	智	聞	日	遂	大和 万福寺 大宮 大泉寺
	460	廣	泰	院	東	運	日	澄	安居山 東漸寺 藤枝 大慶寺 内房 本成寺
	461	乗	宣	院	快	学	日	求	小出 保妙寺
	462	智	敬	院	了	遠	日	要	柳島 実成寺
	463	信	妙	院	完	識	日	満	中野 妙久寺 三ツ倉 法蔵寺 万沢 顯本寺
化 212代	464	智	感	院	圓	義	日	典	久成 円妙寺 宮原 本定寺
	465	顯	祥	院	善	立	日	逢	松本 広福寺
	466	理	遠	院	義	善	日	晃	江原 報恩寺 今泉 妙延寺
	467	智	用	院	見	旭	日	有	小河原 浄蓮寺 長沢 上行寺
	468	光	顯	院	泰	具	日	逅	

妙玄庵歷代帖（林）

	420	泰	中	院	啓	直	日	遊	大塩	葉王寺
									小条	蓮長寺
化 206代	421	智	鏡	院	貞	秀	日	顯	沼津	妙海寺
									久成	円妙寺
	422	自	静	院	宣	教	日	意	南部	妙浄寺
									駿府	妙像寺
									御松	実相寺
化 207代	423	慧	海	院	了	純	日	照		
	424	雙	俊	院	義	念	日	讀	戸田	実成寺
									須津	東光寺
	425	本	種	院	貞	道	日	照	下曾根	円妙寺
化 208代	426	蓮	妙	院	義	圓	日	恭	柳川	柳川寺
									内船	内船寺
	427	本	静	院	宣	恕	日	逢	東南湖	長久寺
									興津	耀海寺
	428	宝	珠	院	慈	仁	日	賀	久保山	法泉寺
									三日市場	妙永寺
	429	是	静	院	寛	是	日	貫	万沢	顯本寺
							永聖ノ祖			
	430	環	明	院	智	顔	日	演	本郷	妙善寺
	431	宜	寛	院	要	海	日	照	荊口	弘妙寺
									大師	了仙寺
	432	耐	如	院	善	朗	日	聽	日野	見法寺
	433	大	善	院	慈	貞	日	東	岡崎	円頓寺
	434	富	妙	院	圭	瑞	日	命	江尻	妙泉寺
	435	存	貞	院	存	道	日	秀	大久保	常泉寺
化 211代									鰺沢	蓮久寺
	436	本	理	院	本	蓮	日	雄	長沢	善国寺
									青柳	昌福寺
	437	容	中	院	慈	岸	日	俗	内房橋上	貫名寺
	438	智	孝	院	慶	恩	日	秀	小繩	本泉寺
	439	潮	妙	院	瑞	亮	日	貞	落居	常慶寺
	440	妙	応	院	観	實	日	浣	下多加	富西寺
	441	潮	音	院	泰	門	日	広	鰺沢	感応寺
									松本	本立寺
									横須賀	妙立寺
	442	潮	心	院	智	貞	日	潯	大島	妙泉寺
	443	是	龍	院	義	朝	日	彦	大島井	妙浄寺
									高田	長生寺
	444	智	泰	院	本	立	日	随	飯富	本成寺



妙玄庵歴代帖（林）

化 195代	370	是	性	院	性	圓	日	慈	竹居	楞巖寺
	371	遠	光	院	本	瑞	日	放	横根	実教寺
									青柳	昌福寺
	372	一	樹	院	啓	叔	日	堅	安居山	東漸寺
	373	是	性	院	存	省	日	輝	柳島	実成寺
化 196代 化 197代	374	中	道	院	琇	遠	日	年	黒沢	妙学寺
									柚野	正法寺
										法林寺
	375	本	義	院	堯	辨	日	明	元吉原	妙法寺
化 198代	376	是	雄	院	快	遠	日	琳	山室	遠照寺
	377	本	慈	院	義	順	日	国		
	378	僧	那	院	海	伯	日	船	切石	善妙寺
									小林	妙諸寺
化 203代									端和	妙恩寺
	379	師	子	吼	院	実	洞	日	吉原	妙祥寺
									興津	耀海寺
	380	貞	妙	院	貞	本	日	遍	鯨沢	蓮花寺
	381	是	秀	院	義	真	日	善	米倉	妙昌寺
化 204代	382	史	原	院	純	澄	日	承	中村	満勝寺
	383	玄	性	院	栄	性	日	顯	松代	蓮乗寺
	408	豊	遠	院	太	豊	日	誠		
	409	圓	翁	院	圓	旭	日	満	小林	妙諸寺
化 205代									長沢	善住寺
	410	是	遠	院	持	徳	日	運	山高	実相寺
	411	正	行	院	光	勝	日	現	ツヅラ	妙現寺
	412	潮	温	院	海	意	日	広	玉川	蓮照寺
	413	是	妙	院	義	近	日	精	寺部	妙遠寺
化 204代									藤田	仙能寺
									松本	妙光寺
	414	是	竟	院	慈	辨	日	胎	松本	妙福寺
	415	本	妙	院	顯	瑞	日	覚	市川	円立寺
	416	体	玄	院	玄	意	日	義	白須	蓮性寺
化 205代	417	是	泰	院	泰	瑞	日	晋	車田	法円寺
									一ノセ	妙円寺
	418	遯	中	院	東	現	日	庸	落合	本照寺
	419	潮	昌（照）	院	貞	勤	日	禮	和泉	妙円寺

妙玄庵歴代帖（林）

化 190代	346	智 真 院 智 慶 日 瑞	イサブ 安穩寺 駿府 感応寺 南部 妙浄寺
	347	善 光 院 政 雲 日 遂	布施 妙泉寺
	348	是 妙 院 義 龍 日 静 <small>三老席マテ勤ムル 功ニ依テ加歴ス</small>	浜松 法雲寺
	348	智 眼 院 博 瑞 日 祥	下山 常福寺 柚井 本光寺
	349	瑞 映 院 貞 栄 日 瑤	黒田 妙学寺 甲府 要法寺 内房 本成寺
	350	妙 誠 院 貞 善 日 泰	鰍沢 蓮久寺
	351	候 妙 院 泰 瑞 日 義	下山 本国寺
	352	一 中 院 玄 雅 日 過	掛川 正願寺
	353	本 寿 院 顯 薩 日 量	市川 円立寺
	354	太 運 院 義 達 日 完	平須 長遠寺 中条 長遠寺
化 191代	355	智 運 院 大 義 日 宝	四日市場 要法寺 越城 上行寺
	356	太 要 院 持 要 日 萬	小林 法寿寺
化 192代	357	太 妙 院 義 猷 日 理	柳川 柳川寺
化 193代			天神中条 真浄寺
化 194代	358	理 宣 院 義 通 日 運 <small>祖師堂上棟ノ玄庵</small>	長貫 長見寺
	359	顯 妙 院 智 陽 日 運	本郷 法眼寺
	360	顯 寿 院 了 快 日 習	万沢 顯本寺 一ノ谷 妙照寺
	361	全 真 院 見 政 日 匡	荊口 弘妙寺
	362	潮 華 院 通 快 日 泰 <small>祖師550遠忌満山十日ノ開出仕</small>	横須賀 妙隆寺 内房 本光寺
	363	本 教 院 湛 道 日 威	甘利 大輪寺 有野 行善寺
	364	真 孝 院 辨 朗 日 慶	安居山 東漸寺 赤沢 妙福寺
	365	本 源 院 良 雅 日 堅	石和 遠妙寺
	366	性 善 院 貞 潮 日 牙	イサブ 安穩寺
	367	大 善 院 貞 順 日 近	岩間 定林寺
化 194代	368	是 性 院 海 旭 日 運	落合 成妙寺
	369	観 義 院 良 智 日 遙	八幡 忠安寺

妙玄庵歴代帖（林）

化 183代	322	潮	延	院	海	周	日	淨	八代	定林寺
	323	潮	遠	院	持	紋	日	栄	山高	実相寺
	324	潮	心	院	泰	仁	日	宏	一ノ七 蔦木	妙了寺 真福寺
化 184代	325	智	翁	院	見	旭	日	厚	長沢	善住寺
化 185代	326	養	妙	院	慈	善	日	迎	蒲原	東漸寺
	327	厚	妙	院	本	義	日	徳	宮沢	法淨寺
	328	正	中	院	素	通	日	選	掛川	正願寺
	329	大	法	院	海	量	日	観	瀬葉川	世尊寺
			昇、加歴同様ニ候							
	330	温	妙	院	海	聞	日	新	松野 中条	永精寺 長遠寺
化 186代	331	鳳	山	院	存	雅	日	珠	春米	宝林寺
	332	潮	牙	院	貞	性	日	潤	鰐沢 穴平	蓮花寺 遠照寺
	333	憲	寿	院	純	式	日	明	三ッ倉 中村	法蔵寺 満勝寺
	334	潮	義	院	演	瑞	日	静	小島 下田	善立寺 了仙寺
	335	太	遠	院	湛	如	日	聞	青柳	昌福寺
	336	太	治	院	前	晴	日	海	下山 和泉	上沢寺 妙延寺
化 187代	337	宝	山	院	慈	仁	日	秀	大淵 内房	了仙寺 本成寺
	338	潮	典	院	智	圓	日	詠	高橋 南部 甲府	常德寺 妙淨寺 信立寺
	339	観	理	院	見	忠	日	政	富竹	大広寺
	340	真	性	院	慈	湛	日	相	横須賀	本源寺
	341	観	厚	院	貞	存	日	遙	高田	長生寺
	342	本	如	院	唯	識	日	逢	上河東 下曾根 甲府	妙福寺 円妙寺 信立寺
化 188代	343	太	善	院	善	玉	日	栄	中野	妙久寺
	344	瑞	泉	院	春	旭	日	満	夜子 端和	沢法向寺 妙恩寺
化 189代	345	不	染	院	慈	遠	日	慈	小林 内房	法寿寺 本成寺

妙玄庵歷代帖（林）

	296	真	壽	院	快	順	日	迨	松本	妙福寺
	297	智	淨	院	順	東	日	信	三島	本覺寺
	298	大	運	院	慈	妙	日	宝	黒田	本久沢寺
	299	智	温	院	東	稟	日	透	蒲原	東漸寺
	300	智	俊	院	貞	完	日	量	松	法雲寺
	301	一	心	院	持	運	日	見	今泉	妙延寺
化 174代	302	智	応	院	玄	澄	日	修	内船	内船寺
	303	海	静	院	宣	恕	日	逞	青柳	法長寺
	304	豊	温	院	義	門	日	泰	山高	実相寺
	305	本	照	院	宣	要	日	遊	藤枝	大慶寺
化 175代	306	智	誓	院	本	立	日	潤	興津	耀海寺
	307	智	海	院	了	遠	日	惺	飯富	本成寺
化 176代	308	太	恵	院	勇	説	日	榮	松本	妙光寺
	309	潮	亨	院	海	具	日	喜	岩淵	光榮寺
化 177代	310	本	承	院	貞	道	日	種	大嵐	蓮花寺
	311	潮	善	院	泰	信	日	玄	飯富	本成寺
化 178代	312	逞	中	院	音	開	日	迅	山室	遠照寺
	313	潮	穩	院	要	穩	日	遊	柚野	光徳寺
化 179代	314	潮	昌	院	堯	詮	日	行	落合	成妙寺
化 180代	315	憲	性	院	恵	性	日	明	下山	本國寺
	316	善	応	院	俊	妙	日	定	中条	長遠寺
化 181代	317	智	了	院	文	和	日	慈	篠原	法久寺
	318	從	妙	院	義	伯	日	運	南部	妙浄寺
化 182代	319	潮	遊	院	善	立	日	詠	甲府	信立寺
	320	憲	立	院	本	從	日	行	江尻	妙蓮寺
	321	義	中	院	義	本	日	憲	永井	常隆寺
									内房	本成寺
									由井	正法寺
									穴平	遠照寺
									松代	蓮乘寺
									金谷	長光寺
									石和	遠妙寺
									内船	内船寺
									中条	長遠寺
									天神	中条 真浄寺
									布施	妙泉寺
									飯富	本成寺
									落居	本照寺

妙玄庵歷代帖（林）

	269	耐	辰	院	善	察	日	能	飯富	本成寺
	270	大	中	院	慈	貞	日	慶	浜松	法雲寺
化 160代	271	蓮	妙	院	潮	瑞	日	運	長野	長見寺
	272	光	順	院	順	妙	日	妙	落居	本照寺
化 161代	273	遠	壽	院	本	瑞	日	命	端和	妙恩寺
	274	佛	語	院	察	圓	日	聞	山高	実相寺
化 162代	275	善	慈	院	溪	雲	日	從	岡善	国寺
	276	不	側	院	慈	遠	日	容	青柳	昌福寺
化 167代	277	蓮	上	院	泰	具	日	芳	三島	本覚寺
化 168代	278	理	善	院	義	学	日	誠	布施	妙泉寺
	279	貞	性	院	泰	恩	日	迨	内房	本成寺
化 169代	280	圓	滿	院	圓	覚	日	運	上河	蓮花寺
化 170代	281	本	理	院	学	誠	日	到	浜松	法雲寺
	282	智	光	院	智	聞	日	順	長貫	長見寺
	283	智	勇	院	智	顔	日	演	中条	長遠寺
	284	聞	要	院	圓	達	日	達	鰺沢	蓮花寺
化 173代	285	了	遠	院	了	秀	日	秀	上小	河原 淨蓮寺
化 172代	286	本	妙	院	義	真	日	德	篠原	法久寺
	287	遊	応	院	遊	貞	日	觀	三ツ倉	法蔵寺
	288	玄	朗	院	信	政	日	贊	大宮	大泉寺
	289	一	義	院	海	音	日	答	下山	本国寺
	290	慈	温	院	純	旭	日	厚	長沢	善住寺
	291	妙	義	院	東	雲	日	体	松野	永精寺
	292	義	中	院	俊	那	日	顯	鰺沢	蓮久寺
	293	了	義	院	了	順	日	順	下曾根	円妙寺
	294	恵	運	院	圓	義	日	逢	駿府	感応寺
	295	大	涼	院	敬	順	日	達	浜松	法雲寺

妙玄庵歴代帖（林）

化 155代	243	教	寿	院	学	通	日	現	富竹	大広寺
	244	誠	諦	院	純	式	日	圓	静岡	満勝寺
	245	養	運	院	遊	応	日	洞	興津	耀海寺
	246	宝	音	院	快	傳	日	珠	石和 米倉	遠妙寺 妙昌寺
	247	泰	真	院	快	応	日	米	下曾根 伊佐布	円妙寺 安穩寺
	248	本	妙	院	了	運	日	堯	鉦沢	蓮花寺
	249	宣	寿	院	勝	通	日	静	篠原	法久寺
	250	教	泰	院	秀	遠	日	量	袖野	正法寺
	251	瑞	光	院	圓	義	日	曦	能勢	真如寺
		亨	教	院	演	瑞	日	延	大嵐 永紋	蓮花寺 白初祖
化 156代	252	是	妙	院	大	義	日	観	下曾根 伊佐布	円妙寺 安穩寺
	253	空	妙	院	海	圓	日	場	若神子	妙円寺
	254	開	顕	院	顕	瑞	日	誠	市川	円立寺
	255	泰	運	院	澄	然	日	翁	由井 南部	正法寺 妙浄寺
化 157代 紋白ノ祖	256	観	中	院	快	遠	日	遑	小出	深妙寺
化 158代	257	本	迎	院	義	穩	日	元	落合 中条	成妙寺 長遠寺
化 159代	258	観	智	院	了	智	日	芳	八幡	忠安寺
	259	天	如	院	完	叔	日	遠	小倉 吉原	見本寺 妙浄寺
	260	勇	猛	院	榮	素	日	進	三ツ倉	法蔵寺
化 160代	261	自	全	院	見	政	日	雄	荊口	弘妙寺
	262	一	運	院	東	現	日	元	下田	了仙寺
	263	源	了	院	了	雅	日	帆	吉原 石和	妙浄寺 遠妙寺
化 171代	264	堅	固	院	義	忍	日	迅	一ノセ 一谷	妙了寺 妙照寺
	265	見	竜	院	順	要	日	詔	江尻	妙蓮寺
	266	一	事	院	堯	辨	日	義	加島	常諦寺
	267	圓	宜	院	友	妙	日	考	西井出	上行寺
	268	映	照	院	海	察	日	恕	平須 柚野	長遠寺 光徳寺

妙玄庵歴代帖（林）

化 144代	215	漸	妙	院	義	真	日	法	須津 一谷	東光寺 妙照寺
	216	迢	壽	院	快	山	日	鳳	市川	円立寺
	217	本	壽	院	要	存	日	量	吉原	妙祥寺
化 146代 文化 6	218	覺	漸	院	慈	妙	日	来	蒲原	東漸寺
	219	圓	具	院	東	圓	日	迎	元吉原	妙法寺
化 147代	220	本	応	院	唯	識	日	宣	鰍沢 石和 甲府	蓮花寺 遠妙寺 信立寺
	221	本	具	院	玄	善	日	誠	岡	善国寺
	222	瑞	妙	院	貞	栄	日	栄	長岡 内房	宗徳寺 本成寺
	223	生	法	院	察	忍	日	忍	伊東	妙法寺
	224	遠	妙	院	貞	性	日	前	鰍沢 駿府	蓮花寺 感応寺
	225	漸	如	院	宣	直	日	領	布施	妙泉寺
化 148代	226	海	漸	院	智	順	日	週	大宮	大泉寺
化 149代	227	慈	性	院	慈	湛	日	宗	横須賀	本源寺
化 150代	228	智	性	院	智	啓	日	静	八幡 内房	忠安寺 本成寺
	229	寂	禅	院	圓	朗	日	定	高田	長生寺
	230	一	味	院	友	完	日	等	今スハ	久本寺
	231	為	中	院	堯	応	日	充	南部	妙浄寺
化 151代	232	所	中	院	玄	雅	日	啓	桂川	正願寺
	233	泰	妙	院	存	澄	日	融	箱根	本迹寺
	234	玄	量	院	義	本	日	静	落居	本照寺
	235	本	性	院	真	意	日	完	山高	実相寺
化 152代	236	妙	照	院	映	覚	日	到	長貫	長見寺
	237	朝	元	院	輪	妙	日	速	今泉	妙延寺
化 153代	238	善	厚	院	貞	存	日	明	高田	長生寺
	239	本	立	院	亨	見	日	哲	布施	妙泉寺
化 154代 文政 2	240	本	要	院	湛	道	日	聽	穴平	遠照寺
	241	中	道	院	芳	雲	日	文	諏訪	高国寺
	242	源	留	院	善	量	日	碍	小倉 安居山	見本寺 東漸寺

妙玄庵歴代帖（林）

	189	光 受 院	光 学 日 周	金谷 長光寺
	190	瑞 雲 院	光 圓 日 選	成島 竜泉寺
化 132代	191	堯 翁 院	運 省 日 英	石和 遠妙寺
化 133代	192	勇 玄 院	勇 説 日 啓	由野 光徳寺
	193	寛 利 院	宣 要 日 進	大嵐 蓮花寺
化 134代	194	豊 敬 院	敬 順 日 元	落居 本照寺 江尻 妙蓮寺
	195	理 妙 院	照 亨 日 真	飯富 本成寺 岡崎 善立寺
	196	一 乗 院	隆 恵 日 彰	興津 耀海寺
化 136代	197	観 事 院 <small>享和二年(1802)化主就任</small>	貞 圓 日 要 <small>文化10年4月5日化</small>	三島 本覚寺
化 137代	198	十 如 院	性 圓 日 遊	今スハ 久本寺 松代 蓮乗寺
	199	修 妙 院	識 遠 日 慈	長貫 長見寺 須津 東光寺
化 138代	200	持 遠 院 <small>(187日貞師同ジク初祖ト「ルガ如何?」)</small>	湛 如 日 芳	青柳 昌福寺 永紋白初祖
	201	玄 了 院	了 遠 日 感	信州山室 遠照寺
	202	妙 運 院	泰 顔 日 実	二老ニテ逝去 依評加 暦 小島 善立寺
	203	自 然 院	宣 恕 日 遇	下田 了仙寺 一谷 妙照寺
	204	圓 寿 院	感 瑞 日 甄	元吉原 妙法寺
化 139代	205	本 照 院	義 順 日 侃	小田原 常永寺 浜松 法雲寺
化 140代	206	潮 照 院	海 聞 日 演	伊東 大行寺 中条 長遠寺
	207	漸 壽 院	通 快 日 透	松本 本立寺
	208	見 翁 院	見 旭 日 遷	今泉 妙延寺 長沢 善住寺
	209	瑞 恩 院	瑞 察 日 義	下山 本国寺
	210	瑞 応 院	善 朗 日 政	一谷 妙照寺
化 141代	211	耐 詔 院	演 瑞 日 耐	安居山 東漸寺 端和 妙恩寺
化 142代 文化5 化	212	大 路 院	堯 詠 日 亮	若神子 妙円寺 内房 本成寺
化 143代	213	一 相 院	俊 妙 日 養	猪根 正行寺
	214	圓 牙 院	慈 誠 日 耀	横須賀 東光寺



妙玄庵歴代帖（林）

	162	潮	治	院	宣	偕	日	廣	藤枝	大慶寺
	163	宜	如	院	貞	秀	日	純	内房	本成寺
	164	慈	観	院	慈	完	日	観	駿府	感応寺
	165	大	行	院	光	勝	日	境	鯨沢	蓮花寺
									駿府	感応寺
	166	泰	遠	院	泰	遠	日	然	落居	本照寺
	167	瑞	如	院	春	覚	日	明	蒲原	東漸寺
	168	本	禅	院	堯	意	日	観	飯田	長源寺
	169	情	玄	院	堯	存	日	遊	石和	遠妙寺
	170	一	行	院	惠	運	日	伝		
化 125代	171	大	乗	院	慈	貞	日	典	浜松 京富 飯富	法雲寺 満願寺 本成寺
化 134代	172	温	妙	院	見	夷	日	法	荊口	弘妙寺
化 126代 寛政 6	173	宗	武	院	察	遠	日	真	切石 横須賀	善妙寺 本源寺
	174	圓	乗	院	温	瑞	日	現	小出	深妙寺
	175	瑞	妙	院	存	秀	日	聴	大嵐	蓮花寺
化 127代	176	相	応	院	泰	学	日	孝	日唱一件ノ玄庵ナリ、 異流退治ノ師善立寺	
化 163代	177	慈	運	院	義	忍	日	現	同二老	須津 東光寺
化 164代	178	妙	義	院	潮	瑞	日	貞	同三老	江尻 妙蓮寺
化 128代	179	源	妙	院	良	向	日	観	同四老	石和 遠妙寺
化 165代	180	源	喜	院	博	瑞	日	静	同五老	由井 本光寺
	181	飲	喜	院	博	瑞	日	静	同五老	由井 本光寺
		義	運	院	辨	具	日	進	豆州雲金 妙本寺 加島常諦寺	
	182	一	要	院	義	宣	日	友	猪根	正行寺
	183	鉢	玄	院	堯	順	日	詮	高橋	常德寺
化 129代	184	義	天	院	海	具	日	研	飯富 端和	本成寺 妙恩寺
化 130代	185	實	妙	院	実	洞	日	紹	元吉原 駿府 甲府	妙法寺 感応寺 信立寺
	186	本	承	院	永	玄	日	静	小倉	見本寺
	187	瑞	具	院	智	陽	日	貞	南部 永紋白	妙浄寺 初祖
化 131代	188	一	中	院	東	玄	日	過	布施 中条	妙泉寺 長遠寺

妙玄庵歴代帖（林）

化 107代	136	仁 宗 院 宣 旭 日 敬	一ノ谷 妙照寺 内房 本成寺
	137	誠 諦 院 受 潤 日 長	大宮 大泉寺
化 108代	138	養 中 院 圓 朗 日 慈	横須賀 本源寺
化 109代	139	誠 圓 院 義 達 日 遵	豆州三宅島在遠島 文 政12年50年目赦免有之 山高 実相寺 <sup>(7)</sup>
化 110代	140	壽 遠 院 快 遠 日 到	信州山室 遠照寺 <sup>(19)</sup>
	141	博 遠 院 辨 雅 日 養	小田原 常永寺
	142	修 善 院 政 雲 日 報	長貫 長見寺
	143	本 薩 院 宣 恕 日 到	落居 本照寺
化 111代	144	牀 真 院 智 俊 日 情	元市場 常諦寺
		了 義 院 堯 辨 日 見	下山 本国寺 <sup>(30)</sup>
化 112代	145	一 如 院 貞 恩 日 貞	有野 行善寺
	146	智 見 院 顯 礼 日 住	<sup>(43)</sup> 見師ノ院代ナリ
	147	信 誠 院 存 応 日 貞	岡崎 善立寺
化 113代	148	見 理 院 玄 海 日 照	穴平 遠照寺
化 114代	149	妙 牙 院 了 秀 日 證	内房 本成寺 一谷 妙照寺 高遠 蓮華寺
化 115代	150	勇 解 院 章 恩 日 信	中条 長遠寺 内房 本成寺
化 116代	151	慈 運 院 光 応 日 瑄	米倉 妙昌寺
	152	豐 善 院 伯 英 日 保	南部 妙淨寺
化 117代	153	大 實 院 光 見 日 堯	
化 118代	154	遠 誠 院 貞 性 日 俊	鰺沢 蓮花寺
化 119代	155	妙 淨 院 遵 貞 日 遵	三島 本覚寺
化 120代	156	快 壽 院 学 通 日 慶	青柳 昌福寺 甲府 信立寺
化 121代	157	深 妙 院 純 式 日 寛	中村 満勝寺
	158	玉 輪 院 慈 能 日 輝	下田 了仙寺 京 満願寺
化 122代	159	輪 妙 院 澄 然 日 泰	吉原 妙淨寺
化 123代	160	宝 輪 院 慈 遠 日 治	西井出 上行寺 内房 本成寺
化 124代	161	又 聞 院 圓 定 日 近	大嵐 蓮花寺 浜松 法雲寺 一谷 妙照寺

妙玄庵歴代帖（林）

化 96代	108	義 妙 院 演 瑞 日 瑞	一谷 妙照寺 内房 本成寺
	109	潮 源 院 圓 洲 日 香	
	110	寛 応 院 義 譚 日 日 演	
	111	玄 光 院 東 圓 日 日 瑞	
化 95代	112	勇 妙 院 智 静 日 日 静	
化 97代	113	聞 要 院 博 遠 日 日 勇	興津 耀海寺
	114	寛 慈 院 慈 全 日 日 正	
	115	観 静 院 英 澄 日 日 存	穴平 遠照寺
化 98代	116	大 照 院 海 聞 日 日 映	中条 長遠寺 勝手ノ 間天井ノ 施主
化 99代	117	実 相 院 存 式 日 日 純	静岡 満勝寺
化 100代	118	泰 壽 院 通 快 日 日 逢	甲府 信立寺 吉原 妙浄寺
	119	鏡 明 院 存 海 日 日 光	八幡 忠安寺
化 101代	120	真 如 院 孝 卯 日 日 相	穴平 遠照寺 甲府 信立寺
	121	圓 妙 院 圓 譚 日 日 観	二老ニテ退且今般許容 ヲ以歴世加入要ハ別記 ニ有リ
	122	流 通 院 完 妙 日 日 演	
	123	通 妙 院 義 碩 日 日 逮	石和 遠妙寺
	124	泰 遠 院 通 海 日 日 治	安居山 東漸寺 駿府 感応寺
	125	圓 具 院 玄 善 日 日 義	米倉 妙昌寺
	126	妙 実 院 文 達 日 日 解	加島 常諦寺
化 102代	127	體 如 院 體 勇 日 日 勇	内房 本成寺
化 103代	128	長 遠 院 堯 碩 日 日 詮	興津 耀海寺
化 104代	129	自 静 院 慈 辨 日 日 教	端和 妙恩寺 蒲原 東漸寺
化 105代	130	玄 妙 院 義 静 日 日 迎	飯富 本成寺 口 弘妙寺 中条 長遠寺
化 106代	131	遠 妙 院 亨 辨 日 日 勇	柚野 正法寺
	132	心 是 院 玄 静 日 日 賢	
	133	本 寿 院 義 衷 日 日 正	
	134	本 妙 院 顯 瑞 日 日 永	一ノ谷 妙照寺
	135	圓 義 院 恵 秀 日 日 妙	端和 妙恩寺

妙玄庵歴代帖（林）

化 76代	80	誠	妙	院	存	省	日	貞	静岡	満勝寺
	81	榮	妙	院	立	仙	日	隆		
化 77代	82	玄	葉	院	了	雅	日	運	塚原	根本寺
	83	本	實	院	遊	政	日	遊		
化 88代	84	遠	寿	院	瑞	翁	日	泰	顯瑞寮建立依テ列之 端和妙恩寺	
	85	禪	智	院	慧	応	日	秀		
	86	宣	応	院	逐	説	日	演		
化 80代	87	潮	信	院	慈	門	日	盈		
化 79代	88	託	事	院	澄	光	日	慧	穴平	遠照寺
	89	壽	遠	院	堯	性	日	昌		
化 81代	90	顯	了	院	堯	意	日	法	青柳	昌福寺
化 82代	91	驚	諸	院	勝	光	日	照	布施	妙泉寺
	92	本	誠	院	湛	秀	日	諦		
化 83代	93	大	慈	院	義	貞	日	典	端和	妙恩寺
	94	宣	妙	院	存	立	日	這		
化 84代	95	亮	玄	院	恵	哲	日	秀	甲府	信立寺 <sup>29</sup>
	96	潮	昌	院	義	観	日	運		
	97	潮	遠	院	智	三	日	諦	米倉	妙昌寺
	98	理	玄	院	理	玄	日	近		
化 86代	99	大	道	院	海	進	日	精	小田原	常永寺
化 85代		壽	妙	院	恵	達	日	勝	吉原	妙祥寺 <sup>(2)</sup>
化 87代	100	見	壽	院	東	恩	日	量	駿府 中条村 京	感応寺 長遠寺 東漸寺 満願寺
化 89代	101	安	住	院	守	明	日	現	清水	妙啓寺
化 90代	102	妙	雄	院	玄	素	日	僊	興津	耀海寺
化 92代	103	潮	運	院	海	哲	日	等	須津	東光寺
化 91代	104	収	玄	院	昶	偕	日	専	端和 落居 宣示院	妙恩寺 本照寺 改ム
化 93代	105	妙	行	院	貞	静	日	審	三島	本覚寺
	106	位	妙	院	春	雅	日	貞		
化 94代	107	秀	妙	院	三	智	日	澄	南部	妙浄寺

妙玄庵歴代帖（林）

化 58代	47	性 雲 院 榮 正 日 慈	松代 蓮乗寺
化 59代	48	照 岸 院 堯 應 日 運	伊東 大行寺 加島 常諦寺
化 60代	49	一 乘 院 普 妙 日 化	小田原 常永寺
	50	富 性 院 春 達 日 邁	
	51	善 性 院 春 底 日 述	
化 61代	52	慈 遠 院 識 遠 日 治	岡崎 善立寺
化 62代	53	圓 珠 院 隆 玄 日 養	興津 耀海寺
化 63代	54	玄 妙 院 泰 顔 日 精	一ノ谷 妙照寺
化 64代	55	中 正 院 長 説 日 静	
	56	二 諦 院 了 察 日 春	
化 65代	57	正 音 院 是 来 日 到	信州荊口 弘妙寺23
化 66代 72代再講主	58	本 善 院 存 貞 日 誠	三島 本覚寺
化 67代	59	常 照 院 堯 応 日 啓	石和 遠妙寺
化 68代	60	体 善 院 恵 相 日 圓	円井（葦崎） 妙浄寺
	61	真 光 院 真 光 日 通	
	62	本 寿 院 通 圓 日 念	伊佐布 安穩寺
化 69代	63	体 玄 院 導 林 日 観	須津 東光寺
	64	現 語 院 泰 静 日 邇	
	65	大 圓 院 智 詮 日 成	
	66	修 善 院 住 忍 日 湛	大宮 大泉寺
	67	通 妙 院 智 悦 日 徳	
	68	通 心 院 泰 森 日 昌	
	69	首 妙 院 智 光 日 逢	高田 長生寺
化 70代	70	空 妙 院 海 静 日 遙	布施妙泉寺(10)
化 71代	71	要 玄 院 玄 廣 日 静	大須賀 本源寺(9)
	72	純 妙 院 察 心 日 元	
	73	蓮 實 院 圓 善 日 報	端和 妙恩寺
	74	貫 通 院 観 道 日 統	大宮 大泉寺
化 73代	75	仁 讓 院 玄 龍 日 淳	端和 妙恩寺
	76	讓 遠 院 亮 辨 日 健	
	77	四老ニテ逝去ス其籍共九ツ智碩日徳 化主衆ニ納ム依テ歴代ニ加フ	
化 74代	78	通 妙 院 学 通 日 顕	安居山 東漸寺
化 75代	79	大 樹 院 運 智 日 曜	成島 滝泉寺

妙玄庵歴代帖（林）

化	31代	18	空	如	院	空	如	日	信		
		19	春	性	院	春	性	日	榮		
化	30代	20	玄	収	院	学	養	日	義		
化	32代	21	隆	存	院	隆	存	日	迨	興津	耀海寺 <sup>(15)</sup>
化	33代	22	本	禅	院	湛	要	日	述	甲府	遠光寺
										静岡大	須賀 本源寺 <sup>(6)</sup>
化	35代	23	修	学	院	湛	長	日	道	米倉	妙昌寺
										一ノ七	妙了寺 <sup>20</sup>
化	36代	24	即	心	院	智	宅	日	在	元吉原	妙法寺
										小田原	常永寺
		25	圓	昌	院	秀	禅	日	空		
化	37代	26	圓	妙	院	泰	然	日	融	興津	耀海寺
化	38代	27	通	玄	院	惠	了	日	迨		
化	39代	28	遠	珠	院	光	惠	日	治		
		29	亨	学	院	薤	如	日	肇	甲府	遠光寺
化	40代	30	亨	成	院	官	叔	日	貞	蒲原	東漸寺
										三島	本覚寺
化	41代	31	遠	妙	院	顓	秀	日	遜	中条	長遠寺
化	42代	32	統	要	院	玄	叔	日	将	一ノ七	妙了寺
化	43代	33	遠	妙	院	智	秀	日	宣	甲府	遠光寺
化	49代	34	遠	照	院	叡	存	日	沽	端和	妙恩寺
化	46代	35	亨	善	院	由	性	日	觀		
化	47代	36	圓	諦	院	運	芸	日	審	米倉	妙昌寺
化	48代	37	亨	妙	院	要	玄	日	濬	柚野	正法寺
										甲府	信立寺
化	50代	38	一	中	院	正	圓	日	如	端和	妙恩寺
										潮師ノ	院代ナリ
化	51代	39	見	容	院	察	岸	日	亮	加島	常諦寺
化	52代	40	觀	珠	院	春	隆	日	随	大須賀	本源寺
化	53代	41	德	樹	院	太	長	日	亮	穴平	遠照寺
化	54代	42	從	本	院	溪	雲	日	来	須津	東光寺
化	55代	43	含	章	院	唯	日	照	榮	高田	長生寺
化	56代	44	眼	智	院	義	圓	日	存	篠原	法久寺
化	57代	45	溫	讓	院	義	靜	日	妙	三島	本覚寺 <sup>29</sup>
										中条	長遠寺 <sup>27</sup>
										京	妙伝寺 <sup>37</sup>
		46	融	妙	院	玄	秀	日	遑		

# 妙玄庵歴代帖

林 是 幹 手控

表紙ニ曰ク

是迄善学院ニ無之折々差支候ニ付二百七世日讓代写之置ク者也  
他江出ス事御無用ニ候

化主所持

玄庵退院之節可為致記帳

本書は善学鏡師伝及西谷檀林四百年史執筆に際し青柳昌福寺より  
借用し後日の為め筆写保存す。（昭和三十三年四月大宜堂刊）  
筆写は伊藤俊子之に当る。今般原本に照合することが出来なかつ  
たので多少の誤字があることと思う。乞諒承。

化主歴代	開基	本	理	院	遙	山	日	長	高田	長生寺
	2	隆	生	院	玄	底	日	永	大野山	在廟
	3	本	是	院	良	卯	日	相	豆州三島	本覚寺
	4	正	終	院	智	秀	日	玄		
化 15代 自檀ノ祖	5	宝	聚	院	守	玄	日	城	甲府	信立寺
化 20代	6	隆	生	院	玄	底	日	永	無人ニ付再玄	譚
	7	即	心	院	恵	静	日	観		
化 21代	8	常	昌	院	受	閑	日	迅	米倉	妙昌寺
化 24代	9	本	成	院	栄	順	日	住		
化 23代	10	観	理	院	亮	玄	日	義	穴平	遠照寺
	11	一	行	院	元	雅	日	立	藤枝 清水	大慶寺 妙啓寺
	12	本	成	院	了	順	日	宥		
	13				圓	哲	日	宣		
	14	信	行	院	順	亮	日	観	加島	常諦寺
	15	相	応	院	貞	順	日	実	三島	本覚寺
	16	榮	観	院	榮	観	日	心		
化 29代	17	体	玄	院	堯	長	日	近	一ノセ	妙了寺 <sup>(10)</sup>
				太	寿	院	日	量		

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

山 田 日 真	新訂増補日宗龍華年表	臨川書店	昭和53
日蓮宗現宗研編	近代日蓮宗年表	日蓮宗宗務院	◇ 56
宮 崎 英 修	新発見真蹟解題	日教研一 1 号	◇ 49
山中 喜八 編	日蓮大聖人御真蹟御本尊集	立正安国会	◇ 49
法蔵館編集部	日蓮聖人真蹟集成(一)~(十)巻	法蔵館	◇ 51
宮崎 英修 編	日蓮辞典	東京堂	◇ 53
河村 孝照 編	明治・大正・昭和日蓮門下仏家人名辞典	国書刊行会	◇ 53
中 尾 堯 編	日本名僧辞典	東京堂	◇ 53
石 川 教 張	日蓮宗仏事行事集（上）（下）	ピタカ	◇ 55
早 水 弁 静	日蓮宗（葬儀大事典）	鎌倉新書	◇ 55
日蓮宗事典刊行会	日蓮宗事典	日蓮宗宗務院	◇ 56
河村孝照・石川教張	日蓮聖人大辞典	国書刊行会	◇ 56
中尾 堯 編	日蓮聖人事蹟事典	雄山閣	◇ 56
大鑑編集委員会編	日蓮宗寺院大鑑	池上本門寺	◇ 56
遠藤 是秀 編	日蓮宗葬儀の手引一駿河地区を中心として	日蓮宗和党会	◇ 56
創価学会教学部編	日蓮正宗教学小辞典	創価学会	◇ 47
創価学会教学部編	日蓮大聖人御書辞典	聖教新聞社	◇ 51
宗 勢 調 査 会編	日蓮宗全国宗勢調査統計表	日蓮宗宗務院	◇ 52
宗 勢 調 査 会編	日蓮宗宗勢調査報告書	日蓮宗宗務院	◇ 53
日蓮宗新聞部編	日蓮宗新聞縮刷版	日蓮宗宗務院	◇ 54



日蓮聖人研究文献目録（奥野）

〈資料・辞典類〉

高 木 豊	「身延鑑」管見	棲神—52号	昭和55
高 木 豊	「身延鑑」管見(二)	日教研—8号	◇ 56
冠 賢 一	近世後期日蓮宗出版史の一考察—書肆村上平楽寺の蔵板支配について—	日本仏教史学—12号	◇ 52
冠 賢 一	日蓮宗出版書における寛文期の意義	古稀記念	◇ 49
兜 木 正 亨	日蓮聖人真蹟影印刊行の概観	日蓮聖人の真蹟集成—1巻	◇ 51
宗政 五十緒 他	京都妙覚寺現蔵版木の研究(一)	日蓮とその教団—1集	◇ 51
正中山法華経寺編	中山史（増補版）	正中山法華経寺	◇ 53
本能寺史編纂会	本能寺	大本山本能寺奉賛会	◇ 47
庄 司 寿 完	堀之内妙法寺史料	堀之内妙法寺	◇ 49
宗政 五十緒 他	京都妙覚寺現蔵版木の研究(二)	日蓮とその教団—2集	◇ 52
林是晋・北村聡	〈資料〉延享二年身延山久遠寺末寺帳	日教研—3号	◇ 51
林是晋・北村聡	〈資料〉延享二年身延山久遠寺末寺帳（続）	日教研—4号	◇ 52
冠 賢 一	〈資料〉埴谷抄—日親—	日教研—4号	◇ 52
渡辺宝陽・井上博文	〈資料〉不敵寺代々相伝抄	日教研—5号	◇ 53
高木 豊 他	〈資料〉「法則」集成	日教研—6号	◇ 54
渡辺宝陽・井上博文	〈資料〉法華間要集	日教研—7号	◇ 55
松村 寿巖 他	〈資料〉六檀会評控	日教研—8号	◇ 56
示 村 貞 夫	妙法寺史	妙法寺史刊行委員会	◇ 54
中山法華経寺	中山法華経寺誌	中山法華経寺	◇ 56
熊本県立美術館編	本妙寺歴史資料調査報告書	熊本県立美術館	◇ 56
立正大学寺院史料研究会	京都・北竜華妙覚寺文書目録—日蓮宗寺院史料調査報告—	妙覚寺	◇ 48
身延山久遠寺編	身延文庫所蔵文書・絵画目録	身延山久遠寺	◇ 51
立正大学日蓮教学研究所	改訂日蓮宗宗学章疏目録	立正大学日蓮教学研究所	◇ 53

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

長光徳和・妻鹿 淳子編	不受不施派読史年表	開明書院	昭和53
中 村 孝 也	万治法難と本行寺日蓮門流	印仏研28—1	◇ 54
勝 木 太 一	上総寛政法難宗門一件について	印仏研27—1	◇ 53

〈文学、芸術〉

野 村 耀 昌	日蓮宗芸術家略伝	講座「日蓮」1	昭和47
坂 輪 宣 敬	法華経と芸術・芸能—日蓮宗の絵画・彫刻	講座「日蓮」1	◇ 47
坂 輪 宣 敬	日蓮聖人画像の系譜	日仏年報38号	◇ 48
坂 輪 宣 敬	日蓮宗と初期狩野派の絵師について	古稀記念	◇ 49
坂 輪 宣 敬	「日蓮聖人註画讃」の絵師窪田統泰について	大崎学報—128号	◇ 51
檜 崎 宗 重	法華信仰と浮世絵（野村耀昌編法華経信仰の諸形態）	平楽寺書店	◇ 51
冠 賢 一	「日蓮聖人註画讃」の一考察（野村耀昌編「法華経信仰の諸形態」）	平楽寺書店	◇ 51
坂 輪 宣 敬	日蓮宗僧の画像について	日本仏教—45号	◇ 53
坂 輪 宣 敬	日蓮聖人画像の一考察（とくに「波木井の御影」について）	印仏研—20—2	◇ 47
ベルナール・フ ランク	日蓮宗の仏像	法華59—10	◇ 48
植 中 直 斉	日蓮聖人絵伝	身延山久遠寺	◇ 48
冠 賢 一	日蓮聖人註画讃	勉誠社	◇ 49
上 田 本 昌	日本文学と法華経（野村耀昌編法華経信仰の諸形態）	平楽寺書店	◇ 51
森 山 一	宮沢賢治の詩と宗教	真世界社	◇ 53
石 川 康 明	日蓮と近代文学者たち	平文社	◇ 53
石 川 教 張	文学作品に表われた日蓮聖人	国書刊行会	◇ 55
石 川 教 張	吉田松陰の日蓮観	東京立正女子短大 紀要	◇ 56

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

縄 田 早 苗	霊友会—法華経新教団の母体 （新宗教の世界Ⅱ）	大蔵出版	昭和53
横 山 真 佳	立正佼成会—法華信仰と先祖 供養（新宗教の世界Ⅱ）	大蔵出版	〃 53
溝 口 敦	創価学会—宗教政治集団の発 展と拡散（新宗教の世界Ⅱ）	大蔵出版	〃 53

〈不受不施〉

奈良本辰也・高 野 澄	忘れられた殉教者	小学館	昭和47
相 葉 伸	殉教の人々	講座「日蓮」3	〃 47
渡 辺 宝 陽	不受不施の信仰	講座「日蓮」3	〃 47
影山 堯雄 編	日蓮宗不受不施派の研究	平楽寺書店	〃 47
宮 崎 英 修	不受不施義の展開（中世法華 仏教の展開）	平楽寺書店	〃 49
宮 崎 英 修	悲田不受不施派の興亡	古稀記念	〃 49
日蓮宗不受不施 派記念事業執行 委員会	図録「日蓮宗不受不施派の歴 史」	同刊行委員会	〃 50
宮 崎 英 修	不受不施派の名分論	喜寿記念	〃 50
不受不施派研究 所編	日蓮宗不受不施派の歴史	妙覚寺	〃 50
安 藤 精 一	不受不施派農民の抵抗	清文堂出版	〃 51
小林日行 監修	異端—関東における不受不施 派の記録	東京若松寺	〃 51
相 葉 伸	不受不施派殉教の歴史	大蔵出版	〃 51
宮 崎 英 修	禁制不受不施派の研究	平楽寺書店	〃 51
孝 本 貢	仏教教団再編成過程の研究— 日蓮宗不受不施派の事例—	日蓮とその教団— 1 集	〃 51
加 川 治 良	房総禁制宗門史	国書刊行会	〃 52
高 野 澄 他	聖—写真でつづる日蓮宗不受 不派抵抗の歴史	国書刊行会	〃 52
井 上 恵 宏	日蓮門下の殉教史	ピタカ	〃 53
宮 崎 英 修	不受不施派流僧の祈りと行法	印仏研—29—2	〃 56
日蓮宗不受不施 派研究所	不受不施史料	平楽寺書店	〃 56

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

社会問題資料研究会編	日蓮宗に顛れたる不敬事件 （仏教と社会運動）	社会問題資料叢書 第一輯 思想研究資料特輯 52号	昭和47
山 折 哲 雄	ナショナリズムと日蓮主義— 日蓮思想におけるナショナル な心情と呪性	講座「日蓮」4	◇ 47
渡 辺 宝 陽	ナショナリズムと日蓮主義— 田中智学	講座「日蓮」4	◇ 47
渡 辺 宝 陽	ナショナリズムと日蓮主義— 本多日生	講座「日蓮」4	◇ 47
中 濃 教 篤	ナショナリズムと日蓮主義— 石原莞爾	講座「日蓮」4	◇ 47
中 濃 教 篤	革命思想と日蓮主義—妹尾義 郎	講座「日蓮」4	◇ 47
戸 頃 重 基	革命思想と日蓮主義—テロと 日蓮主義の関係（北一輝・大 川周明・井上日召）	講座「日蓮」4	◇ 47
佐 木 秋 夫	革命思想と日蓮主義—日蓮と 国家および革命	講座「日蓮」4	◇ 47
田 村 芳 朗	近代日本の歩みと日蓮主義	講座「日蓮」4	◇ 47
戸 頃 重 基	近代社会と日蓮主義（日本人 の行動と思想18）	評論社	◇ 47
戸 頃 重 基	近代日本の歩みと日蓮主義— 日蓮の国家観—（とくに法国 相関の両義性について）	講座「日蓮」4	◇ 47
池 上 尊 義	日蓮と国家	日蓮とその教団— 1集	◇ 51
佐々木 馨	日蓮と天皇—国主観との関連 で	日本仏教—44, 45 号	◇ 52 53
梅 原 正 紀	日蓮系の新宗教運動—法華系 の新興教団（その体質と問題 点）	講座「日蓮」4	◇ 47
宮 崎 英 修	日蓮系の新宗教運動—既成教 団の新展開	講座「日蓮」4	◇ 47
日 隅 威 徳	日蓮系の新宗教運動—創価学 会	講座「日蓮」4	◇ 47
小 松 邦 彰	日蓮系の新宗教運動—霊友会 立正佼成会	講座「日蓮」4	◇ 47
冠 賢 一	日蓮系の新宗教運動—仏立宗	講座「日蓮」4	◇ 47
小 野 泰 博	妙智会—先祖供養と忍善への 道（新宗教の世界Ⅲ）	大蔵出版	◇ 53

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

里見泰穂	日蓮宗と俗信仰との交渉（中世法華仏教の展開）	平楽寺書店	昭和49
望月良晃	京都町衆の法華信仰一本阿弥光悦を中心として—（中世法華仏教の展開）	平楽寺書店	◇ 49
田村芳朗	日蓮聖人と民衆仏教	法華59—3.4	◇ 48
中尾堯	題目講の機能と性格	喜寿記念	◇ 50
藤井学	法華信仰の諸相—法華一揆	講座「日蓮」3	◇ 47
影山堯雄	法華信仰の諸相—日蓮の諸尊信仰	講座「日蓮」3	◇ 47
藤井学	法華信仰の諸相—町衆の信仰	講座「日蓮」3	◇ 47
宮崎英修	日蓮教団の展開	講座「日蓮」3	◇ 47
川添昭二	日蓮教団の分立—九州における日蓮宗の発展	講座「日蓮」3	◇ 47
中尾堯	日蓮教団の分立—東国における日蓮宗の発展	講座「日蓮」3	◇ 47
冠賢一	日蓮教団の分立—京畿・中国・四国における日蓮宗の発展	講座「日蓮」3	◇ 47
宮崎英修	他宗徒のみた日蓮聖人	法華58—7.8	◇ 47
田村芳朗	近代における日蓮観—高山樗牛の日蓮観	講座「日蓮」4	◇ 47
紀野一義	近代における日蓮観—宮沢賢治と日蓮	講座『日蓮』4	◇ 47
茂田井教亨	近代における日蓮観—日蓮観の諸相	講座「日蓮」4	◇ 47
高木豊	近代における日蓮観—キリスト者の日蓮観	講座「日蓮」4	◇ 47
戸頃重基	論争の歴史—現代における論争（日蓮の平和思想について）	講座「日蓮」3	◇ 47
勝呂信静	論争の歴史—排仏論者との論争	講座「日蓮」3	◇ 47
妹尾啓司	論争の歴史—キリスト教との論争	講座「日蓮」3	◇ 47
渡辺宝陽	論争の歴史—脱宗者の思想	講座「日蓮」3	◇ 47
浅井円道	論争の歴史—他宗との論争	講座「日蓮」3	◇ 47
中濃教篤	戦時下の仏教	国書刊行会	◇ 52
林靈法	妹尾義郎と新興仏教青年同盟	百華苑	◇ 51
松根麿	妹尾義郎と新興仏教青年同盟	三一書房	◇ 50
山川智応	日蓮主義発展史	真世界社	◇ 53

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

室 住 一 妙	みのぶ山論	棲神—46号	昭和49
室 住 一 妙	身延山論をめぐる	棲神—47号	◇ 50
北 村 聡	日蓮宗寺院の開帳とその寺院経営—松葉ヶ谷妙法寺の事例を中心として—	仏教学論集—9号	◇ 47
北 村 聡	近世寺院の開帳と講中の役割について	印仏研—22—2	◇ 49
北 村 聡	開帳と講中—身延山久遠寺の江戸開帳を支えた人々	立正史学—41号	◇ 52
内 野 久美子	七面法華と子安講—その習俗と信仰—	日本仏教—45号	◇ 53
北 村 聡	近世における日蓮宗寺院の経営史的考察—鎌倉・松葉ヶ谷妙法寺の場合—	日教研—1号	◇ 49
坂 本 勝 成	江戸の七面信仰—高田亮朝寺の場合—	日教研—3号	◇ 51
北 村 聡	近世法華信仰の一具体像—「千代見草」を素材に—	日教研—3号	◇ 51
松 村 寿 巖	中世日蓮宗と追善供養	日教研—1号	◇ 49
松 村 寿 巖	中世日蓮宗における法要儀礼—日蓮・日像・日朝の事例をめぐる—	日仏年報—43号	◇ 53
下 宮 高 純	京都妙顕寺所蔵講式声明について—「宗祖四百五十遠忌式」を中心にして—	日教研—5号	◇ 53
下 宮 高 純	日蓮宗の十種供養式	日教研—6号	◇ 54
遠 藤 是 秀	題目宝塔にみる法華教団とその信仰—静岡県富士地区について—	日教研—5号	◇ 53
松 村 寿 巖	日蓮宗と仏具—その受用時期を視点として—	日教研—6号	◇ 54
宮 崎 英 修	江戸中期における諫曉活動	棲神—48号	◇ 50
宮 内 武 範	富山藩廃仏毀釈における日蓮宗寺院の動向	印仏研—24—1	◇ 50
植 田 観 樹	能勢法華の成立についての一考察—寂照院日乾と能勢頼次を中心として—	日教研—5号	◇ 53
宮 川 了 篤	日蓮宗批判史の一考察—松本鹿鹿と平田篤胤の関係—	日本仏教—45号	◇ 53
妹 尾 啓 司	キリスト教伝来と日蓮宗（中世法華仏教の展開）	平楽寺書店	◇ 49

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

中尾 宝陽	堯・渡辺	日蓮宗（日本仏教基礎講座）	雄山閣	昭和53
中 尾	堯	日蓮宗の歴史	教育社出版	◇ 55
宮 崎	英 修	日蓮聖人をめぐる人々	法華58—10	◇ 47
宮 崎	英 修	日蓮宗の人びと	宝文館出版	◇ 51
高 木	豊	日興とその門弟	日蓮とその教団— 4集	◇ 54
糸 久	宝 賢	像師の京都弘教について	日教研—6号	◇ 54
寺 尾	英 智	池上・比企谷両山貫主の上総 国巡説について	日教研—8号	◇ 56
佐 藤	行 信	寺僧の活躍による寺院の成立 について—大石寺を中心とし て—	櫛田博士頌寿記念	◇ 48
糸 久	宝 賢	南北朝期に於ける妙顕寺の動 向について	日教研—7号	◇ 55
糸 久	宝 賢	室町時代における京都本能寺 の展開—本能寺敷地をめぐる 経緯と公武との交渉を中心と して—	日教研—8号	◇ 56
松 井	孝 純	種子島日典殉教史	印仏研—22—2	◇ 49
上 田	本 昌	日蓮教団における法難の間難	日仏年報—39号	◇ 49
林	是 幹	横須賀問答の「裂邪網」につ いて	棲神—48号	◇ 50
林	是 幹	身延西谷檀林の形成と展開 （近世法華仏教の展開）	平楽寺書店	◇ 53
冠	賢 一	日蓮宗における檀林法度の制 定について—飯高・小西・三 味堂檀林を中心に—	印仏研—25—1	◇ 51
林	是 晋	身延山支院の成立と展開	棲神—46号	◇ 49
林	是 晋	身延山支院の研究—宿坊につ いて—	日教研—1号	◇ 49
町 田	是 正	身延山墓碑史考	棲神—48号	◇ 50
秋 山	智 孝	身延裏参道考	棲神—48号	◇ 50
林	是 晋	近世における身延山支院の組 織について	日教研—3号	◇ 51
林	是 晋	身延山の年中行事について	日仏年報—43号	◇ 53
林	是 晋	身延山久遠寺の本末について	棲神—52号	◇ 55
林	是 晋	身延山諸堂建立考	棲神—53号	◇ 56
林	是 晋	日唱の身延除歴事件について	棲神—49号	◇ 52

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

村 上 重 良	仏立開導長松日扇	講談社	昭和51
北 川 前 肇	一妙院日導の顕本論	日教研—3号	◇ 51
小 野 文 珙	近世日蓮宗教学に於ける観心 思想の展開(一)	日教研—3号	◇ 51
窪 田 哲 城	日什と弟子達（顕本法華殉教 史）	山喜房仏書林	◇ 53
小 野 文 珙	庵林宗学の系譜（近世日蓮宗 教学の研究二）	日教研—5号	◇ 53
本 田 栄 秀	日蓮教学における三大秘法に ついて(二)(特に本妙日臨以後)	印仏研28—1	◇ 54
小 野 文 珙	「本門自誓受戒」について	印仏研28—1	◇ 45
井 上 博 文	近世初頭京都日興門流教学の 展開	日蓮とその教団— 4集	◇ 54

〈教 団 史〉

影 山 堯 雄	日蓮教団の成立と展開 (中世法華仏教の展開)	平楽寺書店	昭和49
高 木 豊	京幾日蓮教団の展開 (中世法華仏教の展開)	平楽寺書店	◇ 49
冠 賢 一	東海日蓮教団の展開 (中世法華仏教の展開)	平楽寺書店	◇ 49
林 是 幹	甲斐日蓮教団の展開 (中世法華仏教の展開)	平楽寺書店	◇ 49
中 尾 堯	関東日蓮教団の展開 (中世法華仏教の展開)	平楽寺書店	◇ 49
冠 賢 一	戦国期日蓮教団の展開 —遠州駕津本興寺と鶴殿氏—	印仏研22—2	◇ 49
渡 辺 宝 陽	日蓮聖人の戒壇義と教団の問題	日仏年報—39号	◇ 49
千葉県郷土史研 究連絡協議会	日蓮一房総における宗派と文 化	千秋社	◇ 55
川 添 昭 二	九州日蓮教団の展開 (中世法華仏教の展開)	平楽寺書店	◇ 49
川 添 昭 二	博多における日蓮教団の展開	日蓮とその教団— 2集	◇ 52
中濃 教篤 編	近代日蓮教団の思想家 —近代日蓮教団教学史試論—	国書刊行会	◇ 52
宮 崎 英 修	日蓮教団史研究の課題	大崎学報—131号	◇ 53



日蓮聖人研究文献目録（奥野）

中 条 暁 秀	日蓮宗上代における神天上義について	印仏研23—2	昭和50
北 川 前 肇	日蓮聖人における法華色読の一考察	仏教学論集—10号	◇ 48
有 賀 要 延	日蓮各派の教学	山喜房仏書林	◇ 50

〈教 学 史〉

高 橋 謙 祐	「本因妙抄」考	日教研—6号	昭和54
高 橋 謙 祐	「本因妙抄」にみる 興門教学の思想背景について	印仏研28—2	◇ 55
北 川 前 肇	行学院日朝の教学における摂折論	日教研—1号	◇ 49
北 川 前 肇	行学院日朝の研究（仙波遊学について）	印仏研22—2	◇ 49
北 川 前 肇	行学院日朝の門下教育	印仏研24—2	◇ 51
芦 沢 一 男	行学院日朝と中古天台思想との関連について	印仏研27—1	◇ 53
大 平 茂 樹	慶林坊日隆聖人著「名目見聞」について	印仏研24—1	◇ 50
北 川 前 肇	慶林院日隆の顕本論(一)	仏教学論集—12号	◇ 51
芦 沢 一 男	慶林坊日隆の時間論（五百座点実説論について）	仏教学論集—15号	◇ 55
高 鳴 雄三郎	嗚呼孝子元政上人	法華58—9	◇ 47
松 村 寿 巖	近世日蓮宗における「草山清規」の位置	日蓮とその教団—2集	◇ 52
岡 田 栄 照	草山元政についての批判	印仏研27—1	◇ 53
小 野 文 珖	本妙日臨律師の研究	大崎学報132号	◇ 54
林 是 幹	本妙日臨上人の阿毘縁山行について	棲神52号	◇ 55
宮 川 一 敬	優陀那日輝における排仏論に対する姿勢	印仏研21—2	◇ 48
小 野 文 珖	優陀那日輝研究ノート	日教研—4号	◇ 52
茂田井 教 亨	中世における日蓮教学の成立と展開（中世法華仏教の展開）	平楽寺書店	◇ 49
渡 辺 宝 陽	一如日重の行法観（近世日蓮教学の原点）	印仏研21—2	◇ 48
石 川 裕 光	永昌院通義日鑑の本尊論	日教研—1号	◇ 49
冠 賢 一	霊鷲院日密の法華経談義	大崎学報—129号	◇ 51

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

松 村 寿 巖	日蓮宗「臨終曼荼羅」の成立と展開	古稀記念	昭和49
浅 井 円 道	本尊論の展開（中世法華仏教の展開）	平楽寺書店	◇ 49
渡 辺 宝 陽	大曼荼羅と法華堂	日蓮とその教団—1集	◇ 51
北 川 前 肇	日蓮教学における寿量本仏観の展開	日蓮とその教団—2集	◇ 52
桑 名 貫 正	御本尊論研究ノート（前編）	棲神—53号	◇ 56
奥 野 本 洋	成仏への道	棲神—51号	◇ 54
渡 辺 宝 陽	靈山往詣と即身成仏—覚え書き—	棲神—52号	◇ 55
浅 井 円 道	即身成仏論の成立と展開	棲神—53号	◇ 56
室 住 一 妙	棲神の意義	棲神—45号	◇ 48
室 住 一 妙	神秘の問題—成仏道にふれて—	日仏年報—40号	◇ 50
茂田井 教 亨	宗学の主体性と客体性	棲神—48号	◇ 50
疋 田 英 肇	純粹宗学への道	棲神—48号	◇ 50
茂田井 教 亨	宗学研鑽上の課題	大崎学報—131号	◇ 53
茂田井 教 亨	日蓮教学における「教」の位置と構造（承前）に「教」によって選択された「教」	大崎学報—128号	◇ 51
渡 辺 宝 陽	本迹論の展開（中世法華仏教の展開）	平楽寺書店	◇ 49
室 住 一 妙	摂折論の展開（中世法華仏教の展開）	平楽寺書店	◇ 49
宮 崎 英 修	日蓮の宗教における合理性と神秘性	印仏研—23—2	◇ 50
渡 辺 宝 陽	日蓮宗信行論の研究	平楽寺書店	◇ 51
渡 辺 宝 陽	日蓮教学における三昧の問題	日仏年報—41号	◇ 51
宮 崎 英 修	日蓮宗の祈禱法	平楽寺書店	◇ 55
戸 頃 重 基	日蓮の宗教への社会科学的視座	喜寿記念	◇ 50
上 田 本 昌	日蓮聖人における仏国土思想の展開	古稀記念	◇ 49
勝 呂 信 静	宗学研究上の二、三の問題点	古稀記念	◇ 49
戸 頃 重 基	日蓮の宗教哲学—業の必然と意志の自由—	古稀記念	◇ 49
茂田井 教 亨	歴史的 개념としての日蓮教学の本質	喜寿記念	◇ 50

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

日 比 宣 正	天台教学との関連 (中世法華仏教の展開)	平楽寺書店	昭和49
田 村 芳 朗	天台本覚思想と日蓮教学 (中世法華仏教の展開)	平楽寺書店	◇ 49
関 口 真 大	日蓮聖人に見る天台三大部	古稀記念	◇ 49
浅 井 円 道	日蓮の依憑天台とその超克	大正大学研究紀要 61号	◇ 50
横 超 慧 日	法華宗三国四師の説一最澄・ 日蓮の相承を中心に	日蓮とその教団一 1 集	◇ 51
高 橋 謙 祐	天台学僧信尊について	日教研一 4 号	◇ 52
高 橋 謙 祐	日蓮聖人と「修善寺決」	日教研一 5 号	◇ 53
林 真 芳	日蓮教学に影響せる「五時八 教」について	印仏教一28— 1	◇ 54
赤 星 憲 司	日蓮聖人の天台・妙楽大師観 の一考察	日教研一 8 号	◇ 56
浅 井 円 道	宗祖における観念論打破の思 想	古稀記念	◇ 49
庵 谷 行 亨	日蓮聖人教学における本門と 観心	印仏研25— 1	◇ 51
北 川 前 肇	日蓮教学における教相の一問 題	印仏所28— 2	◇ 55
北 川 前 肇	日蓮聖人の教観二門に関する 一試論	大崎学報一133号	◇ 55
伊 藤 慎 一	日蓮教学と本覚思想一日蓮聖 人との関わり合いを中心とし て	日教研一 7 号	◇ 55
伊 藤 慎 一	日蓮聖人教学と本覚思想の一 考察	日教研一 8 号	◇ 56
中 尾 堯	日蓮宗の成立と展開	吉川弘文館	◇ 48
勝 呂 信 静	日蓮における開会の思想と教 団の問題	日仏年報一39号	◇ 49
佐 藤 弘 夫	初期日蓮の国家観	日本思想史研究10 号	◇ 53
中 尾 堯	日蓮宗の諸問題	雄山閣	◇ 50
渡 辺 宝 陽	日蓮宗から見た天台宗	「天台」No.3	◇ 56
影 山 堯 雄	日蓮宗布教の研究	平楽寺書店	◇ 50
戸 頃 重 基	日蓮教学の思想的な研究	富山房	◇ 51
茂田井 教 亨	日蓮教学の根本問題	平楽寺書店	◇ 56
茂田井 教 亨	日蓮教学入門	法華59—8, 9, 11, 12号 60—2号	◇ 48 ◇ 49

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

宮崎海優	日蓮聖人の女性観	棲神—47号	昭和50
笠井正弘	日蓮の思考と政治志向性	西日本宗教学雑誌 4号	◇ 50
中條暁秀	宗祖と守護神	棲神—50号	◇ 53
佐々木 肇	日蓮と武士	仏教史学研究—21 —2	◇ 53
玉城康四郎	日蓮のめざす究極者	日蓮とその教団— 3集	◇ 53
浅井円道	宗祖における造語の妙とその意味	日教研—5号	◇ 53
西方元證	日蓮聖人の安心について	日教研—6号	◇ 54
最上雅友	日蓮聖人出家動機の考察	日教研—7号	◇ 55
松村寿巖	日蓮聖人における追善供養の動向と展開	印仏研—22—2	◇ 49
上田本昌	身延の日蓮聖人と五種修行	法華60—9	◇ 49
中村鍊敬	日蓮聖人と諸人供養	平楽寺書店	◇ 47
上田本昌	身延入山当初の日蓮	棲神—45号	◇ 48
上田本昌	身延山初期における日蓮聖人—特に建治二年を中心として—	棲神—46号	◇ 49
上田本昌	身延山における日蓮聖人—建治三年を中心として—	棲神—47号	◇ 50
上田本昌	身延山における日蓮聖人	棲神—48号	◇ 51
上田本昌	身延山における日蓮聖人—弘安元年の秋と冬—	棲神—49号	◇ 52
上田本昌	身延山における日蓮聖人—弘安二年の春から夏へ—	棲神—50号	◇ 53
上田本昌	身延山における日蓮聖人—弘安二年の秋から弘安三年の冬へ—	棲神—51号	◇ 54
上田本昌	身延山晩年における日蓮聖人—弘安三年三月から八月まで—	棲神—52号	◇ 55
上田本昌	身延山晩年における日蓮聖人	棲神—53号	◇ 56
若杉見龍	感応道交の世界—日蓮聖人の身延生活—	日仏年報—44号	◇ 54
浅井円道	日蓮の日本天台史観	印仏研—20—2	◇ 47
浅井円道	上古日本天台本門思想史	平楽寺書店	◇ 48
小松邦彰	天台密教思想との連関（中世法華仏教の展開）	平楽寺書店	◇ 49

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

石 指 浩 紘	日蓮聖人の罪意識—立教開宗との関連において	日教研—8号	昭和56
町 田 是 正	日蓮聖人にみる人間観 (第二輯)	棲神44号	◇ 47
町 田 是 正	日蓮聖人にみる人間観 (第三輯)	◇ 45号	◇ 48
町 田 是 正	日蓮聖人にみる人間観 (第四輯)	◇ 46号	◇ 47
梅 原 猛	日蓮の人物—手紙に現われた日蓮の人間像	講座「日蓮」2	◇ 49
渡 辺 宝 陽	日蓮の人物—日蓮聖人の人間像	講座「日蓮」2	◇ 47
増 谷 文 雄	日蓮—書簡を通してみる人と思	筑摩書房	◇ 54
倉 橋 観 隆	日蓮聖人の倫理観の一考察	日教研—7号	◇ 55
倉 橋 観 隆	日蓮聖人の倫理観—「正直」ということを中心に	日教研—8号	◇ 56
倉 橋 観 隆	日蓮聖人の倫理観についての一考察	印仏研—29—2	◇ 56
茂田井 教 亨	日蓮の行法観—その思想と生涯—	佼成出版	◇ 56
上 原 専 禄	死者・生者—日蓮認識への発展と視点	未来社	◇ 49
里 見 泰 穂	日蓮聖人の生死観	日仏年報—46号	◇ 56
庵 谷 行 亨	日蓮聖人の生死観	日仏年報—46号	◇ 56
奥 野 本 洋	日蓮聖人の臨終観	棲神—53号	◇ 56
伊 藤 寛 仁	日蓮聖人の救済論について(一)	日教研—8号	◇ 56
中 尾 堯	日蓮聖人の浄土宗批判とその意義	古稀記念	◇ 49
浅 井 円 道	宗祖対法然房	大崎学報—128号	◇ 51
奥 野 本 洋	日蓮聖人遺文中に見られる法然像	棲神—50号	◇ 53
浅 井 円 道	日蓮聖人の教学形成と法然教学との関連	棲神—52号	◇ 55
渡 辺 芳 遠	日蓮と親鸞の消息文	印仏研—23—1	◇ 49
浅 井 円 道	日蓮の弘法大師観	日仏年報—40号	◇ 50
中 條 暁 秀	宗祖と得一	棲神—52号	◇ 55
渡 部 公 允	日蓮聖人の平和思想	法華58—5, 6	◇ 47
宮 崎 海 優	日蓮聖人の方位観	棲神—46号	◇ 49

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

西 片 元	救済論の一考察—受持譲与における力用について	日教研—5号	昭和53
中 尾 堯	日蓮の終末思想と蒙古襲来（日本宗教史論集上）	吉川弘文館	◇ 51
茂田井 教 亨	日蓮聖人の歴史観	法華58—1, 2	◇ 47
町 田 是 正	日蓮聖人の「時」の意識	棲神—49号	◇ 52
山 本 光 明	日蓮聖人における「時」について	日教研—4号	◇ 52
茂田井 教 亨	日蓮教学における「時」の問題	大崎学報—130号	◇ 52
山 本 光 明	日蓮聖人における「時」の問題—「歴史的時間」の特殊性について—	日教研—5号	◇ 53
町 田 是 正	日蓮聖人の時間論—「今本時」の意味について	棲神52号	◇ 55
庵 谷 行 亨	日蓮聖人における専唱題目と余行の実修—とくに読誦を中心として—	印仏研23—2	◇ 50
上 田 本 昌	日蓮聖人における唱題と三昧について	日仏年報—41号	◇ 51
庵 谷 行 亨	日蓮聖人の三益論	印仏研—28—1	◇ 54
小 野 文 琬	日蓮聖人の仏種思想(一), (二)	印仏研26—2 27—2	◇ 53 54
渡 辺 宝 陽	日蓮聖人の仏性論の基盤	印仏研28—2	◇ 55
渡 辺 宝 陽	日蓮聖人の仏種論について	印仏研29—2	◇ 56
高 橋 俊 隆	日蓮聖人の下種論—不軽品の逆縁下種を中心として	日教研8号	◇ 56
室 住 一 妙	日蓮聖人ご隆誕の意義について	棲神44号	◇ 47
上 田 本 昌	日蓮聖人の「上行再誕」について	棲神44号	◇ 47
中 條 暁 秀	不軽と上行	棲神49号	◇ 52
庵 谷 行 亨	日蓮聖人の師自覚について(一)	印仏研29—2	◇ 56
有 村 友 伸	日蓮聖人における謗法観—道元禪師との比較において	日教研3号	◇ 51
宮 淵 泰 存	日蓮聖人における罪認識の一考察—法華経における罪の概念と日蓮聖人—	日教研—4号	◇ 52
渡 辺 宝 陽	「謗法・墮獄」覚え書き	日教研—4号	◇ 52
本 間 裕 史	末法と戒—最澄・法然・日蓮を巡って	日教研—4号	◇ 52

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

中 條 暁 秀	法華経の如説修行と日蓮	日仏年報—45号	昭和55
北 川 前 肇	日蓮聖人の「摩訶止観」の受容	日仏年報—45号	◇ 55
茂田井 教 亨	日蓮の法華経観	佼成出版社	◇ 55
渡 辺 宝 陽	日蓮聖人の釈尊観	古稀記念	◇ 49
北 川 前 肇	日蓮聖人における「寿量品の仏」について	大崎学報—129号	◇ 51
高 橋 俊 隆	日蓮聖人における釈尊観の一考察—特に本師の開顕について—	印仏研28—1	◇ 54
高 橋 俊 隆	日蓮聖人の釈尊観—釈尊三徳観を中心として—	日教研—6号	◇ 54
浅 井 円 道	日蓮聖人の仏身論の特徴	印仏研28—2	◇ 55
小 野 兼 弘	日蓮聖人の本尊に関する一考察	印仏研28—2	◇ 55
高 橋 俊 隆	日蓮聖人の釈尊観（一）親徳を中心として	日教研—7号	◇ 55
庵 谷 行 亨	日蓮聖人における受持論の一考察	印仏研21—1	◇ 47
庵 谷 行 亨	日蓮聖人における受持の概念—日蓮聖人引用の法華経を中心として—	印仏研22—1	◇ 48
宮 淵 泰 存	受持譲与段における「受持」についての一考察	日教研—3号	◇ 51
庵 谷 行 亨	「観心本尊抄」受持譲与段について—その論理過程についての—一考察—	大崎学報—130号	◇ 52
庵 谷 行 亨	日蓮聖人の一念三千について—「観心本尊抄」をめぐって—	大崎学報—132号	◇ 54
庵 谷 行 亨	本尊抄末註における受持の概念	日教研—1号	◇ 49
庵 谷 行 亨	「観心本尊抄」の具足論	印仏研—26—1	◇ 52
星 野 行 秀	事一念三千論の一考察	日教研—6号	◇ 54
茂田井 教 亨	開目抄講讀	山喜房仏書林	◇ 52
塚 本 啓 祥	正法受持と日蓮の立場—法身観展開の一面—	古稀記念	◇ 49
庵 谷 行 亨	日蓮教学における五字と受持について	印仏研24—1	◇ 50
庵 谷 行 亨	日蓮聖人における「受持」の問題—天台本覚思想との関連—	日教研—3号	◇ 51

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

梅 本 光 祥	「開目抄」写本の書誌的考察	大崎学報—130号	昭和52
本 間 裕 史	「三大秘法抄」とその課題	日教研—3号	◇ 51
本 田 栄 秀	日蓮教学における三大秘法について—特に本妙日臨以後—	印仏研—26—1	◇ 52
山 川 智 応	三大秘法概説	浄妙全集刊行会	◇ 55
兜 木 正 亨	富木尼ごぜん御書の「かまへてさんと三年」について	法華58—11, 12	◇ 47
高 川 英 司	五人土籠御書の解釈と大進阿闍梨の評価について	法華60—5	◇ 49
中 條 暁 秀	「立正安国論」の略本と広本について	印仏研27—2	◇ 54
中 條 暁 秀	「立正安国論」の略本と広本について	棲神51号	◇ 54
花 野 充 昭	日本中古天台文献の考察(一) 日蓮の「立正観抄」の真偽問題について—	印仏研25—2	◇ 52
中 條 暁 秀	最蓮房あて御書の一考察—立正観抄・同送状—	棲神53号	◇ 56
兜 木 正 亨	私集最要文注法華経の題名と相伝—日蓮聖人書き入れ法華三部経—（日蓮聖人真蹟集成7巻）	法蔵館	◇ 52
西 片 元 証	日蓮聖人遺文引用説話の一考察—安心の側面より—	日教研—7条	◇ 55
坂 本 幸 男	日蓮思想の源流—日蓮の思想的背景	講座「日蓮」1	◇ 47
茂田井 教 亨	法華経の伝承—（日蓮と法華経）	講座「日蓮」1	◇ 47
増 谷 文 雄	日蓮の思想	講座「日蓮」2	◇ 47
茂田井 教 亨	日蓮聖人の思想—立正安国論・開目抄・観心本尊抄を中心に	講座「日蓮」2	◇ 47
久保田 正 文	日蓮聖人の仏教	法華60—3	◇ 49
浅 井 円 道	法華経修行の歴史（Ⅰ）（Ⅱ）	法華61,—9, 10, 11	◇ 50
久保田 正 文	法華経と日蓮聖人	第一書房	◇ 51
佐々木 馨	日蓮の思想構造—「法華経世界」の成立をめぐる—	日蓮とその教団—1集	◇ 51
佐 藤 弘 夫	日蓮の後期の思想—王法と仏法との関係を中心として	日本思想史学—9号	◇ 52
安 川 義 孝	日蓮聖人の法華経	山喜房仏書林	◇ 53
兜 木 正 亨	法華経と日蓮聖人	妙永山本納寺	◇ 54



日蓮聖人研究文献目録（奥野）

冠 賢 一	日蓮遺文の書誌的考察一写本から刊本へ	日蓮とその教団一3集	昭和53
冠 賢 一	日蓮遺文の書誌的考察(二)	日教研一7号	◇ 55
庵 谷 行 亨	日蓮聖人の妙字釈	日蓮とその教団一4集	◇ 54
今 成 元 昭	「宝物集」と日蓮遺文（中世文学資料と論考）		◇ 53
小 松 邦 彰	日蓮聖人引用經典の一考察	日蓮とその教団一3集	◇ 53
小 松 邦 彰	日蓮聖人引用經典の研究(一)一聖人教学形成の背景一	大崎学報一129号	◇ 51
飛 田 謙 是	大般涅槃經引用の依本について 一日蓮・親鸞の場合一	印仏研20一2	◇ 47
久 住 謙 是	日蓮聖人の正法護持における涅槃經引用について	印仏研21一2	◇ 48
高 木 豊	鎌倉新仏教における法華涅槃經の受容	古稀記念	◇ 49
久 住 謙 是	宗祖の折伏実践における涅槃經依用の一考察	日教研一1号	◇ 49
高 木 豊	「涅槃經」と日蓮（日本宗教史論集上）	吉川弘文館	◇ 51
高 木 豊	初期日蓮における「涅槃經」の受容一「守護国家論」をめぐって	和歌森太郎先生還暦記念論文集	◇ 51
本 田 義 憲	日蓮遺文における引用の内相と外相一「施陀羅」如是我聞	日蓮とその教団2集	◇ 52
小 松 邦 彰	立正安国論小考一日蓮聖人における政治と宗教	古稀記念	◇ 49
望 月 良 晃	開目抄における一闍提	古稀記念	◇ 49
伊 藤 瑞 叡	「日女御前 御返事」における本尊観について	古稀記念	◇ 49
室 住 一 妙	御講聞書をめぐって	古稀記念	◇ 49
春 日 正 三	日蓮聖人ご遺文の言語研究一「千日尼御返事」御書の複合動詞	古稀記念	◇ 49
室 住 一 妙	「御講聞書」にそうて	棲神一48号	◇ 50
浅 井 円 道	「御講聞書」考	棲神一48号	◇ 50
若 杉 見 龍	「御講聞書」について	棲神一48号	◇ 50
高 木 豊	「開目抄」「撰時抄」「報恩抄」の分巻をめぐって 一日蓮遺文の書誌に関する試論の一つ	大崎学報一128号	◇ 51

日蓮聖人研究文献目録（奥野）

宮都宮	日	綱	日蓮聖人自叙伝	法華ジャーナル	昭和53
西川		満	日蓮聖人	真世界社	◇ 53
石川	教張	他	日蓮聖人絵詞伝	ビタカ	◇ 54
百瀬	明	治	日蓮の謎—激動の今日に甦る生の哲学	小伝社	◇ 54
影山	堯	雄	日蓮聖人を偲ぶ	泰福寺	◇ 54
新月	通	正	日蓮の旅	朝日ソノラマ	◇ 55
			日蓮—炎の生涯（歴史読本）	新人物往来社	◇ 56
山口	晃	一	日蓮聖人と両火房	法華ジャーナル	◇ 56
中里	悠	光	日蓮聖人佐渡流罪の法制史的考察（一）	棲神45, 46号	◇ 48 49
新倉	善	之	竜口法難の史実と伝説	竜口寺	◇ 51
高木	豊		門弟の静態、動態	講座「日蓮」2	◇ 47
中里	日	応	日蓮聖人身延御入山と南部一族の動向	棲神45号	◇ 48
上田	本	昌	阿仏房について	印仏研—26—1	◇ 52
宮崎	英	修	宿屋入道と宿屋光則	棲神52号	◇ 55
川添	昭	二	日蓮遺文に見える北条氏一門	棲神52号	◇ 55
中里	悠	光	南部実長考—実長の姓について—	棲神53号	◇ 56
川添	昭	二	安達泰盛とその兄弟	棲神53号	◇ 56
兜木	正	亨	若き日の日蓮(1)～(7)	佼成新聞社	◇ 50
冠賢		一	日蓮の生涯—青春の遍歴—	講座「日蓮」2	◇ 47
冠賢		一	日蓮の生涯—弘通の日々	講座「日蓮」2	◇ 47
高木		豊	日蓮の生涯—流謫の星霜	講座「日蓮」2	◇ 47
高木		豊	日蓮の生涯—隠栖の明暮れ	講座「日蓮」2	◇ 47
藤谷	俊	雄	日蓮とその時代	講座「日蓮」2	◇ 47
鎌倉遺跡研究会			鎌倉と日蓮大聖人	新人物往来社	◇ 51

〈遺文・教義・教学〉

宮崎	英	修	日蓮の遺文—日蓮遺文の考究	講座「日蓮」2	昭和47
宮崎	英	修	日蓮の遺文—日蓮遺文の解題	講座「日蓮」2	◇ 47
上田	本	昌	日蓮聖人遺文註釈の動向（中世法華仏教の展開）	平楽寺	◇ 49

# 昭和47年以降 日蓮聖人研究文献目録

奥野本洋編

## 略 称

印 仏 研	（印度学仏教学研究）
日 仏 年 報	（日本仏教学協会・仏教学会年報）
古 稀 記 念	（茂田井教亨先生古稀記念論文集）
喜 寿 記 念	（久保田正文博士喜寿記念論文集）
日 教 研	（日蓮教学研究所紀要）

## 〈伝 記〉

茂田井 教亨 他	「法然・親鸞・日蓮集」（仏教教育宝典4）	玉川大学出版部	昭和47
紀 野 一 義	日蓮一配流の道	淡交社	◇ 48
土 師 清 二	日蓮	鶴書房	◇ 50
日蓮宗現代宗教研究所	日蓮の伝記と思想	隆文館	◇ 50
田 村 芳 朗	日蓮一殉教の如来使	日本放送出版協会	◇ 50
山 川 智 応	日蓮聖人伝十講	浄妙全集刊行会	◇ 50
原 田 三 夫	傑僧 日蓮	新月社	◇ 51
笠 井 正 弘	日蓮とその予言	日蓮とその教団—2集	◇ 52
高 橋 智 遍	日蓮聖人小伝	師子王学会出版部	◇ 52
菊 村 紀 彦	日蓮一その生涯とこころ	社会思想社	◇ 52
岡 本 鍊 城	日蓮聖人—久遠の唱導師	法華ジャーナル	◇ 52
田村 芳朗 他	現代に生きる人間日蓮	主婦の友社	◇ 53
成 川 文 雅	日蓮聖人の生涯（増補改訂）	共栄書房	◇ 53
上 原 巖	人間日蓮	主婦の友	◇ 53
日蓮宗宗務院遠忌事務局	日蓮聖人—その壮烈な生涯と思想	サンポウジャーナル	◇ 53

ろ

廊下	120. 130. 153. 178. 230 239. 246. 257. 288
廊下慢水引	178
老君子	259
滝泉寺	23. 36. 83
老僧	172. 183. 194. 198. 213 221. 264. 272. 282
老僧当番	185. 259
老中	132. 134. 151. 167. 170 241
老弁	180
朗門九鳳	35
朗門流	35. 50
六院家	241. 255
録外	81. 111
六牙院	198
録事	313. 333
録所	219
六条河原	9. 45. 106
六上足	22. 36
六条檀林	126
六条門流	50. 81. 176. 177
録内	81
録内啓蒙	20. 158
録内御書簡条	99
録内扶老	2
六老僧	15. 21. 22. 25. 28. 29 30. 31. 35. 38. 81. 159
六老畑	15
六老坊跡	255
六献	72
六百遠忌	291
鹵簿諸道具	160
論議	65. 71. 76. 142
論議聖教	69
論義第一	37
論談用意抄題目	65

わ

和歌	105. 115
若衆舞台	288
若僧	72
若大衆	78
若党	170
若山村 (上総)	211
脇坂淡路守	122
脇座	221
脇本観静	302
和訓法華經	117
和語雑々抄	105
分持	254
和讃	73
鷺尾家	244. 245
鷺ノ山	29. 43
和蔵	171
綿入	73
渡辺市郎右衛門	155
渡辺大隅守	151
渡辺氏	131
和本東叡山版蔵經	128

了閑坊	175
両行事	71. 72. 75
了慶庵	256. 278
了牙院	324
了源	265
亮玄	204
領玄寺	182
了源坊	285
良向	218~221
両山	51. 52. 55. 57. 59. 116 117
両山一寺	214
両山兼職	57. 59
寮舎	162. 257
領主	249
良叔	150
了性	18
靈山	79. 81. 91
涼地坊	256. 265. 278
亮朝院	319. 320
了的	112
亮道	214
両頭人	71. 72
両能	321
領峰院	224
旅順	314
林歌	259
輪行院	324
林行坊	256. 284
琳琬院	99
綸旨	160. 166. 167. 171. 185 192. 199. 223. 236. 261 279. 280
輪次守塔制	29
輪次月番	27
林蔵坊	28. 76. 173~175. 255 285. 286. 288~290
輪堂	128
輪番	31
輪番帳	28. 124

林邑	208
----	-----

る

流罪	122
類聚要文	70

れ

靈元天皇	332
靈元法皇	185
例講	83
例講問答	66. 84
冷泉	300
冷泉要惇	302. 333
靈仏	231. 239
靈宝	130. 144. 173. 231. 239 248
靈宝蔵	129. 156. 172. 202. 230
靈宝目錄	66
歷代本尊	220
列座除外	250
列衆	222
蓮永寺（貞松）	115. 133. 159 176. 241. 314. 315
蓮歌	115
蓮花阿闍梨→日持	
蓮華寺	96
蓮華谷	242. 243
蓮久寺	297. 314
蓮公行狀年譜	27
蓮光寺	318
蓮秀坊	174
蓮成院	202
蓮乗寺	98. 177
蓮盛坊	174. 284. 288
蓮乗房	81
蓮心坊	76. 255
蓮信坊	124. 174. 286. 325
蓮長寺	327

よ

余	198
八日市場	97
八日講	231
要義	322
葉計	236
容月	297
影現七面天女	248
影現堂	216
影向石七面宮	231
影禰坊	175
養珠院	112. 113. 115. 116. 119 120. 144
養珠寺	143. 176
要順	247. 320
養心院	232
養仙院	130. 157. 160
要中	321
要法寺	72. 177
要品	13
要文類聚	69
要力院	251
予科	312
翼衣	208
欲賀作十郎	155
浴室	120 257. 267
浴仏	73
横浜 (神奈川)	301. 310
横町	265
吉野	47
吉原宿	254
余璋王	198
四谷	211
四人舞	78
四百五十遠忌	186

ら

洛陽	144
羅刹	172

羅陵王	207. 208
乱声 (らんじょう)	73
蘭陵王	258

り

律	116
律院	229
立教開宗	115
律師	229
立正安国論	10. 67. 124
立正会	66. 83. 113. 115
立正会法則	65. 78. 83
立正会問答	66. 84
立正寺	17. 97. 98. 124. 177 200. 318
立正大師	316
理妙院	212
龍海	192
留学	302
留学生	306. 312
堅儀の式	113. 115
琉球	259
龍華	117. 195
隆源院	144
龍口寺	317
龍口法則	78
龍口法難	40
龍口法難会	151. 164
隆恕	127
龍丈	320
隆生院	162. 257. 274
立像寺	148. 297
龍象房	17. 40
龍頭	178
立幡	74
立法華肝要集	55
立本寺	149. 152. 153. 176. 179 181
了雲坊	284
良観訴状	69

文句問……………182  
 文句要文……………68  
 文句要文類聚……………69  
 文講……………247. 261. 262. 280. 332  
 文字韻学……………182  
 問者……………65  
 文殊坊……………174. 256. 285. 325  
 門前……………134. 256  
 問注所……………23  
 門徒……………13. 15  
 文能……………110. 191. 246. 247. 321  
 紋白袈裟……………194. 231  
 門扉……………297  
 門末議員……………313  
 門末議會……………308. 313  
 門末總會議……………301  
 門葉縁起……………6. 27. 36. 43. 117  
                             142  
 門流……………35. 49. 50. 52. 56. 80  
                             81. 178. 267

や

八重十重……………68  
 薬王品……………76  
 役寺……………106. 141. 220  
 役者……………73. 75. 196. 214  
 役僧……………201. 212. 217. 226. 244  
                             254. 266. 276  
 役人……………173. 187  
 冶工棟梁……………119  
 安宮……………171  
 八代麻三郎……………308  
 八代裕太郎……………308  
 矢戸村（甲斐）……………4  
 谷中（武蔵）……………97. 212. 224  
 柳小路……………162. 257  
 柳島……………5  
 柳之間……………241  
 柳之寮……………162  
 柳原大納言……………168

屋根替……………202. 240. 249. 301  
 山火事……………260  
 山口出雲守……………135  
 山科（檀林）……………145. 146. 179~181  
                             192. 199. 214. 237. 238  
                             262. 332  
 山田清八……………138  
 山名因幡守……………197  
 山梨郡（甲斐）……………98  
 山梨県令……………281  
 山之坊……………76. 174. 255. 285. 288  
                             290. 329  
 山吹……………208  
 山本坊……………28. 76. 150. 173. 174  
                             176. 186. 255. 265. 285  
                             288. 289. 296. 319. 328  
                             329

ゆ

唯教院……………250  
 遺言状……………149. 150. 152  
 唯識……………105. 116  
 唯授一人……………52  
 宥雅……………211  
 涌感坊……………175  
 猶子……………50. 160. 170. 244. 245  
 涌出品……………13  
 勇成房……………224  
 友真……………261  
 融心院……………250  
 融善院……………243  
 有範法印……………10  
 裕筆……………137  
 遊明子……………179  
 湯皮折……………255  
 雪小路……………257  
 雪之寮……………162  
 柚野……………12. 43  
 湯吞所……………230  
 湯本……………22

177	
妙法寺 (泉南) .....	157
妙法寺 (堀ノ内) .....	244. 245. 296 298. 319. 322
妙法寺 (村田) .....	158. 176. 237 247. 261. 320. 321. 328
妙法寺 (元吉原) .....	179
妙法大善神堂 .....	247
妙法堂 .....	278
妙法尼 .....	16
妙法華院 .....	19. 160. 169. 216
妙法華寺 (王沢) .....	305. 322
妙本寺 .....	279
妙本寺 (比企谷) .....	29. 52. 176 211. 290
妙満寺 (安房) .....	327
妙満寺 (京都) .....	72. 133. 176
妙揚寺 .....	238
妙了寺 .....	98. 176. 237. 246. 251 252. 265. 319. 323
妙蓮寺 (金津) .....	280
妙蓮寺 (京都) .....	177
妙蓮寺 (桑名) .....	86
妙蓮寺 (小湊) .....	4. 3. 247
民部阿闍梨→日向	
民部卿→日院	
明本藏經 .....	182

む

武蔵 .....	249
虫切加持 .....	332
陸奥 .....	4. 5
六浦上行寺縁起 .....	85
六浦入道妙法 .....	40. 85
無得道論 .....	117
棟札 .....	110
無辺行菩薩 .....	8
村雲御所 .....	102

め

明治維新 .....	263. 268
麵子 .....	75
面授口決 .....	52

も

蒙求 .....	271
蒙古対治旗曼荼羅記 .....	199
猛獸 .....	208
蒙潤之集註 .....	110
木像開眼御書 .....	70
餅入小豆 .....	73
餅搗 .....	76
望月運四郎 .....	311
元信 (狩野) .....	130
本橋六右衛門 .....	219
元町 .....	315
物部氏 .....	305
藻原 (上総) .....	5. 21. 24. 29. 33 34. 36. 37. 49. 52. 64 65. 113. 133. 159. 241
藻原尾張律師 .....	54
藻原系図 .....	6
揉光朝 .....	3
木綿 .....	96
森岡氏 .....	312
森田日教 .....	300. 312
森日定 .....	306
護良親王 .....	9
盛物 .....	75
文句→法華文句	
文句講記 .....	192
文句講主 .....	199
文句五要文 .....	69
文句私記 .....	181
文句抄 .....	193
文句席談所 .....	257
文句第十撮要録 .....	182
文句部頭 .....	204



妙恩寺……………318  
 妙音坊……………284  
 妙覺寺(興津) …… 17. 210. 224  
     238. 272. 280. 319  
 妙覺寺(京都) …… 56. 101. 107  
     115. 121. 122. 123. 133  
     176. 177. 299. 331  
 妙覺寺(黒沢) ……321  
 妙閑……………154  
 妙閑寺……………200  
 妙久寺……………262  
 妙経科註……………145  
 妙行寺(藤田) ……327  
 妙行寺(谷中) …… 325. 327  
 妙経七部……………166  
 妙行必要…………… 60  
 妙玄庵…………… 165. 257  
 妙玄院……………274  
 明玄院…………… 212. 213  
 妙原院……………269  
 妙見会……………164  
 妙見宮……………120  
 妙玄講師…………… 183. 184  
 妙見寺……………279  
 妙頭寺(京都) …… 50. 56. 80. 144  
     172. 176. 241. 275. 276  
 妙頭寺(佐野) ……177. 223. 262  
     320  
 妙頭寺(新曾) …… 37. 194. 323  
 妙頭寺(水呑) ……300  
 妙源寺…………… 317. 320  
 妙見社……………265  
 妙見大土宮……………172  
 妙見堂……………257  
 妙幸……………154  
 妙光院……………272  
 妙香院貞俊日玄夫人……………154  
 妙広寺…………… 289. 298  
 妙光寺(藻原) …… 29. 34. 35. 49  
     52. 100. 177

妙興寺(野呂) …… 17. 176. 211  
     224. 320  
 妙国寺…………… 62. 88. 101. 298  
 妙釈院……………226  
 妙寂院……………126  
 明堅……………329  
 妙祝寺……………238  
 妙純寺……………133. 176. 224. 234. 241  
 妙定院……………259  
 妙昌寺…………… 83  
 妙祥寺……………328  
 妙勝寺…………… 52  
 妙照寺……………177  
 妙淨寺…………… 78  
 妙正堂……………260  
 妙成寺(紀伊) ……176  
 妙成寺(滝谷) …… 143. 192  
 妙心院……………143  
 妙石庵……………225  
 妙石坊…………… 86. 175. 256. 285. 288  
 妙泉寺…………… 321. 327  
 妙宣寺……………53. 177  
 妙仙坊…………… 256. 285. 288. 328  
 妙善坊……………155. 256. 289  
 妙藏寺……………83. 304  
 名代……………219  
 妙長寺……………261  
 妙伝寺(京都) …… 58. 82. 83. 87  
     100. 126. 145. 177. 180. 181  
     184. 192. 200. 214~216. 226  
     227. 252. 253. 279. 293  
 妙伝寺(備中) ……299  
 妙典寺……………234  
 妙梅院春光日恵……………154  
 妙福庵……………256  
 妙福寺……………57. 59. 100. 119. 175  
     326. 328  
 妙福坊…………… 175. 230. 286. 303  
 妙法結社……………295  
 妙法寺(小室) …… 53. 100. 124

身延山史索引 (林)

葉袋村 (甲斐) .....	136
南赤沢村 (甲斐) .....	278
南谷 .....	58. 155. 174. 242. 244 313
南之坊 .....	28. 76. 173. 176. 255 265. 285. 288. 328
源経基 .....	4
源頼経 .....	7
源頼朝 .....	4
源頼信 .....	4
源頼義 .....	4
美濃 .....	249
美濃阿闍梨→天目	
蓑夫 .....	11. 12
身延 .....	1. 7. 8. 10~13. 15. 20 22. 24. 25. 29. 31. 32. 34 35. 37. 39. 41. 44. 45. 47~ 60. 63. 66. 79~81. 85. 86 89. 91. 96. 97. 100~103. 106 112. 113. 116. 117. 121. 132 133. 149. 152. 190. 194. 196 198. 213. 240. 260. 263. 268 269. 275. 291. 296. 311. 332 334
身延鑑 .....	29. 33. 39. 43
身延伽藍記 .....	46. 87
身延川 .....	12. 277. 330
身延記 .....	26. 143
身延行記 .....	11. 128
身延講中 .....	194
身延御書抄 .....	2
身延山 .....	3. 8~12. 16. 17. 22 29. 31~35. 37. 40~43. 45 63. 70. 78. 79. 81. 84~86 89. 91~93. 95. 97~99. 100 102. 105~107. 110. 114. 116 117. 121. 124. 126~129. 132 134. 136. 139. 158. 161. 172 175. 185. 193. 199~201. 218 240~242. 244. 245. 259. 269

270. 273. 293. 309. 311. 313 329	
身延山掟 .....	107
身延山久遠寺→久遠寺	
身延山御書類聚 .....	145
身延山史 .....	64
身延山十徳 .....	79
身延山諸堂記 .....	182
身延山中植入十徳 .....	210
身延山由緒書 .....	182. 241
身延小檀林 .....	302
身延先師代々の事 .....	40
身延大檀林 .....	300
身延檀林 .....	282
身延町 .....	231. 256. 272
身延図経 .....	199
身延鉄道 .....	310
身延電灯株式会社 .....	311
身延の生字引 .....	333
身延の事 .....	85
みのぶの沢 .....	22
身延派 .....	241
身延碑銘 .....	85
身延文庫 .....	333
身延別院 .....	309. 310
身延門流 .....	50. 53. 57. 58
身延曆代譜 .....	33. 43
御牧 .....	7. 11
貞松→蓮永寺	
三村氏 .....	299
三宅島 .....	221
宮崎若狭守 .....	151
宮原村 (甲斐) .....	294. 295
妙雲院 .....	103
妙雲寺 .....	247. 321
妙恵日秀尼 .....	102
妙円寺 .....	87. 280
妙応院日威 .....	154
妙翁社 .....	265
妙応坊 .....	154

松平隠岐守……………155  
 松平紀伊守……………167. 169  
 松平清長……………154  
 松平相模守……………188. 189  
 松平定長……………130. 160  
 松平左京大夫……………255  
 松平勢洲……………157  
 松平光仲……………154. 171  
 松平山城守……………151  
 松平頼学……………239  
 松茸……………93  
 松田氏……………145  
 末頭……………106. 276  
 松野……………16. 29. 35  
 松葉谷……………7. 79  
 松本氏……………120  
 松山 (伊予) ……130. 160  
 松和田谷……………141. 146. 189. 190. 191  
     195. 197. 200. 201. 212. 213  
     222. 223. 234~236. 238. 246  
     247. 262. 270. 279  
 摩尼珠宮……………222  
 摩尼珠嶺……………193  
 真間……………24. 29. 41. 51. 54. 56  
     113. 133. 136. 159. 241  
     329  
 摩利支殿……………299  
 丸尾山……………277. 278  
 丸亀 (讃岐) ……133  
 満願寺……………178. 181. 182. 192. 246  
     262  
 満願の祖師……………41  
 万吉……………299  
 万沢御番所……………96. 184  
 満山 (大衆) ……71. 73~77. 74~76  
     189. 250. 253. 270  
     273. 274  
 満山古老……………251  
 満山拾人……………251  
 満山惣代……………201

萬字院……………219  
 萬寿夫人……………156  
 万寿曆……………16  
 曼荼羅……………89. 138. 187. 191. 220  
     267. 268  
 万灯堂……………230. 231  
 万部会供養……………231

み

三井寺……………36. 114  
 三浦明敬……………129  
 三浦党……………43  
 御影講法則……………78  
 御影堂……………91. 107. 209  
 御影石玉垣……………296  
 味方家政……………130  
 三木 (御酒) ……71  
 三沢氏……………16  
 三上氏……………136  
 三上長富……………3  
 三島……………31. 32. 82  
 水野氏……………198  
 水屋……………129  
 味噌倉……………280  
 弥陀……………65  
 御靈屋……………230  
 道奉行……………170  
 三日講……………73~75. 83. 140. 233  
     257. 258  
 三日講諸集……………99  
 三日講問答……………65. 66. 84  
 三日講論議……………333  
 三ッ切本尊……………235  
 三橋 (寮) ……274  
 水戸三味堂……………147  
 水戸庠……………180. 192  
 水戸諸門徒……………179  
 水戸斉昭……………231  
 水戸藩……………142  
 水戸光圀……………160. 180

本朝鏡銘集……………157. 330  
 本長寺……………320  
 本弟子……………22  
 本堂……3. 7. 102~104. 107. 230  
           240. 246. 248. 267. 287  
           291. 301  
 本土寺(平賀)……17. 50. 52. 55  
           113. 132. 133. 159. 176  
           241  
 本応院……………27. 28. 152  
 本応寺……………246  
 本能寺……………177  
 本応坊……………175  
 梵音……………73. 75  
 本遠寺(大野)……113. 116. 177  
 本馬……………254  
 本仏寺(江戸)……236  
 本仏寺(流川)……293  
 本坊庫裡……………289  
 本法寺……………101. 107  
 本間海解……………301. 302. 312. 333  
 本末……………40. 187. 245  
 本丸……………237. 255  
 本満寺……101. 105. 107. 114. 115  
           126. 127  
 本満寺祖書……………105  
 本妙院……………172. 264  
 本妙寺(足尾)……321  
 本妙寺(笹走)……327  
 本妙寺(篠原)……329  
 本妙寺(中山)……80. 176  
 本妙坊……………97. 256. 288. 325  
 本妙法華宗……………62  
 本門寺……35. 52. 123. 176. 177  
           197. 276 →池上  
 本陽寺……………177  
 本用坊……………251  
 本立院……………214  
 本立寺……………100. 177. 305  
 本隆寺……………62. 145. 176

本蓮寺……………328

ま

舞師……………20. 140  
 舞人……………208  
 前島三郎右衛門……………155  
 前田加賀守侍女……………156  
 前田家……………314  
 前田綱紀……………129  
 前田利家……………118  
 前田利常……………118  
 前田利長……………118  
 摩訶止観……………19. 20. 111  
 巻纓冠……………207  
 牧野越中守……………219. 220  
 孫七……………229  
 町中……………90  
 町中掟……………108  
 町奉行……………151  
 町家……………288  
 町役所……………250  
 町役人……………254  
 松……………198  
 松井坊……47. 76. 173. 175. 176  
           255. 265. 285. 288. 289  
           296. 329  
 松尾社……………265  
 松ヶ崎小檀林……………333  
 松崎檀林(談所)……63. 104. 109  
           132. 198  
 松木三太夫……………134. 135  
 松倉石見守……………151  
 末寺……40. 58. 75. 89. 90. 95  
           96. 98. 102. 106. 123. 149  
           166. 172. 177. 188. 220. 245  
           259. 265. 267. 271. 272. 277  
           283. 292. 308. 309. 313  
 松平出雲守……………134  
 松平右近將監……………197  
 松平越中守……………157

316. 250. 333	
法相	302
堀田備中守	151
発軫堂	193. 254. 267
堀内良平	311
堀川(京都)	50
堀川村(越中)	304
堀ノ内法縁	146
本阿弥家	115
本阿弥光悦	119
本院	73~76. 114. 149. 171. 183 203. 206. 227. 232. 233 242. 243. 250. 256~258 282. 283. 287. 289
本科	312
本学坊	265
本覚寺(池田)	177. 199. 240 247. 322
本覚寺(鎌倉)	58. 82. 83. 176 199. 241. 293. 317. 322
本覚寺(京都)	80
本覚寺(三島)	82. 128. 184
本覚坊	278. 327
本学坊	155
本願人	187. 202. 203. 251. 252
本行坊	76. 166. 175. 255. 286 288~290. 325. 328. 329 331
本化上行(大菩薩)	22. 243
本化聖典大辞林	29
本化別頭高祖伝	37. 91. 181
本化別頭仏祖統紀	7. 29. 30. 33 39. 43. 44. 51. 52. 55 60. 85. 91. 179
本化律	157
本源寺	132
本権坊	256
本考	236
本高院	219. 220
本光国師	121

本光寺	241
本国院	28
本国寺(京都)	34. 50. 63. 80 81. 83. 102. 104. 105 241. 275. 276. 300. 304
本国寺(下山)	18. 94. 175
本国寺年譜	26. 29. 30. 81
本山	39. 71. 90. 106. 112. 138 187. 188. 225~227. 232 244. 245. 294. 296. 304 308. 313
本寺	123. 138
本寿寺	224
本種坊	272. 279. 280. 286. 288
梵鐘	119
本勝迹劣	294
本照寺(厚木)	83
本照寺(落居)	155. 261
本成寺	176. 333
本浄寺(雑司ヶ谷)	247
本庄宮内小輔	135
本職	282
本信院	314
本迹寺	126. 330
本迹勝劣	17. 53
本迹問答	34
本清寺	299
本是院	162. 257. 274
本泉寺	211
本禪寺	176
本尊	31. 60. 98. 215. 218 220. 222. 232. 251. 258 268. 269. 294
本尊抄見聞	89
本尊抄私記	126
本多紀伊守	197
本多修理	244
本地院	235
本地垂迹	39
本地塔	172. 248. 267

法神閣	299
芳心坊	154
宝清寺	177
坊跡録	28. 173. 182. 255
謗施受用	53
法泉寺	83
法善寺	4
宝藏	119
宝藏院	98. 99
法談	203
宝地房 (証真)	69
法嫡正閏の論	80. 81. 83
宝塔	13. 291
坊頭	149
法難	58. 116
法服七条の論	53~55. 80
法服制度	183
方便品	13. 74. 163. 165. 251
254	
謗法	32
法本尊	294
法脈	180
法明寺 (雑司ヶ谷)	132. 133
212. 269. 279. 280. 286	
宝物書上	267
宝物目録	143
法要	78. 117
法要規則	78
法要寺	176. 182
法輪寺	177. 322
法類	275~277
法蓮寺	133
法蓮抄	69
法藹	213. 275. 276. 305
法論	91
墨染寺	333
卜祐	125
北陸	303
法華經	13. 19~21. 78. 79. 105
116. 267. 292. 294. 331	

法華經音義	157. 330
法華經校正	182
法華經寺	276
法華經十軸略釈法則	78
鉢	77. 208
菩薩号	50
菩薩持經	68
墓参	74
保存会	301
菩提梯	119. 130. 309
牡丹	160
北海総導師	24
北海道	35. 303. 310
法華義疏	70
法華玄義	42. 69. 111. 145. 204
法華玄義聞書	117
法華玄義見聞集	42
法華玄義釈籤	111
法華寺 (上総)	37
法華寺 (浜土)	29. 34
法華寺 (碑文谷)	113. 133. 166
177	
法華寺 (富士)	177
法華宗	56. 123. 132. 161
法華取要鈔	3. 70
法華初心略音義	200
法華草演抄	83
法華大意	117
法華谷 (上総)	34. 37
法華朝演抄	83
法華文句	111. 116. 146. 180. 198
法華文句記	111
法華文句私述記	146
法華文句随間記	110. 117
法華律	330
法華和註大意	115
木剣	331
法式	138
法師品	165
法主	250. 291. 308. 313. 315

177. 255. 286. 288. 289  
325  
触書……………216. 268  
触頭……………97. 106. 194. 198. 212  
214~216. 221. 222. 225  
~227. 265. 268  
触下……………187. 215. 216. 241  
不老院……………247  
風呂場……………288  
文嘉……………297  
文学……………182  
分国……………93. 95  
分骨……………82. 87. 315  
文章文嘉……………297  
芬陀利窟……………15  
文通……………204  
文明院……………297

へ

平氏……………4. 43  
平僧衣……………183  
平僧寺院……………183  
幣殿……………131. 166. 225  
平寮……………257  
別院……………309. 310. 313. 315  
別当……………39. 46. 146. 166. 263  
264. 304. 323. 326. 327  
別当寮……………265  
紅粥……………20  
弁海……………121  
扁額……………216. 224. 299. 310  
弁天会……………164  
弁天堂……………257  
逸見氏……………4

ほ

坊……………276. 287. 290  
法雲……………100. 265  
法雲院……………104  
法雲坊……………76. 98. 104. 173. 175

177. 255. 285. 288. 289  
290  
法衣……………57. 161. 178  
法門寺……………83  
法蘭坊……………154  
報恩講本願……………187  
法音寺……………176  
報恩抄……………17. 68  
報恩塔廟……………222  
法界寺……………321  
法規……………283  
伯耆……………103  
法喜堂……………299  
法鏡……………86  
法久庵……………286  
法久寺……………98  
謗施受用論……………115  
宝聚院(日朝)……………82  
宝聚院(日伝)……………87  
宝聚院(寮)……………162. 257. 274  
房州……………17. 36. 128. 234. 238  
宝寿寺……………314  
宝受坊……………124  
芳春日悟……………155  
法春坊……………256  
芳春坊……………155. 285  
方丈……………64. 104. 156. 172. 248  
272  
北条氏……………44  
北条高時……………44  
法性院……………151. 152  
法性院日勇→日勇  
方丈院主……………173  
放生会……………74  
坊城家……………170. 185. 253  
方丈建立正法則……………104  
北条氏……………44  
法性寺……………320  
法成寺……………83  
芳心院日春夫人……………154. 171

身延山史索引（林）

平賀朝雅	36
平賀与左衛門	135
平塚	22
毘留遮那仏	246
広島大本營	301
広野弥太郎	23

ふ

敷	71
笛	209
布衣装束侍	170
深川（江戸）	229. 231. 261. 262
舞楽	20. 77. 83. 139. 140. 205 206. 232. 233
深草（山城）	157
舞楽頭	139
布教	303. 313
奉行	119. 121. 134. 136. 191 198. 213. 218. 219. 227
布教結社勸募員	305
奉行所	122. 189. 197. 213. 220 241
諷経席次	267
福岡博多東公園	310
富士	32
富士長忠	3
福泉寺	247
福仙坊	94
福泉坊	76. 140. 255. 284
福田会	298
福田行誠	297. 298
普賢咒	71. 74. 163~165
普賢坊	285
不二庵	116. 195
富士大宮（駿河）	2
富士川	11. 12
富士郡（駿河）	11. 12
藤田文哲	303
藤原氏	36
藤原種香	119

藤原日迦	290
伏見宮	171
伏見宮邦房親王	331
富士身延鉄道	311. 315
藤村弘庵	297
藤村紫朗	281. 292
富士門流（日興門流）	31. 32. 34 50. 53. 65. 89
富士門流古記	9
舞者	208
舞主	75
武州	35. 60. 77. 83. 158
不受悲田	218. 220
不受不施	56. 63. 101. 107. 113 115. 116. 120. 121. 127 132~134. 142. 143. 148 157. 158. 221
不受不施論記	145
普請添簡	214. 215
不尽説持堂	157
補旋集	83. 84. 333
布施弥治郎	219. 220
不染院	324
扶桑伽藍記	178
扶桑倫類	36
舞台	77. 94. 172. 178. 230 231. 249. 267. 279. 288
傳大士心王仏論	69
府中	71
仏舍利	267
仏乗寺	83
仏説孝子経	271
仏壇	251
仏誕生会	163
仏物	102
普恬院	248
武徳楽	258
舟原	8. 11. 311
不白（武田信君）	95
麓坊	15. 76. 87. 150. 174. 175



身延山史索引 (林)

原宿沢瀉屋……………254  
 原殿……………9  
 はらのけ……………14  
 原美濃守信知……………89. 98  
 播磨坊明堅……………41. 329  
 春乙丸……………48  
 春気川……………12. 264. 304  
 飯……………75  
 番小屋……………288  
 盤渉 (ばんしき) ……258  
 判者……………121  
 番衆役……………125  
 番所……………230. 287  
 半鐘……………257  
 番神会……………164  
 番僧……………172. 252  
 蟠蛇……………208  
 飯台場……………231  
 板頭……………111. 204. 211. 219  
 番部屋……………119. 230. 231  
 判物……………101  
 番寮……………153. 156

ひ

比叡山……………36. 45. 48. 49. 82. 92  
 100. 334  
 東葛飾……………42  
 東蔵……………48. 55. 58. 66. 99. 171  
 173  
 東谷……………28. 154. 173. 180. 216  
 242. 244. 249  
 東谷上塩沢……………94  
 東南湖村 (甲斐) ……262. 266  
 東之坊……………41. 45. 76. 174. 255  
 285. 288~290. 324  
 東宝蔵……………156  
 東法眷……………141  
 東身延……………35. 58. 82. 83. 293  
 東山 (京都) ……101. 102  
 東山祇洹百度大路角堂 ……42

東山天皇……………159. 179  
 東山庠……………210. 247  
 彼岸……………73. 74  
 比企谷……………29. 51. 52. 59. 79. 85  
 195. 211. 290  
 比企谷代官……………57  
 比企谷門流……………65  
 飛脚……………17  
 悲華経抜書……………70  
 彦六郎……………93. 94. 140  
 土方久元……………295  
 非衆……………139  
 尾州……………81. 245. 246. 277. 321  
 美女ヶ谷 (甲斐) ……264  
 美女ガレ (甲斐) ……265  
 常陸……………17. 35  
 常陸の湯……………21  
 筆策 (ひちりき) ……209. 232. 258  
 備中……………299  
 悲田供養……………134. 158  
 悲田新義停止……………158  
 悲田派……………147. 158. 159. 179  
 檜……………209. 295  
 日野家……………50  
 樋沢坊……………28. 37. 76. 173. 175  
 177. 250. 255. 265. 285  
 288. 289. 290  
 緋白……………194  
 緋紋……………194. 236. 319  
 緋紋白……………194. 205. 231  
 碑文谷→法華寺  
 平調 (ひょうじょう) ……259  
 評定……………172. 182. 186. 188. 207  
 264  
 評定所……………151  
 評定留役……………219  
 表白……………78  
 屏風……………251  
 平賀→本土寺  
 平賀忠晴……………16

野呂談所…………… 132. 158

は

拝石……………172

拝殿……………74. 94. 103. 112. 129  
156. 166. 171. 185. 230

廃仏毀釈……………270

陪爐……………207

破奥記……………115

博多別院……………310

萩……………101

萩野……………179

波木井……………2. 6. 7. 9~11. 48. 59  
89. 205. 229. 254. 311

波木井影堂……………267

波木井河……………11. 12. 254

波木井公五百五十遠忌……………240. 247

波木井公の銅像……………309

波木井実長→南部実長

波木井氏……………3. 8. 31. 32. 34. 44  
45. 47. 49. 55. 186. 247  
309

波木井氏置文……………8

波木井主計……………186

波木井城趾……………9

波木井宗七……………229

波木井殿御筆……………70

波木井孫七……………229

波木井御牧……………7

波木井茂兵衛……………229

羽切……………6

破切居……………6

羽切薩摩守七郎左衛門……………6

羽切遠江守実継……………6

薄黄地金襴……………170

薄黄鈍子長鬘……………170

伯爵……………296

博瑞……………218~221

ばくち……………124

幕府……………122. 158. 167. 197. 240

~242. 253. 255. 260

箱根宿柏屋……………254

羽衣橋……………312

姜餅 (はじかみもち) ……71

羽柴秀勝……………102

羽柴一路……………101

蓮沼氏……………305

長谷川良察……………182

旗曼荼羅……………259

桴……………208

八王子……………305. 310

鉢崎 (越後) ……223

八座講談……………78

八之尻村 (甲斐) ……266

八戸 (陸奥) ……5. 6. 9

八ノ宮……………331

八幡……………268. 269

八幡宮 (社) ……46. 48. 57. 89  
104. 129. 183. 248

八幡太郎義家……………4

八役……………16

八角堂……………286

八講……………75. 164. 165

法則……………78. 98. 104

発電所……………14

法度……………43. 108. 132. 140. 185

八品派……………56

抜頭……………207. 208. 227. 259

鼻高沓……………20

華堂……………73

花之坊……………58. 174. 285. 288. 313

華之坊……………76. 255

花の帽子……………78. 161

端場坊 (はばのぼう) ……29. 76  
173. 176. 255. 284. 288  
289. 325. 326. 329

破仏毀釈……………304

浜土……………42

浜名次郎光成……………43

早川……………11. 12

日蓮宗	56. 100. 178. 242. 260 298. 306
日蓮宗宗学章疏目錄	43
日蓮宗大学	314
日蓮宗大学教科書編纂委員	334
日朗(大國阿闍梨)	2. 7. 9. 16 17. 21. 25~29. 34. 35 37. 38. 40. 42. 50. 81
日和(藻原)	139
日暮里	217
日天	13
二天門	129. 230. 248. 250. 254 262. 267
二人舞	78
二舞(にのまい)	207
二百遠忌	83
二百五十遠忌	123
日本	22. 68. 259
二本榎	234
日本国仏法渡次第事	68
二品親王	45
日本第一験者	332
日本橋馬喰町	97
入院年頭御礼	241
入文	78
女院	168
女御	168
如来秘藏録	271
二老	111
忍遠坊	256
仁岳	110
人足	254
忍脱坊	154
人別帳	272
人本尊	294

ぬ

糠部(陸奥)	4
貫名重忠	36
沼津町	2

塗盃	71
----	----

ね

城下谷	190. 191. 195. 196. 197 200. 201
涅槃会	73. 163. 258
涅槃会法則	78
涅槃疏	69
涅槃像	73
年行事	72. 75. 173. 206
年行事坊	173
年貢地	266
念珠	166
年序祝辞	215
年中行事	20. 70. 71. 77. 83 126. 163
年頭御礼	241. 253
年頭賀状	255
年頭出役日記	253
念仏宗	7
念仏無間	106. 112. 113
年分度者	70

の

能榮	212
能化	58. 111. 134. 141. 151 183. 192. 214. 215. 219 221
能化毎日行事	165
能化寮	162
納骨仮殿	289
納骨堂	291. 296. 303
能治院	211
能州(能登)	143. 303
濃州(美濃)	277
能生庵	256
納米	103
野沢義真	301. 303
野沢弥右衛門	156
能勢	114. 115

身延山史索引 (林)

- 日明 (積善坊) ..... 242. 243  
 日明 (智啓院) ..... 325  
 日命 ..... 67. 71  
 日命 (太潮院) ..... 324  
 日命 (不惜院) ..... 323  
 日諡 (円中院) ..... 239. 245. 320  
     327  
 日猛 (勇進院) ..... 236. 319  
 日門 ..... 17. 35  
 日由 ..... 242  
 日遼 (潮松院) ..... 321  
 日友 (中正院) ..... 100. 117  
 日有 (中山) ..... 57  
 日宥 (大石寺) ..... 40. 45  
 日宥 (本成院) ..... 163  
 日裕 (見龍院) ..... 182~185. 187  
     188. 190. 192. 196. 317  
     323  
 日裕 (積善坊) ..... 242. 243  
 日祐 (大輔公) ..... 40. 41. 48. 50  
     53. 85  
 日裕 (潮生院) ..... 277  
 日祐 (西之坊) ..... 86  
 日勇 (積善坊) ..... 242. 243  
 日勇 (大隆院) ..... 235. 319  
 日勇 (法性院) ..... 126. 145  
 日涌 ..... 232  
 日幽 ..... 243  
 日遊 (養心院) ..... 237. 319  
 日誉 ..... 65  
 日用 ..... 61. 64  
 日要 (伊那) ..... 304  
 日要 (顯是院) ..... 86. 117~120  
     125. 126. 326  
 日容 (觀厚院) ..... 328  
 日容 (智海院) ..... 218. 219  
 日陽 (積善坊) ..... 242. 243  
 日揚 (立正院) ..... 142. 215  
 日葉 ..... 242. 243  
 日葉 (荃真院) ..... 323  
 日遙 (見寿院) ..... 293. 296. 301  
     302. 322  
 日養 (太蓮院) ..... 319  
 日養 (玉沢) ..... 133. 139  
 日養 (無安院) ..... 130  
 日耀 (円是院) ..... 117  
 日来 (中山) ..... 107. 126  
 日迷 (智光院) ..... 162  
 日利 (隆真院) ..... 145  
 日理 (可円院) ..... 248  
 日理 (清水坊) ..... 330  
 日理 (寿光院) ..... 318  
 日理 (智巖院) ..... 280. 322  
 日理 (本是院) ..... 179  
 日立 (真間) ..... 136  
 日隆 ..... 145  
 日隆 (慶林房) ..... 56  
 日了 ..... 196  
 日了 (惠快院) ..... 324  
 日了 (智明院) ..... 279  
 日命 (平賀) ..... 139  
 日良 (是教院) ..... 325  
 日良 (智等院) ..... 302. 304. 306  
     307. 326. 329  
 日亮 ..... 243  
 日量 (威音院) ..... 192  
 日領 (小西) ..... 107. 122. 127  
 日遼 (感応寺) ..... 158  
 日遼 (興源院) ..... 130. 137. 143  
     162  
 日遼 (南延房) ..... 119  
 日琳 (是泰院) ..... 325  
 日琳 (是経院) ..... 238. 320  
 日輪 (池上) ..... 55  
 日輪 (円通院) ..... 201. 202. 204  
     205. 210. 318. 323  
 日臨 (本妙) ..... 148. 229  
 日蓮 ..... 1. 7. 22. 39. 58. 79. 81  
     88. 92. 111  
 日蓮禁断の令 ..... 58

身延山史索引(林)

- 日伝(本国寺) ..... 50  
 日伝(妙心院) ..... 143  
 日典 ..... 101  
 日沾(教山院) ..... 225. 227. 235  
     319. 324  
 日奠(妙心院) ..... 26. 63. 129~  
     133. 137. 139~144. 150  
     152  
 日灯(恵明院) ..... 198  
 日東(藻原) ..... 116. 122  
 日到 ..... 244  
 日透(観如院) ..... 147. 163. 165  
     190  
 日答(広演院) ..... 180. 193. 194  
     199~201. 205  
 日登 ..... 244  
 日登(孝超院) ..... 236. 319  
 日登(是幹院) ..... 238. 320  
 日登(潮旭院) ..... 325  
 日登(文義院) ..... 246. 320  
 日等 ..... 65  
 日等(永寿院) ..... 321  
 日等(北之坊) ..... 332  
 日等(積善坊) ..... 243. 244  
 日童 ..... 294  
 日統(要行院) ..... 104. 125  
 日禰(智現院) ..... 272. 273. 279  
     280. 325. 328  
 日道 ..... 56  
 日道(法雲院) ..... 100. 103. 104  
 日銅 ..... 244  
 日徳 ..... 64. 242. 243  
 日徳(修善院) ..... 326  
 日徳(中山) ..... 133. 139  
 日日新 ..... 236  
 日如(一中院) ..... 318  
 日如(慈舟院) ..... 234. 318  
 日如(智静院) ..... 325  
 日忍 ..... 196  
 日忍(下野公) ..... 25~27. 35  
 日忍(不變院) ..... 179  
 日忍(妙衣院) ..... 321  
 日忍(理運院) ..... 323  
 日然 ..... 137  
 日能(妙法房) ..... 54  
 日範 ..... 35  
 日布(智明院) ..... 322  
 日附(碑文谷) ..... 158  
 日阜(春応院) ..... 301. 304. 312.  
     326. 328  
 日刃 ..... 58  
 日弁(越後公) ..... 17. 23~27. 30  
     35  
 日保 ..... 17  
 日方(顯中院) ..... 245. 320  
 日芳(春窓) ..... 154  
 日法(和泉公) ..... 17. 23. 25~27  
 日法(一道院) ..... 184. 331  
 日法(皆如院) ..... 205  
 日法(妙信院) ..... 247. 320  
 日法(立正寺) ..... 124  
 日宝(潮音院) ..... 216. 213. 223  
 日逢 ..... 166  
 日報(顯円院) ..... 328  
 日彰(妙信院) ..... 321  
 日豊(僧那院) ..... 132. 136. 139  
     142  
 日豊(亮心院) ..... 225. 234. 318  
 日梵(金塚) ..... 307. 322  
 日満 ..... 54  
 日満(豊後房) ..... 24  
 日妙(円行院) ..... 329  
 日妙(温譲院) ..... 184  
 日妙(晴存院) ..... 162  
 日妙(貞漸院) ..... 327  
 日妙(能治院) ..... 180. 201. 202  
     211. 318. 323  
 日明 ..... 126  
 日明(見理院) ..... 126. 134  
 日明(小湊) ..... 157

- 日棕(智登院) .....327  
 日像(龍華) .....3. 16. 33. 35. 41  
     50  
 日藏(本源院) .....162  
 日存 ..... 56  
 日存(本立院) .....320  
 日村(大野) ..... 204. 205  
 日尊 ..... 56  
 日尊(小室) ..... 53  
 日尊(中山) ..... 40. 54  
 日尊(要法寺) ..... 35. 50  
 日尊(蓮成院) .....104  
 日体(瑞輪寺) .....133  
 日誦 ..... 88  
 日泰 .....196  
 日迨 .....243  
 日體(高正院) .....219  
 日大(太善院) .....328  
 日台(鏡門阿闍梨) ..... 45~48. 50  
     55. 243  
 日琢(事感院) .....239. 248. 249  
     257. 262. 321. 325. 328  
 日達(真応院) ..... 117. 142  
 日達(智伸院) .....319  
 日達(了義院) ..... 147. 192  
 日脱(一円院) .....147. 149. 151  
     ~154. 156~160. 162. 166. 172  
     176. 178. 179. 196. 199. 200  
     253. 300. 317. 323. 331. 332  
 日地(本義院) .....225. 227. 235  
     237. 318  
 日中 .....85. 247  
 日中(同広・正住院) ..... 147. 157  
     229  
 日仲(大扇房) ..... 81  
 日仲(不老院) .....240. 247. 320  
     325. 327  
 日忠(禪那院) ..... 100. 136  
 日衷(遠來院) .....261  
 日長(円覚院) .....100  
 日長(寿遠院) .....327  
 日長(長氏) ..... 45~48. 70  
 日頂(伊予公) ..... 21. 23~29  
 日迨 .....243  
 日朝(行学院) .....2. 10. 13. 20  
     22. 26. 37. 56. 58. 62~66  
     71. 77. 78. 80~82. 84~87  
     98. 129. 140. 147. 205~207  
     243. 261. 293. 333  
 日潮(六牙院) .....30. 91. 147. 189  
     ~191. 193~200. 203. 215  
     216. 317  
 日澄 ..... 34  
 日暢 .....196  
 日調(寂中院) .....317. 326. 329  
 日聴(禪明院) .....180  
 日澄寺(天津) .....305. 321. 328  
 日朝上人二百五十遺忌 .....248  
 日逗 .....237  
 日通 .....243  
 日通(境持院) ..... 27. 30. 43  
 日通(寂遠院) .....62. 63. 127  
     130. 131. 137. 141. 144. 145  
     149. 150. 152. 165. 179~181  
     323. 332  
 日廷(尊賀院) .....331  
 日貞 ..... 50  
 日貞(小川) .....302. 305. 307. 322  
 日逞(智順院) ..... 280. 322  
 日逞(智性院) .....327  
 日逞(潮文院) .....229~232. 235  
     237. 318. 319. 324. 327  
 日禎(本教院) ..... 247. 320  
 日禎(妙賢院) .....328  
 日伝(玉泉坊) ..... 58. 59  
 日伝(小室・肥前公) .....21. 27. 29  
     53. 67. 124  
 日伝(宝聚院) ..... 56. 63. 84~87  
     89. 90. 98~100. 119. 242  
     243. 333.

- 日進 (碑文谷) .....107. 122. 127  
132
- 日新 (慈雲院) ..... 43. 94. 95. 98  
~100
- 日新 (宣示院) .....248. 261. 328
- 日審 .....243
- 日審 (智透院) .....228. 229. 236  
324
- 日親 (久遠成院) .....32. 49. 52. 56  
58
- 日禪 (本国寺) .....102
- 日誡 (善応院) ..... 179. 180
- 日迅 (常唱院) .....163
- 日迅 (即成院) .....318
- 日陣 (晴心院) .....322
- 日陣 (本国寺) ..... 56
- 日深 (常在院) .....147
- 日深 (妙寂院) ..... 119. 126
- 日清戦争 .....301
- 日逗 .....243
- 日遼 (智性院) .....137
- 日瑞 .....196
- 日瑞 (海運院) .....328
- 日省 (智寂院) .....37. 91. 146. 147  
153. 163. 166. 167. 166. 170  
172. 180. 183. 185. 186. 190  
253. 300
- 日政 .....244
- 日清 (春応院) .....304
- 日清 (太教院) .....328
- 日盛 (堅樹院) ..... 236. 319
- 日盛 (本善院) .....327
- 日晴 (太裕院) .....132. 230. 237  
319. 324. 327
- 日晴 (法華寺) .....132
- 日誠 (感応寺) .....132
- 日誠 (瑞輪寺) .....269
- 日誠 (相寿院) .....320
- 日誠 (西谷檀林) .....231
- 日誠 (妙経院) .....323
- 日勢 .....244
- 日勢 (顯隆院) .....325
- 日精 (唯誠院) .....333
- 日精 (円正院) .....129
- 日精 (修光院) .....147
- 日精 (太裕院) .....237
- 日整 (琳瑯院) ..... 88. 94. 99
- 日仙 .....243
- 日宣 .....66. 224. 242. 243
- 日宣 (機扣院) .....321
- 日宣 (誠明院) .....323
- 日扇 (双樹院) .....238. 240. 246  
247. 320. 325. 327
- 日詮 (山光院) ..... 88
- 日詮 (常寿院) .....236
- 日詮 (法雲坊) .....119
- 日暹 (智見院) .....115~117. 119  
~124. 127. 129~132 142  
215. 330. 331
- 日遼 (安原) .....305
- 日遼 (領峰院) ..... 222~224
- 日闍 (一乗院) .....240. 247. 320  
327
- 日全 (明静院) .....225. 235. 319  
324. 327
- 日善 (大法阿闍梨) ..... 39~45. 47  
48 52. 55. 243
- 日禪 ..... 17
- 日禪 (碑文谷) .....157
- 日善讓状 ..... 70
- 日宗 (境妙院) ..... 142. 159
- 日相 (久成院) .....146
- 日相 (本光院) ..... 234. 318
- 日奏 (上妙院) ..... 228. 236. 319.  
324. 327
- 日湊 (真如院) ..... 238. 319
- 日聡 ..... 65
- 日經 (貞明院・禅明院) .....193. 194  
200. 201. 205. 322
- 日聡 (了直院) .....219

身延山史索引(林)

- 日出(一乘房) ..... 58~60. 82  
 日述(円理院) .....192  
 日述(遠光寺) ..... 187. 188  
 日述(寛妙院) .....328  
 日述(境智院) .....142  
 日述(本土寺) ..... 132. 133  
 日俊(藻原) .....133  
 日春 .....243  
 日春(甲斐) ..... 17. 67  
 日春(中道院) .....145  
 日舜(究竟院) .....230. 237. 238  
     319. 324. 327  
 日舜(生蓮院) .....115  
 日巡(順藏院) .....100  
 日純(十如院) ..... 81  
 日純(谷中) .....158  
 日淳 .....196  
 日惇(妙法寺) .....245  
 日順(本如院) .....162  
 日順(満行院) .....242. 243. 330  
 日遵(玉沢) .....122  
 日遵(長遠院) .....132  
 日遵(西谷檀林) .....218. 219. 221  
 日潤(一雨院) .....239. 245. 320  
     324. 327  
 日序(潮庵院) .....327  
 日叙(宝蔵院) ..... 87. 89~91. 93  
     94. 98. 99. 140. 141  
 日恕(深厚院) .....322  
 日正(常栄) .....155  
 日正(正行院) ..... 54  
 日正(了樹院) .....324  
 日生(教蔵院) .....104  
 日匠(本学院) .....147  
 日沼(太玄院) .....237  
 日松(積善坊) .....243  
 日昭(不輕院) .....7. 17. 20. 21  
     25~31. 34. 42  
 日詔 .....245  
 日祥 .....243  
 日祥(止明院) .....203. 264. 272  
     279. 321. 325. 328  
 日祥(妙伝寺) .....239  
 日唱 .....212. 213. 216~222. 225  
     318. 324  
 日勝(境心院) .....142  
 日照(顯成院) .....154  
 日照(智逗院) .....328  
 日照(法蔵院) ..... 119. 326  
 日彰 .....243  
 日成 .....244  
 日成(妙覚寺) ..... 56  
 日定(智心院) .....321  
 日定(実修院) ..... 97  
 日定(本持院) .....325  
 日城 ..... 89  
 日城(宝聚院) .....162  
 日浄 ..... 196. 243  
 日浄(最蓮房) ..... 16  
 日乗 ..... 17  
 日常(中老) .....159  
 日盛(堅樹院) ..... 228. 236  
 日盛(天目) ..... 21. 34  
 日静(止明院) .....279  
 日静(諦中院) .....329  
 日静(東之坊) .....41. 45. 329  
 日静(本国寺) ..... 50  
 日心(大進阿闍梨) ..... 42  
 日心(智了院) .....240. 246. 248  
     320. 325  
 日辰(耐慈院・円海) ..... 201. 202  
     206. 209~213. 318. 323  
     327  
 日信(以順院) ..... 244. 325  
 日真(大進阿闍梨) ..... 42  
 日真(妙応院) .....34. 326  
 日進(三位公・大進阿闍梨) ..... 17  
     34. 37. 39~46. 48. 49  
     53. 55. 64. 85. 243  
 日進(神宮寺) .....294



234. 241  
 日恒(覺林坊) ..... 66. 84  
 日香(宗延寺) ..... 269  
 日珙(仏心院) ..... 88. 101  
 日稿(円光院) ..... 193  
 日興(積善坊) ..... 243  
 日興(白蓮阿闍梨) ..... 2. 7. 9. 17  
 21. 22. 25~33. 35. 53  
 日合(筑前公) ..... 25~27  
 日合(妙覺寺) ..... 299  
 日郷 ..... 50  
 日業(立正寺) ..... 97  
 日豪 ..... 136  
 日国 ..... 242  
 日言(円仁房) ..... 323  
 日近(積善坊) ..... 242. 243  
 日侏(中山) ..... 101  
 日健(獅音院) ..... 268. 272. 273  
 275. 279. 280. 325. 328  
 332  
 日勤 ..... 196  
 日嚴(延寿院) ..... 94  
 日嚴(境行院) ..... 301. 302. 305  
 312. 326. 329  
 日嚴(養遠院) ..... 146  
 日際 ..... 127  
 日薩(文明院) ..... 279. 289. 290  
 292. 294. 297. 299~301  
 305. 307. 314. 325. 328  
 日山(大鷲阿闍梨) ..... 51. 52  
 日産(智勝院) ..... 236. 319  
 日贊(東之坊) ..... 119  
 日讚(大乘坊) ..... 57~59  
 日次(一相院) ..... 318  
 日治(一真院) ..... 248. 321  
 日持(示宣院) ..... 261  
 日持(蓮華阿闍梨) ..... 21. 25~30  
 35. 43. 58. 115  
 日慈(功刀) ..... 296  
 日慈(積善坊) ..... 242~244

日慈(正教院) ..... 126  
 日慈(智進院) ..... 321  
 日慈(本信院) ..... 307~310. 314  
 日嗜 ..... 305  
 日実(慈祥院) ..... 124. 249. 261  
 321. 325. 328  
 日実(但馬公) ..... 17. 25~27  
 日実(本立院) ..... 246  
 日実(量厚院) ..... 280  
 日受 ..... 244  
 日受(慧性院) ..... 100  
 日受(遠寿院) ..... 320  
 日寿(遠寿院) ..... 245  
 日寿(智現院) ..... 280  
 日寿(智等院) ..... 327  
 日寿(妙俊院) ..... 322. 332  
 日樹(池上) ..... 107. 115. 116. 119  
 ~122. 127. 132  
 日樹(宇中院) ..... 333  
 日樹(真間) ..... 41. 50  
 日秀(深妙院) ..... 329  
 日秀(丹波公) ..... 17. 23~27. 35  
 43  
 日秀(中道院) ..... 162  
 日守(大蓮房) ..... 86  
 日修(円盛院) ..... 155  
 日修(心妙院) ..... 148. 295. 299~  
 301. 304. 305. 307. 314  
 325. 328. 333  
 日什 ..... 56  
 日充 ..... 122  
 日住 ..... 56. 65  
 日住(真如院) ..... 80. 82  
 日住(潮明院) ..... 324  
 日住(養真院) ..... 110. 137. 162  
 日重(一如院) ..... 101. 103. 104  
 107. 114. 115. 300  
 日秀尼 ..... 102. 104  
 日祝(慧眼院) ..... 113. 114. 117  
 136

- 日教 (漸学院) .....234  
 日教 (長義) ..... 34. 47. 67  
 日經 (常樂院) ..... 106. 112  
 日皎 (滝谷) .....189~191. 195  
 日境 (通心院) .....128. 132. 134  
     136. 141~143. 150. 152  
 日鏡 (善学院) ..... 87~89. 93. 95  
     98. 99. 110. 141  
 日久 (妙顯寺) .....276  
 日行 (鵜川) .....290. 291. 296  
 日行 (延命院) ..... 57. 59  
 日行 (十如院) .....180  
 日行 (積善坊) ..... 242. 244  
 日行 (本鏡院) .....325  
 日行 (本寿院) .....240  
 日行 (蓮心院) .....327  
 日堯 (明靜院) .....147  
 日弘 (平賀).....107. 122. 127. 132  
 日室 (觀樹院) .....117  
 日解 (真通院) .....130  
 日解 (大慈院) .....163  
 日桂 (普恬院) ..... 239. 240 248  
     321. 325. 328  
 日啓 (寂耀院) .....146  
 日慶 ..... 59. 137. 192  
 日慶 (教住院) .....324  
 日慶 (智応院) .....247  
 日慶 (本理院) ..... 235. 319  
 日慶 (隆善院) .....162  
 日見 (理天院) .....213. 223. 228  
     318. 324  
 日研 (是歸院) .....264. 325. 327  
     328  
 日研 (妙法寺) .....261  
 日建 (玄寿院) ..... 236. 319  
 日乾 (寂照院) ..... 63. 103. 105~  
     108. 113. 114. 116. 117  
     119. 122. 126. 127. 142  
     147. 215. 300  
 日堅 (是応院) ..... 192. 238  
 日賢 (淡路公) ..... 25~27  
 日賢 (西林院) ..... 46  
 日賢 (智朗院) .....148  
 日賢 (中山) .....107. 122. 127  
 日賢 (妙雲院) .....100. 101. 103  
     104  
 日憲 (積善坊) ..... 242. 244  
 日顯 .....243  
 日顯 (鏡妙院) .....329  
 日顯 (小室) ..... 49  
 日顯 (智禪院) .....321  
 日顯 (要中院) .....328  
 日玄 (真間) .....133. 139. 158  
 日彦 (山本坊) .....116  
 日現 (小倉山) .....145  
 日現 (積善坊) ..... 242. 243  
 日現 (普門院) .....299  
 日現 (瑞輪寺) .....194  
 日現 (大翁院) ..... 236. 319  
 日現 (仏寿院) ..... 86. 98  
 日顔 (見性院) .....145  
 日顔 (智光院) .....329  
 日源 (光漸院) .....225. 234. 318  
 日源 (実相寺) ..... 17. 35  
 日眼女御書 ..... 68  
 日悟 ..... 53  
 日護 (中正院) .....120. 143. 144  
 日護 (妙守院) .....320  
 日広 .....243  
 日好 (禪智院) .....147  
 日孝 (大野山) ..... 190. 191  
 日孝 (是中院) .....238. 239. 244  
     320  
 日孝 (大玄院) .....324  
 日孝 (大中院) .....37. 38. 91. 131  
     162. 178. 332  
 日高 (伊賀公) .....3. 25~27  
 日亨 (遠沾院) .....38. 86. 146. 147  
     150. 153. 165. 169~173. 178  
     181. 183. 185. 192. 196. 215

日榮 (本学院) .....155  
 日映 (小湊) .....158  
 日楹 (智鏡院) .....249. 261. 321  
     325. 328. 332  
 日影 (長寿院) .....323  
 日叡 (上行院) ..... 40. 51~57. 59  
     80. 243  
 日叡 (妙有院) .....147  
 日悅 (学林院・覚林院).....146. 323  
 日円 (成就院) ..... 81  
 日円 (波木井) ..... 7. 8. 32. 37  
 日延 (成就院・観行院) ..... 56. 58  
     ~60. 83. 243  
 日延 (誕生寺) .....132  
 日莚 (隆源院) ..... 63. 130. 131  
     137. 141~144. 150~152  
     162. 196  
 日応 (飯高) .....185  
 日応 (寂隆院) .....213. 216. 223  
     224. 228. 318. 319  
 日応 (中納言) ..... 66  
 日応 (花之坊) ..... 58  
 日雄 ..... 66  
 日奥 ..... 101. 107. 121. 218  
 日遑 (乗妙院) .....162  
 日億 .....56~60. 243  
 日遠 (実氏) ..... 47  
 日遠 (心性院) ..... 63. 103. 105~  
     115. 117~119. 122. 125~127  
     136. 142. 143. 145. 147. 163  
     193. 218. 220. 242. 243. 277  
     300  
 日荷 ..... 85  
 日過 .....243  
 日迦 .....291  
 日海 (和泉房) ..... 49. 52. 53. 55  
     64  
 日快 .....269  
 日怡 (専心) .....247  
 日確 (戒修院) .....321

日学 .....244  
 日学 (成就院) .....41. 57~60 80  
     243. 329  
 日閑 ..... 242. 243  
 日閑 (貞松) ..... 133. 139  
 日閑 (仙寿院) .....330  
 日寛 (隆心院) .....193~197. 199~  
     201. 205. 241. 318. 323  
 日寛 (平賀) .....139  
 日感 (円明院) .....325  
 日感 (教運房) ..... 89  
 日幹 (要敬) ..... 193. 207  
 日環 (是運院) .....225. 230. 238  
     320. 324. 327  
 日観 (智応院) .....319  
 日観 (智雄院) .....236  
 日観 (潮濤院) .....326  
 日観 (並木) .....314  
 日観 (本是院) .....146  
 日観 (妙静院) .....279  
 日鑑 (自厚院) .....130. 148. 279  
     290. 292~295. 298. 300. 301  
     307. 314. 322. 325. 328  
 日軌 (大車院) .....297  
 日暉 (円通寺) .....305  
 日輝 (見如院) .....328  
 日輝 (妙祥院) .....325  
 日輝 (瑞妙院) .....318  
 日輝 (優陀那) .....148. 297. 304  
 日宣 (機扣院) .....321  
 日遑 (智伸院) .....237  
 日義 ..... 166. 243  
 日義 (観理) .....163  
 日義 (慈謙院) ..... 246. 320  
 日儀 ..... 84. 166  
 日擬 (体運院) .....298  
 日顓 (池上).....190. 191. 194. 195  
     197. 198  
 日竟 (誠峰院) .....187. 189. 192  
     196. 197. 202

南部義継……………	61	西谷名目解……………	143
南部義長……………	61	西谷名目標条……………	127
南部義論……………	61	西洞院時直……………	126
南林坊……………	173	西之坊……………	76. 86. 166. 175. 177 255. 286. 288~290. 326
に		西法眷……………	126. 141
新尼御前……………	16	西身延……………	82. 83. 293
新津又兵衛……………	292. 296	西山氏……………	16
新見但馬守……………	135	二重塔……………	64. 83. 130. 230. 240 246. 249. 287
二王尊像……………	85	二帖抄見聞……………	87
二王門……………	40. 157. 262. 265. 279 296	二疊台……………	251
日家（にけ）（寂日房）……………	17. 25~ 27	仁蔵……………	130
日向（にこう）（佐渡阿闍梨）……………	2. 17 21. 25~36. 42. 43. 65 81. 102. 242. 243	二側（にのかわ）……………	204
濁酒……………	74. 75	日安（智照院）……………	234. 318
二献……………	72	日位（治部公）……………	24~27. 35. 50
西庫宝物録……………	182	日意（円教院）……………	46. 56. 63. 65 82~87. 98. 214. 243. 323 333
西谷……………	64. 83. 94. 98. 99. 113 115~117. 126. 128. 147. 154 173~175. 215. 236. 280. 306 318	日印……………	41. 42. 50
西谷所化……………	203	日因（中山）……………	276
西谷檀林……………	63. 89. 98. 109. 110 113. 114. 116. 117. 120. 130 131. 134. 136. 137. 143. 156 162. 166. 183. 203. 217. 219 220. 222. 231. 256. 257. 274 282. 312. 332	日因（本法寺）……………	107
西谷檀林永聖跡……………	163	日院（実教阿闍梨）……………	46~49. 51 53. 55. 80. 243
西谷檀林講堂……………	130. 162. 289	日迂（妙応院）……………	318
西谷檀林所化寮……………	1. 31. 156	日雨（慶雲院）……………	180
西谷檀林惣門……………	193	日運（池上）……………	276
西谷檀林法則……………	117	日運（慈船院）……………	323
西谷檀林門額……………	193	日運（積善坊）……………	242~244
西谷妙玄庵講主……………	183	日運（誕生寺）……………	132
西谷名目……………	110	日運（中応院）……………	327
西谷名目簡条……………	115	日恵……………	244
		日慈（深信院）……………	36. 100. 130
		日永（因幡房）……………	18
		日永（瑞輪寺）……………	196
		日永（隆乗院）……………	163
		日英（中山）……………	54. 55
		日英（本覚院）……………	157.
		日栄……………	243
		日栄（寿福院）……………	118

身延山史索引 (林)

63. 65. 79. 80. 83. 85. 101  
107. 113. 126. 133. 159. 241  
275. 329  
中山坊……………156  
中山門流……………35. 56  
名古屋……………303  
名古屋伝灯講……………291  
名主……………136  
鈍掛……………71  
生麦事件……………259  
奈良……………58. 116. 302  
奈良田 (甲斐) ……12  
南延坊……76. 173. 174. 178. 255  
284  
南向坊……76. 100. 174. 175. 255  
286. 324  
南松院……………94  
南条氏……………16  
南泉房……………104  
南朝……………9. 47  
南天竺国……………207  
南都……………49. 82. 114. 161  
南都北嶺……………306  
南蛮寺……………100  
南部……………2. 4. 5. 7. 11. 32  
南部氏実……………61  
南部勝義……………61  
南部清光……………4  
南部五郎行連……………5. 6  
南部根元記……………5  
南部三郎兵衛……………19  
南部実氏……………9. 47. 48. 61  
南部実次……………61  
南部実継……………6. 8. 47. 61  
南部実友……………8  
南部実長……3~11. 19. 21. 22. 30  
31. 33. 34. 36. 37. 47. 48.  
60. 61. 209. 240. 307  
南部実春……………61  
南部実秀……………61

南部実行……………61  
南部氏……5. 6. 30. 44. 45. 47. 61  
南部次郎……………19. 45  
南部二郎実光……………6. 8  
南部四郎経光……………4  
南部太郎三郎朝清……………5  
南部太郎朝光……………6  
南部徳長郎……………45  
南部利勘……………61  
南部直栄……………61  
南部直政……………61  
南部直義……………61  
南部長氏……………45~49. 61  
南部長継……………47. 61  
南部長経……………61  
南部長春……………61  
南部長安……………61  
南部信長……………61  
南部信政……………61  
南部信光……………61  
南部春氏……………61  
南部春行……………61  
南部治義……………61  
南部政栄……………61  
南部政経……………61  
南部政長……………6. 61  
南部政光……………61  
南部光経……………61  
南部光長……………4  
南部光行……………4~6  
南部守清……………61  
南部師行……………47. 61  
南部弥四郎国重……………9  
南部弥四郎宗朝……………5  
南部弥次郎……………9. 23  
南部弥六郎長義……………9. 34. 45. 47  
61. 240. 255  
南部行氏……………61  
南部行朝……………6  
南部義実……………61

身延山史索引 (林)

棟梁……………254  
 道路……………291. 310. 311  
 富木氏……………3. 16. 23  
 富木堯広……………302. 312  
 富木胤継……………18  
 時の鐘……………156  
 土岐美濃守……………220  
 賭弓……………208  
 徳川家綱……………62. 147  
 徳川家光……………121  
 徳川家茂……………259  
 徳川家康……………89. 95. 98. 101. 106  
                     112. 113. 116. 209  
 徳川氏……………62. 88. 94~97. 132. 290  
 徳川綱重……………129  
 徳川幕府……………106. 157  
 徳川秀忠……………106. 121  
 徳川光圀……………180  
 徳川光貞……………171  
 徳川頼宣……………171  
 読師……………192  
 読誦祈禱会……………253  
 独尊……………216  
 特派布教師……………309  
 徳松……………135  
 徳山五兵衛……………151  
 独礼……………241  
 土佐……………298  
 戸沢能登守……………133  
 年寄役免除……………186  
 土蔵……………130  
 戸田因幡守……………220  
 戸田長門守……………166  
 戸田村……………266. 280  
 戸塚宿笹屋……………254  
 飛地……………39  
 富川玄快……………316. 323  
 留役……………220  
 富山 (越中) ……181  
 豊臣氏……………62. 101. 102

豊臣秀次……………102  
 豊臣秀吉……………97. 101  
 取持……………251. 252  
 鳥急 (とりのきゅう) ……227  
 頓写会……………291

な

内外典雑々拔書……………69  
 内証法門集聞書……………87  
 内藤玄子……………309. 322  
 内藤氏……………131  
 中井清太夫……………217  
 轅輿……………170  
 中川久恒……………131. 155. 156  
 中座……………72. 111. 204. 205. 219  
                     220  
 長崎屋平左衛門……………154  
 長沢村 (甲斐) ……266. 267  
 中条一老……………252  
 中州耀妙……………293  
 中台谷……………180. 189. 190. 191. 195  
                     ~197. 200. 201. 212. 213. 234  
                     235. 237. 238. 245. 247. 261  
                     270. 280  
 中谷……………47. 59. 156. 173~175  
                     265. 280  
 中務左衛門尉殿御返事……………14. 68  
 長野……………310  
 永野土佐守……………127  
 中之側……………205  
 中林源助……………299  
 中町……………265. 296  
 永見新左衛門……………154  
 中村 (檀林) ……109 137. 141. 147  
                     148. 151. 161. 299. 304  
                     314  
 中村正直……………300  
 長持……………170  
 中門……………257. 267  
 中山……………40. 41. 48~51. 53~57

出開帳	202. 249. 301. 303. 310
手形	96. 136. 184. 260
鉄炮	90
寺役	94
天海	121
天冠	208
伝教会	164
伝教大師	267
伝教大師講法則	78
伝五右衛門	156
天竺楽	207. 208
天子山	11. 12
眞師法類	144
天主教	100. 101
天寿楽	207
天照	268. 269
天照八幡社	103
天正盟約	62. 88
点心	75
天眞院妙仁日雅夫人	155
天神宮	202. 265
天神中条村 (甲斐)	266
点心餅	75
伝奏者	167. 170
天台	49. 51. 54. 58. 88. 161 246. 302. 312
天台灌頂玄旨	60
天台玄旨口決	60
天台大師	19. 20
天台大師会	165
天台大師講法則	78
天台づり	63. 78
天台梵網疏	70
天中	237
殿中間答	41
天聰の高祖	41
伝灯抄	29. 32. 40. 52. 55
天王寺	158
天目 (日盛)	21. 30. 34
天目山	97

天文法乱	88
------	----

と

土井大炊頭	227
土井大炊助	121
堂宇	248. 249
東叡山	92
東海道	170. 310
東海道線	311
東金門徒	177
東京	275. 289. 301. 303
東京別院	315
藤九郎守綱	19
塔形石灯籠	172
東現	219. 220
同広	330
東西身延	82
鎗子	330
十島番所	184. 186
導師役	57
灯主堂	166. 230. 231. 279
道順	119
道春法印	121
東照宮	129. 209
磐川	345
東漸寺	89
堂前橋	172
道善房	17. 36
東蔵	55. 99
東都	142
堂塔伽藍	128. 134
遠江	6. 37. 310
頭人	72. 73
当番	172. 186. 213. 214. 272 282
豆腐	71
答舞	207
童舞	75
唐本一切藏經	171
灯明錢	102

澄意	274
長運寺	319
長円坊	9
潮円坊	251
潮恩院	319
長遠寺	177. 184. 265. 322
長久寺	262
長元寺	190. 194. 270
長源寺	177. 248
長光寺	320
朝勤	282. 287
朝師三百五十遠忌	261
朝師堂	194
潮師法類	146. 199
長州	101
朝集抄	98
長寿坊	155
長松院日栄夫人	155
長松閣	47
長昌寺	317. 318
長松坊	155
潮瑞	218~221
潮善	319
朝善寺	83
手水場	288
長徳寺	247
潮文院	237
長法寺	176
聴法寺	177
頂妙寺	100. 101. 132
勅願寺	171. 182
勅許権律師	236. 317~322
千代見草	117
地領	264
智了院	246
枕目目錄	87
鎮守社	163. 164. 268
鎮西身延	293. 294. 310

つ

追放	122. 123
通海	319
通寛	248
通閑坊	219. 256. 285
通光阿闍梨	54
通師記録	43
通師法類	146
通心院	142
通本橋	119. 230. 231. 239. 245 248. 249. 252. 262
番舞 (つがいまい)	207
津賀檜	209
月行事	70~72. 76. 83. 165. 173
月小路	257
月次説法	194
月次法談	203
月の曼茶羅	170
月之寮	162
月番制	28
継目	228. 244. 283
継目式	192. 214. 215
対島	101
葛木	2. 10
土崎町 (秋田)	333
土屋但馬守	132
土屋政直	167. 169
綱脇龍妙	304
鶴瀬 (甲斐)	186
鶴若丸	85

て

庭園	172
貞俊坊	154
貞静	320
帝都開教	35
泥筆青蓮華御本尊	67
貞明	200
貞妙	200



短歌	246
談義	13. 20. 73. 203
談義僧	123
団子	75
団参	48
誕生会	73. 163. 258
誕生会法則	78
誕生寺	17. 132. 176. 192. 235 236. 241. 245. 247. 261 262. 280. 306. 320. 322
檀那	188
湛然	110. 111
丹波公→日秀	
丹後	176
丹治家信	112
短冊畠	110
丹雀嶺	15
談所	132. 161
湛如	224
檀林	63. 109. 110. 130. 136 141. 163. 183. 194. 201 203. 230. 231. 259. 274 283. 294
但令双用得意	193

ち

智応	247
智恩	224
智恩院	318
智海院幸哲→日容	
地久	207. 208
智鏡院	261
筑前公→日合	
竹木免除	95. 97
智化院	324
智解の秀泰	305
智見院	127. 318
稚児音楽大法会	316
児坊	75
稚児舞 (児舞) (ちごまい)	20. 205

稚児文珠	85
児文珠宮	172
智寂院	180
智寂坊	174. 180. 255. 284. 288 289. 329
秩父宮	316
地頭	32. 34
智等院	306
智透院	236
智徳院	215
千葉氏	54
地引御書	68
治部公→日位	
地宝坊	54
茶折	255
茶亭	172
茶之間	230. 231
茶坊主	151
中央拝殿	230
中教院	298. 300. 304. 306
中教正	276
中曲	207. 208. 228
中啓	20. 78
中間	170
中興	182. 214. 300
中興三師	63. 88. 147. 192
忠光坊	174
中賞	271
中檀林	314. 333
中適坊	175
中頭	204
中等科	312
中童子	170
中道寺	158
中老	78. 251
中老僧	17. 20. 22. 28. 30. 35 124
長	75
長安	61. 96
長安坊	154

身延山史索引 (林)

大本山	304	武田信義	4
大本寺	275	武田彦太郎	141
大名小路	162	武田義清	4
対面所	74. 120. 231. 267. 301	竹子	74
題目	73. 74. 76. 254	竹ノ下	2. 22
大門	172. 267	竹之坊	28. 76. 173. 175. 176
太裕院	237	186. 255. 264. 265. 285. 288	
大猷院殿	132	289. 296. 322. 328. 329	
対揚	73~75	竹之寮	162
平頼綱	23	武見日愨	296
太量院	244	田家村 (越後)	279
大林寺	194	他国侵逼難	19
大林坊	76. 150. 173. 174. 177	但馬	176
255. 284. 288. 289. 328		但馬公→日実	
329		太政官	272
大連	314	田代	155
大蓮坊	86. 175. 256. 286. 319	厨司 (だす)	94. 112. 231. 280
325		291	
大蓮明養	237	多田満仲	4
鷹ヶ峯	115. 181. 214. 215. 216	立烏帽子	20
鷹峰庠	127. 142. 146~216	脱師法類	180
鷹峰談林	213	脱省亨三師	182
鷹取山	3. 10. 11. 12. 64. 162	韃靼	35
209. 277. 304. 330		塔中	124. 283
尊良親王	45	楯	208
高野前大納言	167. 168	伊達宮内介	133
高橋入道	16. 43	伊達次郎泰衡	4
滝谷琢宗	298	堅札	253
詫事院	204	田中四郎	23
武井坊	76. 151. 152. 173. 174	田中日現	326
177. 255. 284. 288. 289		棚沢	156. 175. 224
329		多宝塔	286
竹小路	162. 257	玉沢 (伊豆)	117. 127. 133. 139
武田勝頼	92. 97	142. 144. 148. 159. 176	
武田三代軍記	92	241. 305. 306	
武田氏	4. 5. 61. 86. 89. 94. 315	玉沢法類	142
武田信玄	88~94. 97. 140	神 (たましい)	79
武田宣明	301. 304. 309. 322	玉作談所	132
武田信君→不白		陀羅尼	71. 74. 163~165. 251
武田信虎	86. 90	檀越	13. 15. 17. 19. 81

身延山史索引(林)

大教正…………… 275. 277. 297. 332  
 大曲…………… 208  
 大工棟梁…………… 102. 118  
 大驗者…………… 185  
 代講…………… 187. 188. 239  
 大孝庵…………… 15. 46  
 大講義…………… 276  
 大洪水…………… 230. 238  
 大講堂…………… 130. 259  
 大光坊…………… 286. 288  
 代講名代…………… 246  
 大國阿闍梨→日朗  
 大黒講法則…………… 78  
 大黒堂…………… 129. 202  
 大黒天…………… 216  
 醍醐谷…………… 21. 58. 155. 173  
 太鼓…………… 75. 209. 251  
 太鼓堂…………… 230. 262  
 太鼓樓…………… 156  
 耐慈院…………… 211  
 大師講…………… 19. 20. 75. 76. 139  
 太子堂…………… 265  
 題釈…………… 78  
 太守…………… 140  
 大鷲阿闍梨→日山  
 大衆…………… 198. 213. 219  
 台宗…………… 58  
 大衆舞…………… 20. 75. 77. 78. 205  
 泰俊…………… 204  
 太順…………… 332  
 大書院…………… 270. 289  
 大乘院…………… 132  
 大乘寺…………… 223. 237  
 大聖寺町…………… 314  
 大鐘堂…………… 131. 291. 296  
 大聖人…………… 1. 3. 40  
 大聖廟…………… 40  
 大乘坊…………… 57. 58. 76. 173. 174  
 177. 255. 284. 288. 289  
 299. 328

大進阿闍梨→日進  
 大進院…………… 42  
 大進家…………… 43  
 大進房…………… 42  
 大心坊…………… 175  
 大石寺…………… 35. 72. 176  
 諦善院…………… 324  
 大扇房…………… 81  
 大善坊…………… 58. 76. 173. 255. 284  
 288. 289. 316. 326. 328  
 大藏阿闍梨…………… 54  
 大宋高僧伝…………… 68  
 大僧正…………… 92. 145. 315  
 大僧都…………… 321  
 退檀…………… 204  
 大檀林…………… 304  
 大長寺…………… 322  
 台徒…………… 17. 18  
 大堂…………… 189  
 大頭寮…………… 126. 214  
 台東兩密…………… 65  
 大式阿闍梨…………… 65  
 大日經疏…………… 68  
 大日經疏要文…………… 68  
 大日經疏拔書…………… 68  
 大日本諸宗寺鑑…………… 240  
 大忍…………… 321  
 泰忍…………… 246. 321. 322  
 提婆品…………… 15. 38. 39  
 大風雨…………… 228. 230  
 大仏殿…………… 101  
 太平橋…………… 216. 228. 296  
 大坊…………… 90. 95. 109  
 大法阿闍梨→日善  
 大法寺…………… 177. 235. 304  
 大方丈…………… 102. 230. 231. 239. 246  
 267  
 大菩薩…………… 50  
 太本…………… 244  
 大本願…………… 317

身延山史索引 (林)

奏楽場	209
雑乱勸請	217
相輪塔	225. 249
宗林坊	155
惣礼	73~75. 77
曾我伊賀守	135
統太平記	6
即如院一相	225
俗役	257
素絹五条	170
蘇合香	207. 208
祖山	8. 22. 29. 34. 40. 42~ 51. 55~60. 62~66. 71. 77. 82 87. 95. 98. 100. 103. 104. 106 107. 109. 110. 113~116. 118 120. 121. 126~128. 130. 132 137. 139. 142~144. 146~150 153. 158~162. 166. 169. 171 ~173. 178. 180~184. 186. 189 190. 192~196. 199. 200. 201 203. 205. 210. 211. 214. 216 217. 223~225. 234~239. 241 242. 245~248. 250. 252. 253 259. 261~263. 265. 274. 279 280. 290~292. 300~302. 305 ~311. 317. 320. 322. 332~334
祖山学院	300. 312. 314. 334
祖山学問中興の祖	111
祖山小檀林	333
祖山大学院	301. 302. 305. 333
祖山中興	84. 153. 300
祖山由緒書	266
祖山留学生	302
祖師	87. 113. 226. 239
祖師会	75. 165
祖師宮殿	290
祖師口伝	38
祖師堂	23. 71~77. 85. 112 119. 128. 129. 178. 193. 202 206. 230. 254. 259. 267. 269

287. 289. 290. 296. 301. 309 311	
祖師堂宮殿	86. 89. 172. 231
祖師廟堂	112
祖書	56. 267
祖書見聞	59. 60
祖書公刊	113
祖書五大部	106. 113. 271
祖書三大部見聞	48
祖像	23. 41
祖像御遷座供養会	290
祖堂	77. 87. 282
祖廟	9. 33
曾谷氏	16. 42. 43
尊賀堂	288
尊王論	259
存立	320

た

大意	78
大運坊	175
大会	186~188. 206
大会式	35. 184. 258
大門坊	140. 256
大縁坊	278
泰応	321
大雄寺	314
大恩寺	314
泰加	318
大岳	244
台学	63. 148
泰学	210. 218~221
大覚大僧正	50
諦観	110
代官	54. 71. 108. 134. 249
大客殿	296. 301
大行	327
大教院	294. 297. 298. 304
大行院	236
大行寺	102

身延山史索引 (林)

仙石越前守政明	131. 155
撰時抄	69
仙寿院	322
禪宗事	48
千穠 (秋) 楽	207. 258
漸成	327
善正寺	102. 217. 241. 320
禪定房	151. 152
扇子	16. 255
泉水	172
宣隨	319
千僧供養	101
洗足山 (甲斐)	278
仙台坊	156. 217. 250. 256. 285
仙台陸奥守	156
千駄谷法類	146
先達座	72. 108
旃檀林	193
善知	9. 18
仙洞	168
千日尼	16
千人講	291
仙波檀林	58. 82
千部会	185. 187. 231. 248. 324
千部金	202. 203
千部講	203
千仏造立	120
千仏堂	129
千部法要	277
千部役僧	203
饑法会	291
千本杉	211
洗米箱	255
千松	135
宣妙	199
禪明院	200
仙名坊	219. 265
善門院	244
善立寺	106. 167. 180. 213. 219 227. 232. 269

仙林房	136
先例書	196

そ

草庵→御草庵	
宗延寺	106. 133. 198. 213. 219 269. 280. 318. 321
藏經堂	171
宗賢坊	156
宗幸	154
倉庫土藏	296
草山要路	271
雜司ヶ谷法類	146
葬式	269
諍時義	68
惣司	170
惣執行	119
奏者宿坊	166
奏者所	168
雙樹院	247
宗寿寺	314
増上寺	112
総施主	178
雜々拔書	69
相伝師	243
相伝書	87
総導師	24. 57
曹洞宗	4. 297
僧徒数 (身延)	256
雜煮	251
僧坊	90. 95. 97
総本山	106. 178. 290. 292. 304 308. 313
相馬 (陸奥)	122
藏面	207
草木成仏義	100
総門 (惣門)	129. 193. 209. 217 249. 252. 253. 254. 257 267. 301. 312
蒼鷹山	12

255. 284. 288	
杉原……………	167. 168. 241
鈴木伊兵衛……………	296
鈴木近江守……………	118
鈴木日寿……………	176. 293. 295. 296
素袍……………	170
隅之坊……………	76. 87. 173. 174. 176
256. 285. 324	
相撲……………	208
駿河……………	11. 12. 17. 22~24. 35
36. 43. 77. 95. 277. 301	
諏訪若狭守……………	135
駿東郡（駿河）……………	2
駿府……………	83. 268
駿府八ヶ寺……………	268

せ

清閑……………	154
征韓の役……………	102
清閑坊……………	154. 256. 278. 323
制規……………	116. 283
清玉坊……………	154
清九良右衛門……………	156
清兮……………	298
清兮寺……………	291. 299
清光寺……………	4. 325
清光房……………	66
醒悟園……………	229
省師法縁……………	199
省師法類……………	199
清正堂……………	250. 260. 262
棲神……………	2. 8. 30. 50. 64. 91. 116
231. 301. 302. 314	
棲神閣……………	291. 299. 316
征清忠魂塔……………	301
聖祖……………	8. 9. 13~17. 19~21
35~37. 50. 51. 77	
西檀→西谷檀林	
西檀紅衣騒擾……………	205
聖誕七百年……………	309. 311

清澄寺大衆中……………	68
制掟……………	138
生徒寮……………	291
清八良右衛門……………	155
政府……………	268. 270
清耀院日淨夫人……………	155
清耀坊……………	155
清和天皇……………	4
是運……………	238
是海……………	320
施餓鬼……………	74
是寛……………	150
是感坊……………	251
関所……………	96. 184. 186. 260
石梯……………	171
関札……………	96
関下（相模）……………	22
関本駅……………	2
関本龍門……………	312
関守……………	96
節会……………	208
説教……………	77. 292
節供……………	73
摂待所……………	230
殺生禁断……………	90. 95. 97
刹女堂……………	64. 129. 240
説法……………	71. 73~75. 79. 161
183. 203	
瀬野（相模）……………	22
世話役……………	202
善応院……………	179. 317
善翁院……………	219
仙応坊……………	256
善学院……………	89. 98. 109. 116. 136
231. 274. 282. 289	
宣教師……………	100
遍境二師の五法……………	142
詮玉……………	322
宣慶……………	262
善綱坊……………	256. 284

身延山史索引 (林)

清規…………… 71  
 信行寺…………… 328  
 深敬病院…………… 304  
 信行坊…………… 278. 284  
 神宮寺…………… 295  
 信玄家法…………… 91  
 神号…………… 268  
 人口 (身延) …… 256. 272  
 神功皇后…………… 20  
 新小路…………… 162  
 清国布教…………… 314  
 真骨→御真骨  
 真言宗…… 4. 7. 58. 114. 161. 302  
 震災…………… 250  
 進師御法度…………… 70  
 辰師堂…………… 288  
 神社改め…………… 265  
 神社参詣…………… 31  
 真宗…………… 148. 297  
 信州…… 10. 83. 92. 98. 100. 248  
 新宿 (身延) …… 252. 256  
 真浄坊…… 76. 173. 174. 255. 284  
 真蹟の表装…………… 130  
 神前…………… 71  
 神銭…………… 136  
 神箭…………… 92  
 真善院大寿日賢…………… 155  
 真善坊…………… 155  
 心達坊…………… 174  
 心地教行決…………… 69  
 神通坊…………… 175  
 神天上…………… 32  
 神道…………… 269. 270  
 真説…………… 165  
 新土蔵…………… 230. 249  
 真如院…………… 151. 152  
 真如閣…………… 216  
 真如寺…………… 146  
 新橋 (江戸) …… 223  
 真筆題目曼荼羅…………… 66

神仏混淆廃止…………… 265. 268. 270  
 神仏冥応論…………… 192  
 神分…………… 78  
 心妙院…………… 299  
 新屋六右衛門…………… 128  
 新羅三郎義光…………… 4  
 神力坊…………… 175. 303. 304  
 神力品…………… 13. 164. 165. 251  
 信立寺…… 86. 87. 95. 141. 162  
                   177. 192. 266. 279. 322  
 新寮…………… 301  
 心了院日源…………… 155  
 信了坊…………… 155. 256

す

吹…………… 74. 75  
 水旱花天冠…………… 170  
 水行…………… 242  
 瑞光院…………… 154  
 瑞光坊…………… 154  
 炊事場…………… 301  
 推鐘堂…………… 119. 131. 267  
 瑞松堂…………… 198  
 隨身…………… 218  
 隨身長…………… 300  
 隨身門…………… 131. 312  
 墜道…………… 311  
 水鳴楼…………… 130. 239. 246. 253  
 吸物…………… 71. 73~76. 251  
 瑞龍院…………… 102  
 瑞龍寺…………… 102  
 瑞輪寺 (江戸) …… 97. 100. 106. 149  
                   179. 196. 205. 212. 218  
                   ~220. 254. 319. 321  
 水領…………… 128  
 末広…………… 167. 168  
 杉…………… 209. 295  
 杉浦内蔵允…………… 151  
 杉田日布…………… 302. 303  
 杉之坊…… 76. 173. 174. 177. 250

身延山史索引 (林)

請待箱……………	252	177. 255. 265. 285. 288 325. 329
常題目堂……………	130	
小檀林……………	303. 312. 314. 333	松林坊…………… 76. 94. 99. 173. 175
上地……………	272. 307	勝劣……………56. 97. 132
常置委員会……………	309. 313	浄蓮寺……………297
上地官林委托願……………	295	浄蓮坊……………155
上地御料林払下……………	303	鐘樓…………… 40. 230. 257
上中座……………	194. 203	丈六堂…………129. 202. 216. 287. 303
鐘堂……………	225. 230. 290	丈六の釈尊……………120
正東庖……………	126. 143. 144	撰論要文…………… 70
浄土宗……………	63. 88. 91. 106. 112 116. 148. 297. 312	松和軒…………… 141. 146
浄土真言要文……………	55	除疫本尊……………331
浄土真宗……………	148	助願人……………187
聖人……………	10. 15. 31. 32. 90	助教……………333
上人号……………	279. 280. 332	諸経論要文…………… 68
小舞……………	75	植入十徳……………210
昌福寺……………	184. 322. 332	植林……………131. 209. 210
小兵衛……………	72	所化……………151. 163. 204
小坊……………	21	所化寮…………131. 156. 162. 163. 257
正法院……………	28. 150	初献…………… 72
正法寺……………	43. 109. 176	所司代……………54. 170
小方丈……………	120. 130. 172. 230. 239 246. 267	序品……………78. 251
正法華経抜書……………	70	諸末寺衆分…………… 75
聖密坊御書……………	70	庶務部……………313
鐘銘……………	119. 131	諸役………… 20. 90. 95~97. 123. 124
浄妙……………	327	除歴……………134. 225. 318
上妙院……………	236	除歴唱師→日唱
浄名経要文……………	70	私領……………249
証明坊……………	174. 256	寺領…………… 134. 265
上妙坊……………	285	寺領と供養……………121
正容礼……………	180	四老…………… 111. 219
上洛天奏……………	49. 50. 58	白書院…………… 241. 253
常立寺……………	325	城山(甲斐)……………5
松立坊……………	256	心王仏論…………… 69
浄隆坊……………	174	心海…………… 58
常立坊……………	256	新楽…………… 207. 208
定林寺……………	87	晋楽座……………257
定林坊……………	175. 256	晋楽人…………… 257. 258
		臣軌…………… 68
		神枝……………330



身延山史索引（林）

巡説……………	246. 277	小庫裡……………	280. 288
純性……………	103	將軍……………	241. 259
春窓坊……………	154	將軍家薨去……………	267
順妙院……………	250. 251	正慶寺……………	325
淮歷……………	262	正顯阿闍梨……………	66
書院……………	171. 230. 257. 267. 280	松玄坊……………	155
笙……………	209	鉦鼓……………	209
省庵……………	300	正光院……………	136
浄安坊……………	175	定光院（横川）……………	334
攘夷論……………	259	上座……………	111. 198. 218. 220. 282
省已……………	157	常在院……………	28. 265
静郁……………	321	小山茗話……………	20. 182. 207
正運寺……………	223	常紫衣……………	169. 172. 181
正運坊……………	265. 278	昭師御筆……………	70
松雲寺……………	256	定式目……………	125
浄永寺……………	177	松寿庵……………	237. 238
常栄坊……………	155. 256. 285. 325	松樹庵……………	172. 256. 287
小会式……………	35. 258	成就院……………	59. 60
成遠院……………	318	正修院……………	274
常遠院……………	215	正終院……………	162
長遠寺（鏡中条）……………	296. 322	常住制……………	30
詔海……………	51	常住坊……………	175. 256. 286. 288
乘海……………	87	上賞……………	271
乘覺……………	54	常照寺……………	280
正覺寺……………	225	正行寺……………	154
正覺坊……………	97	小書院……………	291
城ヶ峯……………	9	成正寺……………	176
松岸……………	198	常唱堂……………	256. 265. 278. 286
貞観政要……………	70	浄心誠勸……………	271
正経寺……………	327	浄心寺……………	194. 202. 205. 229. 239
正行寺……………	83		241. 248. 249. 259. 274
上行寺（六浦）……………	85		286. 310
松久院日茲……………	155	浄心坊……………	256
上行寺日向小井……………	133	浄信坊……………	175
上行所伝抄……………	69	常清寺……………	322
常経堂……………	130. 304	聖跡……………	183
上行堂……………	230	常宣房……………	81
常経坊……………	278	請待……………	251
小曲……………	207. 227	常諦寺……………	177
聖教殿居……………	35	請待僧……………	252

宗祖涅槃日……………	65	寿高院……………	219. 220
秀泰……………	304	守護国家論……………	70
宗牒感得記……………	199	守護神……………	218
衆徒……………	150. 151	首座……………	183. 214
十二時鐘堂……………	267	儒者衆……………	182
十二時鐘銘……………	332	種々御振舞御書……………	68
十如院……………	81	儒書……………	271
十如是……………	71. 73. 74. 163~165	守成時代……………	64
十如坊……………	175. 286	主職……………	215
十八史略……………	271	酒食……………	233
衆非衆……………	76. 77	寿山……………	314
衆分……………	75	鷲山寺……………	133. 177
什宝古書画……………	297	酒造……………	272
十万部寺……………	172. 175	修多羅……………	161
宗務院……………	305. 309	出火……………	296
宗務管事……………	314	出家……………	170
宗務監督……………	305. 314	出仕人……………	75
宗務總監……………	309. 322	出世寺……………	213
什物……………	144	守塔……………	29~31
宗門網格……………	107. 115. 271	守塔輪次……………	7. 25. 27. 30. 31. 33
宗門専門学校……………	300	寿忍……………	280
宗門中興の三師……………	111	寿福院殿……………	118. 129. 144
宗要……………	69	受不受……………	63. 101. 119
宗要集……………	99	受不受法理抄……………	143
宗要集五時部……………	69	受不施……………	121. 134
十羅刹……………	161	修法……………	181
十羅刹女法則……………	78	鷲峰……………	3
衆寮……………	130	鷲峰庠……………	145
十六羅漢像……………	120	須弥山譬之事……………	66
宗論……………	106	須弥壇……………	240
寿延寺……………	328	守明寮……………	274
寿応院殿……………	129	寿文……………	77
誦經……………	165	寿量寺……………	87
宿院……………	178	寿量品……………	73. 164. 165. 251
宿太郎……………	109. 186	俊海……………	121
宿坊……………	166. 184. 190	巡教……………	310
宿坊定……………	176	巡化……………	293
祝融……………	194	純慧……………	100
樹下庵……………	211. 318. 327	准后……………	168
修驗僧……………	10	春光坊……………	154

島地默雷……………297  
 嶋坊……………29  
 志摩坊……………21. 29. 49. 76. 173  
     174. 177. 255. 284. 288  
     289. 325. 332  
 清水院……………136  
 清水坊……………33. 77. 124. 175. 176  
     255. 285. 288. 289. 325  
     326. 330  
 清水龍山……………302  
 事務所……………301  
 四明指要鈔……………111  
 下経……………34. 42. 43. 99. 249  
 下野房 (日秀) ……23  
 下之坊……………29. 76. 173. 174. 176  
     194. 255. 284. 288  
 下町 (身延) ……265  
 下山 (甲斐) ……8. 11. 16. 18. 22  
     34. 94. 136. 140. 175  
 下山光長……………34  
 緇門崇行録……………271  
 紫紋白袈裟……………263  
 釈迦……………31. 65. 79  
 釈迦堂……………131. 289. 301  
 酌……………72  
 寂遠院……………145  
 寂光院……………121  
 寂光寺……………158  
 寂光坊……………285  
 寂照房……………175  
 積善坊……………76. 87. 173. 174. 242  
     243. 255. 285. 288. 330  
 積善坊流祈禱……………87. 242. 243  
 釈尊……………157. 243. 330  
 釈尊二千八百遠忌……………261  
 寂日房→日家  
 折伏逆化……………63  
 寺役免除……………96  
 迹門不誑……………37  
 聚遠觀……………256

社参……………163~165  
 社寺裁判所……………265  
 社寺上地御料林特売規定……………303  
 邪神……………218  
 寂海……………23  
 沙弥……………47. 97  
 朱印地→御朱印地  
 集……………71  
 秀栄……………319  
 秀悦坊……………174. 256. 284. 288. 324  
 修海……………211  
 宗学……………63. 80. 148  
 宗学林……………302  
 宗規……………297. 302  
 宗義……………66. 217  
 祝儀……………11. 74. 76. 251  
 宗教院……………297. 300  
 集解席談所……………257  
 修玄院……………150  
 宗元鈔……………43  
 宗賢房……………66  
 重厚院……………227  
 充洽園……………148. 299. 305  
 宗幸坊……………154  
 秀光 (寮) ……274  
 渋谷坊……………155. 256. 278  
 宗旨建立……………163  
 宗旨雜記……………115  
 周書異記拔条……………69  
 周書異記要集……………69  
 住職指名寺院……………241  
 住職取上げ……………250  
 宗祖……………29. 30. 41~43. 57. 82  
     83. 85. 86. 94. 112. 129  
     140. 242. 316  
 宗祖会……………187  
 宗祖御真筆……………130  
 宗祖御尊像……………190  
 宗祖大菩薩……………242  
 宗祖銅像……………310

249. 265	
四宗要文……………	84
四書……………	271
四条氏……………	3. 16. 20
慈上記念文庫……………	315
四条金吾殿御書……………	68
自証寺……………	132
時鐘堂……………	288
四条門流……………	50
四条頼基……………	17. 29
地震……………	171. 211. 249. 261
思親閣……………	15. 216
静岡県令……………	292
寺僧……………	188
下谷 (江戸) ……	213
七回忌……………	30. 37
七献……………	72
七条法服……………	75
七条謗法衣の論……………	54
七戸……………	5
七面会……………	164
七面山……………	11. 12. 37~39. 91. 119 131. 136. 156. 175. 181. 193 209. 217. 229. 240. 247. 264 265. 278. 279. 301. 303. 304 311. 326~328. 332
七面山鑰取……………	119. 326
七面山神祠記……………	38
七面山別当……………	263. 264. 326
七面山影禰石……………	295. 296
七面社……………	131. 144. 220. 234. 264
七面大明神……………	38. 39. 92. 136. 216 218. 220. 330
七面大明神縁起……………	37. 38. 332
七面大明神像……………	170
七面天影禰社……………	166
七面天女……………	37. 39. 265. 269
七面堂……………	242
七面本宮……………	225. 239
七面本社……………	136. 172. 218. 262. 264
寺中……………	90. 134. 149. 175. 288
実円坊……………	175
実教坊……………	124. 175
十軒部屋……………	288
十講法会……………	291
執事……………	91. 293. 309
十種供養……………	178
実相寺 (岩本) ……	23. 35. 176. 177 241
実等……………	192
実道坊……………	156. 174
十徳……………	170
十不二門……………	110
十不二門指要抄解……………	146
十不二門文心解……………	110
十不二門文心解私記……………	126
四天王堂……………	120
四天王法則……………	78
地頭……………	249
児童……………	75
祠堂金……………	156
自動車……………	311
師徒毎月行事……………	165
品川宿……………	254
品川弥二郎……………	295
支那唐……………	208
信濃……………	89. 249. 301
慈忍……………	322
柴田巖透……………	309
土符官薦……………	9
時服……………	241
持仏堂……………	13
渋谷平兵衛……………	155
渋谷又左衛門……………	131
試補……………	305
寺法……………	90
紫袍勅許……………	179
島田淡路守……………	135
島田出雲守……………	151
島田弾正……………	121

身延山史索引(林)

三転法輪	65
山徒	219
三塔	20
山内御溝	250
山内改正十六ヶ条	281
山内寺中	281
山内住僧	256
山内房舎	29. 58. 255. 256. 284
山王大師講法則	78
三戸	5
三百遠忌	94
三宝库	301
三品経	71
三枚橋	2
三位公	40
山務監督	296. 307. 309. 313. 316
山務代理	333
山務取扱	295
三門	85. 120. 128. 193. 194 202. 225. 254. 267. 278 302. 303. 306
三問三答	74
三門常唱堂	230
山門奏状	68
山門訴状	69
山門徒	80
山門之状	69
三益	200
三夜堂	265
三衆	207
山林	209. 295. 303. 304. 307 ~310. 313
三老	111. 219
参籠	125. 217

L

詩	290. 299
四威儀	157
支院	57. 71. 174. 176. 272 313. 332

寺院	117
慈雲院	100. 151. 152
慈雲寺	100
紫衣	107. 153. 159. 160. 166 ~169. 171. 172. 181. 321
塩沢	11. 94. 95. 97. 256
塩尻	20. 91
塩田大学	244
獅音院	280
自我偈	71. 73. 74. 76. 119 163. 165. 254
寺家坊	54
事感院	262
止観解	146
止観掇要録	182
止観随聞記	117
自鑑漸耻抄	117
止観輔行伝弘決	111
止観問要	68. 69
色衣	170. 172. 183. 251
食堂	130
四教儀	110. 111. 271
四教儀集解	110. 111. 145
始経役	187~189
紫袈裟	172. 183. 184. 232
寺家台村(上総)	234
至言坊	265. 284
四国	239. 246
地獄	113. 121
四献	72
四山一主	52
志士	259. 260
獅子	207
賜紫衣	159. 169. 180. 192. 264
自治会館	316
侍者	73
寺社御朱印記	242
寺社総轄	265. 266
寺社奉行	121. 132. 133. 149. 151 188. 201. 217. 227. 228

身延山史索引 (林)

酒井日慎……………	309	山規……………	106. 299. 301. 313
酒匂 (相模) ……	2	三組盃……………	251
相模……………	292	散華……………	71. 73~75
坂本村 (下総) ……	34. 37	参詣……………	82. 96. 121. 158. 159
酒輪 (相模) ……	2		184. 186. 283. 291. 310
坐具……………	161	参詣者……………	161. 186. 218. 252. 264
作事小屋……………	230		292. 311
佐久間兵庫……………	36	山家集……………	11
佐倉坊……………	76. 174. 175. 255. 286	三光会……………	164
酒……………	14. 17. 71. 73. 75	三光尊像……………	129
栈敷女房……………	16	三光天宮殿……………	202
指ぬき……………	161	三光堂……………	129. 131. 225. 256
差定……………	187	三光無師会……………	62. 88. 104
座主……………	41	三個の重宝……………	80. 81
座主評頭……………	30	三献……………	72
佐世保別院……………	309. 310	三菜……………	75
佐竹右京義処……………	144	三谷頭……………	276
貞純親王……………	4	三谷輪次……………	196. 197. 200. 202
定……………	102. 103	三山一主……………	51
左中弁……………	168	三山兼職……………	57
粟冠溪雲……………	326	三山輪番制……………	107
薩心院……………	199	三紙御本尊……………	67
左伝……………	271	三止三請 (三請三止) ……	251. 274
佐渡……………	16. 20. 235. 301	三四側……………	204
佐渡阿闍梨→日向		山主……………	241. 282. 283
佐渡御勘気御書……………	69	三汁……………	75
佐野堯善……………	304	三十番神……………	268. 269
佐野五兵衛……………	155	三重役……………	75
佐野前勵……………	310	三種教相見聞……………	49. 65
座配……………	124. 189	三説超過……………	65
左舞……………	20	参内……………	50. 153. 160. 166~168
侍……………	170. 252		170. 171. 192. 199. 223. 228
沢田治助……………	296		236. 261. 270. 279. 280. 332
沢田善一郎……………	308	三台……………	207
讃……………	73~75. 77	三台鹽……………	207. 259
三縁山 (増上寺) ……	121	三大部……………	105. 193
三縁山誌……………	112	三大部私記……………	69
三ヶ国諸末寺衆非衆……………	75	山中植入願……………	209
三観口決……………	60	三闢三赦……………	41
三韓征伐……………	20	三長三本の諍論……………	50. 51

身延山史索引(林)

小林孝三	302
小林小太郎	239. 292. 296
小林是純	294
小林日昇	292
小林民部実信	36
古筆	267
御筆	71
五百遠忌	222. 225
五百五十遠忌	231
五百大羅漢像	262
御廟	29. 32. 193
御廟所	15. 23
御廟堂	94. 313
御廟八角堂	230
御廟齋整	313
古物	267
古仏堂	156. 171. 225. 230. 231 262. 267
古仏堂祖師	202. 229
古法眼の間	120
御本丸屋満女	231
巨摩郡	10
胡麻郡	10
駒郡	10
駒込(江戸)	223
小町夷堂(鎌倉)	58
小松海浄	329
古末寺	177
小松原御難	165
後水尾天皇	331
小湊(安房)	36. 133. 199. 236 241. 247
小結烏帽子素袍小力	170
小室(甲斐)	2. 9. 21. 49. 52 53. 100. 124. 126
米	96
小者	73
籠堂	131. 166
五養条	143
後陽成天皇	113. 114

御用番	220
御料局長官	295
御料地	249. 304
御料林	295. 301. 307. 314
御霊骨宝蔵	171
鼓楼	230. 248. 257. 267. 287
五老	111. 219
五老僧	173. 190
覬玉集	105
権現	123
根元記	6
金剛宝戒寺	58
権宗	7
権少教正	280. 283
権大講義	283
紺地金泥経	92. 93
近藤氏	123. 124
昆布	251
金鉾論	110. 271
金仏釈迦尊像	131
根本寺	177
根本道場	50
厳誉	23
権律師	332

さ

斎	75
西行	11
最誠	229
洒掃	25
妻帯	159
斉藤遠江守兼綱	37
祭文	75
最遊房	16
佐賀	310
堺	261
酒井雅楽頭	121. 132
酒井紀伊守	134
酒井顕寿院夫人	296
酒井遠江守	154

310 311	
広福寺	100
光福寺	125. 211
甲府寺社總轄	265. 266
甲府奉行	134
甲府役人	187
神戸市	308. 310
好弁	192
光明院	50
後門石橋	125
高野山	100. 102. 302
公用人	219
高麗国状	70
香爐	178
五誠五禁	117
古楽	207. 208. 227
御介錯	72
小河原内藤与兵衛	154
古器	267
御祈禱開白結願作法	78
古記録	26. 333
古今類句寸字篇	11
黒衣	78. 204
穀倉	280
国語	271
御供所水谷	286
国前寺	177
国邑聚落事	66
小袈裟	78
柿板葺替	280
九戸	5. 6
五献	72
孤山顯性録	110
五山盟約	275. 276. 281
居士位	7
小鹿村 (駿河)	234. 235
小島氏	254
御赦免状之写	70
御朱印	95. 122. 129. 133. 183
御朱印地	242. 266. 272. 277

278	
五十遠忌	41
五重塔	118. 129. 144. 230. 238 248. 249. 262. 286
御書	70. 271
五条	78. 170
御聖教	68. 69. 73
御消息	13. 18. 67~70. 267
五常楽	227. 259
御書問答抄	237
故信庵	237
御真骨	82. 87. 112. 293
御真骨堂	112. 209. 224. 230 248. 267. 291. 303. 311
御真骨土蔵	129
御真骨宝蔵	202. 231. 240. 289 291
巨水遠沾記	182
御製抄	100
御草庵	3. 18. 20. 23. 64. 313
御草庵跡	12. 131. 296
小袖	17
後醍醐天皇	44. 45
五大部	111
五大部見聞	84
御檀紙	72
伍長坊	288
小塚原 (武蔵)	221
国庫証券	308
小伝馬町	309
後鳥羽院	4
小繩 (甲斐)	11
御難	73~75. 165
小西檀林	107. 127. 144. 151 211. 241
御入滅	18. 22
近衛家	160. 170
御白書院	241. 253
琥珀稻荷社	288
琥珀堂	299



身延山史索引 (林)

顯謗法書	69
顯本寺	87. 96
玄妙	234. 322
玄妙庵	289
顯妙院	150
見聞愚案記	105
玄文講	192
見聞集	55
源譽	112
見龍院	192
顯立坊	174

二

小出土佐守	166
胡飲酒	227. 258
幸阿弥与左衛門	154
紅衣	78. 203~205
幸右衛門	72
高雲日心夫人	155
高雲坊	155. 256. 317
広演院	200
孝格	319
講究所	289. 291
孝經	271
講經	78
興行	183
後見	170
亨玄院	190. 193
幸国寺	212. 261. 306. 320. 321
高座	71. 73. 75
高座石	86
光山 (本国寺)	195
講師	65. 246
向師御筆	70
向師御遺言状	70
興師義絶四ヶ条	31
皇室	50. 252. 253
亨師徳行記	192
校舎	256
講主	200. 236. 237. 238. 245

亨受院	190
交衆	139. 257
甲州	5. 9. 10. 17. 22. 53. 58 59. 77. 88. 95
甲州三ヶ寺	205
甲州南条講	290
高住村	136. 264. 265. 278
向師謄状	70
孝順	229
光浄院岳天	36
広勝寺	177
孝勝寺	176. 189. 198
光精坊	256. 286. 289
壺簪庵	256
壺簪坊	278
甲駿三ヶ寺	281. 283
亨善院	190
宏善寺	83
高祖	25. 50. 54. 55. 82. 79 91. 128. 225
高祖御服着更	74
高祖大士	205. 209
高祖日蓮大聖人	22
高祖日蓮大法將	92
高祖年譜	37. 39
高祖年譜攷異	22. 28. 39. 43
皇太子	207
光沢庵	328
高知 (土佐)	298
光長寺	17
皇朝史略	271
高通	200
講堂	110. 142. 163. 257
高等科	312
後董問題	187. 190. 194
光日上人御書	68
光日房御書	68
高忍	321
強仁上人御返事	69
甲府	86. 87. 95. 291. 300.

身延山史索引（林）

庫裡和尚	94. 99
久留氏	136
車返（駿河）	2. 22
吳地	22
搦坪（甲斐）	136
九老僧	44
黒駒	22
黒沢村（甲斐）	266
黒田豊前守	189
クワイ	72
桑ヶ谷（鎌倉）	3. 17
桑名（伊勢）	211
桑名茂三郎	295
群疑論	68. 69
訓読	73
郡内	57

け

慶雲院日通夫人	154
慶雲坊	154
稽古講法則	78
狛座	33
敬慎院	263. 264
鶏声ヶ窪	314
慶成房	174
溪舌律院	157. 229. 330
溪舌寮	274
鶏足山	12
境内地	103. 267. 292. 307. 308
慶長の法難	63. 106. 112
慶長の盟約	101
慶徳	259
競馬	208
経理部	313
慶林坊	59. 76. 174. 175. 255
	286
華嚴学	302
華嚴経拔書	69
袈裟	20
袈裟松祖師堂	287

化主	104. 109. 110. 113. 126 127. 134. 137. 143. 146. 162 180. 181. 200. 204. 210. 211 220. 223. 224. 234~236. 238 261. 262. 318
化主寮	204
結衆	72~75. 108. 156. 219 221. 222. 270. 273
結衆中老	72
月松	321
下男（身延山内）	256
下人（身延山内）	90
下馬	254
下馬札	137. 272
花臺	170
玄海	145
玄関式台	156. 231. 289
玄義指要抄	271
玄義席談所	257
玄義部	204
献香	25
玄講	142. 180. 183. 262. 318
源氏	48
顕実寺	238
玄上（寮）	274
玄祥院	226
顕成院日照夫人	154
顕成坊	154
顕盛坊	284
還城楽	207. 208
玄瑞	318
元政	11. 128. 129. 157
元政埋髮之塚	128
顕説	261
見塔院妙蓮日宝夫人	156
見塔坊	156
玄能	184. 219
玄能寮	184. 257
献馬	71
顕仏未来記	69

身延山史索引 (林)

277. 302. 303	
京都一条尻切台町	82. 86. 87
教頭	301. 302. 312
行道	73
教導職	282
京都十六本山	268
京都守護職	36
京都諸山	80. 112. 113
京都所司代	167. 170
京都市檀林	333
京都二十一本山	62
鏡忍寺 (小松原)	133. 177. 234
教部省	279
旭遠	321
玉泉寺	290
玉泉坊	175. 256
玉蔵坊	174
玉伝寺	177. 224
旭芳	261
巨舜	321
清州城	81
清原行清	42
吉良義央	159. 179
桐生 (上野)	297
切支丹	113
切棒駕籠	254
記録	71. 142
勤学所	271
金綱集	43~45. 333
近習僧	75. 254
禁制	90. 94. 95
金灯笼	125
金原明善	295. 296
近末	271

<

九院家中老十八坊	256
空雅	179
空山	276
久遠寺	1. 3. 19. 39. 40. 46

70. 90. 93. 95. 97. 106. 136	
152. 171. 178. 181. 182. 189	
197. 213. 241. 242. 260. 264	
~266. 274~281. 283. 286. 295	
久遠寺月行事輪次	76
久遠寺領	277. 278
究竟院	238
弘経用心記	84
闇取	149~152. 190
俱舎	116
久成殿	216
久世大和守	132
口宣御奉書	167
口留	96
供厨	172
沓谷 (駿河)	115
久津美氏	180
沓持	170
口伝	65
口伝相承見聞	55
国見坂	4
窪尼	16
弘法寺	176
求法檀林	109. 298
久保吉右衛門尉	137
久保金右衛門	137
窪之坊	28. 76. 173. 174. 176
251. 255. 284. 288. 289. 326	
窪寮	274
久本寺	261
九品念仏道場	32
久本房八役給仕	16
熊王重郎兵衛	186
熊本	310
組合	124. 288
弘妙寺	177
雲駒満行院	331
供屋	267
蔵原長次	118
庫裡	131. 163. 230. 257. 291

身延山史索引 (林)

- 菊御紋……………268. 269. 272  
 菊天井……………193  
 巖厚……………236  
 岸之坊……………58. 76. 173. 177. 255  
                     284. 288. 323. 328  
 鬼子母神……………170. 216  
 岸本氏……………312  
 巖誠……………324  
 規則……………141. 270. 276  
 喜多院……………37  
 北風氏……………280  
 北沢 (甲斐) ……278  
 北之坊……………23. 34. 76. 173. 175  
                     176. 255. 286. 288. 289  
                     325  
 北原村 (甲斐) ……9  
 義瑞……………238  
 吉士舞……………20  
 祈禱……………87. 114. 139. 163~165  
                     185. 241~243. 249. 252  
                     331  
 祈禱会……………249. 252. 253. 259  
 祈禱堂……………153. 156. 176. 252. 253  
 祈禱抄……………69  
 義忍……………218~220  
 木下弥助……………101  
 岐阜……………310  
 帰伏改宗……………17  
 帰伏手形……………133  
 木鐸……………77  
 鬼門……………38  
 客座……………72. 75. 108  
 逆修講法則……………98  
 客寮……………131. 312  
 九州……………50. 239. 246. 293. 301  
                     303  
 休息所……………171. 230. 249  
 休息村 (甲斐) ……10  
 宮中……………109. 207  
 休台寺……………234. 280  
 宮殿……………87. 172  
 教育……………313  
 經一丸 (磨) ……16. 20. 77  
 教雨……………321  
 鏡円……………48  
 教円院……………324  
 鏡円坊……………48. 175  
 教応……………321  
 經王寺……………167  
 教誠律儀……………271  
 行学院……………59. 82~84  
 教学相承抄聞書……………87  
 教学部……………313  
 經帷子……………268  
 經谷 (鎌倉) ……116  
 境行院……………305  
 京極高勝……………131  
 京極高国……………120  
 京極百介……………133  
 堯山……………229. 244  
 行事……………70. 72  
 行事坊……………173. 256  
 教授……………244. 333. 334  
 竟秀院……………324  
 教俊……………235  
 堯順……………115  
 堯俊房……………54  
 堯碩……………204  
 教善……………319  
 行全……………229  
 行善寺……………318  
 教泉坊……………174  
 經藏……………216. 230. 257  
 鏡像院……………151. 152  
 經藏堂……………171  
 行智……………23  
 教田……………147  
 京都……………36. 41. 45. 49. 50. 56  
                     ~58. 62. 79. 80. 106. 114  
                     115. 144. 178. 199. 214. 228

身延山史索引（林）

川中島（信濃）	92. 93
河原口村（相模）	156
感井坊	156. 175. 256. 287
勧学	144
看経	25
巻経	72
諫曉八幡抄	68
観具	247
勧化	249
観月	125
観月庵	126
観故	212
関西身延	87. 214. 226
冠山	143
監子	209
官寺	86
勧持品	13. 74. 163~165
甘州楽	207
観十	235
勧請	78
勘定組頭	219
勘定衆	151
願主堂	156
観松坊	155
願成坊	256
寛正の盟約	62
観心席談所	257
観心部代講	204
肝心問答要集	59
貫主	54. 77. 92. 93. 138. 162 172. 201. 205. 213. 222. 240 252. 332
貫首	41. 46. 49. 57. 71. 73. 74 91. 124. 133. 141. 147. 150 160. 162. 172. 173. 179. 190 191. 194. 216~219. 238. 239 248. 251. 253. 255. 301. 318
貫主請待	251. 273
貫主天蓋	178
貫主盃	73. 74

甘泉楽	228
元祖	81
元祖化導記	13. 22. 26. 37. 83 84
元祖堂	75
官地	265
管長	275. 289. 297. 298. 300 304~306. 315. 316
関東諸山	79. 85
完道坊	287
観道坊	256
監督	302. 315
貫日陳	283
観念	69
感応寺（駿河）	83. 100. 176 279. 321
感応寺（谷中）	132. 133. 158 176. 290
感応坊	284
関白	102. 168
観法石	229
完妙	235
観門	111
官林	277. 278. 292
完輪	319
管領	58
甘露院	219. 291

き

紀伊阿闍梨	81
紀伊公	26
紀伊大納言	155. 171
祈雨御書	70
木内七兵衛	155
嶺海	150. 181
義科私案立	99
義科集	99
義科論義	127
祈句	78
規矩顯章記	214

身延山史索引 (林)

楽頭……………	20. 75	月明……………	56
楽人……………	20. 139. 140. 206. 233 257	賀殿……………	227. 228
学問所……………	171. 230. 249. 270	賀殿急……………	258
楽屋……………	172. 230. 231	褰頭……………	20. 74. 161
学養寺……………	57~59	加藤四郎……………	312
神楽……………	205. 207. 208. 228	加藤光敬……………	97
加倉井 (常陸) ……	21	金沢藩士……………	305
学立坊……………	174	鐘……………	251
学侶……………	256. 257	狩野修理亮 (淑昌) ……	52
学寮……………	311. 312	鎌ヶ谷村 (下総) ……	43
覚林院……………	305	鎌倉……………	2. 7. 17. 18. 23. 29 34. 37. 38. 40. 41. 44 57. 58. 88. 316
覚林寺……………	320	鎌倉殿中間答記……………	41
鶴林精舎……………	299	神尾源右衛門……………	135
鶴林の聖跡……………	50. 51	袴……………	251. 252
覚林坊……………	76. 84. 151. 152. 173 174. 177. 255. 284. 288 289. 316. 322. 332	上新町 (身延) ……	230. 265
懸烏帽子……………	170	上町 (身延) ……	265
駕籠……………	251. 254	冠物……………	253
過去帳……………	268	亀寿丸 (磨) ……	20. 77
火災……………	194	亀屋万兵衛……………	231
傘持……………	170	鴨川 (安房) ……	185. 331
風間日珠……………	305	加茂嶺透……………	309. 316. 323
鯨沢……………	96. 310. 311	加用人……………	72. 75. 185. 273
加治左馬之助……………	112	加用人規則……………	141
加島 (駿河) ……	23	から井戸……………	229
春日岡巖海……………	121	唐絵……………	267
上総……………	21. 36. 37. 53. 210. 211 249	唐門……………	102
伽陀……………	71	伽藍……………	112. 127. 128. 153. 159 161. 171. 172. 201. 202. 209 230. 238. 239. 248~250. 267 290. 291. 293. 299. 306
片岡作左衛門……………	198	仮厨司 (かりだす) ……	231. 267
片隈 (身延) ……	83. 89. 129. 265	迦陵頻……………	258
帷子……………	73	嘉齡延年舞楽……………	7. 20
花壇……………	172	川越 (武蔵) ……	234
我通……………	143	河内国……………	45
合飲塩 (がっかんえん) ……	227. 259	河内領 (甲斐) ……	10. 135. 272
羯鼓……………	209	河口 (甲斐) ……	22
月山寺弁海……………	121	河東の総導師……………	57
合羽駕籠……………	254		

身延山史索引（林）

怨嫉大陳既破…………… 68  
遠照院……………226  
遠照寺……………83. 177  
音中院……………273  
恩田……………147  
遠妙寺……………176  
遠理院……………181

か

可莽……………299  
甲斐…………… 4. 7. 11. 17. 32. 34  
                  95. 102. 265  
海郁……………237. 320. 321  
開運殿……………299  
開会関……………193  
海雄……………236  
甲斐大島村……………131  
海音……………198  
海外布教……………35. 314  
甲斐源氏……………4  
海源寺……………83. 176  
戒行寺……………211, 270  
開口……………78  
開港論……………259  
開山会……………102  
開山鏡師会……………163  
海慈……………320  
改宗……………65. 114  
会所……………289  
回章……………75. 186. 253  
海浄寺……………176  
改正案諮問会……………305  
外船驛退大祈禱会……………259  
戒善坊……………66. 76. 165. 174. 175  
                  217. 255. 286  
開祖大菩薩……………293  
懷中抄……………69  
開帳……………231. 249. 261. 262. 281  
                  310  
開帳供養千部会……………231

海長寺……………176  
皆如院……………205  
改派……………89  
開扉……………229. 239. 248. 274  
開關……………2. 64  
開關会……………178. 258. 291  
開關五百遠忌……………216  
開關六百年……………277. 281  
開關六百五十年……………316. 317  
海宝寺……………176. 225. 227  
開目抄……………70  
貝山宣是……………322  
海輪……………223  
海鍊……………245  
回廊……………119  
回禄……………217. 230. 238. 250, 265  
                  279. 288. 299  
加賀……………144. 298  
加賀阿闍梨……………82  
加賀爪甲斐守……………132  
加賀美遠光……………4  
鏡御影……………67  
鑰……………326  
書捨草……………115  
鑰取……………119. 326  
楽……………20. 71. 73~75  
覚王坊……………154  
学海余滴……………39  
楽講……………233  
楽座……………233. 258  
廓山……………112  
学室……………115  
覚樹庵……………115  
覚樹院……………226  
覚樹院日良……………154  
学禪院……………150. 152  
学則……………110. 111  
格致院……………188. 190  
学徒……………64~66. 283  
学頭……………34. 50. 52

身延山史索引(林)

王昭君……………	227. 259	岡山檀林……………	333
正政復古……………	268	岡山中教院……………	304
王尊供所……………	265	小川泰堂……………	148
王代抄……………	69	置文……………	8. 33. 34
御馬両行事……………	72	興津(上総)……………	17. 36. 310
押領使……………	4	掟……………	108. 109. 172
御会式……………	30. 35. 96. 103. 140 189	奥位牌堂……………	239. 245
大井能登守……………	151	奥書院……………	249. 289
大岡越前守……………	197	奥院……………	15. 87. 128. 129. 146 183. 209. 249. 262. 286 295. 296. 303
大鐘鑄造……………	119	奥院鐘堂……………	131. 279
大ガレ……………	264. 265	奥院祖師……………	118. 130. 231. 248
大槻村(甲斐)……………	261	奥之院別当……………	166. 323
大久保加賀守……………	151. 169	奥之院題目千部会……………	324
大久保助左衛門……………	131	小倉縫左衛門……………	216
大久保長安……………	96	小田円泰……………	312
大阪……………	193. 225~228. 239. 246 277. 281. 300. 303. 308. 310. 333	織田氏……………	62
大阪講中……………	231	織田信長……………	88. 92. 95. 100
大阪寺院……………	249	小田船原村(甲斐)……………	217. 277
大阪中教院……………	304	織田大和守……………	81
大柴氏……………	136	小田原(相模)……………	43. 224. 254
大島(甲斐)……………	131. 136	御茶引……………	76
大城(甲斐)……………	11. 134. 166	御堂番……………	108
太田氏……………	16. 17	御留役……………	219
太田甚兵衛……………	135	小野金六……………	311
大津氏……………	193	小幡山城守信貞……………	89. 98
大島居村(甲斐)……………	266	小浜(若狹)……………	104
大野……………	7. 42. 88. 113. 114. 116 204. 205. 211. 241. 311	御浜御殿……………	202
大淵(遠江)……………	122	御筆……………	71
横被……………	161	おまんの方→養珠院	
大目付……………	151	重須談所……………	34. 35
岡崎(京都)……………	181	尾張宝塔講……………	291
小笠原氏……………	4	遠忌……………	41. 57. 83. 94. 123. 186 225. 291
小笠原佐土守長重……………	167	音楽……………	227. 232. 257. 258
小笠原村(甲斐)……………	131	御義口伝……………	13
男金(安房)……………	36	遠高院……………	219. 220
岡宮門徒……………	176	遠光寺……………	57. 187~189. 265. 294 322



身延山史索引 (林)

231	
江坂孫太郎	219
絵座敷	130
会式→御会式	
会式関免許	96. 184. 209. 260
恵秀院	323
慧性	100
恵性院	149. 152
江尻 (駿河)	94. 119
恵心流大綱私聞書	60
恵善坊	256. 265. 285. 288. 289
329	
越後	42. 247. 249. 280. 292
301. 303	
越後公→日弁	
越前公	25~27
会伝	234
越天楽	227. 258. 259
江戸	144. 155. 167. 192. 215
217. 218. 223. 227. 232	
249. 253. 259. 260. 300	
江戸講中	259
江戸三ヶ寺	141. 149. 188. 194
201. 205. 215. 232. 245	
江戸出役	213
江戸城	119. 121
江戸幕府	62
江戸役寺	106. 133
江戸八日講	231
榎畑史庵	29
恵林坊	152
円応坊	175. 256. 284
円教坊	87. 175. 251. 286. 288
290	
円鏡坊	251
延喜楽	207
円光庵	256. 286. 324
円光坊	154
延山→身延山	
延山偶吟	180

延山年中行事	126
延山宝物目録	143
円実寺	9
円師堂	202. 230. 240
莚師堂	151
莚師法類	145
延寿院妙正日叡	94. 95
延寿寺	310
延寿坊	94. 256. 284. 289
円成寺	37
円正坊	175. 186. 256. 285
円政	299
宴政	299
円真寺	234. 235
衍台	207
円台坊	76. 151. 152. 174. 175
177. 250. 255. 265. 285	
288. 289	
円中院	245
円頓章	76. 164
円諦寮	274
円澄	68
円如院	217
延年の舞楽	7. 19. 20. 77. 205
振舞 (えんぶ)	77. 207
円妙院	210
円勇院	324
円融寺	158
円理坊	175. 256
円立寺	326
円柳坊	124. 174. 256. 285. 327
延曆寺	41. 68

お

追分	156
追分祖師堂	183. 202. 228. 287
桜花園	299
扇谷 (鎌倉)	180
相坂関	57
逢島祖師堂	128

伊予公→日頂	
伊羅喉律師	41
いろはの抄	157. 330
岩城	122
岩千代磨	115
岩淵	310
岩村(濃州)	221
岩村氏	295
印英	98
印鑑	184. 260
韻鏡	99
院号	232. 258
院代	179. 188. 201. 219. 227 232. 234~238. 245~248 280. 317. 319
因明	105
隠寮	257

う

上杉輝虎(謙信)	92
上田(信濃)	122
上野氏	10. 16. 22. 31
上の山	129. 130. 154. 171. 216 278. 286. 291
上の山滝ノ下橋	172
上の山水谷	120
鵜飼	9
鵜飼徹定	297
鵜川日行	290. 291. 296
鶯谷	119
受附	231
宇佐美郷	82
歌	181. 246
内野日運	326
宇多天皇	2
馬	17. 272
右舞	20
右馬頭	135
右馬入道	19
廨舎	21

梅平	8. 9. 12. 46. 48. 49. 175
梅の方	154
梅松磨	126
浦井宗竹	142
浦井宗府	127. 142
浦賀(相模)	249. 259
孟蘭盆	74. 164. 258
裏門	172. 249. 301
宇和島(伊予)	133
雲雷寺	176. 225. 247

え

永享法難	56. 58
栄源寺	132
叡山	20. 36. 56. 58. 62. 65 78. 86. 302. 329
叡思	53
永紫衣勅許	169
叡昌	52
栄寿	156
永什寺	200
永守社	230
永精寺	29
永聖跡	141. 163. 327
永聖免許	141. 165
永善法印	122
永代委托林	295. 296. 307
永代千部会	186. 187. 202. 203 228. 230
永代月次十三日法談	203
永代緋紋白	231
叡朝	142
叡門の三貌	59
永紋白免許	263
永禄の規約	62
永禄寺	100
江川太郎左衛門	255
回向	71. 73~75
恵光寺	214
会合所	72. 74. 119. 156. 230

身延山史索引 (林)

- 池上末寺…………… 52  
池上南谷…………… 147  
池大神…………… 38. 131  
石和 (甲斐) …… 2. 9. 58. 82  
石井氏…………… 115  
石門稻荷社…………… 166. 267. 315  
伊豆…………… 47. 48  
伊豆法則…………… 78  
泉坊…………… 285  
和泉公→日法  
伊勢…………… 65  
伊勢平氏…………… 36  
石井了言…………… 115  
委托林…………… 296. 301  
板津半七…………… 137  
板屋…………… 179  
一円庵…………… 175. 179. 192. 199. 211  
223. 230. 234~236. 317  
一円記…………… 179  
一円寺…………… 179  
一円坊…………… 256  
市川家…………… 317  
市川大門村…………… 266  
市川太右衛門…………… 292  
市川文藏…………… 296  
市川村 (甲斐) …… 40  
市川役所…………… 272  
一行…………… 305  
一行坊…………… 175. 256. 286  
一行行業…………… 145  
一越…………… 258  
一座奉行…………… 72  
一字成仏…………… 65  
一乘院…………… 247  
一乘寺…………… 223  
一代肝心…………… 60  
一代五時記…………… 83. 84  
一代五時鶏図…………… 68  
一代五時図…………… 68  
一道…………… 115  
一日経…………… 7. 19. 21  
一忍…………… 306  
一ノ瀬…………… 146. 252  
一戸…………… 5. 6  
一部真読…………… 73. 75. 77  
一老…………… 244. 250~252. 293. 295  
322. 328. 333  
一向宗…………… 100  
一切経蔵…………… 111. 120. 129. 248. 249  
267. 286  
一宗の貫首…………… 162  
一心三観口決…………… 60  
一心房…………… 136  
一千檀王…………… 16  
一致勝劣…………… 72. 178. 297  
一致派…………… 97. 98. 298  
伊東 (伊豆) …… 102. 122  
伊藤出雲守…………… 133  
伊東御難…………… 164  
伊藤茂右衛門…………… 295. 302  
伊東茂三郎…………… 296  
稲子…………… 12  
稲葉石見守…………… 155  
稲葉右京之亮…………… 255  
稲葉頼母…………… 255  
因幡房…………… 18  
稲葉正通…………… 167. 169  
稲葉美濃守…………… 132. 151. 154  
稻荷…………… 156  
伊沼…………… 136  
井上周兵衛…………… 294  
井上正岑…………… 169  
位牌堂…………… 128. 202. 239. 240. 245  
248. 267. 280. 287  
庵原郡 (駿河) …… 11  
遺文…………… 40. 50. 79. 148  
以方便力…………… 65  
今諏訪村 (甲斐) …… 100  
今村伝三郎…………… 155  
今村伝四郎…………… 119

身延山史索引(林)

浅野忠吉……………103. 104  
 浅野左京太夫……………102. 103  
 麻の法衣……………183  
 浅利村……………242  
 足利氏……………79. 80  
 足利尊氏……………44. 50  
 足利持氏……………58  
 足柄……………2  
 安土御殿……………102  
 安土宗論……………63  
 安土城……………88  
 吾妻鏡要目集成……………20  
 篤子……………216  
 熱原神四郎……………23  
 熱原法難……………23. 36  
 穴山勝千代……………95  
 穴山信君(梅雪)……………93~95. 140  
 穴山信友……………5  
 阿仏房……………3. 16. 18  
 安部河原……………112. 116  
 安部貞任……………43  
 阿部野(和泉)……………47. 61  
 阿部正式……………167  
 案摩……………207  
 甘理……………2. 10  
 阿弥陀法印御返事……………68  
 雨畑……………12. 38. 39. 135. 136. 229  
     264. 278  
 雨宮氏……………136  
 新居宗左衛門……………297  
 新居日薩……………279. 281. 283. 293. 314  
 荒尾(相州)……………85  
 荒行……………229  
 有馬氏……………223  
 淡路公→日賢  
 安永身延紀行……………216  
 安家……………43  
 安国・開目開書……………87  
 安国論私記……………117  
 庵室……………10. 13. 17~19

庵室修覆書……………10  
 庵室生活……………13. 14  
 安祥寺……………319  
 安世院……………57  
 安政大地震……………249  
 安藤伊賀守……………130  
 安藤右京進……………134  
 安藤重常……………130. 162. 164  
 安藤対馬守……………249  
 安楽寺……………144

い

飯田(信濃)……………121. 122  
 飯高(檀林)……………63. 104. 109. 110  
     116. 141. 146. 147. 149. 151  
     152. 161. 180. 181. 190. 192  
     195. 196. 198~200. 210~213  
     215. 218. 220. 223. 224. 234  
     ~238. 241. 245~248. 261. 262  
     270. 297~299. 306. 317. 321  
     332  
 飯高三谷……………148. 191. 194. 200. 213  
 以一察萬抄……………70  
 飯塚(下総)……………104  
 飯富野(甲斐)……………7  
 飯野(甲斐)……………7. 11  
 飯盛城(河内)……………45  
 伊賀公→日高  
 居開帳……………297  
 池上……………3. 21. 22. 25. 28. 37. 50  
     ~53. 55. 59. 79. 85. 86. 100  
     104. 106. 107. 112. 113. 121  
     122. 132. 133. 146. 159. 195  
     ~197. 213. 241. 272. 275 →  
     本門寺  
 池上中教院……………306  
 池上兵衛志……………14  
 池上正重……………86  
 池上宗重……………102  
 池上宗仲……………16

# 身 延 山 史 索 引

- 本索引は昭和48年6月17日発行の『身延山史』を対象とし、『続身延山史』は除いた。
- 主として人名・書名・地名・寺名・施設名・事項・その他の語いを検出し、五十音順に配列した。
- 僧名は原則として日号で示し、院号・寺名等の別を（ ）内に示して判別の手がかりにしたものもある。なお、日号は「ニチ」と読むか「ニッ」と読むかは判別し難いものもあるので日号の次を五十音順に配列した。
- 書名は検索に便ならしめるために、具称または略称を掲げた。
- 支院名の「坊」「房」号は「坊」に統一した。
- 内容の同じものは統一して、又、誤りに気付いたものは訂正して収録したものもある。
- 訓みの未詳のものは、音読みにしてその該当する箇所に配列した。
- 本索引の作成には井出万美・今村紀子・今村千加子・大森千恵子・桑原律美・佐野初美・佐野明美・佐野智恵美・清水達之氏等の協力を得ている。特に今村良枝女史には多大の尽力にあづかった。記して感謝する。

昭和56年10月13日

林 是 晋

あ	
会津	180
会津中将	255
阿育王	208
愛源日行夫人	120
愛知	310
相又（相俣）	11. 29. 166
相俣山	134
青木氏	198

青山市之丞	312
青山氏	213
赤沢（甲斐）	8. 11. 57. 59. 134～ 136. 166. 264. 304
秋元但馬守喬朝	167. 169
秋山五郎右衛門	305
秋山太郎光朝	4
明智光秀	101
浅井氏	121
浅草	23

る。この水準に、ウォーフの言語相対説も関係している。」

以上、言語と思考の問題について、二人の学者の説を中心に、一考察を試みた次第です。(1981, Aug.)

Notes:

- (1) サビア・ウォーフ説: the linguistic relativity hypothesis (言語相対論説)  
と云われ、思考様式は人間に普遍的なものではなく、個別言語に相対的であり、従って言語によって現実世界が異なった形で認識され则认为。決定論的視点に立つ仮説。

サビア (E. Sapir) (1884—1939): 米国の人類言語学者、コロンビア大学、シカゴ大学、ユール大学等で人類学、言語学を担当。

主著—Language, an Introduction to the study of speech (1921)

ウォーフ (B. Whorf) (1897—1941): 米国の言語学者、ユール大学講師  
主著—Language, Thought and Reality (1956)

- (2) ロナルド・W. ランガッカー (Ronald. W. Langacker): 言語学者、カリフォルニア大学教授

- (3) ピーターウルフソン (Peter Woolfson): 米国北東部ニューイングランドのヴァーモント大学教授 人類学、言語学者

- (4) unicon: 一角獣 (馬に似て額に一本の角のある伝説的動物)

- (5) W. H. Thorpe: 米国の行動生物学者、主著、Animal Nature and Human Nature (1974) 行動生物学: 動物の生得的行動と環境との関係を研究する学問

Bibliography:

- E. Sapir: The status of Linguistics as a science, 1929, America  
P. Woolfson: Language, Thought and Culture, 1973, America  
R. W. Langacker: Language and Its Structure, 1968, America  
Y. kurokawa: Essays on Language, 1977, Tokyo  
H. Narita: Language and Humanity, 1979, Tokyo

(resolution). The cat does all this without the aid of language, and therefore it seems reasonable to assume that we are capable of some processes of thought without the mediation of language. Some essential ability to deal with events in time as in space is, by definition, to be expected throughout the world of living things.

即ち、「猫が犬を見た後で、木に走り上る時、猫は次の能力を示す。猫は犬を見る（認知）、其れは、犬を危険であると見別ける（認識）。其れは、トラブルを予見する（予期）、其れは、すみやかに、其の環境をチェックする（評価）、そして其れは、最も近い木に走り上る（決心）。猫は、こうした事を、凡て言語の助けなしで行なう。それ故に、我々が言語の媒介なしで、或る思考過程を経る能力があると考えた事は、合理的に思われる。時間、空間を問わず、物事を処理する或る本質的能力は、明確に生物の世界に、期待されている筈である。」尚、ウールフソンは、言語の文法（語法）について、次の様に述べている。

There are to be sure, very broad and general, universal statements about language that can be made to which no exceptions can be found.

However, it is equally true that the grammars of the languages of the world show considerable variety in the devices they employ to classify reality. It is this level of classification, dissection, and organization, the level of diversity rather than universality, with which whorf's linguistic relativity hypothesis is concerned.

即ち、「確かに、言語について、例外の見出せないような、非常に広く、一般的な、普遍的な定義がある。けれども、世の中の言語の語法が、事実を区別する為に用いる方法の中で、かなりの多様性を示す事も、等しく真実である。其れは、類別、解剖、構成の水準であり、普遍性よりむしろ多様性の水準であ

Using these alternatives in English grammar, he makes it possible for us to visualize the different types of snow and to perceive the differences among them. Because the differences are specifically labeled, we become conscious of them.

即ち、「英語々法に於けるこれ等の選択語を用いて、彼は、我々が、違ったタイプの雪を目に見える様にする事や、それ等の間の違いを認める事が出来るようになる事を可能にする。なぜならば、其等の違いが、明示的に名称を与えられている為に、我々は、其等を意識する様になる。」彼は、以上の様に述べているが、更にスキヤーと、雪とを例示して、次の様に述べている。

If it becomes necessary for us to perceive these distinctions, as a skier might with snow, then they would become conscious, and the vocabulary or descriptive items would follow. In the case of skier, he borrows his terms for snow from the more specialized vocabulary of the Austrians.

即ち、「我々が、此等の違いを、スキヤーが、雪に対して認める様に、認める事が必要になるならば、その時その違いは、意識となるであろう。そして、その用語や、叙述項目が、従って来るであろう。スキヤーの場合、彼は、雪に対する彼の語を、オーストリア語の一層専門化された用語から借りるのである。」

以上の彼の説から考えると、言語が、認知を規定するのでなく、認知が、言語を規定すると云えよう。尚、この事例として、彼は、米国の行動生物学者 W.H. Thorpe (ソーブ)<sub>(5)</sub> の次の説を引用している。

When a cat runs up a tree after seeing a dog, he exhibits this ability. The cat sees the dog (perception), it identifies the dog as dangerous (cognition) ; it foresees trouble (anticipation), it quickly checks its environment (evaluation) and it runs up the nearest trees



弱めたりする特別の一組の眼鏡を、我々に与える。この様にして、凡ての感覚が、神経組織により受け入れられている間に、或る感覚だけが、意識のレベル迄もたらされる。」

そして、彼は、この過程に於ける言語の役割を示すものとして、ウォーフ学説の中で例示されている snow（雪）について述べている。

では、ウォーフ学説の中で述べられている雪は、次の様になる。一部を述べると、

We have the same word for falling snow, snow on the ground, snow packed hard like ice, slushy snow, wind-driven flying snow whatever the situation may be. To an Eskimo, this all inclusive word would be almost unthinkable ; he would say that falling snow, slushy snow, and soon, are sensually and operationally different, different things to contend with ; he uses different words for them and for other kinds of snow.

即ち、「我々は、降る雪、地面の雪、氷の様にかたくつめられた雪、解けた雪、風に吹き飛ばされる雪等、其のシチュエーションは何んであろうとも、同じ言葉の snow と云う語を持っている。エスキモーに取っては、此の凡てを含んだ語は、殆んど考えられないであろう。即ち、彼は、降る雪、解けた雪等は、感覚的にも、作用上からも違って居り、一緒に論ずべきものではないと云うであろう。彼は、其等や、他の種類の雪に対しては、違った語を用いる。」以上の様に、ウォーフは、実体を区別する為には、違った語が用いられると云っているが、しかし、適当な語がない時は、実例を用いる事によって、語の欠けている部分を補い、その概念を表現出来ると云って居り、この様にして、違ったタイプの雪は、適当な形容的な語句を用いる事により、述べる事が出来ると云っている。

こうした事に関し、ウールフソンは、次の様に述べている。

Although the hypothesis seems to affirm the view that language determines thought, one should remember that it concentrates on habitual patterns ; and habitual patterns may be ignored or circumvented. What is necessary is that we become aware of these patterns by conscious introspection, scientific study, or cross-cultural comparison.

即ち、「本質に於て、その説は、与えられた言語は、殊にその語法に於て、その話手に、既成の型で世の中を見る様な傾向にさせる習慣的表現様式を与えると云う事を、示している。文法（語法）は、語から語へと変る為に、思考の習慣的型は、異なった言語の話し手の、世の中の見方とは違って来るようである。その説は、思考を決定すると云う見解を断言するようにみえるけれども、人は其の説は、習慣的型に集中している事を思い出すべきである。そして、習慣的型は、無視され除外されるかも知れない。必要である事は、我々が、此等の思考型を、意識的内省、科学的研究、又は異文化間の比較によって知る様になる事である。」

以上の様に彼は述べて居るが、我々が健康である限りは、現実に対応する同じ様な身体器官をもっている。しかし、神経組織は、違った種類、強度、持続時間の、断えざる流れにより改められて、それ等の諸感覚は、凡てが、我々の意識に達するとは限らないのであり、この達しない感覚を、適当な量に処理して、意識の中に入れ込むろ過装置に当るものが言語であると云えよう。この事に関して彼は、次の様に述べている。

Our language, in effect, provides us with a special pair of glasses that heightens certain perceptions and dims others. Thus, while all sensations are received by the nervous system, only some are brought to the level of consciousness.

即ち、「我々の言語は、結果に於て、或る知覚を強めたり、又、他の知覚を

If, in your native language, you were brought up to say the equivalent of the flower reds, the tree tall, and the river deep, it would not follow that you lived in an especially exciting mental world where colors were actions on the part of objects, where trees continually participated in the activity of tallness, where rivers stretched themselves vertically while flowing horizontally.

即ち、「もし、あなたが母国語の中で、花が赤くなる。川が深くなる。と云う語と、同じ様な意味の事を云って、育てられたならば、色調が、物の側に立って、行動的になったり、木々が、絶えず高くなる事の行動に加わったり、川が水平に流れる間に、川自身垂直に延びて行く様な、こうした特別興奮的な精神の中に居るとしても、その事を、あなたは、感じなくなるであろう。」

以上の様に、彼は、人は習慣的になると、言語の文法上の構造は、思考を全面的に規制するものではない。と述べている。こうした事は、我々が、日常経験するところであり結局、思考の世界の方が、言語の世界より、はるかに豊かであると云えよう。

次に、ピーター・ウールフソン (Peter Woolfson, ヴァーモント大学教授) の説を、中心に考えてみたい。

先づ、彼は、言語が思考を決定すると云う、サピア・ウォーフ説に対し、次の様に述べている。

In essence, the hypothesis suggests that a given language, especially in its grammar, provides its speakers with habitual grooves of expression which predispose these speakers to see the world ready made patterns. Since grammars vary from language to language, it is likely that the habitual patterns of thought will be different from the world view of a speaker of a different language.

典型的なレッドの色合いを覚える事以上に、特別なブラウンの色合いを覚える事は、より困難である事が分るであろう。

彼は、以上の様に、単一の語によって指示された概念を操作する事が、複合語で指示された概念を操作する事より容易であると云う説より、我々の思考が如何に言語学的経験の範囲によって規制されるかを述べている。しかし、こうした影響力（規制力）も、絶対的なものとは考えられず、人は、言語が役に立たない様な概念を、形成する事が出来ると考える。その例として、彼は次の様に述べている。

Imagine a unicon<sup>(4)</sup> with a flower growing out of each nostril. No word exists for such an entity, but it is easy to think about it nevertheless. 即ち、「それぞれの鼻孔から、花が生えている一角獣を相像してみなさい。この様な実在の為の語は、存在していない。しかし、それにもかかわらず、それについて考える事は、容易である。」

次に、語の文法的構造が、思考の上に及ぼす関係について考えて見たい。この事に関し、彼は、次の様に述べている。

There is absolutely no reason to believe that the grammatical structure of our language holds our thoughts in a tyrannical, viselike grip. It is not really surprising that no such evidence has been found. The claims are based on really very superficial aspects of linguistic structure.

即ち、「我々の言語の文法的構造が、我々の思考を、グリップでしめつける様に、ひどくしばりつけると云う事を、信ずる理由は全くない。この様な証拠が発見されないのは、真に驚くべき事ではない。その主張は、言語の構造の、真に非常に表面的相に基づいている。」以上の様に彼は、言語の文法上の構造は、思考を特に限定するものではないと云っているが、その具体的例として、更に次の様に述べている。

calling some things red and others blue.

即ち、「我々は、或る色にレッドと云う語、又他の色にブルーと云う語のレッテルをはる事には、慣れている。典型的なレッドやブルーの物を出された時、我々は、すばやくその色を、呼ぶ事が出来る。レッドやブルーの語は、容易に我々に役に立つ。なぜならば、我々は、或る物をレッドと呼び、他の物をブルーと呼ぶ事に、一生涯の経験をもっているからである。」

この様にはっきりした色調、即ち原色の様な場合は、我々は、容易にそうした物を、思考の中に取り入れる事が出来るが、融合色の場合は、どうなるであろうか。彼は、暗かつ色の場合を取り上げて、次の様に述べている。

There is no common term in English for this particular color. Most likely you will hesitate to call it either brown or black, because it is not typical of the colors usually called brown or black.

Eventually you may resort to a phrase like very dark brown or brownish black, but such a phrase will probably not come to mind as quickly and readily as red or blue. We are not so accustomed to distinguishing shades of brown from one another as we are to distinguishing red from blue. It will prove harder to remember a particular shade of brown than to remember the color of a typically red object.

即ち、「此の特別の色に対しては、英語に於ては、ありふれた用語はない。たいてい皆、其れをブラウンと呼ぶか、ブラックと呼ぶかためろう。なぜならば、其れは普通ブラウンとかブラックとか呼ばれる典型的な色ではないからである。時々人は、暗かつ色とか、かつ色がかった黒の様な用語に、たよるかも知れないが、この様な句は、多分、レッドやブルーの様に、速く容易に、心に浮んで来ないであろう。我々は、ブラウンの色合いを、我々が、レッドとブルーを区別する事に、慣れている程、他の色合いと区別するのに慣れていない。

We have seen that a word can be helpful in forming, retaining, or operating with the concept it designates, we have also seen that no two languages match precisely in the way in which they break up conceptual space and assign the pieces to words as meanings.

即ち、「我々は、一つの語は、その語が指示する概念を形成し、保持し、操作する事に於て、役に立つ事が出来るのを見て来た。我々は又、二つの言語は、それ等が概念上の空間を切り取ったり、その空間の断面を、意味としての言葉に分け与える方法に於て、正確には釣り合わないという事を、見て来た。」

以上の様に、彼は抽象的に述べて居るが、更に具体的例を上げて、次の様に述べている。

English distinguishes between green and blue while other languages use a single word to designate this entire range of the spectrum, and that the Eskimos use a number of words to designate different kinds of snow where English has the single word snow.

即ち、「英語は、グリーンとブルーを区別するが、一方他の言語の中には、これ等の色帯を、単一の言語で示している。エスキモーは、色々の種類の雪を示す為に、多くの語を用いるが、英語では、スノーと云う単一の語を用いている。」

彼は以上の様に述べているが、こうした相違は、凡ての用語範囲や、二つの言語が比較される時、見られるものであるが、問題は、経験上の言語学的範囲に於ける違いが、どの程度迄、それに相当する思考上の相違に影響するかと云う事である。この事に関し、彼は、次の様に色調の例を上げて述べている。

We are accustomed to labeling some colors with the term red and others with the term blue. when presented with a typically red or blue object, we can quickly name its color ; the terms red and blue are readily available to us, for we have had lifelong experience in

and education are familiar terms, yet it would be very hard to pin down their meaning precisely. Justice does not evoke a concrete image in the table does. We can usually agree on whether something is a table or not, but how sure can we ever be about justice? Does the word of liberty have any real significance? We certainly have at least a vague idea of what is meant by these terms, but their meanings tend to be quite elusive and to vary considerably from person to person.

即ち、「正義、デモクラシー、自由、コミュニズム、教育と云った語は、よく人の耳にする語である。しかし、それら等の意味を、正確に規定する事は、大変困難になるのであろう。正義と云う語は、テーブルと云う語が呼び起す様な、具体的なイメージを呼び起さない。

我々は平常何がテーブルであるか、ないかについては、同意見を持つ事が出来るが、しかし、正義については、如何にして確かめる事が出来ようか。リベティ（自由）と云う語は、どんな真の意義をもっているのだろうか。我々は、確かにこれ等の語が、意味する事柄について、少くとも漠然とした考えをもっている。しかし、それ等の意味は、全く捕えにくいものであり、人から人へと、かなり変って行く傾向がある。」

彼は、以上の様に述べて、此等の概念は、それ等に相当する語がなかったならば、存在しなかったであろうと云っている。又、こうした語は、事実とは、漠然と結ばれて居り、或る意味では、殆んど空虚であると言って居り、これら等の語の使用は、慎重にすべきであると、述べている。我々も、こうした語を、簡単に使う傾向があるが、その意味する内容の複雑さについて、一考すべきであると思う。

次に、我々の思考過程と、我々の言語の構造との関係について、考えてみたい。この事について、彼は次の様に述べている。

て単に働くのである。」

以上の様に彼は定義づけをしているのであるが、結局、人間的な認識力と云うものを、言語によって自由に左右されない一つの力として考えていると思われる。

言語は、一般に容易に操作される計算器や、記号として働く事により、或る種類の考えを、非常に助けると云われているが、彼は、アリスメチック (Arithmetic) (算術) と云う語を示して、此の語は、複雑に入りこんだ概念に対し、一つの表示として働くと、云って居り、次の様に述べている。

When we think about arithmetic, we can use the word arithmetic as a symbol in our thought processes. It is much easier to manipulate the word arithmetic in our thoughts than to operate with the entire conceptual complex that this word symbolizes. The use of verbal symbols thus makes thought easier in many cases. One might even argue that some kinds of thinking would be impossible without the existence of these convenient counters to operate with.

即ち、「我々が、アリスメチックについて考える時、我々は、我々の思考の過程の中に、一つのシンボルとして、アリスメチックと云う語を、用いる事が出来る。我々の思考の中で、アリスメチックと云う語を操作する事が、この語が、象徴する全く複雑に入り込んだ概念を操作する事より、はるかに容易である。

この様に言語的標示の使用は、思考を多くの場合容易にする。或る種類の思考は、此等の操作するのに都合のよい計算器の存在なくしては、不可能になるだろう。と云えるかも知れない。」

以上の様に彼は述べて、言語的標示が、如何に思考の助けになるかを強調しているのであるが、尚この働きは、抽象名詞の場合、特に強くなると云って居り、次の様に述べている。Justice, democracy, liberty, communism,



する言語の評価は、慎重にする必要がある。この事に関し、彼は、次の様に述べている。

It is all too easy to lament the tyranny of language and to claim that the world view of a person or community is shaped by the language used. Certainly people have sometimes been misled by a blind reliance on words, but we can recognize such cases and set the record straight ; if language were all that tyrannical, we would be unable to perceive that it sometimes leads us into error when we are not being careful.

即ち、「言語の暴君的な事を嘆いたり、人や社会の世間的評価が、使われる言語によって形成されると云う事を主張するのは、全く容易である。確かに人々は、時に々言語を、盲目的に信頼する事によって、誤り導かれたりするが、しかし、我々は、こうしたケースを認め、その記録を、整理する事が出来る。もし、言語が、それ程迄に、暴君的存在であるならば、我々がよく注意していない時に、言語が、時々我々を、誤り導くと云う事を、認める事は出来ないであろう。」以上の様に述べて言語が思考に対し、絶対的な力のない事を示している。

更に、彼は、言語と思考との関係を、次の様に述べている。We must entertain the possibility that much of what passes for linguistically conditioned thought is not molded by language at all : there may be a more general human cognitive capacity at play, for which language merely serves as a medium, just as music serves as a medium for the composer's creative powers.

即ち、「我々は、言語学的に条件づけられた思考として通用する事の多くが、全く言語によって規制されないと云う可能性を、考えねばならない。もっと一般的な活動している人間的認識力が、あるかも知れない。その認識力に対し、言語は、丁度音楽が、作曲者の創造力に対して媒介として働く様に、媒介とし

We have all had the experience of being absorbed in listening to an instrumental work or mentally running through a familiar tune.

Language is simply not involved. Musical composition is in no way dependent on language, so far as the actual process of creation is concerned.

即ち、「我々は凡て、楽器の演奏を聴く事や、親しみ易い曲に、精神的に傾倒する事で、夢中になる経験をもっている。言語は、簡単に、入り込めない。作曲は、実際に創造作用が関係している限り、言語に頼る事はないのである。」更に、彼は、その例として、彫刻家について、次の様に述べている。

The sculptor at work is in no significant sense guided by language. He may, of course, receive much of his instruction through language, talk about his creation, and even entertain himself with an internal verbal soliloquy as he chips away with hammer and chisel. But such verbalization does not appear to be instrumental in his creative activity. There may be many stretches of time during which he is so busy conceptualizing forms and techniques that words disappear entirely from his thoughts.

即ち、「仕事中の彫刻家は、言語によって導かれる何の強い意識はない。彼は、勿論、言語を通じて、多くの教示を受けたり、彼の創作について語り、又、ハンマーや、ノミで刻みながら、言語による内的な独り話で、自分自身を、楽しませるかも知れない。しかし、この様な言語化は、彼の創作活動に、教示的に表われない。又、形や技能を概念化するのに非常に忙しく、言語が、全く彼の思考から消える様な、多くの時の流れがある。」

彼は此の様に述べて、言語なしの思考の存在を認めているのである。又、或る考えを述べようとする場合、適当な言語が見つからない場合も、言語なしの思考と云えよう。しかし、思考の多くは、言語を包んで居り、思考に対

## 言語小論⑤

大 森 孝

### ◎言語と思考について

此の問題については、以前に、少こし述べた次第ですが、今回は、更に追加的に考えてみたい。此の問題については、以前から多くの言語学者、心理学者が研究して来た主題であるが、その論題の中心となるのは、言語が思考を決定すると云うサピア・ウォーフ学説<sup>(1)</sup>である。この説は、多くの学者により批判されて来たのであるが、此の小論を進めるに当り、その中心となる二人の学者、ロナルド・W・ランガッカー<sup>(2)</sup>と、ピーター・ウルフソン<sup>(3)</sup>の学説も、その内容は、サピア・ウォーフ学説に対する批判の傾向が出ている。以下二人の学者の説を中心に論を進めて行く次第です。

先づ、ロナルド・W・ランガッカー (Ronald. W. Langacker) カリフォルニア大学教授の説を中心に、考えて見たいと思う。

言語は、勿論、我々の思考を表わす為に、用いられるのであるが、この言語と思考との関係について、彼は、次の様な疑問を、投げかけている。

Can we think without language? Is our thinking molded by the structure of our language? 即ち、「我々は、言語なしで、考える事が出来るか。我々の考えは、我々の言語の構造によって、形成されるのか。」そして、この答は、人間の心理的構造の、一層の理解なくしては、答える事は、難かしい問題であると、彼は云っている。そして、又、彼は思考を、意識的、精神的活動と、定義すると、思考は、完全に言語から独立して、行動できると思う、と、述べて居り、その具体的例として、音楽を取り上げ、次の様に述べている。

◇ 学 園 叢 報 (昭和五十六年度)

◇ 望月海淑教授の篤志寄附 ◇

本学教授望月海淑先生(身延山樋沢坊住職)には、本学園に對して金参百万円の篤志を寄せて、学園の研究体制の充実と発展に資して欲しいと申し出られのに對し。本学教授会は先生の篤志を意義あらしめる為に、前年度新設された「灘上研究奨励基金」と併せ一本化して、「灘上・望月學術奨励基金」として発足させ、今後は仏敎文化研究所を中心として大いに基金を活用し、身延山敎学の振興を図ることが議せられた。

◇ 学内研究発表会 ◇

この研究会は満六年を数え本学先生方の研鑽発表の場となっている。偶々、本年度は宗祖七百遠忌の正当に会し、身延山久遠寺に於て遠忌事業が展開された為に、本学の先生方も遠忌事業の全般に亘り参画協力・奉仕を余儀無くされた為、研究発表も割愛を余儀なくしたが、それでも左記の通り実施した。

◇ 第四十四回 (四月十一日)

一日蓮宗インド仏跡参拝」研修報告

助教授 山田 是明

◇ 第四十五回 (五月二十八日)

本尊論の展開について

講師 桑名 眞正

◇ 第四十六回 (九月二十五日)

言語と思考

教授 大森 孝

◇ 四十七回 (十一月六日)

「空観」の検討―竜樹を中心として―

教授 里見 泰穂

◇ 第四十八回 (五十七年二月十六日)

道元の時間論について

教授 町田 是正

学会活動報告

○ 日本印度学仏敎学会

第三十二回學術大会は、八月二十六日(水)・二十七日(木)の両日、同朋大学(名古屋市中村区)において開催され、本学より左の三氏が研究発表された。

中論の論理について

里見 泰穂

最蓮房あて御書の問題点

中条 暁秀

日蓮聖人の瑞相観

上田 本昌

## ○日本仏教学会

昭和五十六年度学術大会は、十一月十三日(金)・十四日(土)の両日にわたり、「社会倫理と仏教の機能」を共同研究テーマとして、四天王寺本坊(大阪市天王寺区)において開催され、本学の上田本昌教授が研究発表された。

日蓮聖人における衆生済度と機能

上田本昌

## ○日蓮宗教学研究発表大会

第三十四回日蓮宗教学研究発表大会は、十一月二十七日(金)・二十八日(土)の両日、日蓮宗宗務院において開催された。本学からの研究発表者は左の四氏であった。

関西身延妙伝寺について

林 是晋

三観について

若 杉 見 龍

金綱集の一考察

中 条 暁 秀

四山四河の一考察

上 田 本 昌

(文責・中条)

## ○インド仏跡巡拝研修旅行。

本学の山田是明助教・筒井妙清護教諭の二人は、二月十一日より二十六日まで、インド仏跡等の巡拝を行い帰国した。

カルカッタ。パトナ。バイシャリ(釈尊外護者リッチャヴィ族の都)。ブダガヤ(釈迦成道の聖地)。ベナレス。サルナート(釈尊初転法輪の聖地)。クシナガール(涅槃の聖地)。テ

イラウラコット(立正大学発掘調査のカピラ城)。ルンビニ(釈尊誕生の地)。デリー。タジマハール。サンチ。エローラ。この巡拝研修の成果については、学内研究会(四月十一日)で詳細に報告された。

## ◇「山梨県一般教育研究・協議会」の設立

昭和五十六年十二月十二日、山梨県下の高等教育機関(大学・短大・専門学校)を主体として「山梨県一般教育研究・協議会」が設立された。本会は「一般教育に関する研究活動の正当な発展を期し、研究活動に関する情報交換並に研究成果の公表併せ一般教育の振興を図ることを目的」(協議会規則二条)としている。本学からの加入会員は左記の通りである。

町田是正(教授・日本中世仏教史・歴史学)

大森 孝(教授・英語学・英文学)

堀 一 勇(教授・東洋思想史・外国史)

一富嘉孝(助教・体育学)

山田是明(助教・体育学)

尚、大森・町田両教授は本会の理事に就任す。

## ◇日蓮聖人第七百遠忌身延山報恩事業

身延山に於ける報恩記念事業は、(一)建設部門、(二)社会教化部門。(三)読誦会・大法要部門の三つに亘り展開し、鴻恩の一分に謝し、以って報恩に擬し奉った。

(一)建設部門：清風寮新築(五十五年十一月完成)、水鳴楼建築

(五十五年十二月完成)、信徒休憩所新築(五十六年三月完成)  
新納牌堂新築(五十六年九月完成)、大本堂建立(五十六年十  
月上様式・五十七年十月完工予定)。

(二)社会教化部門：身延山久遠寺が刊行するものに『日蓮聖人遺  
文辞典』(立正大学日蓮教学研究所編・代表宮崎英修所長)、  
『身延山史年表』(身延山短期大学仏教文化研究所編・代表町  
田是正所長)、『身延文庫典籍目録』(身延文庫編・代表林是  
晋主任)、『日蓮聖人と身延山』(ぎょうせい出版社刊)

(三)説誦會・大法要部門：前年大法要(五十五年十月十一日～十  
三日)。御正当前期大法要(四月一日～十日)。中期大法要(五  
月一日～五月十日)。御正當報恩大法要(十月六日～十五日)

右の身延山報恩事業のうち、特に本学教職員が奉仕協力した  
もの、進捗しつつある事業は次の通りである。

(1)『身延山史年表』：本学の先生方により膨大な資料の蒐集・  
調査・整理が進められ、遠忌大法要御正会・十月六日、整理さ  
れた原稿の一部(今村良枝浄書に依る)が、町田是正教授によ  
って竹下日康総務に手渡され、総務がこれを御宝前に献納した。  
年表作成に参画協力された諸先生は―林是幹・上田本昌・望月  
海淑・大森孝・若杉見竜・山田是明・林是晋・中条暁秀・中里  
悠光・奥野本洋・桑名貫正・望月海英・今村良枝・町田是正  
(敬称略)である。

(2)『日蓮聖人と身延山』：本学からの共同執筆は次の通り。  
上田本昌教授「日蓮聖人と身延山」。「文学芸能に現われたる

身延山」。町田是正教授「身延山の歴史」。望月海淑教授「身  
山案内記」。林是晋講師「身延山の自然と文化財」。となっ  
ている。

(3)『身延文庫典籍目録』：身延山の開闢以来伝来する秘宝の典  
籍を目録に作成するもので、この目録によって身延文庫に所蔵  
される典籍の全貌が明らかとなる。本学講師林是晋先生が寸暇  
を惜しんでの作業でありその刊行が期待される。この典籍目録  
の原稿も、遠忌大法要の当日、棲神閣に於て、林講師から竹下  
総務に渡され、宗祖の御尊像宝前に奉安された。

(3)身延山大法要(前年度・正当会)出座奉仕教職員は左の通り。

教授 林是 幹(端場坊住職 協導師勤む)

教授 長谷川寛慶(大善坊住職 声明導師勤む)

教授 堀 一男(窪之坊住職 脇座・鑒座を勤む)

教授 町田是正(延寿坊住職 遠忌委員・木鉦座)

教授 望月海淑(樋沢坊住職 七面山敬慎院別当)

講師 林 是晋(了円坊住職 雅楽・中座勤む)

講師 望月海英(花之坊住職 雅楽・中座勤む)

講師 中里悠光(鏡円坊住職 雅楽・中座勤む)

講師 奥野本洋(妙石坊住職 雅楽・中座勤む)

講師 長谷川寛勝(大善坊裡 中座勤む)

(文責・町田)

# ◇同窓会本部役員会の開催

日時：昭和五十六年十一月二十七日。場所：身延山短期大学  
仏教文化研究所。出席：灘上恵教・松井大周・岩田日成・小崎  
竜雄・池上要輝・長谷川寛慶・児島鎮誠・町田是正の各師。

審議決議事項：①学園図書館建設について役員会の連署を以  
って、久遠寺当局に対し「要望書」を上申すること（連署のう  
え提出す）。②本部幹事の深沢義雅師（和身会世話人）の退任  
を承認し、永年の奉仕に対して同窓会本部より感謝状、併せ和  
身会から慰労金一封を贈ることとした。③昭和五十六年宗会議  
員選挙で当選した同窓諸師（矢谷恵宏・中村正彦・沖原成行・  
関谷泰蔵・森恵遠・伊藤如願。）と、本学に教鞭を執る望月海  
淑師に対して祝電をおくる事とした。④図書館の建設に関して  
学園当局に於ても早急に寄与真（見積概要）を作成して本山当  
局と接渉して欲しい。⑤本部会計監事として下里是忠師（身延  
山本行坊住職）を選任す。⑥和身会世話人深沢義雅師退任、そ  
の後任に小崎竜雄師（神奈川県本円寺住職）を選任したいと申  
し合せた。また和身会の世話人の名称を「会長」と改め、深沢  
義雅師を顧問とすることに決した。

（文責・町田）

# ◇昭和五十六年度短大卒業論文論題

（ ）内は指導教官、敬称略

番号	論 題	学生氏名
1	宗祖の「法難観」について（秋葉真敬）	安藤 顕雄
2	日像上人と帝都開教について（林 是晋）	石 田 顕正
3	日蓮聖人の報恩観（桑名貫正）	石 井 潔
4	法華経広宣流布について（望月海英）	大 原 康昭
5	法華経中の誓願について（望月海淑）	片 寄 智雄
6	戦国時代の日蓮教団の歴史―特に天文法難について― （林 是晋）	香 味 成樹
7	本宗における祈禱本尊鬼子母神について―考察 （奥野本洋）	金 原 広秀
8	日蓮聖人身延九箇年の一考察（上田本昌）	米 虫 是恭
9	宗祖の「上行自覚」について（中条勇秀）	小 代 海 蔵
10	優陀那日卿上人について（林 是幹）	瀬 尾 雅 範
11	宗祖の法華経観（若杉見龍）	竹 岡 智 大
12	宗祖の訪法観（桑名貫正）	豊 田 通 良
13	靈友会教団とその分派（上田本昌）	丹 羽 三 典
14	日蓮聖人の佐渡の御生活について（町田是正）	望 月 是 祥
15	唱題論と藤井日達師の思想（里見泰穂）	百 瀬 三 津 明
16	二乗作仏（奥野本洋）	山 口 稜

17 現代における「立正安国論」の意義について

(中条亮秀)

渡辺浩紀

18 稲荷信仰について―特に最上稲荷について―

獅子原量則

19 弘教の祖日持上人についての一考察(堀 一勇)

細川泰源

20 鎌倉時代における日蓮聖人の思想的展開―立正安国論を中心として―(長谷川寛勝)

山口清治郎

(文責・奥野)

### ◇図書寄贈者紹介(五十六年度)

若杉見竜―国訳一切経一九冊・他四七冊

灘上恵教―日蓮聖上の歩まれた道

望月海淑―法華経における信の研究序説(自著)・他二冊

松下日孝―運命・信仰・迷信・供養・餓魂の話

小野文琬―日蓮宗池上法類神楽坂法縁

深沢義雅―観心本尊抄通解・他五冊

中条暁秀―日本仏教史講話第一巻・他一冊

新川日見―小西法縁系譜

北沢光昭―急急如律令録・他十二冊

身延山久遠寺―久遠寺蔵・重文「本朝文粹」上下(複製本)

他一冊

### 本54号執筆者紹介

竹下日康(巻頭記念染筆)身延山法主・本学園学長

若杉見竜 本学教授(天台学)

町田是正 本学教授(中世日本仏教思想史)

望月海淑 本学教授(仏教学・梵文)

上田本昌 本学教授(日蓮教学・祖書学)

中条暁秀 本学講師(日蓮教学・祖書学)

大森孝 本学教授(英語学)

林是幹 本学教授(日蓮宗史)

北沢光昭 本学会々員(日蓮教学)

奥野本洋 本学講師(天台学)

林是晋 本学講師(日本仏教史・日蓮宗史)

今村良枝 本学園事務局主事

熊王秀臣(巻頭涅槃図写真撮影)身延山久遠寺勤務

### 望月日滋法主猊下御遷化

身延山八十八世法主・身延山短期大学々長・太玄院望月日滋猊下には、昭和五十七年二月一日午後一時十五分御遷化された。

身延山門前町に生まれ十六歳で旅立たれ、昭和四十九年六月身延山八十八世の猊座に晋董、地元民の衆望を負うて身延に帰られた法主猊下でした。ときは宗門挙げて宗祖七百遠忌報恩事



業が展開されつつあった。猊下にはご晋山以来、幾多の身延山の記念事業の推進に取り組み、大本堂の建設をはじめ、宝蔵・水鳴楼・信徒休憩所・新納牌堂・学生寮など境内諸堂宇の建設整備、また社会教化事業、報恩大法要の奉行など、総務竹下日康猊下の強力な補佐の下に着々と諸事業を円成されていった。昭和五十六年宗祖七百遠忌正当大法要には、四大不調にも拘わらず棲神閣祖師堂に大導師法主の一臂を執られた。しかるに二月一日、大本堂の落慶を目前にしての御選化であります。悲痛寂しさ極みなし。謹んで学園教職員一同増円妙道をお祈り申し上げるのみであります。

## 竹下日康猊下、身延山第八十九世法主

### 猊座に晋董

昭和五十七年二月六日身延山久遠寺祖山会は、万場一致を以って現久遠寺総務・竹下日康猊下（神奈川県本山妙純寺貫首）を第八十九世法主（守塔沙門）に推挙いたしました。竹下猊下には約半世紀にわたり久遠寺枢要の場に在り、特に庶務部長・総務の要職を永きに勤められ、身延山発展の原動力となり、久遠寺堂宇整備と莊嚴輪奐の美を築かれました。

宗祖七百遠忌記念主事業であり掉尾を飾る大本堂の完成こそまたれる所であります。新法主猊下には法体弥々健かに、為宗護山に御尽力あらんことを、併せ身延山教学発展の為に一臂の御助力を賜わらんことをお願い申し上げます。御入山心から祝

意を表します。

### ◇文化講演会の開催

日時：昭和五十七年二月二十五日。場所：身延山短期大学。  
講師：立正大学教授・文学博士・中尾堯先生。演題：宗祖御遺文との出会い（中山法華経寺聖教殿の御真蹟めぐって）  
本学では毎年、斯界の権威者を招聘して公開文化講演会を開き、学の内外の有識者と共々に素養を深めているが、本年は山梨県一部布教師会諸師多数の来聴を得て盛会裡に終始し、宗祖御伝記・宗門史発掘の原点について理解を深めることができた。

## ◇ 編集後記 ◇

◇第五十四号は「日蓮聖人七百遠忌記念号」として発刊いたします。巻頭に(1)「紙本着色日蓮聖人涅槃図」(久遠寺蔵・林是晋講師解説)。(2)「臨滅度時大曼荼羅」(妙本寺蔵・上田本昌教授解説)。(3)「遠忌報恩記念染筆」(身延山八十九世法主・学園長竹下日康親下)の写真三葉を掲げ、遠忌特輯号を飾ることとした。御染筆を賜った竹下日康法主親下竝に解説の労を頂いた上田教授、林講師には深々の謝意を表します。

◇宗祖七百遠忌の報恩事業は、「知恩報恩」をテーマとして宗門を挙げて多彩且つ大々的に展開された。が、然し、遠忌報恩に便乗した商品宣伝、祭り気分の催しが目白押しの一年であったことを振り返ると、本当の意味で「知恩報恩」の真を捧げることが出来たかどうか。編集子は懺悔反省しきりであります。

◇本号は資料掲載の頁数を多くして特輯号の特色としました。(1)北沢光昭師に労を煩わした『身延山歴代略譜』は今回で完結しましたが、その資料的価値の高いことから、近く単行本に纏めて刊行を予定しています。(2)林是

晋講師・今村良枝女史共筆『身延山史索引』は、去る四十八年発刊『身延山史』(久遠寺編)の全頁にわたる事項・人名・地名・寺名・などの索引であり、身延山史の研鑽者にとって至便のものとなりました。将来単行印刷して出版したいと思っています。(3)「身延西谷檀林妙玄庵歴代」一覧は、林是幹教授所蔵の貴重な資料を公開するもので、資料の提供に謝意を表します。(4)「日蓮聖人研究文献目録」は、奥野本洋講師に特に依頼して短期日に作成したもので、不備の点があればその責は全て編集子にあります。

◇本号は、若杉・望月・上田・大森・町田各教授、中条講師から、玉稿労作を賜はり記念号として刊行することが出来ました。執筆の諸先生に厚く御礼を申し上げます。

◇編集子はこの一年間、身延山に於ける遠忌事業に微力奉仕を余儀なくされたこともあって、学内の研究活動から遠のく事が多かったが、その間、仏教文化研究所主任の中条暁秀・奥野本洋両講師から多くの助力を得ました。此処に本五十四号の編集を完了することができました。記して謝意を表します。

(文責・町田)

「棲神」五十四号

昭和五十七年三月二十五日 印刷

昭和五十七年三月三十日 発行

編集者 町田 是正

発行者 里見 泰穂

印刷者 宮田 如龍

甲府市中央二丁目十二番三十一

印刷所 大宣堂印刷

山梨県身延山東谷

(☎NO、四〇九一二五)

発行所 身延山短期大学学会

振替(甲府)一二七五番

電話身延(☎要六〇)二一〇一〇七

# THE SEISHIN

The Journal of Nichiren and Buddhist Studies

No. 54

---

Edited by  
Minobusan College  
Minobu Yamanashi, Japan.